
女神再び
カンピオーネ！
Campione IX
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

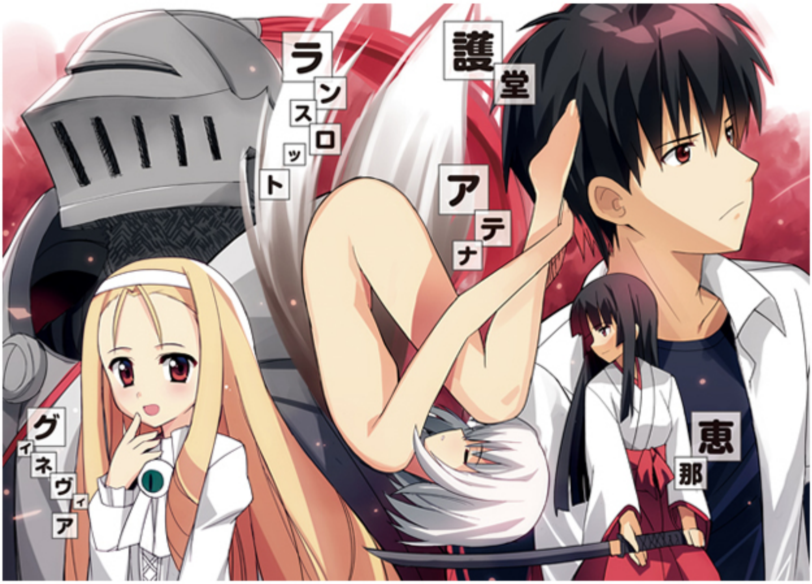
Ⅸ　女神再び

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
女神再び
Campione IX


護堂
アテナ
恵那
ランスロット
グィネヴィア


「これは矢に見えて矢に非ず。
冥界の女王が放つ、死への誘い。
すなわち、
死そのものである」
蛇だけがアテナの化身ではない。
あれはフクロウの翼だ。
夜空を自在に
飛びまわる聖鳥。
智慧の象徴。
そして、冥府より来る死の使い。
女神アテナが好む猛禽としての姿！
「アテナよ、
我が槍を受け給え！」


「……あ。王様、起きたんだ」
護堂の前に
一糸まとわぬ恵那の裸体が横たわっていた。
生まれたままの姿。
つくべき部分にはたっぷりと肉がつき、
ふくよかなくせに、
それ以外はほっそりと引き締まった、
奇跡のような肢体。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

アテナ

まつろわぬ女神。

グィネヴィア

神祖の女王。

陸りく鷹よう化か

護堂の義姉・羅濠の直弟子。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

甘あま粕かす冬とう馬ま

正史編纂委員会のエージェント。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
女神再び
Campione IX

第１章　神槍の傷痕

1

　フランスのブルターニュ地方には、英国との浅からぬ縁がある。

　かつてブリテン島の先住民であるケルト人は、アングロ・サクソン人の侵攻に悩まされ、住む場所を奪われていった。五世紀頃になると、コーンウォールに住む一部のケルト人は海を渡り、フランス最西部の半島に移住したのだ。

　彼らは大陸の人間から『ブルトン人』と呼ばれ、ブルターニュ半島の語源となった。

　この地にはまた、最も正統なる神しん祖その根ね城じろも隠されていた。

　魔女王グィネヴィア。

　アンティークドールのごとき精せい緻ちな美び貌ぼうは、一〇代前半の少女そのもの。か細い肢し体たいにまとうのは、喪も服ふくめいた黒のドレス。

　宝玉にも似たサファイア色の瞳ひとみが見つめるのは、湖みずうみの水面であった。

　結界の魔術で守られた、ブルターニュの深き森。

　その一角にある、小さな湖。水辺には木々が生いしげり、湖こ畔はんに緑の彩いろどりを加える。

　グィネヴィアは瀟しよう洒しやな湖のほとりにたたずみ、水面を

眺めていた。

「小お父じ様……グィネヴィアは確信いたしました」

　そこに映るのは白き甲かつ冑ちゆうの騎士。水中にいるのではない。

　彼は湖水というスクリーンに映るだけの、二次元の存在であった。

「やはり、我らの主あるじたる『最後の王』が眠るのは日本――東方の果てに他なりますまい」

（――ほう。その根拠は？）

　只ただ人びとには聞こえぬ『声』で、水面の騎士が応こたえる。

　名はランスロット・デュ・ラック。湖の騎士ともいう。天地の位を極きわめた魔女の守護者にして、神祖を庇ひ護ごする軍神である。

「同どう胞ほうアーシェラの遺のこした情報です。かの国の呪じゆ法ほうを陰より束ねる『古老』なる輩やからあり。英雄神スサノオを頭とう領りようとし、幽かく世りよに住まいを移した異能の者どもが付きしたがい、まつろわぬ《鋼はがね》すら鎮しずめる――」

　グィネヴィアはつらつらと語る。

「斉せい天てん大たい聖せいすら利用した、竜りゆう蛇じや封じの大呪法……。その存在を知ったときより、もしかしてと怪しんでおりました。よほどの大だい事じを秘ひ匿とくするのでなくては、ここまでの大仕掛けは必要ありませんもの」

（そういえば先日、そなたはかの地を訪ねておったな）

　ランスロットの『声』がささやきを返す。

　いわゆる『まつろわぬ神』ではない。彼は魔女王とその係けい累るいを守護するため、地上とつながりを持つ〝神の影〟に過ぎなかった。

「ええ。あるいは、封じられた斉天大聖こそ『最後の王』――我ら

が主ではないかと期待し、策を弄ろうしてみたのですが」

（だが、あの猿えん王おうは、主とは程遠い神格であった）

「はい。ですが、代わりに古老なる者について知ることがかないました。そこでグィネヴィアはかの島に留とどまり、探りを入れてみたのです」

　亡きアーシェラが九く法ほう塚づか家けより得た情報が手がかりとなった。

　ときに古老の意を受ける日本呪術の総そう帥すい『四家』。彼らが直ちよつ轄かつする日本各地の寺社には、日につ光こう西さい天てん宮ぐうのように重要な役目が割り振られている。

「しかし一箇所だけ、その役目が不明な社やしろを見つけ、試こころみに訪ねてみました」

（ふむ……。不明であるのは『何者かの意図で隠された』と見たか）

「そのとおりですわ。幸いにもグィネヴィアの読みは当たり、霊視が降りました。——かの社にこそ、我らが主の消息をつかむための秘密が眠るのだと。それを解きあかせば、この世の最後に顕あらわれる王は再さい臨りんするのだと……！」

　グィネヴィアは恍こう惚こつとして語った。

　彼女が転てん生せいを遂とげてから、幾十年が経たつだろう？　その間ずっと、伝説の英雄王を追い求めてきたのだ。

「女神であった頃のグィネヴィアの記憶に、謎なぞを解とく鍵かぎがあったやもしれません……。ですが、転生を果たした神祖は前世の記憶を失います。かつて主に仕つかえた小父様も、主の行方ゆくえを知らず——いえ、知ろうとなさらず」

　それゆえ、秘密を解く鍵は失われたのだ。

　詠えい嘆たんするグィネヴィアに、白き騎士は飄ひよう然ぜんと相あいづちを打つ。

（ああ。野を駆かけ槍やりを振るい、女人を愛し、守ることこそが

余の本ほん懐かい。その他の全すべては雑事にすぎぬ。余よ所そ事ごとにすぎぬ。余を鈍にぶらせ、惰だ弱じやくへと導みちびく因にしかなるまい）

　わずかな躊ちゆう躇ちよも逡しゆん巡じゆんもなく、ただまっすぐに。

　全速で駆け抜ける、剣にして雷いかずち。それこそが軍神ランスロットの性さがなのだ。

（肩を並べて戦う男がいたとしよう。そやつが何処いずこかのいくさ場で斃たおれたならば、剣をかかげ、弔とむらいの歌を口ずさみ、暫しばし死を悼いたむ。それで十分ではないか）

　どこまでも武ぶ人じんであり、戦野にのみ生きる。

　自みずからをそう規定する軍神は、恬てん淡たんたる口調でつぶやいた。

（すまぬな、余がこのような者でなければ、もっと早くに謎も解けたであろうが！）

「いいえ。そうであればこそ、小父様はあの御方を除けば最強の《鋼》たりえるのです。気にしてはおりませんわ。それよりも、先のことに目を向けましょう」

　水面に映る騎士の神を、グィネヴィアは真しん摯しに見み据すえた。

　切なる願いと共に両腕を組み、訴える。

「お願いがございます。小父様には我が影、我が守護神ではなく、『まつろわぬランスロット』としての顕けん現げんを願いたいのです」

（——ほう。それを為なせば、もう後戻りはできぬぞ？）

「主の眠る地に目星がついた今、乾けん坤こん一いつ擲てきの勝負に出ねばなりますまい。アレクサンドル・ガスコインに敗れた六年前と、同じ轍てつを踏むわけにはいかないのです！」

　かつて、ここことは異なる森をグィネヴィアは本拠地としていた。

妖よう精せい境きよう――人間どもはアストラル界や幽世、神々は『生と不死の境界』と呼ぶ世界にもつながる、妖あやかしの森だった。

その神域を見み出いだし、侵入を果たした黒王子アレクの冒ぼう険けん譚たん。

グィネヴィアにとっては苦い敗北の記憶――。

「黒王子殿の策略によって、我らは『魔ま導どうの聖せい杯はい』にたくわえた大地の呪力……その大半を失いました。主に捧ささげるため、苦心して集めた地じ母ぼ神しんたちの命を！」

かつてアレクに、聖杯を渡してもよいとグィネヴィアは言った。

だが、本当にそうするつもりなどなかった。彼女こそ正統なる聖杯の継承者。仮に手放しても、念じるだけで呼び戻せる。

そうと見切り、あれを敢あえて奪わなかったアレクの鋭さが恨うらめしい。

「ですが、あのときも小父様が十分に力を振るえれば、かの王子殿を返り討ちにし、聖杯を守り抜くこともできたでしょう」

（余をそなたのそばにつなぎとめる守護者の呪法……あれを破ればの話だがな）

特定の者を庇護するため、神が地上にはりつくなど前ぜん代だい未み聞もんのこと。

それが可能だったのは、とある女神がランスロットに呪法をかけたおかげだ。グィネヴィアの前世――かつて『最後の王』に協力し、聖杯を創造した大地母神が。

だが、この横紙破りは枷かせもあたえた。ランスロットは魔女王たる神祖が危機に瀕ひんしたときだけ、しかも、ほんの短時間しか地上に顕現できない身となった。

（余が『まつろわぬ神』となれば、狂える性にまかせて暴走し、そなたを守るという使命を忘れて戦い狂うやもしれぬ……。その危険を冒おかしてもいいのだな？）

「はい。かの島国には若き草くさ薙なぎ護ご堂どうさまがおり、羅ら濠ごう教きよう主しゆも目を光らせております。大海を隔へだてた彼方には、ジョン・プルートー・スミスさまも控えているのです。我らが事を起こせば、あの方々の誰かが立ちはだかるのは、もはや必然」

　六年前にはなかった、神殺しへの理解。

　それが今のグィネヴィアにはあった。魔王カンピオーネは、ただ近くにいるだけで闘争の火種を燃えあがらせる。どれだけ隠れて事を進めようとも、光に吸いよせられる蛾がのように宿敵たる神を見出す——。なんという理り不ふ尽じん。

　だが、彼らは神を殺あやめた埒らち外がいの者。人を超え神に挑む、愚ぐ者しやの落とし子。

　最もありそうにない可能性を想定するぐらいでちょうどいい。

（ならば娘よ。主の遺せし神刀を研とぎ、余の武具と成すがいい！）

「小父様……。あれを——救きゆう世せいの神しん刀とうを甦よみがえらせよとおっしゃいますのね。天地を引き裂き、星をも墜おとす鋼が必要になると、お思いなのですね!?」

　ランスロットの指示に、グィネヴィアはハッと顔を上げた。

（——なる。予知の神力など持たぬ余だが、近く迫った闘争の匂においだけは、はっきりとかぎ取れる。余にも新たな武器のひとつ程度は必要であろう！）

　白き騎士の顔は兜かぶとの面めん頬ぽおで定かではない。しかし、グィネヴィアは確信した。

　軍神ランスロットは今、まちがいなく笑っている。闘争の予感に喜き悦えつしていると。

「ええ……ええ！　グィネヴィアは喜んで、小父様のために剣を研ぎましょう！　我が寵ちよう愛あいを受ける土の精よ、魔女王の宝物を差し出しなさい！」

　グィネヴィアが華きや奢しやな手を地面にかざすと、地面が割れ

た。

　土が露出し、ふたつの物品が地中より出てくる。

　ひとつは、子供の背丈ほどもある黄金製の大おお甕がめ。もうひとつは長大な両刃の剣だが、ボロボロに朽くち果はて、錆さびついている。

　どちらも地中から出たくせに、土汚れひとつない。

　この大甕こそ『魔導の聖杯』と呼ばれた神具。そして、もう片方こそ『最後の王』の佩はい刀とうだった鋼。彼の忘れ形がた見み、分身といっても過言ではない。かの英雄が地上から消えたとき、愛剣も輝きを失い、朽ちはてた姿で地上に遺されたのだ。

2

　そして、半月の時が流れ——

　ブルガリア南西部に広がる、トラキア平原。

　一部の都市近郊をのぞけば、美しい緑にあふれた土地である。雄大なバルカン山脈の裾すそ野のに、見晴らしのよい広野や畑がどこまでも広がっている。

　この地にグィネヴィアは、魔女の飛ひ翔しよう術じゆつで降り立った。

　見渡す限り広がる平原の一隅に穴を掘り、主あるじの朽くちた佩はい刀とうを埋めておいたのだ。

「王の鋼はがねよ、長の眠りから目覚めてちょうだい」

　仕上げを行うために、グィネヴィアは言こと霊だまを歌に乗せた。

　埋めた剣……英雄王の伝説がエクスカリバーと呼ぶ鋼を甦よみがえらせるために。

「黄金よりも輝かしく、白銀よりも清らかなもの。それがあなた。竜の骸むくろを燃やした灰より生まれた、竜を滅ぼす鋼。それがあなた」

　かつては白く輝き冴さえる、長大な剣だったという。

　刃渡り、実に一〇〇センチ近い。両刃の刀身はがっしりぶあつく、鉈なたにも似た造り。だが今はボロボロに朽ちはて、輝きも失せ、錆さびついていた。

　この神刀は、大地と深い縁ゆかりを持つ。ゆえに土に沈め、大地の精せい髄ずいを集めて、刀身に注ぎ込んだ。失った力を取り戻させるために。

「星も月も太陽も、あなたを前にしては輝きを失うでしょう。あらゆる財宝もあなたの前では価値を失うでしょう。さあ、目覚めてちょうだい。あなたの侍じ女じょである乙女おとめに、ふたたび光を見せてくださいな」

　神刀復活のため、この地を選んだのにも理由はある。

　甦った鋼を振るうのは、まつろわぬランスロット。彼と某なにがしかの絆きずなを持つ土地で蘇そ生せいさせ、霊的なつながりを作りやすくするためだった。

「救世の神刀よ。鋼のなかの鋼である者よ。魔女の王は御おん身みの復活を懇こん願がんいたします！」

　歌い終えたグィネヴィアは手をかざす。

　すると稲いな妻ずまが、いにしえの剣を埋めた場所に降った。次の瞬間、そこには白金プラチナ色の短い刃やいばが突き刺さっていた。

　刃渡り五〇センチ程度。丈たけを縮めながら、朽ちた神刀が生まれ変わった姿である。

　グィネヴィアは、ふぅと安あん堵どの息をもらした。

「ご覧になりまして、小父様？　グィネヴィアはどうにかやり遂とげましたわ！」

「やり遂げた……聞き捨てならぬ言葉だ。そして、見すごせぬほど鋭き刃よな、それは！」

　応こたえたのは予想外の闖ちん入にゅう者しやだった。

　グィネヴィアは声の主に気づき、愕がく然ぜんとした。

「御身が直じき々じきに光こう臨りんされるとは……このグィネヴィア、謹つつしんでご挨あい拶さついたしますわ」

　貴婦人の仕草で黒いドレスの裾をつまみあげ、頭こうべを垂たれる。

　驚きよう愕がくを押し殺しながらの、優ゆう雅がな挨拶。グィネヴィアは表面を取りつくろったが、焦しよう燥そうに心をむしばまれた。まさか、この女神がやってくるとは！

　童女の姿をしているが、か細い体には太たい母ぼ神しんの威い厳げんが充じゆう溢いつしている。大地の母にして闇やみの女王、そして天空の賢けん神しんたる三相一体の女神。



その名はアテナ。

近頃『まつろわぬ神』として顕けん現げんした、ギリシア神話の神。

秘宝ゴルゴネイオンを得て、古き地母の神性まで取りもどした。数カ月前、日本でカンピオーネ草くさ薙なぎ護ご堂どうとも戦ったらしい……。

「この数日、ただならぬ霊気がトラキアの故こ地ちに満ちるのを感じておった」

風のうなりにも似た声で、アテナがささやく。

髪は月を溶とかしたような銀。可か憐れんきわまりない一〇代前半の美少女である。身にまとうのは、古きギリシアの流りゆう儀ぎにのっとった簡素なものだった。

彼女と向き合って、人じん畜ちく無む害がいな少女と思う愚おろか者はいまい。

隠しようのない力の波動を帯びている。神とはわからずとも只ただ人びとに非あらずと、おのずと悟るであろう。

「いかなる凶事の予よ兆ちようかといぶかしみ、わざわざ訪ねてみれば……。まさか、あの男の婢はした女めが忌いむべき鋼を研いでいるとはな！」

女神の幼い瞳には、怒りが焔ほのおのごとく揺れていた。

「恥を知れ、かつての同どう胞ほうよ。我ら太母の裔すえと竜蛇殺しの鋼は、神かみ代よの昔より不ふ倶ぐ戴たい天てんの仇きゆう敵てき同士。にもかかわらず、そのような刃で手を穢けがすとは。そこまで身を堕おとしたか！」

「畏おそれながら申しあげます。女神アテナよ、御身のおおせには誤りがございます。神代の昔より、我ら大地の娘は《鋼》の英雄方に仕えるが運命さだめ。竜蛇となり、あの方々に牙きばを向けたこともありましょう。しかし、それもほんのひとときの夢」

真の女神と比べれば、魔女王も小物に過ぎない。

　だが、グィネヴィアは毅き然ぜんと胸を張り、アテナに訴えた。

「我らは勇士に仕える『英雄の介かい添ぞえ人にん』。女神アテナにしても、ギリシアの大神ゼウスに愛まな娘むすめとして仕えた神話がございましょう。御身のおっしゃりように誤ご謬びゅうがあると、どうぞお認めあそばしませ」

「――ほう。なかなかによく舌が回る」

　アテナは目を細め、ぶしつけにグィネヴィアを眺めた。

「あの男の婢女は、あいもかわらず忠義に篤あつい者ばかりよ。まったく、いつの世もそれだけは感心させられる！」

　むしろ神祖の反発に、やや怒りがうすれたらしい。

　ギリシアでは戦いの女神でもあったアテナ。命を賭として戦う者へ、賞賛を惜おしまない性なのか。グィネヴィアはうやうやしく頭こうべを垂たれて、応えた。

　その仕草に見た目だけは幼い姿で、女神は尊大にうなずいた。

「まあ魔女よ、そなたのことは捨ておこう。しかし、先ほども申したように、妾わらわは見すごせぬ輝きを目にしてしまった。……その鋼は何だ？」

　大地に突き刺さる白き刃へ、アテナの視線は注がれていた。

「智ち慧えの女神たる妾は、その鋼を知っている。あの男の分身『救世の神刀』――あれの骸を甦よみがえらせた刃だな？」

　さすが――。アテナの慧けい眼がんに、グィネヴィアは感かん嘆たんした。

　新生した神刀の素す性じょうを一目で見抜くとは。

「新たな命を吹き込んだか……。長く使えるとも思えぬが、よく打ち直せたものだ。だが、あの骸はそなたらにとっても無二の切り札……。それを惜しげもなく使うとは……」

　アテナの双眼が蛇の目と化すのを、グィネヴィアは見た。

「見つけたか」

　アテナと表ひよう裏りーいつ体たいをなす、蛇女神メドウサの邪じや眼がんに見み据すえられ――

　グィネヴィアは凍りついた。超越の女神に生せい殺さつ与よ奪だつの権利を握られてしまった。恐怖が体を硬直させる。

「見つけたのだな、あの男を？　地上に終末が近づいたとき顕あらわれる、救世の王が眠る墓所を見出したのだな？　どこだ？　彼奴きやつはどこに眠っている？」

「と……東方の果て、日本にございます……」

　空気を求めてあえぎながら、ささやく。

　ついに女神が真の威厳を見せた。これにはさすがにあらがえない。グィネヴィアは心の底から戦せん慄りつし、一心に祈った。

　早く助けて、小父様！　ランスロット・デュ・ラック！

「あの島か？　先日訪れた折りには、彼奴の気など一瞬たりとも感じなかったが……。おそろしく巧たくみに隠されているのだな」

　蛇の目をしたままのアテナに、耳元でつぶやかれる。

　嗚あ呼あ。凍いてつく冬風のごとき声。聞くだけで体が震え、力を奪われる。

「ところで知っているか、婢女よ？」

　グィネヴィアは慄りつ然ぜんとした。

　冷厳たるアテナの声に、殺気がにじむのを感じたのだ。

「妾の宿敵たる神殺しが、かの島にはおるのだ。あの男――全ての魔王を葬ほうむる宿命の英雄が目覚めたとき、真っ先に切り伏せられるのは、やはり膝ひざ元もとにいる草薙護堂と見るのが定じよう石せき。しかし、あの小僧を倒すのは妾の宿願でもある……」

　アテナの幼い面おも差ざしに、類たぐいないほどの妖よう気きと色いろ香かが宿る。

なまめかしい視線でグィネヴィアを眺め、始末のつけ方を思案している！

「草薙護堂が戦士として熟すのを、妾は待っているのだ。その前にあの男が覚かく醒せいするのは、はなはだ不都合よな。ならば、そなたをここで葬り、その芽を摘つむべきか……」

蛇の目に、黄金の光が宿る。

もう一瞬の猶ゆう予よもない。だから、早く——！

「すまぬ、蛇の女神よ」

轟ごう！　雷らい鳴めいと謝罪が、空より同時に降る。

「その娘は余の愛いとし子ごである。刈り取らせるわけにはいかぬのだ」

やにわに天をおおった暗雲より、駆け降るのは白き稲妻——否いな。

白き稲妻をまとい、白馬にまたがり、白ずくめの鎧よろい兜かぶとをまとう騎士、ランスロット・デュ・ラック！　彼の手が逆さか棘とげ状じようの槍ランスを投じた。

これがもうひとつの稲妻となり、アテナを襲う！

「くっ……!?　稲妻と騎馬——最源流の《鋼》か!?」

とっさにアテナはグィネヴィアを突き飛ばし、跳びのいた。

天よりの襲撃をかわしたのだ。しかし、槍は大地に突き刺さる寸前で九〇度——直角に進行方向を変えた。跳んで逃れたアテナを追って、さらに飛ぶ！

「くはっ——！」

稲妻の槍で左肩を抉えぐられ、女神は苦く悶もんに顔をゆがめた。

「智慧の女神たる貴女あなただ。その聖なる目で余の名も見とおすやもしれぬが……。礼儀として名乗ろう。余の名はランスロット・

デュ・ラック。湖の騎士と人は呼ぶ」

　雷鳴と愛馬を従えて、地上に降った軍神は告げた。

3

「小お父じ様！　グィネヴィアは小父様を信じておりましたわ！」

　はずむ声での礼に、ランスロットはうなずきでのみ応こたえた。

　視線はアテナへ向けたまま、飄ひよう然ぜんと言う。

「剣すら持たぬ貴女あなたに槍やりをつけた非礼、心よりわびよう。だが、これも愛し子を守るための振る舞い。どうか寛かん恕じよを願いたい」

「フ——。許しがなくとも、存分に槍働きをするつもりであろう」

　深ふか傷でを負いながらも、アテナは微笑した。

「忘れていたぞ、霧と雷鳴を呼ぶ《鋼》の威い名めいを。あの男の家か臣しんになったと、風のうわさに聞いていた。あなたであったか！」

　アテナは智ち慧えと戦いの女神。大地と闇やみと天空の女神でもある。

　だが、闘神としての性は特に重きものなのか。傷ついたアテナは異様に美しく、覇は気きに富んでいた。美貌を汚す鮮血が、血化粧のごとく華やかですらある。

　ランスロットは「美み事ごと」と賞賛したくなった。

「案ずるな。槍にて挑いどまれれば、妾わらわも力にて応えるまで。いくさ場の作法を知らぬ小娘と侮あなどることこそ、むしろ非礼。アテナは死と闘争の申し子なのだから！」

　やにわにアテナの背丈が伸びた。

　幼い童女の姿から、一〇代後半の乙女おとめへ。成熟を迎える直前の、のびやかな美しさと躍動感を有する美少女へ。一息に成長した。

　肩の傷は癒いえた。傷口がふさがり、流れる血も止まる。

　右腕に顕あらわれるのは、死神の道具じみた長なが柄えの鎌かま。その刃は漆しつ黒こく。闇と大地——すなわち地底の冥めい界かいを統すべる女王にふさわしき武器だった。

「さあ、存分に仕合おうぞ、ランスロット・デュ・ラック！」

「かたじけない。貴女あなたの勇気に、余は最大の敬意を払う」

　馬上から、ランスロットはうやうやしく告げる。

　背が伸びたとはいえ、彼を見あげる格好のアテナは——雄お々おしく笑った。

「……しかし軍神よ。妾にはわかるぞ。あなたは決して十じゆう全ぜんとはいえぬ身だな？」

「ほう。さすがに聡そう明めいな」

　エクスカリバーの再生に取りかかり、守護者の呪じゆ法ほうを破は棄きしたのは半月前。

　しかし、ランスロットはいまだ真の復活を遂げていない。

「妾の叡えい智ちが告げている。『正しき神』でもなく『まつろわぬ神』でもない、半はん端ぱな在り方を長くつづけた報むくいだ。あなたの体は、いまだ現うつし世よに慣れておらぬ。どうせ、一日の大半を惚ほうけて過ごしているのであろう？」

　女神の問いに、ランスロットはかすかにうなずいた。

「左さ様よう。余はけだるい我が身に活力を吹き込むため、雷雲に飛び込み、稲妻に打たれて日々をすごしておる。そうして地上とのつながりを感じなくては、肉体がほどけていくのだ。おかげで、勝手気き儘ままに徘はい徊かいすることもかなわぬ」

　自みずからの弱点を告白しながら、しかし、騎士は泰たい然ぜん

としていた。

「だが、まあ、ご懸け念ねんにはおよばぬ。余は最大の敬意を払うと申した。ゆえに、貴女との立ち合いに時はかからぬであろう。死生勝敗のいずれへ行き着くにせよ」

　死闘を前に、あくまで飄ひよう々ひようと。

　水に漂ただよう浮うき草くさを見送る風流人のごとく言う。

「余は全力全速を振りしぼり、アテナの打倒に挑む。幾いく千せん日にちもの長きいくさをご所しよ望もうなら、お許しあれ。夫それはランスロットの流儀にあらず。吹き抜ける風となり、駆けくだる稲妻となりて、一息に敵を砕く。是これのみが我が作法なれば」

「は——！　よく申した。ならば、妾も全てを懸かけて応えよう！」

　大きくアテナが跳びすさる。

　二足で地を歩む生物としては、ありえない大跳躍。

　ただの一跳びで、白馬に騎乗するランスロットから一〇〇メートル近い距離を取る。翼ある白鳥のごとき、優美な飛ひ翔しようであった。

「大地よ、我が決意を知れ！　暗黒よ、妾の昂たかぶりを呑のみ込め！　太母の裔すえなる女神アテナは、ここに仇かたきなる鋼の郎ろう党とうを成敗してくれよう！」

　可か憐れんな声こわ音ねが、言こと霊だまを呼ばわる。

　ゴゴゴゴゴ——。不気味な音を立てて、大地が鳴動する。

　地震であった。しかも空が陰る、否いな、闇が広がる。つい今までは昼間だったトラキアの広野が、闇のとばりに包まれたのだ。

「我が主よ……御おん身みの骸むくろをこの手に取る僭せん越えつ、ご容よう赦しや願いたい」

　対してランスロットは、ひそやかにつぶやいた。

揺れる大地の上で、乗騎たる白馬を悠々と乗りこなす。天あま翔かける神馬と乗り手の連携は、地震程度で乱れはしない。

「かつて地を裂き、天を穿うがち、星を墜おとした神刀よ。今、そなたが収まるべきは、湖みずうみの騎士の手中なり。いくさの角つの笛ぶえをふたたび吹き鳴らせ！」

馬上より手をのばす。揺れる大地に刺さったままの、白き刃やいばへ。

グィネヴィアが甦よみがえらせた、新たなるエクスカリバーへ。直後、刃渡り五〇センチの白き刃は地を離れ、ランスロットの手元へと飛んでくる！

「——樫オークの秘力よ、小父様を助けて！」

グィネヴィアがとっさに魔術を使った。

招きよせた白き刃に、忽こつ然ぜんと、樫かしの木で作った柄えが生えた。そのままランスロットの右手におさまる。短い刀身に長い柄の組み合わせは、まさしく『槍』。

神槍エクスカリバーの誕生であった。

「土は崩れよ、地は割けよ……女神の猛たけりは滅びの歌になると見よ！」

アテナが謡うたうと、ランスロットと神馬の足もとが崩れた。

戦場となった広野を襲う地震がさらにひどくなり、地割れを引き起こしたのだ。しかも、露出した土くれより黒い蛇へびが飛び出てくる。その数、実に数百匹。ランスロットと愛馬に食らいつき、巻きつき、地中に引きずり込もうと牙きばをむく！

「霧きり風かぜよ、吹け」

ぼそり。馬上のランスロットが唱となえた。

すると彼の周囲に霧が湧わき出した。さらに、騎士と神馬の肉体は色を失い、形を失う。霧はどんどん濃くなっていった。

さながら湖面に立ちこめる濃のう霧む。五メートル先もよく見え

なくなった。

「……小父様、どうぞ御ご武ぶ運うんを！」

　グィネヴィアが飛翔術を使い、彼方かなたへ避難していく。

　それを見送りながら、霧となったランスロットはつぶやいた。

「女神アテナ……おそるべき難敵、ではあるが」

　霧に変じる権けん能のうは、彼の《鋼》としての不死性。

　霧を打ち、切り裂くことはできない。だが、アテナは冥めい府ふの支配者。死と不死については最高の権威。不死身の《鋼》を葬る方法も熟知しているはず。――しかし。

「だが、余と巡めぐり会ったのは不運であった。我が一騎駆けこそ、数あま多たの竜蛇を蹂じゆう躙りんした無む双そう無む対ついの神剣。アテナであっても……否、アテナならばこそ、打ち勝てまい」

　彼が体現する、自らを至し純じゆんの剣たらしめる武技。

　これは究きゆう極きよくの竜殺しともいうべき一撃であった。竜と蛇は荒ぶる大地母神の化身。アテナにとっては天敵にも等しい凶器となる。

　霧となったランスロットと神馬は飛翔し、空中で実体化した。

　降こう臨りんするときに呼んだ雷雲へ飛び込む。電光がバチバチとはじける黒き雲のなかで、騎士は愛馬へささやいた。

「愛し子の祈りに応えるため、敬すべき大敵を打ち砕くため、我らはこれより稲妻となる。余の命、そなたに預けようぞ」

　神槍を構え、切っ先を前方に向けるランスロット。

　白き神馬は駆け出した。地上へ。アテナの待つ地上へ！

　彼らはグィネヴィアを救うときに稲妻と化した。だが今回は、同じく雷電の速さ――神速のまま、さらに絶大な破壊力をまとう。

　それは、天より墜おちる巨大な隕いん石せきにも等しい衝撃、破

壊力であった。

　――轟！

　稲妻の速さで失しつ墜ついする、白き隕石メテオ。

　ありうべからざる、聖なる鉄てつ槌ついであった。

　白き騎士と神馬は天あま降くだる破壊神となり、地上を急襲する。一瞬にして大地へ到達し、まっすぐに槍を突き出す。

　アテナは漆しつ黒こくの鎌を振りあげ、神槍の切っ先を払いのけようとした。

　神速で迫る穂先をも見切り、受け止める女神の神技。

　槍と鎌、ふたつの刃が激突。

　その瞬間、暴風が生まれた。ぶつかり合うアテナとランスロットを爆心地として、全てを吹き飛ばす衝撃波の爆風が巻きおこったのだ。

　アテナの立つ足もとが崩れていく。

　トラキアの広野に根を張る草木、土や岩が吹き飛び、抉えぐられていく。

　それは、地表にクレーターが生まれる光景であった。直径にして二、三キロはある巨大な陥かん没ぼつが地表に刻まれ、大気は鳴動した。

　このクレーターの底で、女神と軍神はさらに激突をつづける。

　アテナは大地より精気を吸いあげ、乙女の細腕に天下無双の剛ごう力りきを宿らせた。闇を実体化させて九体の妖よう蛇じやと成し、ランスロットを噛かみ砕かせようとした。

　――しかし、あとすこしで及ばなかった。

　ついにアテナの鎌は、ランスロットの神槍に跳ね飛ばされた。闇の妖蛇たちは、衝撃波で消し飛んでしまった。

　天より降り、大地を崩壊させる隕石墜落メテオストライクの成じ

よう就じゅであった。

「ク――ガ、アアァァッ!!」

　ついに神槍で胸を貫つらぬかれ、アテナは苦く悶もんの叫びを上げた。

　しかし、蛇の双眼は尚なおもランスロットを凝ぎよう視しし、報復の一手を放たんと闘志を燃やす！

　白騎士は神馬の腹を蹴った。このまま押し切るつもりだった。だが、槍に貫かれた女神へ大地の神力が集つどう。白き隕石となったランスロットを押し返さんとする反発力となる。

　剣術仕合でいえば、鍔つば迫ぜり合いの格好。

　さすがアテナよ。惜おしみなく賛さん嘆たんしながら、ランスロットは守るべき娘へ叫ぶ。

「愛し子よ、今こそ聖杯の秘力を解き放つ時ぞ！」

（どういうことですの、小父様!?）

　飛翔して遠方に逃れたグィネヴィアより、思念が届く。

「そなたの聖杯は大だい地ち母ぼ神しんの命を吸いあげ、たくわえる代しろ物もの。ならば、最高位の地母神より命を汲くみあげる好機、見逃してどうする！」

（――！　承知いたしました！）

　それ以上の指示は不要だった。

　ランスロットのそばに、黄金の大おお甕がめ『魔ま導どうの聖せい杯はい』が忽こつ然ぜんと顕れる。

「ぬ!?　湖の騎士よ、何を企たくらむ――おお!?」

「このまま押し切れたとしても、貴女あなたの不死をくつがえせぬかもしれぬ。だが、聖杯によって命を吸い尽くすのであれば、話はちがう。……さらばだ、まつろわぬアテナよ。貴女はひさかたぶりの決闘にふさわしき大敵であった」

神槍エクスカリバーが抉った傷口から——

アテナの有する大地母神の生命力が漏もれ出した。そのまま聖杯へ流れ込む！

「妖あやしげな手て妻づまを使うと見える！」

アテナの手から黒い霧が放たれ、聖杯を包みこんだ。

物質を腐ふ食しよくさせるはずの気体だと、ランスロットは見抜いた。しかし、聖杯はアテナの命を吸いつづける。黄金の器うつわは、まったく輝きを曇くもらせない！

「これはかつて、我が主に無限の力を捧げるため、貴女と同等の地母神が命を捨てて創造した器なのだ。我らは聖杯と呼んでいる」

愕然とする女神へ、ランスロットは淡々と告げた。

「土より成る物質に見えて、そうは非あらず。神の叡えい智ち、天地の理ことわりを体現する徴しるしなのだ。アテナといえども砕くことはかなうまい」

「く……そうか。妾が求めたゴルゴネイオンと同じ、不ふ滅めつ不ふ朽きゆうの器なのだな」

美貌を蒼そう白はくにして、アテナはうめいた。

しかし、尚も輝きを消さない女神の瞳に、ランスロットは瞠どう目もくした。

「たしかに感じるぞ。妾の命が削られ、その器に呑のまれていくのを」

いつしか、ランスロットと神馬は動きを止めていた。

ついに彼らも力を出し切り、墜落する隕石のごとき突進を終えたのだ。

「この器のために、白き太母神は婢はした女めへと身を堕おとしたか。やんぬるかな！」

今まで聖杯は、幾いく柱はしらもの大地母神から命を奪ってき

た。

　アテナであっても逃れる術すべはない。なのに女神は闘志を失わず、己おのれの胸に刺さった神槍の柄を掴つかみ、ぐいと引き抜く。乳房の間に穿うがたれた傷口から、ごぼりと血が流れ出る。

　そして、アテナは凄せい絶ぜつに微笑ほほえんだ。

「だが、妾はあらゆる叡智を我がものとする智ち慧えの女神。聖杯とやらのカラクリ……この身で味わったおかげか、存外に早く察せられた。やられるだけというのも性に合わぬ。意い趣しゅ返がえしをさせてもらおう！」

　血まみれの手が、聖杯に向けてのばされる。

　すると、大おお甕がめの形をした神具はアテナのもとへ飛んでいった。

「命を汲くみとる聖杯、預からせてもらうぞ！」

　アテナは手をのばし、聖杯にふれる。子供の背ほどもある大甕がたちまち消えた。

　女神の体内に呑み込まれたのだ。

「暫しばしの別れだ、湖の騎士よ。残りの返礼はまたの機会に取っておく！」

　アテナは聖杯を呑んだまま、ずぶずぶと地中に沈んでいった。

　逃すまいとランスロットは槍を繰り出す。

　しかし、まにあわない。穂先は空を貫つらぬくのみだった。

「仕損じたか……。まさか、このような首しゅ尾びに終わるとは」

「いいえ、小父様。決して悪くはない結果かと、グィネヴィアは思います」

　頭を振って悔くやむランスロットに、飛翔の術で戻ってきたグィネヴィアが答えた。

　トラキア平原に穿たれたクレーターの底で、騎士と少女は向かい

合う。

「アテナは身中に呑み込むことで、聖杯の働きを抑おさえたようです。しかし、グィネヴィアは感じます。命を汲む杯さかずきが、それでもわずかに動きつづけるのを」

　神秘なる絆きずなで聖杯と結ばれたグィネヴィアは言った。

　太母神につらなる大地の女神が、己の不死と神格を捨ててまで創造した神具なのだ。かの杯は大地が在ある限り活動を止めず、不朽不滅であるはずだった。

「このまま時を置くだけで、かなりの呪力を貯ため込みましょう。あとはどうにかして、小父様の神刀とアテナの持つ聖杯をつなげることができれば」

「星々をも切り裂く鋼が、ふたたび振るえるようになる、か」

　ランスロットはつぶやいた。さっきの戦いではただ刃物として使っただけ。

　伝説がエクスカリバーと呼ぶ鋼は、まだ真価を見せていない……。

「だが、そうなる前に聖杯を体から抜き出すかもしれぬぞ？」

「そうなれば、むしろ好都合。自らの裡うちに呑むことで、アテナは聖杯を制したのです。もとに戻せば、半月も経たぬうちに――」

「アテナは死ぬ、か。なるほど、たしかに悪くはない」

　ランスロットはうなずいた。

　一度『路みち』が結ばれたら最後。どこに捨てようと、どれだけ距離を隔へだてようと、地上にある限り聖杯はアテナの命を吸収しつづける。

　不死の命とひきかえに創造された神具――。

　それゆえのすさまじさであった。死せる女神の叡智と祈りは、今も尚、大地の奥底に深く刻み込まれ、聖杯の力を地の果てまで届かせるのだ。

「ならば愛し子よ。ひとまずアテナは捨て置くか？」

「はい。グィネヴィアは日本へ、主の眠る島へ参ります。御ご加か護ごをお授さずけくださいませ」

　うむ、と答えて、ランスロットは愛馬の手た綱づなを取った。

　アテナの退場で光を取り戻した蒼そう穹きゅうへ飛び立たせる。いまだ地上に慣れぬうえ、全力全速の一撃で神力も使い果たした。

　ふたたび雷雲に身を投じ、休息を取る必要があった。

　まつろわぬランスロット——。

　絶大なる破壊力を有しながら、いまだ完全復活とはいえない状態であった。

第２章　魔王と学園祭

1

　神様を殺した大魔王。

　そんなプロフィールを持つ草くさ薙なぎ護ご堂どうも、高校生である。

　だから、通っている城じよう楠なん学がく院いんの学園祭には、もちろん参加する。

　護堂のクラスは、教室で地元・文ぶん京きよう区くの地方史についてレポートを張り出す……という、楽だが面白みのない展示を行う。

　自分の担当分を早々にまとめた護堂は、学園祭の間、暇ひまなはずだった。

　しかし、ひょんなことから友人たちの企画した『店』を手伝う流れとなった。

　前日は泊まり込んで店作り。一日目は厨ちゆう房ぼうや買い出しの手伝い。最終日である二日目も、手伝いをつづけるつもりだった。

　だが、もともと『店』とは無関係の護堂に、企画者の名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎ（非公式な通称・三バカ）が気を利きかしてくれた。

「明日は自由にしてくれ……って言われたけど、どうしたものかな？」

学園祭一日目、学校からの帰り。

夜道を歩きながら、護堂は思案した。せっかくもらった暇、無む駄だにするのも野や暮ぼだ。

「でしたら護堂さん、明日は私といっしょに学園祭を見てまわりませんか？」

左隣を歩く、万ま里り谷や祐ゆ理りからの誘いだった。

たおやかな美び貌ぼうに、しっとりとした微笑を浮かべている。

まさしく大やまと和撫子なでしこという、上品な物腰と容よう貌ぼう。やや茶色がかった髪はつややかで長い。控えめな性格に反して、目立つ美少女だった。

「私もお昼前で茶道部の当番が終わるので……もし、よろしければ。午後からはひかりも遊びにきます。おひとりでまわられるよりもにぎやかですし——」

旧きゆう華か族ぞくのお嬢さまは妹の名前も出してから、そっと目を伏せた。

「わ、私も護堂さんとごいっしょの方が、きっと楽しくなると……思います」

恥じらいながら付け足す。その仕草と言葉が可か憐れんだった。

しとやかなだけでなく、いざとなれば凛り々りしく、誇り高く、少々怒りっぽくもある深しん窓そうの令嬢。彼女がときどき見せる恥じらいが、護堂には愛いとおしい。

「そうだな。じゃあ、明日はいっしょにあちこち行こうか」

だから、つい即答してしまった。

本当は『女子といっしょは照れくさいな』という、罰当たりな感情もあったのだが。

「ならば草薙護堂。わたしの同行もお許しいただけますか？」

「もちろん。リリアナだけ別行動のわけないだろ」

右隣の少女から確認されて、これにも即答した。

リリアナ・クラニチャール。東とう欧おう系けいの妖よう精せいめいた美少女であり、草薙護堂の侍じ従じゆう長ちようを自認する騎士である。

……いわゆる『両手に花』の自覚がないまま、家路をたどる護堂であった。

というわけで、学園祭二日目。

護堂は朝の一〇時に自宅前でリリアナと落ち合い、学校へ向かった。

このところ、しょっちゅう彼女と行動を共にしている。ふたりはこの朝も約束を交わすことなく、草薙家の前で合流した。なんとなくそうなるだろうと双方とも思っていたし、事実そうなった。最近は、多くを語らずとも自然と呼吸が合うのだ。

「それにしても、日本の学校にはこういう催しがあったのですね」

校門に造られたゲートをくぐりながら、リリアナがつぶやく。

学園祭でおなじみ、手作りの通用門だ。

「イタリアの学校でもナターレクリスマスや復活祭の時期にパーティーなどをしますが、ここまで大規模ではありませんでした。これだけ大がかりにすると手間もかかりますが、楽しみも増えて、悪くないですね」

と、リリアナが微笑ほほえんでいる。

いつも『騎士』たらんとする彼女にしては、珍しく柔にゆう和わな笑顔だ。

「もしかして、リリアナはこういうのが好きなのか？」

「はい。わたしはホームパーティーで家を飾り立てたり、お料理をたくさん作ったりするのが大好きなんです。このお祭りは言ってみれば、ああいうパーティーを学校全体の規模に拡大したものですよ

ね？　来年はわたしもいろいろ主催したくなってきました」

　ちょっと浮き浮きしながら、銀髪の騎士は言った。

　いつもの凛々しさとも、思わぬ失敗をしたときのあわてぶりともちがう。今のリリアナは、一六歳の年齢相応に無む邪じゃ気きだった。

「そうだなー。結構、面白いと思うぞ。いいんじゃないか」

　護堂はうなずいてから、もうひとりの騎士を思い出した。

「学園祭……学生有志による手作りのフェスタなのね……。趣しゅ旨しはわかるし、行けばまあまあ楽しめるでしょうけど。エリカ・ブランデッリを主しゅ賓ひんに迎えるに足る品格があるとは、
ちょっと思えないかしら」

　数日前、所用でイタリアへ飛ぶという紅あかき騎士の言いぐさである。

　護堂は苦笑しながら言ったものだ。

「そう言いたくなるのも、わからないでもないけどな。でも、せっかく日本の学校にいるんだし、顔を出すのもいいと思うぞ。帰るのをすこし延期したって問題ないだろ？」

　まあ、イタリアの家族が急病で——と、口実をでっちあげての帰省である。

　本当はそちらが問題なのだが、敢あえて不問にした。

「そうね。たとえそれが退屈な催もよおしでも、安っぽい邸てい宅たくでの面白みのないサロンでも、愛いとしい護堂がいっしょなら、味わい深い想い出を作れるとは思うわ」

　エリカは微笑みながら、胸のあたりを押さえた。

　何気ない仕草でさえ華か麗れいに映はえるのは、彼女の真しん骨こつ頂ちょうだといえるだろう。

「でも、今回はパスね。早めに済ませておきたい面談があるの。今イタリアに行かないと、次にいつ実現できるか、わからない、ね……。だから護堂、わたしがいなくて他の娘たちでは埋めがたい無ぶ聊りようを感じるでしょうけど、耐えて頂ちよう戴だい」

「……なんて、エリカは言ってたっけな」

「仕方ありません。あの件はわたしとエリカにとって、死活問題ですから」

　学園祭の喧けん噪そうを歩いていく護堂とリリアナ。

　紅き騎士との別れを思い出した主あるじに、青き騎士が相づちを打つ。

「あいつが向こうへ行った理由に、リリアナも一枚噛かんでいたのか？」

「ええ、実は。……詳しくはエリカが首しゆ尾びよく帰参したときに、ご説明いたします。今はご容よう赦しやください」

　こういうこともあるのだなと、護堂は目を丸くした。

　エリカとリリアナはライバルでありながら、やはり何だかんだで運命共同体なのだ。

　詮せん索さくするのをやめて、校内に目を向ける。

　校門から校舎への道は、いつもとちがう学園祭仕様。道の両側に模も擬ぎ店てんが並んでいる。

　氷水で冷やしたドリンクを売る店。たこ焼き、お好み焼き、イカ焼き、クレープ、焼きそば、ベビーカステラ、おでんなど定番の食べ物屋。さらに占い、似顔絵描き、写真撮影、カラオケ、フリーマーケットなどなど。

　なかなかの充実ぶり。かなり気合いが入っている。

　城楠学院には大学部もあり、高等部の学園祭もその影響を受けるせいかもしれない。

　一〇分ほど歩き、林めいた一角を通り抜けると、目的地に到着した。和室棟と呼ばれる建物だった。

「前に来たときは清せい秋しゆう院いん恵え那ながいましたね。もしかして、今回も？」

「どうだろう？　学園祭の前に電話をかけたら、つながらなかったしな。あいかわらず携帯がバッテリー切れなのか、電波も入らない山奥へ行ったのか……」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こを思い出したリリアナに、護堂は言った。

　高校生のくせに、神しん出しゆつ鬼き没ぼつな旅人なのだ。思わぬところで再会するし、会いたいと思っても会えなかったりする。

　話しながら、広さ二〇畳じようほどの和室にやってきた。

　ここが茶道部による『茶会』の会場だった。受付で入場料を払い、上がり込む。

　和室内には茶釜と茶席がいくつかセッティングされており、そこで茶道部員が客をもてなし、お茶と和菓子をふるまってくれるのだ。

「おふたりとも、よくいらしてくださいました」

　茶席についた護堂とリリアナの前に、祐理がやってきた。

「あとすこしで私の当番は終わりますので、少々お待ちください」

「ああ、わかっている。……ところで万里谷祐理、茶道部はそれが衣装なのだな」

　感心したように銀髪の騎士が言った。

　抹まつ茶ちやを点たてる茶道部員たち。全員が女子なのは、この種の部ではありがちなことだ。

　彼女たちは学校の制服ではなく、着物姿で茶席にすわっていた。

「はい。茶道部ですし、このくらいはしないと——と、みなさんで

話し合いまして」

　わずかに照れながら、祐理は言う。

　彼女は桜色の着物をみごとに着こなしていた。正直、他の茶道部員は着なれていないのが見て取れる。茶を点てる動きが、どこかぎこちない。

　だが、祐理だけはそれがなく、ごく自然な、気品ある所作だった。

「なるほど、それでか……。何か変だと思ったんだ」

　護堂は納得して、会場を見まわした。

　ここで供されるのは抹茶と和菓子である。あまり男子受けするとも思えない。

　なのに、客の三分の一ほどが若い男なのだ。城楠の男子生徒に、よその制服を着た男子学生、もっと年かさの一般客。

　彼らの目当ては着物姿の女子なのだろう、やはり。

　ついでに言うと、ちょっと居心地が悪い……。祐理の点ててくれた抹茶を味わいながら、護堂はなんとなく思った。

　茶道部員のなかでも、祐理がいちばん目立っていた。

　何といっても、評判になるほどの美少女だ。しかも茶席での優美さが、一目でわかるほど他の娘より抜きん出ている。

　草薙護堂はそんな女子にもてなされ、しかも銀髪の白人少女を連れているわけで。

「きっと、これが自じ意い識しき過か剰じようってヤツなんだな」

「どうしました、護堂さん？　お口に合いませんでしたか？」

「わたしの舌には、とても美お味いしく感じられますが……。それとも何か心配事が？」

「ああ、いや。たいしたことじゃないから、気にしないでくれ」

めざとい少女たちに笑いかけながら、護堂は頭を振った。

身近な女子が魅力的すぎるせいで、変に気をまわしすぎなのだ、自分は。もっとデンとかまえていよう……。

尚、この認識は約一時間後に改まることとなる。

2

「さっきのは、やっぱり勘かんちがいじゃなかったんだな」

しみじみ護ご堂どうがつぶやけば、

「どうしましょう？　どうしてこんなふうに人目を集めてしまうのか、さっぱりわからないのですが……。困りました……」

着物姿の祐ゆ理りは憂うれい顔になり、

「わたしたち三人のどこかに、皆の興味をかきたてる要素があるようですね。しかし、だからといって、こそこそ相談しても仕方がない。わたしたちに恥じ入るべき理由はひとつもありません。毅き然ぜんとしていましょう」

リリアナには凛り々りしく訴えられた。

——茶道部での当番を終えて祐理が合流したのは、お昼前だった。護堂たちの前にやってきた祐理は、あの茶会と同じく着物姿だった。

「茶道部の宣伝になるからと……部のみなさんに、この格好のまま外に行けと言われてしまったのです……」

ちょっとうつむき、恥ずかしがりながら祐理は言ったものだ。

今は学園祭。変わった扮ふん装そうなど珍しくもない。なのに、桜色の和服を身につけた祐理はやたらと注目を集めていた。リリアナまでそばにいるから尚なお更さらだ。

道ゆく人々は彼女たちをさりげなく、あるいは露ろ骨こつに見な

がら通りすぎていく。

　たしかに、いい宣伝かもしれない。

　講堂での演劇やバンド演奏、コント。グラウンドでの運動部による親善試合。校舎内の展示や店、演だし物ものなど。寄ってみたいところはいくつもあったが、ちょうどランチタイム。やはり腹ごしらえを済ませたい。

　というわけで、三人は食べ物系の出店をまわったのだが。

護堂「（祐理の興味ありそうな視線に気づいて）もしかして万ま里り谷や、お好み焼きとか気になるのか？　意外だな」

祐理「あ、はい。実は一度も食べたことがありませんので……」

護堂「自分の家でも作れるだろ？　万里谷ならかんたんにできそうな気がするけど」

祐理「（しとやかに微笑み）母が自宅で作ってくれたこともありますし、作り方も知ってはいるのですが。ああいうふうにお祭りで売っているものを食べたことは、まだ——」

護堂「ないのか!?」

祐理「はい。子供の頃、不衛生だからと両親がこういう場所では食べ物を買ってくれなかったので、そのまま今に至ってしまいました……」

リリアナ「（訳知り顔で）たしかに、衛生面での充実は望めないが、逆にこういう場所ならではの美味もある。一度も試ためさないのは人生の何割かを損しているとも言えるだろう」

護堂「たしかにそうかもなー。俺は縁日なんかで、しょっちゅう食べてたよ」

リリアナ「わたしもイタリアでは、サンドイッチやクレープの屋台をときどき利用していました。道ばたで食べるのも時にはいいものです」

祐理「そうなんですか!?　（そわそわした様子で）で、でしたら、せっかくの機会ですから、私も、その——」

護堂「（学園祭プログラムを見て）なら校庭で、広ひろ島しま出身の産さん夫ふ先生が広島焼きの、大おお阪さか出身の丸がん場ば先生がタコ焼きの屋台を出してるみたいだぞ。行ってみるか？」

祐理「はい、ぜひ！」

祐理「（校庭で乱暴な通行人に突き飛ばされて）……きゃっ!?」

護堂「（祐理を抱き止め）大丈夫か、万里谷？」

祐理「（護堂に抱かれながら微笑）は、はい。ありがとうございました」

護堂「（祐理の顔を見て、笑う）そうか、よかったよ」

リリアナ「（ふたりが密着している時間をひそかに計はかっている。一〇秒、二〇秒、おもむろにせき払い）コホン……ふたりとも、少々顔と顔の距離が近すぎるのではありませんか？　草くさ薙なぎ護堂、あなたと万里谷祐理が浅からぬ仲なのは知っていますが、このような場合、もっと手短にすませてもよいはずで——」

護堂「（あわてて祐理と距離を取る）——！」

祐理「（名な残ごり惜おしげに護堂を見つめる）…………」

護堂「ば、バカ言うな。今のはただとっさに動いただけで、そういうのじゃないッ」

リリアナ「そうなのですか……？　失礼しました。あなたのご意思はともかく、あなたの本能は隙すきあらば女性との距離を詰めようとしますから、ついてっきり……」

護堂「そんな本能、あってたまるか。大体、リリアナにだって同じことをするぞ？」

リリアナ「え？」

護堂「当たり前だろ。仲間が危ない目に遭あったんなら、すぐ助けるに決まってる」

リリアナ「（すましているが微妙にうれしそう）…………」

護堂「まあ、実際はリリアナが、俺を守ることの方が多いだろうけどな」

リリアナ「そ、そうでしょうね。ですが、もし仮に、そのような緊急時があるとしたら、あなたに守られるのもやぶさかではありませんっ」

リリアナ「（広島焼きを買ってきて）量が多いので、三人で分けましょう。その方が万里谷祐理もいろいろ食べられてよいでしょうから」

祐理「ありがとうございます。（大ぶりの広島焼きに）……そうですね、私ひとりではとても食べきれそうにありません」

護堂「たしかに、こりゃ完全に男子向けのボリュームだな」

（三人、箸はしで切り分けた広島焼きを食べだす）

護堂「（うっかり箸を落とす）あ、しまった。新しいのもらってくるか」

リリアナ「それには及びません。わたしの箸をいっしょに使えばいいだけのことです」

護堂「ああ、そうか——（間接キスの発生に気づき）い、いや、それはちょっと」

リリアナ「お、お気になさらずに。先ほどあなたと万里谷祐理が浅からぬ……と申しましたが、それはわたしとの間にも言える話です……」

護堂「※☆♂♀!?」

祐理「あ、あの！　で、でしたら、わたしのお箸を使われても！」

護堂「※☆♂♀○×□!?」

（しばらく三者三様の主張、せめぎ合い、葛かつ藤とうがつづく）

護堂「そ、そういうことなら、ありがたく使わせてもらおうか……（結局、リリアナと祐理の箸を交互に使い、広島焼きを食す）」

リリアナ「……いちいち箸をお渡しするのも、すこし面倒ですね。よ、よろしければ、わたし自身の手であなたのお口に運んで差しあげても（箸で広島焼きをつまみ、護堂の口元へ）こ、こうすれば、もっと合理的です……」

祐理「そ、そう言われてみると、そうかもしれませんね……（もじもじしながら）あの、護堂さんがお望みでしたら、私もそのように……ど、どうぞ」

護堂「俺は幼稚園児じゃないぞ！　自分で食べられるって！」

　ふと気づけば、やたらと人目を集めていた。

　今日は学園祭なので、学院生だけではない。他校の生徒にご近所の老若男女、子供たちもいる。そうした人々から注目されていたのだ。彼らは『とんでもないものを見た』という感じでビックリしていたり、眉まゆをひそめたり、連れとひそひそ話したり、ニヤニヤしたり。

「ちょっとうるさくしすぎたか……？」

「そんなに大声は出していないと思ったのですが……」

「野や次じ馬うまができてしまいましたね。わたしたちなど見ても、面白くないでしょうに」

　護堂一行は、いつのまにか近くの人たちから距離を置かれていた。

　特に目につくのは、一部の男子学生を中心とした若い男性だ。敵意むき出しな目つき、いらだたしげな表情……そういうものが、彼らの抱いだいた負の感情を表明している。

　護堂はすまなく思った。

　そこまで怒らせるほど騒がしかったのだ。反省しよう、と。

「なんか他の人たちの迷惑になったみたいだな。気をつけよう」

「ですが草薙護堂、今までの行動をかえりみて、改めるべき点はないように思えます。非がないのですから、気を遣つかわずともよいのでは？」

「でもリリアナさん、私たちが気づいていないだけかもしれませんよ？　……あ、もしかしたら、こんな道ばたで食事をしていたのが迷惑だったのではないでしょうか。通行の邪じゃ魔まになってしまったのかも」

「同じように飲食している人間は何人もいる。その可能性は低いと思うが……。だが一応、気を遣つかってみるか。食堂にでも移動して——」

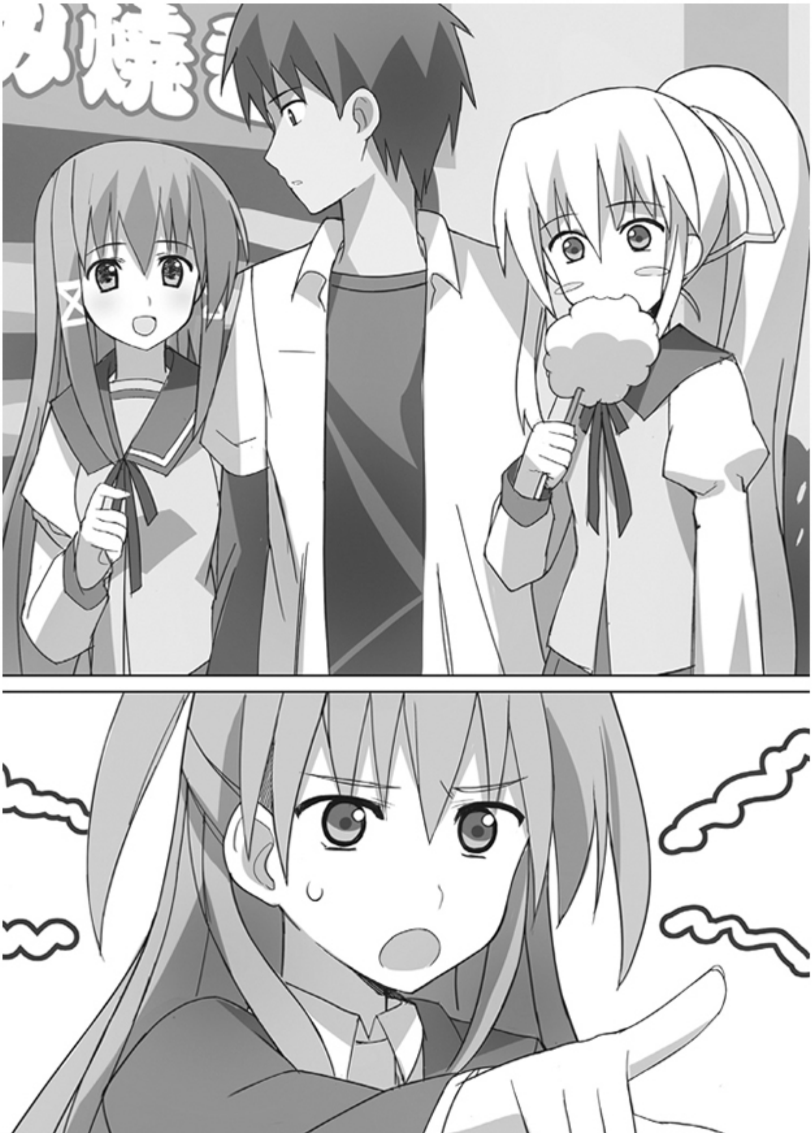
　食料を調達したあと、出店もない隅っこのスペースに移動していたのだが。

　祐理の指摘にリリアナが提案し、護堂もうなずきかけた、そのとき。

「……あんたたち、何ボケボケな相談してるの？　ツッコミなしのボケ三人でコントやってんじゃないんだから！」

　威勢のいい声を聞いて、護堂は驚いた。彼女がここにいるとは完全に想定外だった。

　振りむけば、怒っている様子の幼なじみ、徳とく永なが明あ日す香かが仁に王おう立だちしていた。



「べつに見るつもりはなかったんだけど、あんたたちときたら三人でイチャイチャして……目を背そむけていたら、もっとイチャイチャしはじめて……。あのね、彼氏彼女の二人連れなら、まあ大目に見ないでもないわ。でも何？　両手に花？　二人まとめてつきあってるとでもいうの？　そんないかがわしい関係を公共の場でアピールして、どういうつもり⁉」

　テンポのよい早口で、明日香は苦情を言いたてた。

　なかなか整った顔立ちに、昔から変わらぬツインテールの髪型。草薙家と同じく、根ね津づ三丁目の住人である。

「どう護堂？　何か反論はある？　聞くだけ聞いてあげるけど」

「反論も何も……俺たち、べつにイチャイチャとかしてないぞ。仲間内で普通につるんでいただけで。なあ？」

　護堂の言葉に、他のふたりもすぐに応じた。

「ええ……申し訳ありません。ちょっとおっしゃる意味がわかりかねます」

「わたしたちはたしかに、通常の『友人同士』の範はん疇ちゆうに収まりきらないほど、固い絆きずなで結ばれている。だが、それを猥わい褻せつな関係のように語られるのは心外だな」

　祐理は困惑し、リリアナは憤ふん然ぜんと言う。まったくだと護堂もうなずいた。

　明日香は昔から、的まと外はずれな理由でいきなり怒り出すヤツなのだ。

「んくっ。公衆の面前で抱き合ったりノロケたり、間接キスや『はい、あーん』まで披ひ露ろうしといて、なんて言いぐさ。護堂がこうなのは予想どおりだけど、他の娘こまで。――ちょっと教えて。この連中は、いつもこんな調子なの？」

　明日香が後ろを振り返った。

そこには祐理と同じクラスの女子、澤さわさんと宮みや間まさんがいた。

「前はもうすこし控えめだったけど、最近はおおむねそうだわ」

「ううん。いつもはエリカさんもいるから、もっとすごいよ。今日はむしろ抑おさえめ……？」

メガネ女子の澤さんがレンズを逆光で光らせながら言うと、小学生のように小こ柄がらで童顔の宮間さんは疑問形で反論した。

クラスメイトの登場に、祐理が会え釈しやくする。

そして護堂は、何でこのふたりと明日香がいっしょなんだと思った。

「あたしと澤さん、宮間さんは同じ店でバイトしてるの。ほら、大通り沿いのファミレス。あんたも知ってるでしょう？　で、今日は学園祭に来ないかって誘われたわけ」

察しよく明日香が言った。勘がよく、頭の回転も速い娘なのだ。

「ところで、リリアナさんは護堂のうちで紹介してもらったけど……。そちらのきれいな人は？　ずいぶん上品そうな人ね」

「ああ。そういえば、まだ会ったことがなかったよな」

明日香がちょっとまぶしそうに祐理を見たので、護堂は言った。

「万里谷、こいつは俺の古なじみで徳永明日香っていうんだ。家も同じ商店街にある。学校は近所の都立だから、べつだけど。で、こっちは——」

「万里谷祐理と申します。護堂さんとは親しくおつきあいさせていただいております」

和服姿の祐理は、しとやかに頭を下げた。

言葉数こそすくないが、たしなみと躾しつけのよさを十二分に感じさせる挨拶だった。

「ど、どうも、はじめまして。…………銀髪の外人さんに、どう見

たって完かん璧ぺきなお嬢さま、それにうわさの金髪彼女もいるし、本当にどうしようもない方向へ成長してくわね……。とんでもないヤツだわ。やっぱりあたしが監督して——ううん、一いち朗ろうおじいちゃんにさんざん泣かされたおばあちゃんみたいになるのは……」

珍しく気き後おくれしたようだった。『はじめまして』以降がよく聞こえない。

いつも歯切れよい啖たん呵かが明日香の身上なのに。

「っと、そろそろ動いた方がいいな。いつのまにか、もっと注目されるようになってる。まわりの迷惑だし、どこかへ行こう」

人の視線が気になって、護堂は提案した。

明日香の乱入で、周囲からの注目がいっそうひどくなっていた。

祐理とリリアナもすぐうなずいてくれた。澤さん、宮間さんに挨拶し、立ち去ろうとして——呼び止められた。もちろん明日香に、だ。

「ち、ちょっと待ちなさいッ。このあとも三人でイチャイチャするつもり⁉」

「だからイチャイチャなんかしてないって。変なケチをつけるなよ」

「なんて自覚のなさ……あんたって、本当にどうしようもないスットコドッコイね！」

あいかわらず口が悪い。そのうえ悪態も古くさい。

だが、昔と変わらぬ幼なじみが、どこか微笑ましくもあった。護堂は苦笑しながら「じゃあ、またあとでな」と歩きだす。

「仕方ないわ。断だん腸ちようの思いで、決断してあげたわ！」

すると、いきなり明日香に言われた。

「学園祭の間だけでも、あたしが監督しないとダメなようね。澤さん、宮間さん、申し訳ないけど、やることができたの。ここで別行

動させてもらうわ。――あたしはこのボケ男を、責任を持って監視するから！」

3

　こうして徳とく永なが明あ日す香かを加えた一行は、校舎へ入った。

　もっとも、護ご堂どうには攻撃的な明日香だが、リリアナと祐ゆ理りには正反対だった。

「いい、リリアナさんに万ま里り谷やさん」

　歩きながら、明日香はとくとくと語る。

「この男は言うことこそまじめだし常識的だけど、そんなの全部ウソっぱちよ。信用に値あたいしないフィクションよ。もしあなたたちがこいつにだまされているのなら、力になりたいの。困ったことがあったら、何でも相談してね」

　草くさ薙なぎ護堂をおとしめながらのやさしさと気遣いだったが。

「そうでしょうか？　護堂さんはきちんとした、常識のある方だと思いますよ？」

　おっとり控えめに、祐理が反論してくれた。

「万里谷さんが本当にそう思ってるなら、何も口出ししないけど。もしかして、いろいろ思い当たる節ふしがあるんじゃないの？　ある程度こいつとつきあいが深いのなら、絶対に何かあると思うんだけど」

「……そんなことはありませんよね、リリアナさん？」

「……ああ。草薙護堂は人格・行動ともに高こう潔けつな、騎士の鑑かがみのような人だ。その讒ざん言げんには当てはまらないと思う」

　改めて問われ、祐理とリリアナはなぜか歯切れ悪くなった。ふたりは質問者の明日香だけでなく、護堂からも目をそらしていた。

　その不自然さになんとなく不ふ愉ゆ快かいになったとき、

「あ、おじさまじゃないですカー。おはようございまース」

　すれちがったメイドさんに会え釈しやくされた。

　もっとも、ノースリーブのチャイナドレス＆フリルをあしらったエプロンという、正統なメイドとはかけ離れたコスチュームだ。しかも、頭には猫耳つきのカチューシャ。

「ああ、おはよう」

　もう昼だが、挨あい拶さつはいつでも『おはよう』な業界は多い。無難に返す。

　チャイナ猫耳メイドさんはそのまま外へ歩いていった。ビラの束を持っていたので、宣伝しに行くのだろう。

「……ちょっと護堂。今のは何？」

　いきなり明日香につっこまれた。

「コスプレした女の子と知り合いってだけならともかく、『おじさま』って何よ!?」

「うーん。話せば長くなるから大おお雑ざつ把ぱに言うと、この学園祭で知り合いのやってる『店』があってさ。そこを手伝ったら、ああ呼ばれるようになった」

「どんないかがわしい店よ、それ!?　ちょっとそこまで案内しなさいッ」

「え、今からか？」

　明日香にすごまれて、護堂はすこし考えた。

　べつにいかがわしい店ではない。案内するのはいい。だが、連れは他にもいるわけで。

「陸りく鷹よう化かが協力したという店ですか。わたしはべつにか

まいませんが」

「ああ、香ホン港コンの……。そうですね、すこし興味があります」

　リリアナと祐理が賛同してくれたので、まあいいかと護堂はうなずいた。

　やってきたのは、校舎三階の端にある教室。

　名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎが香港陸家のバックアップを受けてプロデュースした、『チャイナ猫耳メイド喫茶・飲ヤム茶チヤアレンジ館』が営業中だ。

「やっぱり、今日も流は行やってるな」

　店の繁はん盛じようを眺めて、護堂は言った。

　教室に入りきれない客が、入り口の前で行列を作っている。

　ここで供されるのは、秋あき葉は原ばらの〝本店〟から直送される中ちゆう華か点てん心しんに、淹いれたての中国茶。給仕するのはチャイナ猫耳メイドのコスプレ部隊。エプロンの下はボディラインを強調するチャイナドレスで、スカートには大胆なスリットも入っている。

　プラス、本格中華の味。行列ができるのも納得だ。

　チャイナ猫耳メイド部隊は、香港陸家のメイドテーマパークから派は遣けんされた本職である（学院の女生徒だと客には思われているだろうが）。三バカは『猫耳スクール水着メイド喫茶』を計画していたのだが、彼女たちの猛反対に遭あい、今の形に落ち着いた。

「やっぱり、プールでもないのに水着は変だよな……」

　その一幕を眺めて、護堂は納得したものだ。

　猫耳カチューシャだけ、三バカが土ど下げ座ざして頼んだ結果、どうにか採用されたが。

「いかがわしい店じゃなかっただろ？」

「かなりギリギリの線だけどね……。でも、何であんたが『おじさま』なの？」

　行列に並びながら言うと、明日香ににらまれた。

　それはメイド部隊のボス・陸鷹化が護堂を『叔お父じ上うえ』と呼ぶから……だが、口をつぐんでおいた。そこまで語ると、長くなりすぎる。

「おお、心の友よ！」

　呼びかけてきたのは、名波だった。

　厨ちゆう房ぼう兼バックヤードに借りた隣の教室から、ちょうど出てきたのだ。

「おまえのおかげで、店は二日目も順調に繁盛している。……『猫耳スク水メイド喫茶』のコンセプトを捨てたのは痛手だったが、代わりに今の盛況を手に入れられた。全てはおまえの紹介があればこそ——礼を言うぞ、草薙」

「ん、まあ、役に立てたのはよかった。でも『心の友』はやめてくれ」

「くくく……奥ゆかしいヤツめ。しかし、今回の一件でオレにはわかったぞ。草薙、おまえはリア充じゆうとして満たされているのは上辺だけ——実は平凡な日常に飽あきたらず、過激な非日常を渇かつ望ぼうする男だとな！」

　喝かつ破ぱされて、護堂はどきりとした。

　魔王カンピオーネとしての死闘を、もちろん名波が知るはずないのだが。

「オレには……同志であるオレにはわかるのだ。草薙よ、おまえの目にはメイド道を求める漢おとこ特有の、暗い焔ほのおが燃えている！」

「え、そっちか？　いや、そういう趣味は俺にはないし、勘かんちがいだと思う」

「ふふふ、今はまだ自覚がないだけだ。そんなおまえの道みち標しるべになればと考えて、用意したものがある。しばらく貸してやろう」

　名波は教室に一度引っこみ、紙袋を手に戻ってきた。

　それを押しつけられる。なかには携帯ゲーム機と、ソフトのパッケージが入っていた。

「俺、たいしてゲームはやらないんだけどな」

　護堂はソフトを見た。タイトルは『英国正せい統とう女じよ中ちゆう譚たん・小間使いエイミー』。

　パッケージにはメイドの女の子が描かれている。妙に地味なタッチだ。あまり明るい色も使っていない。だが、不思議と惹ひきつけられる絵柄だった。

「時間があるときにやってみろ。人生が変わるほどの衝撃を味わうはず……おっと、買い出しに行く途中だったんだ。悪いがオレはもう行く。じゃあな！」

「あんたも、変な仲間をあちこちに作るわよね……」

　バタバタと去る名波を見送って、明日香がボソリと言ったとき。

「——ああ、ひかり？　そう、学校に今着いたところなのね？」

　祐理が携帯電話を取り出し、話しはじめた。

　チャイナ猫耳メイド飲茶のある場所を教え、そこまで来てと指示している。

「ひかりのヤツ、迷わないかな？　俺が迎えに行ってもいいぞ」

「しっかりした子なので、心配ないと思います。私たちはここで、お店に入る順番が来るのを待っていましょう」

　提案すると、祐理はおだやかに微笑んだ。

　たしかに。護堂はひかりの性格を思い出して、そうだなとうなずいた。

　結局、一〇分ほどで万里谷家の次女はやってきた。

「おひさしぶりです、お兄さま。それにリリアナ姉さま。……あ、そちらの方ははじめてお会いしますね。はじめまして、万里谷祐理の妹・ひかりと申します」

　顔なじみに挨あい拶さつするだけでなく、明日香にもすぐ頭を下げる。

　小学六年生とは思えないほど、行き届いていた。もっとも、次のようなことを言いだすあたりも小学生ばなれしていたが。

　護堂と明日香の立ち位置・距離感を見て、ひかりはいきなり言ったのだ。

「どうやらお兄さまとは、それなりの深さでおつきあいされている方とお見受けします。実は、もうすこし大人になったら、私もお兄さまのおそばでかわいがっていただくつもりなので、そのときは仲良くしてくださいね？　……あ、でも、そのときは私の方が先輩かもしれませんね！」

　と、無む邪じゃ気きでいながら、かすかに『女』を感じさせる笑顔で。

　ひかりの口上に、明日香は顔をひきつらせた。

「…………そ、そうなんだ。万里谷さんの妹さんで、ずいぶん小さいのに……。念のため訊きくけど、今、何年生？」

「六年生です。来年、中学に上がります」

「ふうん、そう……。ちょっと護堂、まさかここまでダメなヤツに成長しているとは、本当に予想の斜め上か下にしか行かないヤツね！」

　明日香に怒鳴られて、護堂はうんざりしながら答えた。

「なに変なふうに受け取ってんだ。まさか、俺が小学生を口く説どいてるとか、そんなこと考えてんじゃないだろうな？　ひかりは純粋に俺を慕したってくれて、こう言ってるんだぞ。なあ？」

「はい。私にとってお兄さまは、実の兄以上の方です」

　にこにこと如じよオさいなく、ひかりは言った。

　ちょっと含みがあるようにも聞こえるが、護堂は気にしなかった。ませてはいるが、まだ小学生。気にする方がおかしい。

　そういえば、他の女子も前にあれこれ気にしていたが。

「リリアナもあんまり、変なことを言うなよ。そういう関係だとか言われたら、ひかりにも姉さんの万里谷にも迷惑がかかるからな」

「ええ……。あなたがそう言うのなら、そのように」

「そ、そうですね。ひかりはまだ子供ですし、ね……」

　リリアナは訳知り顔で言い、祐理もちょっと困った感じでうなずく。

　歳とし上うえ女子たちの反応に、話題の当人はにっこり笑った。

「はい。私、まだ子供なんです。だから、まだまだ先は長いんです。みなさん、末永くよろしくお願いいたしますねっ」

　と、護堂にぴったり寄りそう。実の妹とはちがう素直なかわいさが新鮮だった。

　ポンポン頭をなでてやると、ひかりは笑顔を返してくれた。



「……三年後、ううん、二年後ってところかしら」

「……わたしは、そうなる時期が二カ月後でも不思議には思わないが」

「……あの子が自分で決めたことなら、仕方ないと考えるべきなのでしょうね……」

　明日香、リリアナ、祐理がぼそぼそささやいている。

　どういう意味だ？　護堂はいぶかしんだ。しかも、今の一幕で女子三人の間に連帯感が生まれたような——。

　そのうちに行列は進み、店へ入る番となった。

『チャイナ猫耳メイド喫茶・飲茶アレンジ館』。

　低予算をやりくりして、教室を上う手まく中華風にデコレーションしてある。

　護堂たちは窓際の席に案内された。プーアル茶を人数分、点心をいくつか注文する。

「じゃあ、おじさま。少々お待ちくださいネー」

　チャイナ猫耳メイドさんは気さくに言って、厨房へ引っこんでいった。

　もちろん、昨日まで店を手伝っていた護堂への挨拶だ。

「よくよく見てると、不自然であやしいお店よね。ウェイトレスっていうかメイドさん、めちゃくちゃ慣れてるじゃない。学園祭のレベルじゃないわよ。あと、ちょっと日本語が下へ手たなメイドさんもいる。中国か韓国の人じゃない？」

　明日香がぼそりと言った。

　ファミレスでバイト中だから、メイド部隊のスキルがわかるのだろう。

「ほんと、護堂の知り合いとか友達には変な人が多いわよね。こんな店をどういう縁で手伝うようになったのよ？」

「まあ、いろいろだ。ここのえらいヤツがたまたま友達だったんだよ」

「え、お兄さまもこちらを手伝われているんですか？」

　この店と香港陸家のつながりを聞いていないのだろう。

　ひかりが驚いて、チャイナ猫耳メイドさんの艶あで姿すがたをしげしげと眺めた。

「もしかして、お兄さまにはこういうご趣味があったんですか？　コスプレとかの⁉」

「いいや。したこともないし、あんまり見たこともないな」

「そうなんですか？　でも、よかったら言ってくださいね。私、おつきあいしますから。コスチュームを着たり、そういう格好を見ていただいたりして！」

　ひかりの申し出に、護堂はプーアル茶を吹き出しそうになった。

「き、気持ちはありがたいけど、たぶん、そういう機会はないと思うぞ」

「どうかしらね、それは……」

　疑わしげに口をはさんだのは、明日香だった。

　また俺のことを変人のように——。護堂は聞き流そうとしたのだが。

「ふむ。徳永明日香、そう考える理由を教えてもらえないか？」

　いきなりリリアナが食いついた。

「先ほどから思っていたのだが、あなたは草薙護堂の性格と過去に精通しているようだ。そのあなたが言う以上、何か根拠があるのではないか？　たとえば彼が以前、ある種のコスチュームに強く執しゆう着ちやくした、というような事件が」

「たしかに、そうかもしれませんね」

　なんと、祐理までうなずいた。

「リリアナさんのおっしゃったとおり、護堂さんの人となりについて、徳永さんは一いつ家か言げんお持ちの方だとお見受けいたしました。もし思うところがおありでしたら、ぜひご教示いただきたいのですが」

　ふたりの連れが、明日香へ教えを請こうている！

　なぜだ？　護堂は驚いた。いっしょにいた時間はわずかなのに、幼なじみを見る媛ひめ巫み女こと騎士の瞳には共感めいた色が――？

「え、そんなたいした根拠はないんだけど……」

　いきなり頼りにされて、明日香は困惑しながら言った。

「こいつのことだからさ。興味がないことでも唐突に心変わりして、『これはこれでいいじゃないか』って言いそうな気がして。ホントそれだけだから、真剣に考えないでね？」

「……いや。大胆な決断力は、たしかに草薙護堂の長所だ」

「……そうですね。状況の変化に順応するのが、ものすごくお早いですし」

　しみじみとリリアナ、祐理がつぶやく。

　もしかして、今回の出会いは俺にとってマイナスだったのだろうか？　漠ばく然ぜんとした不安を抱く、護堂であった。

4

　学園祭二日目も、ついに夕方となった。

　夜になれば恒こう例れいのキャンプファイヤーがはじまり、後夜祭となる。フォークダンスやミス高等部の発表など、締めのイベン

トも目白押しだ。

……ちなみに、今年のミス高等部はエリカ・ブランデッリになったそうだ。

その話を聞いて護ご堂どうは「うーん」と首をかしげたものだ。

会場に現れないどころか、学園祭自体をボイコット。参加を打診されたときも、

『わたしの美を見逃しがたいのなら、写真くらいは好きに使ってもかまわないわ。……でも、面倒なことは何にもしないわよ。わたし、そういう催もよおしにイタリアで一回参加して、飽き飽きしてしまったの』

と切り捨てた。ミスコン参加者が集つどう壇だん上じようでは、隠かくし撮どりされた映像がスクリーンに映されたらしい（余談だが、エリカが知人の推すい薦せんで参加したのはミスイタリアを選ぶ地方予選で、一位通過がほぼ確定していたくせに、途中で飽きて会場を去ったとか）。

それなのに、ぶっちぎりの優勝だったそうだ。

ライバルと目された祐ゆ理りやリリアナが、参加をかたくなに拒否したせいもあるだろう。しかし、隠し撮りの映像でさえ他の女子を圧する存在感だったのか。

エリカのデタラメさに呆あきれながら、護堂は階段を上り切った。目の前のドアを開ける。

「あいつ、どこにいるんだろうな？」

ドアの向こうは、夕暮れでオレンジに染まった屋上だった。

ざっと見渡す限り、誰もいない。後夜祭がはじまれば、上からキャンプファイヤーを見おろす人気のスポットになるのだが、まだ早いようだ。

さっき知り合いからメールが届き、屋上で待っている旨むねを報しらされたのだが……。

「お呼び立てして、申し訳ありません。叔お父じ上うえ」

風に乗って、挨拶が届いた。

不思議な声だった。まるで秋風が耳元でささやくかのような。

気き功こうの達人になれば、できる芸当らしい。声に『気』を込めて、離れた場所に送り届けるのだと、魔ま教きよう教きよう主しゆの直じき弟で子しは語っていた。

護堂は屋上の中心あたりに歩いていった。きょろきょろ見まわす。……いた。

端っこに香ホン港コン陸りく家けの御おん曹ぞう司し・陸りく鷹よう化かがたたずんでいた。

「悪い、待たせたな鷹化」

「いえいえ。姐ねえさん方との時間を割いていただくのです。この程度、何でもありません」

陸鷹化はにやりと笑う。美少年のくせに、険けんのある笑顔だった。

一言多いし口も悪い。無駄に挑発的。気むずかしく偏へん屈くつ。だが護堂には、『甥おい』の生意気さが微笑ましくもあった。

昔、野球の代表チームで組んできた天才投手たちの気性を思い出すのだ。

「ところで叔父上、それは何です？」

「ん？　ああ、さっき名波から借りた……っていうか、押しつけられた」

鷹化が気づいたのは、護堂が抱えていた紙袋だ。

そこには『英国正せい統とう女じよ中ちゆう譚たん・小間使いエイミー』が入っている。紙袋を開けてみせたら、武ぶ林りんの麒き麟りん児じは意外にも目をみはった。

「……こいつがうわさの。僕も以前から、風評だけは聞いておりました」

「え？　これ、もしかして有名なのか？」

「ええ。数年前の同人誌即売会でＰＣ版が発売されてから、その完成度の高さが口コミで広がり、その世界では知らぬ者のないヒット商品に。コンシューマーゲームにもなり、昨年はついにアニメ映画化。ＤＶＤおよびブルーレイの販売実績、実に一〇万枚」

「……ずいぶん詳しそうだな」

「僕らのビジネスにも関係する業界ですからね。最近、研究をはじめたんです」

　弟子のこういう方面での修行を知ったら、師は何と言うだろう？

　麗うるわしき義あ姉ねへ、思いをはせる護堂であった。

「いずれ、僕も内容をたしかめるつもりでした。叔父上に先を越されるとは」

「いつ遊ぶとか、全然決めてないけどな。今度いっしょにやるか？」

「いいですね。なら、甘あま粕かすの兄さんはこの道の権威らしいから、あの人も呼びますか。場所は僕が用意しますので……」

　ボーイズトーク（？）が一段落すると、おもむろに陸鷹化は言った。

「今日は神しん祖そどもについて、お耳に入れとこうと思い、参上しました。ほら、日につ光こうではバタバタして、その辺の事情を詳しく話せませんでしたからね」

「……ああ。あの、アーシェラってヤツか！」

　九く法ほう塚づか家けの若君を操あやつった魔女。護堂はすっかり忘れていた。

「たしか、大昔は女神さまだったけど、不老不死の魔女に生まれ変わった連中だってリリアナに聞いたぞ。普通の魔術師よりもすごいんだろ？」

「はい。カンピオーネの方々とは比べるべくもないですがね」

　護堂は首をかしげた。なぜ女神がそこまで身を堕おとしたのだろう？

　そして、一体どうやって？

「僕はアーシェラとしばらくツルんでいました。あいつがね、ときどき連絡を入れていた相手がいるんですよ。名前も盗み聞きして、たしかめました。そいつも神祖で、グィネヴィアといいます。師し父ふを焚たきつけて、斉せい天てん大たい聖せいに手を出させた張本人です」

「そうだったのか！」

「この女が今すぐ叔父上にかかわる可能性は低いでしょうが。一応、ご報告です」

「ありがとう。悪いな、いろいろ気を遣つかってもらって」

「いえ、お気になさらず。僕が師父に虐ぎゃく待たい——いや折せっ檻かん……じゃなくて、行きすぎた特訓をさせられたときは、叔父上だけが頼りなんです。万一のときは頼りにさせていただくつもりなので、本当にお気になさらずに！」

　珍しい陸鷹化の熱弁だった。

　こいつが俺を慕したうのには、ちゃんと切実な理由があったのだなァ。護堂は納得した。あんな師し匠しようがいるのだから、無理もない。できる限り、いい叔父貴でいてやろうか……。

　そう思っていると、不意に陸鷹化は耳をそばだてた。

「ああ、下の階からリリアナ姐ねえさんと祐理姐さんの足音が聞こえますね。叔父上を探しているんじゃないですか？」

「あいかわらず人間離れしてるな……。清せい秋しゆう院いんも似たようなことするけど」

「あの姐さんより、僕の方が目も耳も鋭いですよ」

　ぶあつい鉄筋コンクリート越しに、下の階の足音を聞き取る。

　しかも、その響きだけで誰の足音かまで判別——。冗談のような

聴力を披ひ露ろうした陸鷹化は、にやっと笑った。

「ついでに言えば、エリカ姐さんより僕の方が剛強ですし、リリアナ姐さんより身軽で巧たくみです。その代わり僕は術を使えませんので、まあまあ互角……としておきましょうか」

　明らかに互角と思っていない口調だ。

　みごとな上から目線。護堂はちょっと意地悪したくなった。身近な少女たちの肩を持ってやりたかったのもある。

「でも、前にリリアナと引き分けたんだろ？」

「あの状況だと、師父と叔父上のどちらが勝つか読めませんからね。カンピオーネの直じき臣しんをうっかり殺して、逆げき鱗りんにふれる真ま似ねはしませんよ。……ま、本気は出しましたし、手も抜けませんでした。でも、本当にえげつない殺し技は使わないよう、気も遣いました」

　天才、麒き麟りん児じの真しん骨こつ頂ちようというべきか。おそらくエリカも及ばない、無意識の傲ごう岸がんさだ。

　そのくせ、姑こ息そくな計算高さも同居している。面白いヤツだと護堂は思った。

「ただ、恵え那な姐さんは神がかりって反則技があるから、息の根を止めるつもりなら切り札全部使わなきゃダメでしょうがね。それに、どうせエリカ姐さんあたりは……」

「エリカがどうかしたのか？」

「あの姐さんは本物の雌め狐ぎつねで、本物の戦士です。どうせ、その辺の微妙なところもちゃんと把は握あくしていて、対処するための仕込みや修練もしてるでしょう。白鳥みたいに、水中でもがいてる足を見せないようにしながらね！」

　結局、みんな一線を突き抜けた天才ぞろいなのか。

　たがいの力量をはかりながら、しのぎを削り、より上にいこうと切せつ磋さ琢たく磨まする。研けん鑽さんを怠おこたれば即座に置いていかれる超一流同士。とんでもない連中だと、感心する護堂だった。

5

護ご堂どうたちが学園祭を楽しんでいた頃――

エリカ・ブランデッリはイタリア北部トスカーナ州の古都、シエナにいた。

帝政ローマの頃より栄えた、歴史ある小都市である。中世の街並みを残す歴史地区は、世界遺産としても知られている。

なかでも見どころは、カンポ広場だろう。

広場全体がゆるやかに傾斜しており、すり鉢ばちのような形状をしている。まわりには中世に造られた宮きゅう殿でん、噴水、鐘しょう楼ろうつきの塔などが並ぶ。

世界でいちばん美しい広場――。そんな呼び方があるほどだ。

エリカの目的地は、カンポ広場の近くにあった。

本場シチリアの味そのままのジェラート屋。地元民には人気の店なのだとか。

もっとも、いくら美お味いしくても所しょ詮せんはジェラートである。これ目当てにわざわざ帰省するのは、よほどの物好きだろう。

しかし、エリカが探す人物は物好きで、しかも阿あ呆ほとかバカと評されることも多かった。

「バニラ、ストロベリー、ピスタチオ、アーモンド……。どのジェラートを外すかが問題なんだ。一度に四種類も食べるのは、さすがにやりすぎだからね」

「一一月に三つも食べる時点で、十分やりすぎだ」

「僕は昔から冬が近づくと、この街のジェラートを食べ歩きするんだよ。暑い季節には熱い料理が体にいいように、寒い季節には冷た

いものを食べて、寒さに慣れるべきなんだ。そうすると、風か邪ぜもひかずに一冬すごせるんだよ」

「つまり、ここ以外でも氷菓子をむさぼり喰くらうつもりなんだな？」

「うん。今日一日で可能な限りまわる。だから、一軒目は抑おさえめにいくのさ！」

「……知っているか、サルバトーレ・ドニ？」

「何だい、我が友にして腹心でもあるアンドレアくん？」

「とある国では、知的教養に欠ける者は風邪をひかないというらしい。貴様が風邪をひかないのは、おそらくそれが原因だ……！　貴様がいきなり帰省すると言いだしたせいで、どれだけスケジュールが狂ったと思う！」

「君はいつも賢明な男だけどアンドレア！　『バカは風邪をひかない』には何の根拠もないッ。そんな俗説を信じるとは、君らしくもない不見識だな！」

「言うにことかいて、貴様が言うな！」

　店の外から聞くだけで、頭が痛くなりそうな会話だ。

　そう、『剣の王』サルバトーレ・ドニは古都シエナ出身の騎士。

　彼が執しつ事じアンドレア・リベラの監視つきで帰省するという情報をつかみ、エリカは急きゅう遽きよイタリアへ帰国したのだ。

　……ほどなく、三段重ねのジェラートを手に、金髪の青年が店を出てきた。

　メガネをかけた、美男子だが疲れた顔の青年もいっしょだ。

「あれ？　ひさしぶりだね、エリカ・ブランデッリ」

「ほう。珍しい客人だな。いつ日本から帰ってきた？」

　ふたりはエリカに気づき、声をかけてきた。

　初対面のとき、ドニはエリカの名を一向に覚えなかった。しか

し、今は普通に呼ぶ。何度も会ううちに覚えた……のではない。

　草薙護堂の存在が、ようやくエリカの名を覚えさせたのだ。

　彼が人の名前を覚えないのは記憶力ではなく、興味が不足しているせいなのだから。

　己おのれの敵たりえぬ者は路ろ傍ぼうの石と同じ。そう思っているにちがいない。

「サルデーニャでお会いして以来ですわね、サルバトーレ卿きよう。アンドレア卿にも、その節にはお世話になりました」

　暗あん愚ぐに見えて、すさまじい異才を持つ王者へ。彼を補佐する執事へ。

　エリカは華やかに笑いかけた。

「用があるなら、遠慮なくアンドレアに言っていいよ？　僕はジェラートを食べるから……」

「いいえ。今回は是ぜ非ひ、サルバトーレ卿にお願いしたき儀があるのです」

　面倒事を丸投げしようとした『王』へ、すばやく言う。

「僕に？」

「はい。覚えておいでてでしょうか、わたしが初めて卿にお会いした日の出来事を。聖ラファエロと卿の仕合に立ち合った際のことを」

「うーん。まあ、なんとなく大おお雑ざつ把ぱに。そういえば君、あのときいたねー」

「卿はあの折に、聖ラファエロより『ダヴィデによる勲いさおの書』を受け継いでいらっしゃいました。わたしは――そして、この場にはおりませんがリリアナ・クラニチャールも、あの書をふたたび閲えつ覧らんさせていただきたいのです」

「師し匠しようの本？　本ねえ……？」

「サルバトーレ卿。私が聖ラファエロより要請を受け、サン・ジミ

ニャーノへいただきにあがった魔ま導どう書しよのことでしょう」

　うろ覚えの主に、アンドレア・リベラが助け船を出した。

　旧友と語らうときも、公私で口調を使い分ける律りち儀ぎ者もの。やはり『書』は彼の管理下にあったか。エリカはうなずいた。

　そうだと推測して、わざわざいっしょのときを狙ねらった甲か斐いがあった！

「エリカ卿。あの書については、聖ラファエロより『秘ひ匿とくせよ』と厳命されている。預かった私もひもといたことはない。いずれ聖騎士の位階に至った者が望んだときのみ、閲覧を許せというおおせであった。君の願いは残念ながら――」

「そうであろうと思っておりましたわ」

　さすが厳正・公正なる『王の執事』。

　自みずからも例外としない高こう潔けつさに感嘆しながら、エリカは訴えた。

「ですが、わたしどもにそれを許された方が、サルバトーレ卿のご利益につながるかと存じます。どうぞ卿、御一考くださいませ」

「僕の利益？　どういうこと？」

「はい。異教の神々と堕だ天てん使したちをも切り裂く戦闘魔術の奥おう義ぎ。それをわたしどもが学ぶことにより、草薙護堂の力も増すのです。……いえ、彼の楯たてがより強固なものになる、そう申しあげるべきかもしれません」

「……ははあ。なるほど、なるほど。そういう意味か」

　ジェラートを舐なめるドニの表情が変わった。

　悩みのない赤ん坊のようなハンサム顔に、微妙な鋭さが加わった。彼の人となりを知らなければ、きっと見落としていただろう。

「まあね。もっと血の気の多いヤツだったら『そろそろどう？』『いいね、ヤっちゃう？』で済むんだけどさ。あれで結構、護堂は気むずかしいからね！」

　この鋭さは闘志ではない。殺気でもない。おそらく確信。

　強敵という『友』と、いずれ必ず戦場でまみえる。その確信だった。

「ああいうヤツとの決戦は、然しかるべきシチュエーションになって、あっちのモチベーションが上がるのを待たなきゃダメだ。でないと逃げられるか、盛りあがらないまま終わっちゃう。でも、待ってる間に護堂が死ぬのはたしかにヤだな」

　恋のキューピッドでも見るような浮き浮きした目が、エリカに向けられる。

「ほんと、めんどくさいヤツだよね。いやがるフリして、いつも自分から修しゅ羅ら場ばに飛び込むくせに、僕にだけツレなくてさ。あれが日本でいうツンデレだろ？」

　好敵手と認めた少年を語る『剣の王』。

　意外にも的まとを射いた内容だ。サルバトーレ・ドニは、もしかしたら最もよく草薙護堂を理解する同族なのかもしれない。

「まあ、いいよ。僕の方が彼に求愛している身だ。僕たちが決闘場で再会する日が来るまで、あれこれ尽くすのも悪くない」

　くだされた認可に、リベラが眉まゆをひそめる。しかし、『王』の裁定には逆らえまい。

　エリカはうやうやしく頭こうべを垂たれ、サルバトーレ・ドニへの感謝を表した。

6

　その海岸は、千ち葉ば県木き更さら津づ市内にあった。

　すぐ近くには東とう京きよう湾わんアクアライン——神か奈な川がわ県の川かわ崎さきから木更津までをつなぐ、東京湾上に渡された有料道路も通っている。

近隣には工業地帯もあるし、木更津の市街、県庁所在地の千葉市も近い。

しかし、この浜辺は静かだった。あたたかな時期なら潮しお干ひ狩がりりができるし、夏は海水浴客も来るだろう。だが今は一一月。潮風には冬の寒気がだいぶまざっていた。アウトドアには向かない季節だった。

「……ヒマだねえ、甘あま粕かすさん」

「……ええ。ヒマですねえ、恵え那なさん」

カップ麺めんをすすって清せい秋しゆう院いん恵那がつぶやくと、あんパンをかじる甘粕冬とう馬まも同意した。

この浜の隣はひなびた漁村である。そちらで調達した食料だった。

「ここにあやしいヤツが出るって本当？　もう三日も見張ってるのに、何も出ないよ。……こんなところを委員会が管理してるなんて初耳だったし。何にもないじゃん」

しみじみ恵那はつぶやき、今いる場所を眺めた。

防風林の向こう側はすぐに砂浜。目の前には赤い鳥とり居いのみ。

海辺の空き地にぽつんと立つ鳥居。他には何もない。神社どころか小屋さえもなかった。

「そうだったんですねー、意外にも」

誠意と熱意に欠けるのんきさで、正せい史し編へん纂さん委員は言った。

彼とその上司は東京分室の所属。しかし、その担当範囲はもっと広い。東京・千葉・埼さい玉たま・神奈川・茨いばら城き・群ぐん馬まや栃とち木ぎまで——。

実際には『関東地方』の担当と総括者というべき立場なのだ。

「それはそうと恵那さん。草薙さんところの学園祭、行かなくてよ

かったんですか？」

「え、それって何!?」

「あの人の学校、たしか昨日まで学園祭でしたよ。下へ手たに話題にして『そっちに行く！』と言われるのもヤなので、黙ってましたけど」

「う——。そういえば今の時期って、そんなのあったっけ」

　恵那にはまじめに学校へ行く習慣がない。

　中学、いや小学校高学年の頃には、すでにそうだった。

　山ごもりや媛ひめ巫み女こ修行にいそしむのを清秋院家が是よしとしたためだが、結果、恵那は学校生活の常識にうとくなった。

「しまった～。せっかくのお祭りなんだから、王様たちと遊べばよかった……。甘粕さんのケチッ。教えてくれてもいいのに！」

「おっと、私だけじゃないですよ。馨かおるさんも知っててバックれましたからね」

　正史編纂委員会・東京分室の室長にして媛巫女、沙さ耶やの宮みや馨。

　甘粕はさりげなく彼女も共犯だと主張した。

「でも、女づきあいに無ぶ精しように見えて、意外と要所要所でマメな王様です。今度も『暇なら来ないか』くらい電話してたかもしれませんよ。携帯、ちゃんと電源入ってました？」

「忘れてた……。一週間くらい充電してないよ……」

「ご愁しゆう傷しよう様さまです。ま、おわびの代わりにヒマつぶしの種を提供しましょうか」

　がくりと肩を落とす恵那に、甘粕は言った。

「このあたりは古名だと上かず総さの国くにとか安あ房わの国くになんていいますが、われわれにとってはちょっと特殊な土地なんです」

「ほんとに？　とてもそんなふうには見えないけどなー」

「何をおっしゃいます。この海こそ我が国の誇る英雄、ヤマトタケルが后きさきを失った悲劇の舞台じゃないですか。ロケーション的には悪くないですよ」

　防風林の向こうに広がる東京湾へ、甘粕は視線を投げた。

　それで恵那も思い出した。日本神話でも有名なエピソードのひとつだ。

「ご存じでしょう、房ぼう総そうの海を舞台にするヤマトタケルの物語。ほら、荒れた海を渡るため奥さんの弟おと たちばな橘 媛ひめが海に身を投げるヤツです」

「もちろん。妾あれ、御子にかはりて海中に入りなむ……だよね」

　恵那は文ぶん武ぶ両道の媛巫女筆頭である。とっさに『古こ事じ記き』を引用した。

　英雄ヤマトタケルが相さが模みの国くに 走はしり 水みず——今でいう横よこ須す賀かから船で東京湾を横切り、対岸の千葉県——上総国へ渡ろうとしたときの逸話である。船が出航すると嵐になり、海は大いに荒れた。

　それを鎮しずめるため、后の弟橘媛が『御子に代わりて』と入じゅ水すいしたのだ。

「ですが、ときどき——何十年かに一度、降ってわいたように、この伝承の異い聞ぶんが生まれるんですよ。ほら、こいつをご覧ください」

「へえ……面白いじゃん」

　甘粕がバッグから取り出したのは、一冊の本だった。

　タイトルは『上総国口こう頭とう伝でん承しようまとめ』と味気ない。装そう丁ていもそっけなく地味。目の前に示されたページの一文を、恵那は読んでみた。

「……『后きさき 弟おと 橘たちばな比ひ売め、太た刀ちを抱いだきて海に入り給たまふ。其その太刀の流れし先は陸おかにあらず、

海にもあらざる処ところにて、浮うき島しまといふなり』。こんなの聞いたことないよ」

　弟橘媛の遺品である櫛くしや衣ころもが砂浜に流れついた……。

　というエピソードは、かの后を祭神とする神社で伝えられているが。

「でしょうねェ。そいつは地元の郷土史研究家が、三カ月前に自費出版した本です。われわれ委員会はこの一節を闇やみに葬ほうむるため、本を回収するよう各方面に働きかけ、ついでに著者の先生のところへお邪じゃ魔ましました」

「術で記憶をいじって、忘れさせたの？」

「ええ。念のため、媛ひめ巫み女この方にお願いして」

　そこまでの秘密なのか。恵那は驚いた。甘粕も記憶操作の術を使えるのに、一部の媛巫女だけが使える『名伏せ』の霊力に頼った。

　こちらの方が、より強力に記憶を改かい竄ざんできるからだろう。

「正史編纂委員会とその前身であった組織は、何百年もこの伝承を闇に葬ってきました。伝える人々がいれば記憶から消し、書き記した史書があれば改かい竄ざんして。でも、ダメなんです。何十年か経たつと、また誰かが同じことを伝え出すんですよ。まるで、何者かがその言い伝えをひそかに教えているように」

　あるいは、この地に眠る神秘が己の存在をひっそりと示しているのか――。

　漠然と恵那は思い、それから訊たずねた。

「そうするのは、やっぱりおじいちゃまたちの命令？」

「ええ。かつて――おそらく千年近い昔に、古老の方々から指示が下ったらしいです。上総国に顕あらわれる浮島と神刀の口く伝でん、そして天あま之の逆さか鉾ほこを必ず隠しとおせと」

　天之逆鉾？　これも初めて聞く名だ。恵那は目の前にある鳥居を見た。

　あれだけがぽつんと立つ空き地に物を隠すのなら、やはり——。

「御名答です。逆鉾とやらはあの鳥居の下、地面のなかに埋まってるそうです。厳重な結界を幾いく重えにも地中に仕掛けたうえで」

　恵那の視線にめざとく気づき、甘粕は言った。

「ここを見張らせている『草』……忍びから報告を受けまして。最近、正体不明の不穏な……しかも強力そうな魔術師が出没すると。で、番人を置くことになったんですよ」

「それで馨かおるさん、恵那に声をかけてきたんだ」

「はい。なんかイヤな感じがするから、いちばん強いのがいいだろうって」

　霊視にもすぐれる沙さ耶やの宮みや馨には視みえたのかもしれない。神がかりを使う清秋院恵那でなくては対抗できない敵かもと——。

　このとき恵那は、何者かの視線に気づいた。

「……観みられているよ、甘粕さん。たぶん、あれじゃない。よくある視覚を飛ばす術。どうするつもりかな？　今ここに来るなら、相手をしてあげるんだけど」

　そばに置いていた袋を引きよせる。

　入っているのは刃渡り二尺三寸の日本刀。清秋院恵那の得え物ものだった。

　彼女の五感の冴さえは、野生の獣けものじみている。勘かんも異様に鋭い。呪じゆ術じゆつによる盗み見すら察知できるゆえんだった。……視線が動くのを感じた。

　赤鳥居のまわりを俯ふ瞰かんしていたのが、恵那だけを注視するようになった。

　相手の出方をうかがうこと数十秒。甘粕は黙って、緊急事態にも即応できるよう腰を浮かせている。どうする？　来るか？

　——来なかった。視線は消え失せ、何の気配も感じなくなった。

「行っちゃった。結構、慎しん重ちようような相手みたい」

「それとも恵那さんの切り札を知っているか。どちらでしょうねェ……」

　恵那が緊張の糸をほどくと、甘粕は面倒そうに頭をかき、こんなことを言った。

「いっそ、いつだったかエリカさんも使った手で行きますか」

「ん？　それってどういうの？」

「ここに爆弾が眠っていると、向こうにも知られてますしね。だったら掘り起こして、火薬庫で火遊びする専門家に渡しちゃうのもありかなと」

　と、彼は携帯電話を取り出した。そうか。沙耶宮馨の許可を取るつもりなのだ。

　ふざけた性格ながら有能なエージェントの意図に気づき、恵那は喜んだ。もしそうなったら、ひさしぶりに草薙護堂と会える！

　ふたりは知らない。

　今、清秋院恵那を見つめていた者こそ神しん祖そグィネヴィアなのだと。

　そして、この一幕こそ神刀エクスカリバーにまつわる冒険のはじまりなのだと――。

　新たな死闘の幕開けであった。

第３章　アテナふたたび

1

　作業はじっくり慎重に、厳重な警戒態勢のもと行われていた。

　赤い聖印（鳥居というらしい）の真下を、鈍どん重じゆうだが剛ごう力りきな鋼はがねの機械（たしか重機と呼ぶのか？）で掘り起こす。

　――この世の最後に顕あらわれる王。

　彼の居場所についての秘密が眠る、海辺の聖域。

　以前にグィネヴィアが訪れたときも、人ひと気けはなかった。しかし、この地をひそかに見守る者の『気』はうっすら感じていた。

　魔術で身を隠していたが、向こうもグィネヴィアの気配をわずかに察していたようだ。

　にわかに警戒が強まったので、あのときはすみやかに退しりぞいた。

「やはり、そう易やす々やすと事は運ばないのですわね」

　グィネヴィアはため息をついた。

『魔女の目』で視覚を飛ばし、遠方より発掘作業を見守っている。

　この地の秘密を探るべく、再訪した極きよく東とうの砂浜。しかし、現地の呪じゆ術じゆつ師したちは、秘密をカンピオーネに託すと決めたらしい。地中の結界を幾十人もの術師が力を合わせて解か

い呪じゆしつつ、無ぶ粋すいな機械で土を掘り返していく。邪じや魔まされぬよう見張りも置く。

　幾十人もの手て練だれの剣士・忍びの者・呪術使い・巫み女こたちが待機――。

　厄やつ介かいなのは、太た刀ちをたずさえた神降ろしの巫み女こだ。斉せい天てん大たい聖せいの顕けん現げん時じにも見た。この娘との対決はまだ避けたい。

「グィネヴィアの命を賭とすには、まだ早すぎます。仕方ありませんわね。むしろ、この状況を逆手に取りましょう」

　ランスロットの威いを借りて……とは考えなかった。

　グィネヴィアに献けん身しんしてくれる騎士とはいえ、彼は神なのだ。その位にふさわしき敬意を捧ささげなければ、彼との絆きずなはどんどん弱まるだろう。

　虫けらのごとき人間どもの相手を願うなど、もってのほかだった。

「斉天大聖をも倒した草くさ薙なぎ護ご堂どうさま……。お若くともすでに神殺しの威風をまとっていらっしゃる。そういえば、アテナはあの方を宿敵と呼んでおられた……」

　思案が形になりかけたとき、グィネヴィアは『気配』に気づいた。

「やはりいらっしゃいましたか、女神アテナ。座して死ぬのを是よしとせず、グィネヴィアを葬ろうというのですわね」

（――愛いとし子ごよ。ふたたび余が出陣してもかまわぬぞ）

　耳元にささやきが届く。何ど処こかで身を休めるランスロットからだ。

（女神の方から姿を見せてくれるのだ。迎え撃てばいい。たしかに大敵ではあるが……聖せい杯はいに接触する好機でもある。さすれば、救きゆう世せいの神しん刀とうは真の威力を取り戻し、アテナも不死の生を終え、黄よ泉み路じにつこう）

　魅惑的な案ではあった。だが、グィネヴィアはかぶりを振った。

「いいえ。やめておきましょう。先の立ち合いのように全力を振りしぼれば、小お父じ様のご恢かい復ふくがまた遅れるはずです」

　ランスロットが真の力を取り戻すまで、あと一〇日ほどであろうか。

　だが、アテナと再戦すれば、その日がまた遠のくはず。ならば無理する必要はない。女神と戦える英えい傑けつは他にもいるのだから——。

「ひとまず姿を消しましょう。アテナとあいまみえるべきは、今日ではございませぬ」

　グィネヴィアは神しん祖その魔力を振るった。

　魔女の肉体をほどいて空気と同化し、風に乗って飛んでいく。

　女神アテナでも容易に追跡できないよう、痕こん跡せきを消しながらの逃走だった。

「ちっ。ここも一歩遅かったか」

　童女の姿でアテナが舌打ちした場所は、切り立った海辺の断だん崖がいだった。

　見おろせば、崖がけに当たって砕ける白い波。かすかに香るグィネヴィアの気配をたどって、ここまでやってきた。しかし、またも見失うとは——

「やはり、我が身中の聖杯とやら……。その気配を察したのであろうな」

　アテナはひとりごちた。

　体内に呑のんだおかげで、聖杯の性質がよくわかる。

「こやつが妾わらわのなかにある限り、創造主の裔すえには近づけぬか」

白き太たい母ぼ神しんが転生した、グィネヴィアなる魔女。

アテナが近づけば、気配を察して逃げるはず。その繰りかえしになるだけだ。

「魔女王を葬ほうむり、あの男の復活を阻そ止しするのは……無理か。ふむ。草薙護堂を打倒するのは妾の使命であり宿命。しかし、このままではそれもかなわぬ。甦よみがえったあの男に、神殺しどもがかなうはずはないのだから」

ならば、どうする？　女神アテナはいかにすべきか？

「――フ。今すこし熟じゆくすのを待つつもりであったが。どうやら、今が収穫の時らしい。ここで草薙護堂との雌し雄ゆうを決するとしよう。その果てに命長らえたなら、次はランスロット・デュ・ラックめに借りを返せばよい……！」

己おのれに残された時間はすくない。

その自覚があるアテナは、雄お々おしく微笑ほほえんだ。

女神の闘志が高まると同時に、眼下の海では波が激しくなった。空では風が轟ごう々ごうと吹き荒れる。荒ぶる神の魂たましいに応こたえているのだ。

「みごとなり、軍神ランスロット。さすがはいにしえの流儀を継つぐ、純血の《鋼はがね》よ。このような手で妾の不死を侵おかすとは！」

身中に呑んだ聖杯によって、命を蝕むしばまれている。

不死なる女神から、この神具はすこしずつ命を吸いあげている。今、アテナは緩かん慢まんな死を迎えつつあった。

「ふふふ。杯もろとも『生と不死の境界』へ渡れば、命長らえるやもしれぬが――」

永えい劫ごうの流る浪ろうに飽きはてた『まつろわぬ神』は、時折この世の彼方かなたでの隠いん棲せいを選ぶ。

アテナにとって、おそらく唯ゆい一いつの生を得る道であった。

「だが、妾は敢あえてそれを選ばぬ。我が魂の荒ぶるままに、戦う道を選ぶ。まず草薙護堂を倒し、ランスロットめを討うつ。その果てに命数が残っておれば、かの婢はした女めを罰し、あの男めに報復するのもよい……！」

　不死の超越者であるからこそ、命長らえるために悪あがきなどしない。

　心残りをひとつずつ片づけながら、死ねばいい。力尽きれば大地に横たわり、眠りにつくがごとく死ぬだけでよい。

　アテナは三相一体の女神。しかし、戦いの女神でもあった。

　最さい期ごは闘神としての性に殉じゆんじるのも、一いつ興きようではないか！　荒れ狂う東方の海を前にして、アテナの心は痛快なほど昂たかぶっていた。

2

　学園祭が終わった翌週の金曜日。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうは千ち葉ば県へ向かっていた。昨日、清せい秋しゆう院いん恵え那なから電話があったからだ。

『ねえ王様、お願い！　力を貸して欲しいんだけど！』

　恵那から電話を受けたのは、これがはじめてだった。

　文明の利り器きをほとんど本来の用途に使わない少女なのだ。

「俺にできることなら、べつにかまわないけど……ヤバイことか？」

『かもしれない。あ、でも甘あま粕かすさんが、王様は前にエリカさんから同じこと頼まれてたから、大丈夫だろうって言ってた』

「エリカの頼み事か……」

　彼女に押しつけられた無理難題をいくつか思い出す。

　大体いつも、神様がらみのトラブルにつながる発端だった。

「最悪だったのは、アテナまで東京に呼んだ石せき版ばんを持たされたときだな」

『そうそう、それそれ。何とかってメダルのときみたいに、王様に預かって欲しいものがあってさ。今、発掘中なんだけどね、明日か明後日あさつてあたりに掘り出せそうなんだ』

　なつかしきゴルゴネイオン。地じ母ぼ神しんの叡えい智ちを刻きざんだ蛇へびのメダリオンだったか。

　まあ、仕方ない。護堂はため息をついた。

　これは自分が果たすべきボランティアのようなもの。世話になっている恵那や甘粕の頼みなら、尚なお更さらだ。この世界につっこんだ足は、春頃よりだいぶ深く埋まったなァ――。

　しみじみ思いながら、護堂は言った。

「わかった。手を貸すよ。まず俺はどうすればいい？」

『明日、迎えに行くから、こっちに来てよ。恵那たちは今、千葉にいるんだ』

　電話の翌日は、都合よく金曜日であった。

　護堂は学校から帰ると、週末は友人の家に泊まるとウソをつき、家を出た。

　途中で知人の車に拾ってもらう約束だ。近くの大通りに出て、待つことしばし。護堂の前の路肩に、ありふれたシルバーの国産乗用車がすっと止まった。

　運転席でハンドルを握る人物に、護堂は驚いた。

　美少年にも美少女にも見える中性的な媛ひめ巫み女こ・沙さ耶やの宮みや馨かおるだったからだ。

「実は最近、免許を取ったんですよ。今日の運転手はぼくにおまかせください」

助手席に乗り込むと、洒落しやれたウインクと共に告げられた。

そういえば、彼女（ときどき彼に思えるが）は高校三年生だったはず。一八歳になったところで、晴れて普通免許を取得したのだろう。

「よろしくお願いします。……でも馨かおるさん、ずいぶん慣れてませんか？」

「ええ。きちんと免許を取ったのは最近なんです。でも、女の子と遊びにいくなら、やっぱり車が便利ですしね。たまたま別人名義の免許証を携帯しているときは、ちょくちょく利用していました」

馨のハンドルさばきはやけに手慣れていた。目配りも十分。

初心者らしい危なっかしさ皆かい無むの運転を奇妙に思い、確認してみたら――。

「最近、俺のまわりにはどうしてこう、普通に生きてこなかったアウトローが多いのか、すごく不思議なんですよ……」

「うーん。類が友を呼んでいるのかもしれませんね」

護堂の慨がい嘆たんに、さらりと答える馨だった。

しかも、護堂自身と他の変人連中、どちらが〝類〟か曖あい昧まいな言い方だ。

「まあ、ぼくもこれからは、大手を振ってドライブできる身分です。今度いっしょに、車でナンパ旅行しませんか？　ぼくと護堂さんなら、かなりの釣ちよう果かが見込めますよ」

「不特定多数の女の人に声をかける度胸は、俺にはありませんよ！」

物騒な提案をしながら、馨は危なげなく車を運転していく。

途中でふたり、同行者を拾った。万ま里り谷や祐ゆ理りとリリアナ・クラニチャールだ。

ふたりとも私服姿。祐理はワンピースの上にニットの上着を合わせていた。リリアナは丈の短いブラウスとレギンス、さらにハーフ

コート。

　用件が用件なので、護堂は彼女たちにも声をかけたのだ。

「では、メンバーもそろいましたので、かんたんに事情を説明いたしましょう」

　首都高に乗ったところで、おもむろに馨は言った。

　媛ひめ巫み女こにして正せい史し編へん纂さん委員会の幹部が語る、不思議な伝承。

　后きさき 弟おと 橘たちばな比ひ売め、太た刀ちを抱きて海に入り給たまふ。其その太刀の流れし先は陸おかにあらず、海にもあらざる処ところにて、浮うき島しまといふなり——。

「上かず総さ、安あ房わといえば、たしかに倭やまと たけるの建命みこと、弟おと たちばな橘 媛ひめと深い縁ゆかりを持つ土地ですものね」

　まずうなずいたのは、武む蔵さし野のの媛巫女である祐理だった。

「そうなのか、万里谷？」

「はい。おそらく護堂さんもご存じでしょうが——」

　祐理は弟橘媛の最さい期ごを語ってくれた。たしかに、なんとなく聞き覚えがあった。

「建たけるの 命みことと媛が船出した浜辺の地名・走はしり 水みずは、今も神か奈な川がわ県に残っています。弟橘媛を祭神とする神社も、東京湾をはさんで神奈川・千葉の双方にあるんですよ」

　子供の頃に知ったのであろうヤマトタケルの物語。

　東京湾もその舞台に入っていたとは……。護堂は素直に驚いた。

「面白いのは、顕あらわれる伝承が必ずしも弟橘媛とセットではないところです。ヤマトタケルや媛のくだりが割かつ愛あいされるパターンもあるんですよ」

　馨がさらに補足する。

「由ゆい緒しよある太刀と、持ち主の貴人が海に沈んだ。流れついた先は『陸でも海でもない島』である。太刀がふたたび世に出るとき、貴人もまた甦よみがえる……という具合です」

「だとしたら」

　不意にリリアナが口をはさんだ。

　専門外の日本神話が話題だからか、ずっと黙っていたのだ。

「その奇妙な伝承が本当に訴えたいのは、媛とやらの最期ではなく太刀の行方ゆくえについて……そうなるのではないか？」

「かもしれません。すくなくとも、ぼくと甘粕さんはそう踏んでますよ」

　運転しながら馨は認めた。

「この問題については、古老方へ問いただしたいことが山積みなんです。なのに、あの方々は長い間、おそらく千年以上も秘密主義を貫つらぬいている。そこに今回のゴタゴタですからね。ならいっそ、護堂さんという起爆剤を放り込んでみようと思いまして」

「ずいぶんと思い切ったな、沙耶宮馨」

「そうでもないさ。神々にまつわる秘事なら、最終的にかなりの確率で護堂さんは首をつっこまれるだろうしね。なら、最初からお呼びしてもいいかな、と」

「なるほど。言われてみれば、たしかにそうだな」

　人を爆弾のように語る馨へ、リリアナがうんうんとうなずいている。

　護堂は苦情を訴えようとしたのだが。

「それにしても、太刀と共に永と久わの眠りにつく貴人か。陸でも海でもない、この世ならざる島で。まるで妖よう精せい境きようアヴァロンで眠る、アーサー王とエクスカリバーだな」

　その前に銀髪の騎士がつぶやいた。すると馨は瞠どう目もくし、

「さすがですね、リリアナさん。同じことを甘粕さんも指摘していました。ヤマトタケル、アーサー王……この伝承には、鋼はがねの軍神がからんでいるのかもしれないと」

　物騒な発言をするのであった。

　一行を乗せた車は、川かわ崎さきの浮島ジャンクションから東京湾アクアラインへ。

　夕ゆう闇やみの首都高から東京湾を横断するトンネル内に入る。このまま進めば、海ほたるのパーキングエリア。そして木き更さら津づへの連絡道路を経て、房ぼう総そう半島へ到着する。

　神話の舞台となった海を、今では数十分で走破できるのだ。

「浮島というのは、ヤマトタケルの父・景けい行こう天皇が息子のまつろわせた東国を巡幸したとき、酒宴を行った『浮島宮』にちなんだ地名だといわれますね」

　途中で馨が講釈してくれた。

　木更津へ到着する頃には、すっかり夜になっていた。馨は海岸近くに車を止めた。

「待ってたよ、みんな！」

「や。わざわざのお越し、恐縮です」

　車を降りると、旧知のふたりが近づいてきた。

　清せい秋しゅう院いん恵え那なと甘あま粕かす冬とう馬まである。恵那はいつもの制服姿。甘粕もいつもどおり、くたびれた背広姿。もしかしたら、洒落しやれっ気けのなさでは似たもの同士かもしれない。冬物のジャケットを隙すきなく着こなす馨もいるので、尚なお更さらそう思える。

「あれ？　エリカさんはいないんだ？」

「外せない用があるとかで、イタリアに帰ってるよ」

　かんたんに説明すると、恵那は「へー」とつぶやいた。

　そわそわした表情だ。いたずらを企たくらむ子供が『上う手まくいくかも！』と確信したような。いぶかしむ護堂をよそに、恵那は他の面々へ挨あい拶さつにいった。

　あいかわらずの人なつっこさに、祐理は微笑し、リリアナも鷹おう揚ように応こたえていた。

「ところで、ちょっといいですか？」

　甘粕が声をかけた。護堂ではなく、祐理とリリアナの方へ。

「向こうで天あま之の逆さか鉾ほことかいう代しろ物ものを発掘中でして。正直、いかなる物か見当がつかないのですよ。そこで、おふたりの慧けい眼がんに期待したいと思いまして」

　どうやら霊視の力を借りたいらしい。

　発掘現場で『視みて』もらえないかとの頼みに、祐理とリリアナは即答した。

「都合よく何か視えるとは思いませんが、一応、近くに行ってみましょう」

「そうだな。魔女として調査に力を貸せるかもしれない」

「……俺もいっしょに行きましょうか？」

　なんとなく護堂も申し出た。ちょっと興味がわいたのだ。

「あー。草薙さんには何と言いますかね、別件であれこれもろもろがありまして」

「うん、そうなんだ。王様、ちょっとつきあってもらえる？」

　歯切れ悪く甘粕が言うと、すばやく恵那もかぶせる。

　——？　護堂は不思議に思った。ふまじめなエージェントには韜とう晦かい癖へきがある。しかし、今の物言いはそれともちょっとちがう、適当な口ぶりだった。

　だが不審を訴える前に、恵那に手を取られた。引っぱられる。

「ではみなさん、よろしくお願いします。特に護堂さん、ご面倒でしょうが万事よしなにおはからいください！」

　別れていく甘粕・祐理・リリアナ。それに護堂と恵那。

　行き先の異なる両グループに、なぜか馨は妙な別れの挨拶をするのであった。

3

「それで清せい秋しゆう院いん、俺は何をしたらいいんだ？」

　夜の砂浜を歩く。江え戸ど前まえの海に臨のぞむ、木き更さら津づの海岸だ。

　先へ先へと進んでいく清秋院恵え那なの後ろ姿に、護堂は問いかけた。

「こっちに何かあるのか？　そんな感じにはとても見えないけど」

　夜の海岸には、他に誰もいなかった。

　もう一〇分近くも、ふたりだけで砂浜を歩いている。明かりといえば、遠くで車道を照らす街灯の光だけ。あとは夜空の星々と、半月の白い輝きがあるくらいだ。

　まあ、護堂は夜目が利きくので不便はない。

　恵那もそうだろう。しかし、この夜歩きに何の意味があるのか？

「そろそろいい頃合いかな？　実はさ、恵那は王様にお願いがあったんだ」

「お願い？」

「うん。実はね、王様たちの学校が学園祭だったって、終わったあとに知ったんだけど」

　恵那は足を止めて振り返った。

　きりりと引き締まった表情で、真正面から見み据すえてくる。

「そうだったのか。よかったら来ないかって誘おうと思って、一応電話したんだけどな。おまえの携帯、またつながらなかったぞ」

「うっ、そうだったんだ……。とにかく、恵那はくやしいんだ」

　一瞬へこんだが、すぐに恵那は顔を引きしめ直した。

「せっかく王様とお祭りを楽しむチャンスだったのに、ダメだったからさ。だから今日は、祐ゆ理りやリリアナさんにはないしょで、王様と遊ぼうと思って。今からつきあってよ！」

「お願いって、そんなことかよ！」

　それでわざわざ海に——。護堂は脱力した。

「甘あま粕かすさんや馨かおるさんが不自然だったけど、あれはグルだったからかっ⁉」

「うん。あの人たち、学園祭のこと知ってて黙ってたからね。せめて、その埋め合わせをしてって脅迫したんだ。でないと、もう協力してあげないって。都合よくエリカさんもいなかったし、邪じゃ魔まされなくてよかったよ」

　媛ひめ巫み女こは委員会の配下ではなく、あくまで協力を要請される貴人だという。

　だが、こんなことに権威を使わずともいいだろうに。

　呆あきれる護堂へ、恵那はさらにねだる。

「ねえ、いいでしょ？　恵那もたまには、王様とふたりきりでさ」

　そういえば——護堂はふと気づいた。

　恵那とふたりだけでいた時間はあまりない。たいてい誰かがいっしょだった。

「……まあ、たまにはいいか」

　誰かを意図的に遠ざけて、他の誰かとの時間を作る。護堂の好きなやり方ではないが、恵那との時間がすくなかったのも事実。

　それに、ここまで言ってくれるのだ。やはり、好意は無む下げにできない。

「さすが王様、そうこなくっちゃ！」

「でも、遊ぶってどうやって？　言っちゃなんだけど、何もないぞ」

　初冬の砂浜である。しかも夜。

　あたたかな時期の昼間ならともかく、娯楽向きの場所ではない。

　まあ、夜空には冬の星座がまたたいているし、ザァ、ザザァと打ち寄せる波の音はムーディーなＢＧＭかもしれない。しかも、ふたりきり。ロマンチックであり、ドラマチックな場面ではあった。だがキャスティングが悪い。

　この両名には、いささか不向きなシチュエーションではなかろうか？

「向こうにアキカンが落ちてるよ。缶かん蹴けりでもやる？」

「ふたりでだと、きつくないか？　たぶん、単純に面白くないと思う」

　予想どおり、色気のない会話になった。

　相手がエリカなら、または祐理やリリアナなら、もっと別種のアプローチが向こうからあったかもしれない。

　しかし、護堂はそれに安あん堵どする自分も感じていた。

　多少は免めん疫えきもついたが、いまだに女子との交流には自信が持てないのだ。

「あ、サッカーボールも落ちてる。子供の頃、男の子の試合にまぎれ込んでギタギタに負かしてやったんだ。今でもいい線いける自信あるよ」

「ビーチサッカーこそ、ふたりでやる遊びじゃないような……」

　なのに幼少期の記憶を、恵那は個人競技のごとく語る。

　きっと、ドリブルだけで敵ゴールまで単独突破し、得点しまくったのだろう。

　似たようなスーパープレイヤーは、すぐ身近にもいる。団体競技でも、個の力で試合を決めてしまうエリカ。恵那も同じタイプだろう。野球ならエースで四番をやる人種だ。

「なら、やっぱりこれかなァ？　ちょうどいいのが二本あったし」

　恵那はかがみ込んで、木の枝を拾いあげた。

　長さは一メートルに足らない程度。波に乗って、浜辺に打ちあげられたのだろう。

「ふたりでチャンバラやろうよ。恵那と王様で一対一だし、いいと思うっ」

「いいことあるか。俺が清秋院に勝てるわけない」

「あー、王様ってそういえば剣術とか武術、何も知らないもんね。普通の人だと王様みたいな境遇になったら、付け焼き刃でも護身術くらい習いそうなものなのに」

「そういうもんか？　だって、たいして意味ないだろ」

　護堂はサルバトーレ・ドニを思い出した。

　あの男の存在が、その行為の無意味さを教えてくれたのだ。

　ドニのアホならば、剣技を磨く意味はあるだろう。まず常じよう軌きを逸いつした天才である。その技の鋭さのみで、神すら斬きり裂くほどに。そして、ヤツの権能は剣術に長たけるほど威力を増す。

　対して、草くさ薙なぎ護ご堂どうは天才ではない。

　おそらく五〇年修行しても、神々やドニと伍ごする武芸は身につかない。ならば逆に、自分の長所をどう利用すれば、そういう怪物

連中を出し抜けるか考えるべきで――。

　ヤツと同じ道を往ゆく限り、ヤツには絶対に勝てないのだから。

　……いやいや、待て待て。

　実は、カンピオーネとしての自分は、あのアホから多大な影響を受けている？

　いやな疑念が首をもたげたので、護堂は頭を振った。

「とにかく、こいつの使い道は他に考えた方がいい……。とりあえず、これでどうだ？」

　恵那から木の枝を受け取る。

　枝の先端で砂浜に大きく『＃』を描く。次いで、なかのマスに○を入れた。

「王様、そう来るんだ……。なら、恵那はこうかな」

　べつのマスに、恵那が×を描く。

　結局、ふたりは○×ゲームで勝負をはじめたのだった。

「野球をやってた子供の頃、ときどきこういうのでヒマつぶしをしたなあ」

「あ、わかるわかる。ああいうときって、たまに時間が空あくもんね。持ち歩けるゲームの機械で遊んでた子も多かったけど、恵那は持ってなかったし」

「清秋院も子供の頃は、外で遊ぶ方だったのか？」

「うん。小学校の三年生くらいになるまではね。わんぱくってヤツ？　でも、途中から剣術以外に媛ひめ巫み女この修行もはじまったし、他の習い事もあったし、何より山にこもりがちになったから、そういう遊びはしなくなったけど」

「あー……清秋院はいろいろやってたんだよな。そりゃ忙しかったはずだ」

　剣術自慢の自然児。文ぶん武ぶ両りよう道どうの才女。媛巫女

で、大やま和と撫なでし子ことして諸芸にも長ける。

　彼女の複雑なプロフィールは、一いつ朝ちよう一いつ夕せきに培つちかわれたものではない。

　野球ではそれなりに成果を上げた護堂である。恵那が積み重ねてきたものと、そのために費やされた労力の膨ぼう大だいさを、なんとなくだが想像できた。

「今はそれほどでもないから、ときどき王様のところにも来られるけどね。だから学園祭ってヤツ、顔を出してみたかったんだけど。王様たちとも遊べるし、考えてみたら一度も行ったことなかったし」

　○と×で勝敗を競いながら、恵那は言った。

　白熱しているというより、話しながらの暇ひまつぶしに類する勝負だった。

「だったら、また今度来ればいい」

「え？」

　護堂は自然とやさしい気持ちになっていた。

　女らしさがあまり表立たない、さっぱりした気性の恵那。物もの怖おじしないし強引なところもあるくせに、人との接し方が妙に不器用なときがある。特殊な生い立ちのせいで、人とふれあう時間がすくなかったせいだろうか？

「俺が卒業するまで、まだ二年あるぞ。今年しくじったんだから、清秋院だって来年は失敗しないだろ。だから、また次の機会に来い。いくらでもつきあってやるから」

　清秋院恵那は、不思議とつきあいやすい少女だった。

　こんなふうに男友達とツルむように同じ時間をすごせる異性は、他にいない。俺のところに来たいのなら、いくらでも来ればいい。

　そんな気持ちになった護堂は、穏やかに笑いながら言った。

「そっか。ありがと、王様。そう言ってくれて、うれしいよ」

「この程度で礼を言うなよ。水くさい」

「あ、でもさ。王様って、いつも危険な目に遭あうじゃない？　来年まで生きててくれるか、そっちの方が心配かも。でも安心してくれていいよ。何かあったときは、ちゃんと恵那が命がけで守ってあげるからさ！」

「不吉なことを言うなっ。俺はきちんと畳たたみの上で死ぬつもりなんだ！」

　気安く軽口をたたき合う。だが、いきなり恵那が眉まゆをひそめた。

　木の枝を捨てて立ちあがる。油断なく目配りし、四方をうかがう。『どうした？』とは訊きかずに、護堂も無言で立った。

　実はこの時点で、接近する者の正体に気づいていた。

「来るよ、王様。気をつけて」

　ぼそり。恵那がささやく。

　太た刀ちの媛巫女が見つめる先は、砂浜の向こう——船の停泊所があるあたり。

　そちらから、ひとりの少女が近づいてきた。見覚えがある。幼い容よう貌ぼうの美少女。しかし、その体にみなぎる力と威厳は、死すべき人のものにあらず。

「……って、あいつだったのかよ」

　心身に力がみなぎり、戦闘状態へ移行していく。

　近づいてくる者が神、魔王カンピオーネの宿敵だとはとっくに察知していた。しかし、その名前までは護堂も予想できなかった。

　ゆっくりと歩み寄る、幼い女神。その名はまつろわぬアテナという。

「ひさしいな、草くさ薙なぎ護ご堂どうよ！」

　高らかに女神は告げた。その瞳ひとみが見み据すえるのは、草薙護堂のみ。

　隣にいる清せい秋しゅう院いん恵え那なには、まったく注意を向けていない。女神アテナにとっては、媛ひめ巫み女こ筆頭といえども路ろ傍ぼうの石、雑草に等しい存在なのだ。

　一方、太た刀ちの媛巫女は袋から日本刀を取り出しかけていた。

　臨戦態勢へ——。しかし、護堂は目くばせで制止した。相手が悪すぎる。

「かつての約やく定じようを守らせるために、妾わらわはふたたびやってきた」

「約定……あれか」

　ペルセウスとの戦い。謎なぞめいた英雄神を読み解くヒントは、アテナから授さずかった。

　たしかにあのとき約束した。必ず借りを返す。女神の要求にひとつ応じると。

「我が願いはただひとつ。妾と戦うがいい、草薙護堂よ」

　アテナの瞳ひとみに金色の輝きが宿っていた。

　ゆらゆら揺れる、妖あやしい光。さながら闇やみ夜よに光る、蛇へびの目であった。

「焔ほのおが激しく燃えさかり、やがて虚むなしく燃え尽きるように。風が烈はげしく渦うずを巻き、颶ぐ風ふうとなって吹きすぎるように。妾とあなたで、美しく散る火花のごとく戦うのだ！」

「って、何だよそれは!?」

　一瞬、蛇の目の妖しさに呑のまれかけたが、護堂はすぐに怒鳴った。

「あのとき言ったはずだぞ。まわりの人間に迷惑をかける願いは聞かないって。俺とあんたで戦ったら、どれだけ被害が出ると思うんだ！」

「神と神殺しが雌し雄ゆうを決するのだ。民たみ草くさに犠ぎ牲せいが生じるのは、当たり前であろう」

　なんと愚おろかな――という目で、アテナにさげすまれた。

「我らが戦えば、たしかに幾いくばくかの犠牲は出よう。だが、あなたの同胞である人間も、野を歩けば草花を踏みつけるはず。それと同じだ」

　うわー。女神の言わんとするところを察して、護堂は絶句した。

　神様たちは、やっぱりこういう連中だったか！

「そのようなことは天地の習ならい。何ら案ずる必要はないのだ、草薙護堂よ」

　人間ひとりひとりの個性など、気にもとめない。

　地球上の人類を十じつ把ぱ一ひと絡からげに『人間』として認識する。仮に半数が死んだとしても、『まだ人間はちゃんといる』としか感じないのでは？　だから、『人が死ぬし、街も壊れるから、まわりに迷惑だ』という実感をまったく持てないのでは？

　護堂のひそかな考察であった。

「妾とあなたの戦いで、民は倒れよう。大地も傷つこう。天も大いに嘆なげくであろう。だが案ずるな。民と天地はその痛みを受け容いれ、粛しゅく々しゅくと在ありつづけるもの。我らはただ心のおもむくままに猛たけり、昂たかぶり、荒ぶればいい」

「そんなわけにいくか！　バカを言うのもいいかげんにしろ！」

　思わず暴言を吐はく護堂であった。

　智ち慧えの女神への、とんでもない冒ぼう涜とくかもしれない。

「とにかく、俺はそんな願い事なら聞く気はないからなッ。もう一度、出直してこい！」

「いいや。その言い分は呑のめんな」

　護堂の拒絶に、アテナは冷たく言い返した。

「あなたは神殺しとして、魔王として、いまだ未熟な若僧だ。だから、妾は果実が熟すのを待つつもりであった。不死の命と悠ゆう久きゅうの生にまかせて、じっくり時をかけ、丹念に刈り取るつもりであった。しかし、もうその猶ゆう予よはない……」

　女神の容よう貌ぼうは変わらない。美少女のまま。

　なのに、その美貌はまさしく獲え物ものを前にした大だい蛇じゃであった。蛇の目でにらみ、紅こう唇しんの奥に蛇の牙きばをひそませる。蛇の凶暴さで猛っている！

　アテナの闘志を察して、護堂はひそかに武む者しゃ震ぶるいした。

「さあ、存分に戦おうぞ。今こ宵よいを我われらいずれかの末まつ期ごとするのだ」

「くそ、仕方ないな……」

　アテナの剣幕に、護堂も心を決めた。

　もう戦いは避けられそうにない。だったら、やり方を考えろ。人にも物にも、いちばん被害の出ない方法を選ぼう。できるだけ街から離れたい。そして、女神を力ずくで抑おさえ込む。どこまで可能かわからないが、やるだけやって——

「ふむ……それは雑念だぞ、神殺しよ」

　だが、不意に。

　必死で頭を働かせる護堂に、アテナはささやいた。

　蛇のごとく冷たく。そして、かすかに悄しよう然ぜんと。後輩を高みより見おろし、その未熟を憂うれい、さらなる飛躍を望む先せん達だつのように。

「いずれ虎とらになるであろう勇士も、今はまだ虎の子に過ぎぬか。あなたに戦士の本能はあっても、戦士の気き概がいはまだ足り

ぬのだな」

　不思議と護堂の心にしみいった。

　なぜだろう？　今までの勇ましい言葉とは、何かがちがう。

「フ——。ならば、最後にもう一度だけ、塩を送るとしようか。先ほどの申し出はひとまず忘れよ。草薙護堂の蒙もう、妾が啓ひらいてくれる！」

　女神は不敵に微笑ほほえみ、背を向けて歩きだした。

　来た方向へと戻っていく。草薙護堂から一歩ずつ離れていく。

「我らの逆ぎやく縁えんにふさわしき場を用意する。そのときはあなたも意気を見せよ。それをもって、妾との取引の値あたいにせよ！」

　いずれまた来るという意味か。

　別れの言葉をぶつけられて、護堂は呆ぼう然ぜんとアテナを見送った。

「行っちゃったね、王様。あれがこの春、東京に来たっていう……」

「ああ、蛇の女神さまだ……」

　ずっと抜刀する準備をしていた恵那に、護堂はかすれた声で答えた。

　あれはたしかに、まつろわぬアテナ。

　だが、今までとは何かがちがう。その何かが上う手まく説明できなかったが——。

5

　一夜明けて、土曜日になった。

甘あま粕かすが手配した近くの宿に、護ご堂どうと仲間たちは泊まった。

アテナの襲来も報告してある。かの大女神と面識のあるリリアナ、祐ゆ理りは顔色を変え、甘粕はめんどくさそうに頭をかいた。

「万一の事態に備えることしか、われわれに取れる対策はなさそうですね……」

粋すい人じんの馨かおるは、珍しく深刻そうにつぶやいたものだ。

ともあれ、ここに来た本来の目的は天あま之の逆さか鉾ほこを預かることだ。

発掘は結局、今朝の未明までかかったらしい。護堂たちが寝ている間に作業は終わったそうで、朝食後、見にいくことになった。

木き更さら津づの海岸近くにぽつんと立つ鳥とり居い。

その下に埋められた〝何か〟を発掘する大作業。地中に仕掛けられた結界とやらを丹念に解除しながら、重機まで使って何日も地面を掘りつづけたらしい。

朝の八時すぎ。護堂は発掘現場にやってきた。

「野や暮ぼ用ようができてしまいました。あとは甘粕さんに仕切ってもらいますよ」

と言って、馨は東京に帰っていった。

おそらくアテナの再登場に備えて、さまざまに準備をするのだろう。

祐理とリリアナ、恵那、そして甘粕。このメンバーが護堂のお供だった。

発掘現場は、ロープで隔かく離りされていた。地元警察の警官が十数人も見張りについている。まるで殺人現場のようだった。

「本物の警官もいますが、半分以上はうちの関係者ですね。見えないように配置してるのをふくめれば、もっといますよ」

　さりげなく甘粕が説明する。

　かくして、護堂一行は捜査課の刑事よろしく到着したのである。

「……これが天之逆鉾ってヤツか」

　今朝早くに発掘されたという〝それ〟は、ブルーシートの上に置かれていた。

　一見、ただの棒に見える。ちょうど鉛筆くらいの長さと細さだった。

　素材はわからない。丹念に磨きあげた木材のような飴あめ色いろだ。さわってみると硬かった。石ほどではないが、プラスチックよりは頑丈だろう。

「昨夜、発掘途中のこれを、万ま里り谷や祐理といっしょに調べてみました」

　リリアナが報告してくれた。

「まちがいなく神具でしょう。あなたに託されたというゴルゴネイオン、あれと同じです。物体に見えるのは上辺だけ、神々の叡えい智ちと力を秘めた結晶、不ふ朽きゆう不ふ滅めつの徴しるしなのです」

　だったら、また神様がらみのトラブルになるのか。

　もはや予想ではなく確信を抱く護堂に、リリアナはつづけた。

「ヘライオンのように大地の精気が結晶化しただけの物質なら、トラブルの元凶となる前に破壊することも可能です。ですが、この種の神具は不滅です。おそらく『まつろわぬ神』でも完全には破壊できないでしょうね」

「だから地下に埋めて、ないしょで守ってたんだな……」

　護堂はため息をついた。

　壊していいなら、どんなに楽なことか……。

「幸いなことに、天之逆鉾について霊れい視しを授かることができました」

　今度は祐理の報告だった。

「おそらく土と巌いわおにかかわる神器でしょう。原げん初しよの海に倭やまとの国土を生んだ伊い弉ざ諾なぎの命みことと伊い奘ざ冉なみの命みことに比すべき力を感じました」

「……いざなぎといざなみ？」

「はい。倭の国土をお造りになられたという、国生みの神々です」

　以上がリリアナと祐理からの情報だった。

　護堂は改めて天之逆鉾を見つめた。こいつをどうしよう？　携帯するのも不用心に思えるが、仕方ない。ちょうどボールペンのようなサイズだし——。

「とりあえず、上着のポケットに入れとくか」

「この世を揺り動かしそうなお宝ですが、妥だ当とうな案でしょうねェ。草薙さんの懐ふところ以上にふさわしい収まりどころは、ちょっと思いつきませんし」

　甘粕の不吉なコメントを、正面から否定できないのが悲しい。

　護堂はポケットに神具をしまった。交通安全のお守りでさえ、ここまで罰当たりにあつかったことはないのだが。

「実はさ、さっきおじいちゃまに連絡してみたんだ」

　いきなり恵那が言った。

　恵那のおじいちゃま——御ご老ろう公こう、つまり幽かく世りよの老神スサノオか。

「この鉾について、何か訊きけないかと思って。でもダメだった。向こうに『声』は届いているはずなのに、うんともすんとも言わない」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こを後見するスサノオと、恵那は携帯電話で連絡を取り合える。

　だが、居留守（？）を使われたということは。

「教える気がないんだな……」

　護堂がつぶやいた直後、恵那が持参していた日本刀——その鍔つばを親指で押しあげた。

　鞘さやより刀を抜く準備。『鯉こい口ぐちを切る』というヤツだった。

「白い……女神？　いいえ、もっとべつの何か？」

　そして祐理がささやいた。宙の一点を見つめて。

　他の人間には見えない何かが、彼女には霊視できたのだろう。

「なるほど。こちらにお客さんがやってきましたか……」

　携帯のバイブが震動したらしい。

　おもむろに甘粕は電話を取り出し、仲間らしき相手に答えていた。

「草くさ薙なぎ護堂、お気をつけください」

　リリアナの警告にうなずきを返して、護堂も身がまえた。

　——次の瞬間、忽こつ然ぜんと少女が顕あらわれた。祐理が見つめていた空間に。

　その髪は輝くブロンドの巻き毛。名めい匠しようの手によるアンティークドールのごとき美び貌ぼう。そして、喪も服ふくを思わせる黒いドレス。

　全てが鮮烈な印象をあたえる、一二歳前後の美少女だった。

「お初にお目にかかります、草薙護堂さま」

　玲れい瓏ろう、玉のごとき可か憐れんな声。

神――ではない。だが、定じよう命みようの人間であるはずがない。

これは何だ？　人でありながら人でない種。護堂は妖あやしき美少女を凝ぎよう視しした。

「神殺しの『王』たる御おん身みに、直じき々じきに名乗る非礼をお許しくださいませ。我が名はグィネヴィアと申します。あなたさまのお耳に入れたき儀がございますゆえ、罷まかりこしました」

少女らしくない美び辞じ麗れい句くに、護堂は眉まゆをひそめた。

「聞くだけなら、べつにかまわない。でも、いきなり来た人間に手みやげをやるほど、俺は気前よくないぞ。それでいいか？」

「もちろんでございます、『王』よ」

そっけなく返答する護堂に、グィネヴィアは華やかに笑う。

陸りく鷹よう化かが言っていたヤツだろう。ただの勘かんだが、外れている気はしなかった。

「あんたのうわさは聞いたことがある。日につ光こうの事件に一枚噛かんでた女の仲間だろ？」

「左さ様ようでございます。いかにもグィネヴィアはアーシェラの同胞たる神しん祖そ」

表情、言葉遣い、仕草。

全てが芝居がかっている。そして、絵になっている。

これが神祖――。神とはまったくちがう存在のようだ。もとが女神だと聞いたが、グィネヴィアは護堂以外の人間を認識している。さりげなく他の者にも目配りしている。

「本日は、草薙さまにご献けん策さくさせていただきたいのです」

優美に微笑みながら、金髪の神祖は言った。

「策だって？」

「はい。グィネヴィアは存じあげております。御身の宿敵たる女神アテナがふたたび顕れ、この島国にいらっしゃることを。神と神殺しは近くにいるだけで惹ひきつけ合い、巡り会い、いがみ合い、殺し合うもの」

　小鳥が歌い、さえずるように。

　グィネヴィアは音楽的な声でささやいた。

「御身とアテナが雌し雄ゆうを決するときは、必ず訪れましょう。そのとき、必ずお役に立つ秘策がございます。どうぞ、お聞きあそばしませ」

「神様との戦いに役立つ、だって？」

　必ず儲もうかる株の銘めい柄がらと同じくらい、信用できない話だった。

「ふふふ。疑われますのね？　さすがお若くとも歴戦の勇士でいらっしゃる！　でもご安心くださいませ。グィネヴィアが申しあげたいのは、あくまでアテナと戦われるときのみ、お役に立つ策にございます！」

「……ねえ。あなただよね？」

　軽やかなハミングのようにささやく魔女へ、恵那が言った。

「ここの様子や、見張りに立った恵那たちを遠くからずっと観みていた人は。なんとなく同じ気配だってわかるよ。あなたの狙ねらいは、やっぱり天あま之の逆さか鉾ほこ？」

　太刀の媛巫女の鋭敏さを知る護堂はうなずいた。

　このタイミングで出てくる以上、掘り出した神具と無関係のはずがない。

「ええ、そのとおりですわ。グィネヴィアが欲するのはその霊れい宝ほう——御身に献けん上じようされた、無二の神具にございます！」

　一切悪びれずに神祖は認め、歩きはじめた。

　草薙護堂の前へ。軽やかに、花咲く野原を歩む童女のように。

「いずれアテナとあいまみえ、我わが献けん策さくが役立った暁あかつきには、よろしければグィネヴィアの望みをおかなえくださいませ。御身のお許しがあれば、その石をたまわりたく存じますわ」

　茶目っ気すら感じさせる、冗談めかした嘆たん願がん。

　もちろん護堂は聞き流した。他の面々も同じだったろう。

　恵那は刀を抜き、リリアナはイル・マエストロを召しよう喚かん。ふたりの少女はグィネヴィアの前に立ちはだかる。しかし、どのような術を使ったのか——。

　神祖の体とドレスは剣士たちを風のようにすり抜け、護堂の前にやってきた。

　狙いは天之逆鉾か？　護堂は警戒した。

　今の要領でポケットを狙われたら、防げる自信はない。神具を抜き出し、脇わきに控えていた甘粕へ放り投げる。

　さすが抜け目ない忍びの者。あざやかにキャッチし、懐へ。

　これで盗とられる心配なく、対応できる。護堂が身がまえた瞬間だった。

「ふふふ、うわさどおりに隙すきの多い御方でいらっしゃいますこと！」

　グィネヴィアは風の軽やかさで近づいてきた。

　それほど速くは思えないのに、あっさり肉薄された。一切の防御ができなかった。

　そして魔女は、護堂の顔へ唇くちびるを寄せて。

　キスをした。



「ですが、その大らかさが逆に、偉大なる『王』の器うつわ、些さ事じにこだわらぬ大器の証あかしとも思えます！　期待しておりますわ、草薙さま！」

　教授の魔術か？　知識が口移しに流れ込んでくる。

　いや、それだけではない。もっと感覚的なノウハウのような何かも。

　――聖せい杯はいとは何か。大地の精気を吸い、莫ばく大だいな呪じゆ力りよくのプールとする霊宝。その機能を解き放つための手順、知識、感性、呪じゆ文もん、儀式、魔法……。

　単なる知識を授ける術ではない。より高度な、『魔術』を教える術か！

　護堂が気づいたときには、グィネヴィアの唇は離れていた。

「どうぞアテナを討うち、新たな武ぶ勲くんとなさいませ。『聖杯の呪法』はそのための切り札となりましょう。いずれまたお会いしましょう！」

　と言い残して、金髪の魔女は消え失せた。

　顕れたときと同じ唐とう突とつさで、忽こつ然ぜんと霞かすみのごとく姿を消したのだ。

　魔女グィネヴィアは発掘現場より去った。残ったのは用途不明の魔術のみ。

「何だったんだ、あいつは？」

「護堂さんに知識を伝えることが目的だったのでしょうね……」

　困惑する護堂のそばへ、祐理が近づいてきた。

「頭痛がしたり、精神的にどこか不安定になっていたりとかはありませんか？」

「大丈夫。特にどうともなってないよ」

　不安げな祐理に、護堂は請うけあった。

　実際、カンピオーネの魔術への耐性と生命力は並ではない。

　ケタはずれの頑強さなのだ。神や同等の魔王が使う権けん能のうでもない限り、敵対的な呪法で深刻に傷つく可能性はおそろしく低かった。

　たしかに神祖は、カンピオーネほどの呪力は持たないようだ。

　体で実感した護堂だった。しかし、祐理は悲しげな瞳でこちらを見つめている。

「どうした、万ま里り谷や？　俺の方は全然、何ともないんだけど」

「いえ——。魔女の方がおっしゃったように、護堂さんは本当に隙が多くていらっしゃると思ったら、すこし残念な気持ちになってしまいました……」

　憂うれいと共に、祐理は言った。しかも、悄しよう然ぜんとうつむくおまけつきで。

「ざ、残念って、どういう？」

「いくら普通でない相手でも、初対面の女性に唇を奪われてしまうだなんて、やっぱり普通ではありません。そのような事態に至る隙を、きっと護堂さんはお持ちなのだなと——」

　悲しげにささやく祐理の姿には、儚はかなげな美しさがあった。

　まるで、愛人の家へ足しげく通うくせに、本宅にはまったく帰ってこない夫を憂うれう正妻のような雰ふん囲い気きの……。

　針のむしろにすわると、こういう気分になるのか？

　護堂は居たたまれなくなった。もしかしたら、前のように凛りん然ぜんと叱しかられる方が精神的には気楽だったのかも。絆きずなが深まった分、罪悪感もセットで重くなったような——。

　しかも、リリアナまで追い打ちをかけてきた。

「なるほど。つけ込まれる隙があるからこそ、目め端はしの利きく者にそこを突かれる。万里谷祐理の指摘には、なかなか深い含がん蓄ちくがありますね」

「――!?」

　忠実なはずの騎士は、責めるように護堂をにらんでいた。

「それと、今の一件で思い出したのですが、昨夜は清せい秋しゅう院いん恵那とふたりきりで何をされていたのですか？　いえ、とがめるつもりはありません。しかし、執しつ事じであるわたしに事後報告がまったくない……その軽けい率そつさが、指摘された〝隙〟につながるようにも思えます。だとしたら、改める必要はあるでしょうね」

　とがめるつもりはない。

　そう言いながら、リリアナの目は護堂をとがめていた。

　今の件＋昨夜のことまで!?　そこまで目くじら立てなくともいいだろうに。

　困った護堂は、思わず恵那に目配せした。助け船を期待したのだ。しかし、太た刀ちの媛ひめ巫み女こは照れ笑いを浮かべ、

「うーん……恵那も今のことにはいろいろ文句あるんだけど、昨日はふたりだけでたくさん楽しんだもんね。仕方ないから、何も言わないでいてあげるよ」

　などと言う。むしろ火に油か？

　頭を抱える護堂に、思わぬ方向から支援があった。

　かしましい騒ぎを『あー、またやってるなー』的のんきさで聞き流していた甘粕が、急に携帯電話を耳に当て、通話をはじめたのだ。

「……はあ、はあ。ついに来ましたか。場所は川かわ崎さき……浮うき島しまのあたり。ははあ、そちらはもう陥かん落らくさせて、移動中ですか。やっぱり千ち葉ば方面に？　ですよねェ。浮島町からアクアラインのトンネルへ？　んー、なら、本当にもう時間がないですね……」

　護堂たちが沈黙すると、ほどなく甘粕は電話を切り、

「残念なお知らせがあります。ついにアテナが出現したそうです。以前と同じくらいパワー全開で、まっすぐこちらへ向かっているとか」

　と報告してくれた。

第４章　石化都市

1

　アテナは昨夜、草くさ薙なぎ護ご堂どうとわかれたあと、海を渡った。

　夜よ闇やみの美しさを汚す街の明かり。これを対岸から眺めて、ふと思ったのだ。

　いよいよいくさがはじまる。敵方の砦とりでを陥おとし、火を放ち、開戦の狼煙のろしにするのも戦場の風流。あれを贄にえにしてくれようかと――。

　朝が来るのを待ったアテナの前には、人間どもの港が広がっていた。

　停泊する船は巨大なものもあれば、吹けば飛ぶような小舟もあった。騒々しく民たみ草くさが出入りする城や塔とう、館やかたもおびただしい。

　もちろん、多くの人間どもがいた。千はゆうに越える。たやすく万は数えられよう。

　だというのに連中は、こんな小さな一角でせせこましく暮らしている。

　騒々しく走る、車輪つきの箱どもも目につく。

　これまた、砂漠の砂粒ほどもあふれかえっていた。たかが地を駆けるだけのために不ぶ細さい工くな道具を造り、奇怪な人工石で土を覆おおいかくし、手前勝手に道を整える。

アテナは憂うれえた。まったく、人とはどこまで度しがたく、愚おろかしいのか——。

野の獣けものが命がけで糧かてを得、かなわなければ野の垂たれ死じぬように。

野の草花が風に揺られ、雨に打たれ、陽ひの光を受け、数々の艱かん難なん辛しん苦くと恵みを従しよう容ようと受け容いれるように生き、死んでいけば、心安らかであろうに。

——まあいい。我わが権けん能のうを振るって、静せい寂じやくをもたらせばよい。

アテナは『蛇へびの邪じや眼がん』を解き放った。

視みたもの全てを冷たい石に変える呪じゆ詛そ。かりそめの死をもたらす力だ。

草薙護堂との戦いでも、すこし使った。此こ度たびは存分に振るうとしよう。人間であれば、夕ゆう餉げの食材を決める程度の気安い選択。だが、世界へあたえる影響は甚じん大だいだ。

「フフフ……これでよい。これで草薙護堂も、妾わらわのはやる心を知るであろう」

アテナの前には、さまざまな石くれが転がっていた。

石の船、石の道、石の塔に石の城じよう塞さい。

人間どもが錬れん成せいした人工石を素材とするものも多かったが、それらも全て、アテナの恵みたる自然界にのみ存在する石に生まれ変わらせた。

もちろん、当の人間たちも——。

この港に集つどった民は、ことごとく石に変えた。

草や木まで石に。とにかく視界に入る全てを石に。

駆けまわっていた箱どもも、ことごとく石にした。蛇へび女め神がみのひとにらみで一瞬にして制止し、全て微び動どうだにしない石の箱と化した。

静寂のみが支配する空間を眺めて、アテナは満足した。

「天よ地よ、火よ水よ。何より我が未熟なる宿敵よ。アテナの猛たけりを知り、アテナの力を知るがいい。我が襲来に備え、剣を研とぐがいい！」

傲ごう然ぜんと言い放ち、歩きはじめる。

さあ、このまま往こう。全てを石に変えながら、草薙護堂めのもとへ到来するのだ。あの愚ぐ鈍どんな神殺しも、さすがに女神の闘志を悟さとるはず。悟れぬほど愚おろかなら、もう見限ればいい。誉ほまれも誇りもなく、ただ殺す。

ゆるゆるとした足取りで、アテナは歩みだした。

ランスロット・デュ・ラックならば、稲いな妻ずまとなって敵陣へ殺到するだろうが。

それはアテナの――かつて神界に君臨した女王の流儀にあらず。

堂々たる行進をもって敵城に至り、威いと武勇を示すのだ。

「覚悟せよ、神殺し。今日という日が、あなたの最さい期ごとなるであろう！」

「とまあ、このようにアテナはやりたい放題です」

木き更さら津づの海に近い、天あま之の逆さか鉾ほこ発掘現場。

その地面に甘あま粕かす冬とう馬まは地図を広げ、状況を説明する。

「一時間ほど前、アテナは川かわ崎さきの埋め立て地に出現しまして、手当たり次第に石化させました。あの辺は工場やら倉庫やらが多いですけど、全滅です。港も公園も、船も車も、人も動物も植物も、とにかく、ほんの十何分かで全部まとめて石にしてくれたそうです」

ここで甘粕はため息をついた。

「さすが神様。石化能力の影響範囲がハンパじゃありません。視みたもの全部どころか、視線の先にあるものは数キロ先まで石にしたそうです。もうＲＰＧのボス敵を越えてますね。シミュレーションＲＰＧのマップ兵器並です」

　ふざけた喩たとえだが、軽口というには軽妙さが足りなかった。

「で、その後アテナは浮うき島しまジャンクションへ移動。アクアラインのトンネルに進入しました。トンネルそのものと内部にいる車両をまとめて石化させながら」

　と、地図をさして説明する。川崎の浮島町からアクアラインを利用すれば、神か奈な川がわから千ち葉ばまでは一本道でつながる。

　どうやらアテナは、地勢をきちんと把は握あくしたうえで行動中のようだ。

「何でこんなところだけ、研究熱心なんだ……」

「のんきに二足歩行してますが、そこは神様。普通じゃない速さです。斥せつ候こうの報告によると、時速二〇キロは出ているそうで」

　ぼやく護堂に、甘粕は補足してくれた。

　健脚の人間が歩いて時速五キロ程度。どれだけ速いのだ。

「すでに委員会と馨かおるさんは、関係する各方面へ通達や根回しの最中です。あの周辺を封ふう鎖さしたり、交通規制をかけたり、羽はね田だ空港からの人の流れを止めたり。あと問題は、アクアラインを走行中の車両と、パーキングエリアの海ほたるですな」

「なら、あそこで迎え撃ちましょう」

　護堂はすばやく言った。

　一同——甘粕、リリアナ、祐ゆ理り、恵え那なの視線が集まる。

「幸いといったらなんですけど、俺たちは昨日、海ほたるに寄っています。大丈夫だろ？」

「もちろんです。おまかせください」

　最後の問いは、リリアナに向けたものだった。

　一度訪れた場所なら、魔女の飛翔術で飛べる。うなずく騎士が頼もしい。

「アテナが木更津に上陸するのを待つ必要はないでしょう。その途中で迎え撃って、被害が広がるのを防ぎます」

　地図上の東京湾に描かれた有料道路アクアライン。そのパーキングエリア・海ほたるを指さしながら、護堂は言った。昨日はここで車を止め、小休止したのだ。リリアナの飛翔術で急行し、アテナを迎撃できるはずだった。

「今、海ほたるにいる人たちや、木更津方面から来る車に乗っている人たちをどこまで助けられるかわかりませんが、できる限りやってみます」

「おまかせします。私はこちらの仕切りがあるので、同行できませんから……」

　甘粕もさすがに慣れている。

　すばやく予定を報告し、懐ふところから天あま之の逆さか鉾ほこを取り出した。

「こいつはお返ししましょう。どうぞ」

「ですが、この状況で護堂さんに預かっていただいても大丈夫でしょうか？　おそらくアテナとの戦いになるわけですし……」

　奥ゆかしい口調で訴えたのは、祐理だった。

「これほどの神具ですと、アテナの神格に触発されて、よからぬ影響が出ることも……。あ、もちろん何も根拠のない憶測です。なんとなく気になったもので、つい」

　この警けい鐘しようように、護堂と甘粕は顔を見合わせた。

　最高の霊視力者が『気になった』のである。無視していいものか？

「ならさ、そのまま甘粕さんが持っててもいいんじゃない？　甘粕

さんならニンジャだし、あの魔女が来てもどうにか逃げられるでしょ？」

　と、提案したのは恵那だった。

「恵那もリリアナさんも、それこそあの陸りく家けの若様を連れてきても、鬼ごっこや隠れんぼなら甘粕さんにかなわないし。王様以外なら、いちばん持たせて問題ない人じゃないかな」

「え、そうなのか？」

「うん。甘粕さん、今風に呼ぶとマスターニンジャだって、馨さんも言ってたよ」

「人をマスターシーフとか、マスターサムライみたいに言わないでくださいよ！」

　イヤそうな甘粕を、護堂はまじまじと見つめた。

　だったら、自分以上に神具を隠し持つのにふさわしいのでは？

　猿さるか燕つばめのように身軽な恵那とリリアナ。その技術で彼女たちを凌しのぐうえに、忍び足やスリまで得意らしい陸りく鷹よう化か。この一団から逃げ切る自信は、護堂にはない。

「あ、相手が人間のカテゴリーに入るなら、です。神様なら完全にアウトですし、カンピオーネの方々なら向こうの権能次第。あの神しん祖そのお嬢さまは人間以上神様未満で、思いっきり微妙じゃないですか！」

「まあまあ。神祖は俺たちよりヤバくなさそうですし、大丈夫ですよ」

　給料以上の仕事はしない。

　常々そう広言する甘粕は大いに焦あせっていたが、護堂はあっさり言った。

　能力が問題ないなら、あとは責任感の問題だ。この人なら何だかんだ愚ぐ痴ちりながら、きちんとやってくれそうな気がする。たぶん。

「うーん……ヤバそうなときは全力で草薙さんのいるところに逃げ込みますから、お願いしますよ？　私の月給に、危険手当の項目はないんです」

　結局、悲しい告白をする忍びの者に、天之逆鉾は託された。

　こうなれば、いよいよアテナとの対決になる。

「では参りましょうか、草薙護堂。まつろわぬアテナとの再戦——わたしも、いえ、わたしたちも全力でお助けいたします」

　リリアナのささやきに、無言でうなずく。

　決戦場へおもむくメンバーは、銀髪の騎士のまわりに集まった。護堂と万里谷祐理、そして清秋院恵那——。一行は青い光につつまれて、空へ飛び立つのだった。

2

　十数分の飛ひ翔しようで、海ほたるの偉い容ようが眼がん下かに見えてきた。

　東京湾アクアラインは、複数車線の広い有料道路である。そして海ほたるはパーキングエリアであり、観光名所にもなった施設。

　その外観は、海上に浮かぶ巨大な客船じみていた。

　一階部分には多目的スペースでもある広場や、モニュメントが設けられている。

　二・三階は駐車場。四・五階にはレストランや娯楽施設、展望デッキなどが並ぶ。

　リリアナの使う飛翔術は、光を放ちながら天あま翔かける。その光と着陸を見られて、騒ぎになるのが不安ではあった。

　しかし、杞き憂ゆうだった。護ご堂どうと仲間たちは多目的スペースの片隅に着地したのだが。

　ざっと見る限り、誰もいなかった。流れるアナウンスが事情を教えてくれる。

『お客様に、ご案内申しあげます。先ほど当施設に大量の爆薬を設置したとの通知があり、警察より避難要請が出ております。みなさま、スタッフの誘ゆう導どうに従い、すみやかに避難をお願いいたします――』

　女性スタッフの声を録音したのだろう。

　緊張しながら読みあげたらしい、ぎこちないアナウンスが繰りかえされる。

　今頃、来場者は駐車場へ集まり、順番に木き更さら津づ方面へ送り出されているはずだ。車以外の来場手段がないので、誘導は他の施設より容易かもしれない。

「甘あま粕かすさんも言ってた、現地の対応か」

　護堂はうなずいた。

　正せい史し編へん纂さん委員会が各方面へ働きかけた結果、海ほたるから川かわ崎さきの浮うき島しまジャンクションへの通行はすでにストップ。木更津方面へ避難するよう誘導しているらしい。さっき上空からも、海ほたるから木更津へ逃れていく車の列を見ることができた。

「たしか、最上階に展望台がありましたね」

　不意にリリアナが言った。

「そちらで川崎方面を警戒されてはいかがでしょう？　見晴らしのよいところで、アテナの接近に備えるべきです」

「いいアイデアだと思う。恵え那なは目がいいから、すぐに異状がわかるはずだよ」

「そうですね……私の霊視は普通の視力と関係はありませんが、開けた場所の方がアテナの神気を感じやすくなるかもしれません」

　媛ひめ巫み女こたちも賛同する。たしかに採用しない理由はない。護堂はすぐに言った。

「わかった。じゃあ、その線で行こう」

「承知いたしました。ああ……清せい秋しゅう院いん恵那と万ま里り谷や祐ゆ理りは先に上へ行き、警戒をはじめていてくれ。わたしと草薙護堂は駐車場の様子を確認してから、合流する」

　リリアナがてきぱきと指示を出す。

　銀髪の青き騎士は、以前よりも積極的に場を仕切っていた。いつもまとめ役だったエリカがいないせいか。それとも、侍じ従じゅう長ちようという新たな職権を得たせいか。おそらく両方だろう。

「いいよ。じゃあ祐理、先に行こっか」

「はい。何か異状があれば、すぐにおふたりへお電話いたしますね」

　祐理と恵那も、騎士のリーダーシップを受け容いれている。

　そうか。護堂は面白く思った。イタリア組とは対照的に、媛巫女たちはぐいぐい集団を引っぱる気質がうすい。だから、自然と紅あかと青の騎士いずれかが護堂に次ぐサブキャプテンの座に収まるのだろう。

　ふたりの媛巫女が大きなエスカレーターに乗って、上の階へのぼっていく。

　彼女たちの姿が見えなくなった直後、リリアナはつぶやいた。

「……やっと、ふたりきりになれましたね」

「……へ？」

　リリアナは恥ずかしげに目を伏せ、頬ほおを紅くしながら——。

　不穏なつぶやきを、たしかに口にした。

「実は、こちらへ飛んでいるときから、どうやってふたりだけの時間を作ろうか思案していたのです。思いのほか上う手まくいって、助かりました」

「そ、それはまたどうして？」

　ささやきながら迫るリリアナへ、護堂は震える声で訊たずねた。いや、この流れから『もしかして!?』と察しはついていたが。

「おとぼけにならないでください。あなたは誰よりも『勝利』にこだわる方。アテナとの戦いを前に、武器の準備をしたいと考えないはずがない」

　そのとおりだった。教授の術で教わる知識は、一日程度しか頭に残らない。

　アテナについての詳細な知識を、護堂はとっくに失っていた。

「誰かが知識を捧げなければ、ウルスラグナの『剣』を抜くことはできません。つまり、そういうことなのです、草薙護堂」

「ど、どういうことだよ!?」

　いや、リリアナの美び貌ぼうが近づいてくる時点で、意味はおおむね理解できた。

　だが『そういうこと』を当たり前だと思うのは問題だし、女好きの世評を自みずから認める形にもなる。しかし、有力な武器がないのも悩ましい……。

　さまざまな葛かつ藤とうをかかえていた護堂は、ここでドキリとした。

「誰かがしなければならない役目なら、リリアナ・クラニチャールのものにしたいと思うのです。あなたの執しつ事じたる身で、その役を己に振るのは職しよつ権けん濫らん用ようだと自覚はしています。でも、やはりそこだけは他の娘に譲れませんし——」

　いつもは凛りゝりしい、騎士の表情。

　ときに愛らしく、ときにあたふた取り乱し、ときに無警戒になる妖よう精せいの美び貌ぼう。

　それが今、ひどく自信なさげにおどおどしていた。

「あなたのいちばん近くに控える者は、いつでもわたしでありたいと思うのです。……ですが、あの、あなたがもし他の者にこの役目を委ゆだねたいのであれば、もちろんすぐにこの場から退さがりた

いと思います……どうか、ご裁さい可かを」

　ここまでしておきながら、心細そうに言う。

　選ばれる自信がないのだろう。その覇は気きのなさは、護堂の目にはひどく可か憐れんに映った。

　普段とちがうリリアナの表情に、庇ひ護ご欲よくが刺激される。それに何より、ここまでしてくれた彼女に恥をかかせてはいけない。

　ふと、そんなことを思った瞬間に、リリアナの唇くちびるを奪っていた。

「あ……」

「俺はこれからアテナと戦う。だから、頼む」

　唇くちびるを合わせながら、短くささやく。

　リリアナは目を潤うるませながら、すぐにうなずいてくれた。

「は、はい。わたしが女神について知る全てをお教えいたします。だから……だから今度も必ず勝ってくださいっ」

　熱っぽくささやく騎士の唇が、護堂のそれにおおいかぶさる。

　合わさり、開く唇。からみ合い、交わり合う舌と唾だ液えき。そして伝達される知識と想おもい。

　呪じゅ術じゅつの絆きずなと熱烈な想いを、護堂はたしかに受け取った。

　媛巫女たちに遅れること十数分。

　あたふたと儀式を終えて、護堂とリリアナは展望台へのぼる。先行していた媛巫女ふたりもすぐに気づき、声をかけてきた。

「ああ、ふたりともやっと来た。遅かったじゃん」

「下の方で、何か問題でもありましたか？」

　海ほたるは東京湾のまっただなかにある。

　その五階に設けられた展望台は、四方を海にかこまれる。さらに神奈川県、千葉県双方の陸地と街並みを遠くに望むことができる。

　絶好の見晴らしのよさ。夜景スポットとしても知られる場所だ。

　恵那と祐理は、ここから川崎方面へ至る道路を眺めていた。これこそアテナがやってくるはずの道だった。

「ん、ああ。やっぱり、まだ全部の人が避難したわけじゃないみたいだ」

「そ、そうでしたね。彼らを守るためにも、わたしたちは力を尽くさなければいけません。がんばりましょうっ」

　媛巫女たちに訊きかれて、護堂とリリアナは生返事をした。

　一応、避難状況もちゃんと確認したのだ。駐車場のある階でエスカレーターから降り、どういう様子かをざっと見渡して。

　残っていた車の台数は、二、三〇台というところだった。

　海ほたるは観光スポットだが、今日の来客はすくなかったようだ。おそらく、まだ朝の一〇時と早い時間なのが幸いしたのだろう。

「……王様もリリアナさんもさ、何か変じゃない？」

「……そうですね。おふたりとも不自然にそわそわされていませんか？」

　それはふたりきりで、あれこれしていたから——。説明するわけにもいかず、護堂とリリアナはそろって平静を装った。

「あ。そういえば……もしかして……まさか……やっぱり！」

「どうしたの、祐理？　何かわかった？」

「は、はい。あの、おふたりはきっと、いえ、まちがいなく」

　何かに気づき、いきなり愕がく然ぜんとした祐理。

　それを教えたのが霊視か、女の勘かんかは不明だが……。彼女はまだ呑のみ込めない恵那の耳元に、ゴニョゴニョささやいた。

「じゃあ、恵那たち抜け駆けされたの!?　そんな、ひどいよ！」

「こ、これもアテナとの戦いに必要なこと。そのように不心得なことをおっしゃってはいけません。で、ですがやっぱり——護堂さん！」

　憤ふん慨がいする仲間に、そして自分自身に、分ふん別べつくさく言い聞かせようとするも。

　堪こらえきれない様子で、祐理はいきなり護堂を一いつ喝かつした。

「アテナについての知識を学ばれたのですね。私たちから隠れて、リリアナさんと」

「う……ん、まあ」

「ま、万里谷祐理、あなた自身も言っていたが、これは戦いに必要な儀式でっ」

「リリアナさんはお黙りください。今は護堂さんと話をしています」

　詰きつ問もんに生返事をする護堂。

　言い訳をピシャリとさえぎられ、沈黙するリリアナ。

　いつのまにか、場の中心は祐理になっていた。不思議だ。いつもは控えめだし、リーダーシップを取るタイプではない。

　なのに彼女は、いきなり強烈な影響力をまわりに示すときがある。

「その件については、何も申しません。厳しい戦いを全まつとうするために必要なことと承知しておりますし、私もできる限りお助けしたいと思っております」

「あ、ああ」

　静かでありながら、祐理の物言いには怖さがある。

　護堂は背筋を伸ばした。敬語で『はい』と答えかけたのは秘密だ。

「ですが、昨夜の恵那さんとの逢おう瀬せもそうですが、そのような行状を重ねながら、まわりに隠そうとするお心がまえはいかがでしょう？　あなたは『王』と呼ばれる御方です。そうであればこそ、お振る舞いにも王者の威い風ふうを示されるべきだと思います」

「い、威風？」

「はい。あなたはたしかに蛮ばん行こう・乱らん行ぎようを重ねる暴君にも等しい方。世間の倫理に照らし合わせれば、大たい逆ぎやく無む道どう・不ふ羈き奔ほん放ぽうの輩やからといえましょう。ですが、そのようなあなたも心根は誠実で、義ぎ侠きようの志こころざしに篤あつい方だと私は存じております」

　ここで祐理は、フッと儚はかなく微笑ほほえんだ。

　桜の花びらが散るような、どこか悲しげな笑みだった。

「それゆえに私はあなたをお慕したいし、お助けしたいと思うのです。そして、あなたには卑ひ怯きよう未練な行いとは無縁でいただきたいとも。……ええ、たとえ冥めい府ふ魔ま道どうを往ゆく身であっても、堂々と己の道を歩んでいただきたいと」

　護堂はいたたまれなくなった。

　まるで自分が、『芸の肥こやし』と遊び狂う歌か舞ぶ伎き役者のように思える。

　祐理の方は、高貴な家から嫁とついだ正妻か。夫の浮気も『役者ならば当然』と大目に見つつ、しっかり手た綱づなを取る賢夫人――。

「あなた自身の名誉を傷つける真ま似ねは、お控えくださいね。都合が悪いからと口をつぐむのは、その最たるものです。……では、アテナの方に備えましょうか」

　今までの迫力はどこへやら。

　祐理はもう、いつもどおりの淑しとやかなお嬢さまだった。和なごやかな表情にもどり、空気を変える。説教するときの迫力は前から尋じん常じようではなかったが……。最近は、硬こう軟なんどちらの面でも成長しつつあるようだ。

（……ひかりも何だかんだで、お姉さんには頭が上がらないようだしなァ）

　護堂は思った。みんな、修しゆ羅ら場ばをくぐって成長しているのかもしれない。

　リリアナ然しかり、祐理然り。エリカだって初対面の頃と今では大ちがいだし、恵那も前より人里に降りる回数が増えたらしい。

　俺もしっかりしなくては——と、自じ戒かいしたとき。

　臍せい下か丹たん田でんから戦うための力が込みあげてくるのを感じた。心も昂たかぶる。

　来たか。護堂は川崎方面へ視線を投げた。

　複数車線の広い道路には、一台の車もない。川崎からアクアラインのトンネルに入った女神が、進行方向を進む車両と乗員のことごとくを石にしたせいだろう。

　そして、美しきアテナの姿も見み出いだした。

　堂々たる行進だった。無人の野を往くような、悠ゆう々ゆうとした歩み。

　なのに、その進みは速い。死すべき人間が必死で走っても、すぐに振り切られるはず。

　アテナと草薙護堂、何度目かの再会であった。

3

「フ——さすがに昨夜よりはマシな顔をしているが。足りぬな。

まったく足りぬ」

　いきなりアテナは言い放った。

　その姿は幼い少女。しかし、眉まゆをひそめる表情は気け高だかき女王のものだ。

「あなたの顔と心には、いくさ場にて生を追い、死を得る丈夫ますらおの覚悟が欠けている。神殺しの戦士でありながら、なんという体ていたらく」

「うるさい！　鉄器文明時代の考え方を現代人に押しつけるな！」

　眼下の路上へ、護ご堂どうは言いかえした。

　埋めがたいほどのカルチャーギャップ。結局、アテナと自分の間でコミュニケーションが上う手まく成り立たないのは、それが理由だろう。

「そんなことより、よくもやってくれたな。あんたがここまで人間社会に迷惑をかけるなら、俺だって黙ってられない。また力ずくで、この国から追い出す」

「それが足りぬというのよ」

　神と神殺し。両者を隔へだてる距離は大きい。

　アテナは路上より護堂を睨ねめあげ、護堂は展望台よりアテナを見おろす。

「追い出すだと？　愚おろか者め！　そこで妾わらわを屠ほふり、地上より拭ぬぐい去るとなぜ言えぬ!?　この期ごにおよんで、いまだ戦士の心得を学ばぬか！」

「俺には俺のやり方がある。神様だろうと女王様だろうと、誰にも文句は言わせない」

　この程度の距離は、何の障しよう碍がいにもならない。

　共に承知している。自分たちはすでに、一足一刀の間合い――ほんのすこし踏み出すだけで切り結べる。そういう状態にあるのだ。

　護堂は手振りで、『さがれ』と少女たちに合図した。

　リリアナも、祐ゆ理りも恵え那なも、すぐそのとおりにした。展望台の奥へ下がり、戦況の変化に備える。それが彼女たちの役目なのだから。

「我は言こと霊だまの技を振るい、世に義を顕あらわす！」

「命ある者ども、ことごとく鼓動を止めよ！　すべからくひれ伏すがよい！」

　言霊を唱となえたのは同時だった。

　アテナは『石化』の神力を解き放ち、護堂は『戦士』の化身となる。

「汝なんじらにふさわしきは、冷たき石の碑いしぶみである。それこそが女神のあたえる恩おん寵ちようなれば！」

　かりそめの死を振りまく、蛇へび女め神がみの謡うた。

　その足もとに変化が生じる。彼女が立つのは、ぶあついコンクリートの路上。

　しかし、人工の道はまたたく間に生まれ変わった。灰色の自然石におおわれる、石の平原に変じたのだ。いや、それどころか——海まで石化した。

　海ほたる近辺の海面が波打つのをやめ、凝ぎよう固こした。

　今まで液体だった海水が石と化し、固体となった。アテナから半径二、三キロ以内の海が石化してしまった。

「さあ、眠れ。夢見のなかで覚かく醒せいの時を待つがよい。ただし、妾のあたえる夢は永と久わの牢ろう獄ごくでもあるが……！」

　なんというデタラメさ！　だが負けない！

　護堂も『剣』の言霊を唱える。アテナの神格を斬きり裂くため、智ち慧えの刃やいばを生み出す。

「我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者なり。強大にして雄ゆ

う弁べんなる者なり！」

　海ほたるの展望台に立つ護堂。

　その頭上に顕けん現げんする光球の群れこそ、神殺しの武器だ。

　さながら夜空に浮かぶ幾千の星々。光のひとつひとつがアテナの神格を斬り刻み、アテナの神力を削そぎ落とす。

「邪じや悪あくなる者、我を討うつにあたわず！」

　護堂は『剣』の言霊で、まず海ほたる全体を取り巻いた。

　このパーキングエリアは、今や石の海を漂流する難なん破ぱ船せんであった。寄るべない船内には、避難できなかった人々が数百名はいるだろうか。護堂自身、それに祐理、リリアナ、恵那たちもいる。そして、木き更さら津づへつながる道路には、いまだ走行中の車も多いはずだった。

　アテナの『邪じや視し』を、それらへ届かせるのは許さない。

　揺ゆるぎない意志を持って、『剣』を操る。女神の双眼から放たれる石化の神力を、海ほたるの周囲にばらまいた光の刃で切り伏せ、切り落とし、薙なぎ払い、貫つらぬきとおす。

　まさに盤ばん石じやくの防備。護堂の『剣』は海ほたるを城じよう塞さいに変えた。

「くくく。手ぬるいな、草くさ薙なぎ護堂よ」

　だが、アテナは嗤わらっていた。

　唇くちびるを挑発的に歪ゆがめ、嘲あざけりを露あらわにしていた。

「あなたの『剣』……神を斬り裂くウルスラグナの刃は、一度見た。これを破る手立てのないまま、妾がいくさに臨のぞむと思ったか！」

「なんだって……!?」

「ふふふ。あなたも知っていよう、ギリシアにおいて妾が所持した

『楯たて』の伝承を。メドゥサを殺あやめた勇士ペルセウスは、その頸くびを女神アテナに捧ささげた。アテナはメドゥサの頸を『楯』に合わせた」

　護堂は女神アテナの彫像を思い出した。

　ギリシアの彫刻では、彼女は楯を持つことが多い。その楯には、蛇髪の妖女メドゥサの似姿が描かれる。視みるもの全てを石とする魔力がアテナを守護するのだという。

「あなたの『剣』を破るため、妾はふたたび『楯』の故事に倣ならう。メドゥサこそ、妾が所有する幾多の名のひとつ。ゴルゴネイオンを得て、我らの名はふたたび合一されたが」

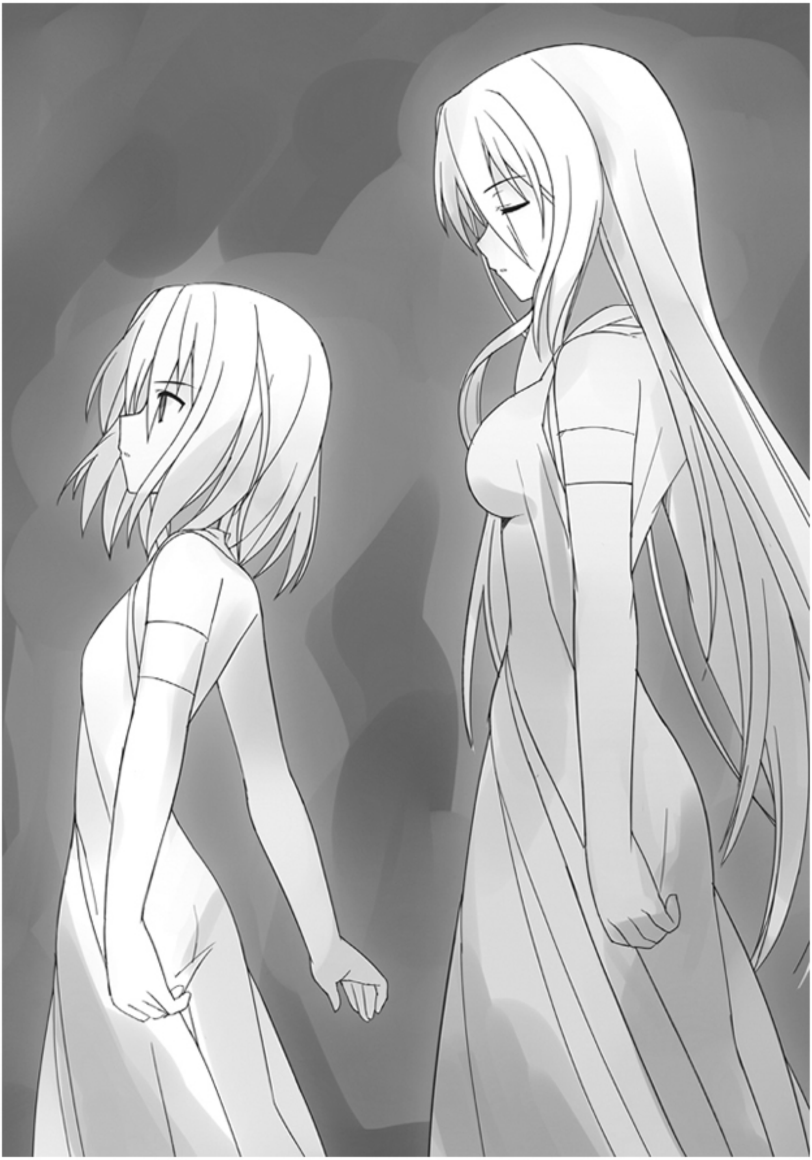
　護堂は見た——。

　アテナの背後に、もうひとりのアテナが顕あらわれるのを。

　前の戦いでも見た。幼女の年格好から成長し、乙女おとめとなった女神の姿だ。

　幼き童女としてのアテナ。一〇代後半くらいにまで成長した、乙女としてのアテナ。

　なんと、ふたりの女神が燦さん然ぜんと出現したのである！



「「今このときだけ、我らはふたたび分かたれる」」

「「すなわちアテナとメドゥサ。メドゥサとアテナ。草薙護堂よ、アテナの神格は斬り裂けよう。しかし、メドゥサの神格ならば如い何かに？」」

　完かん璧ぺきにユニゾンする両女神のささやき。

　――まずい！　護堂は本能的に、このあとの展開を読んだ。

　護堂自身も似たようなことを何度かやった。『剣』で斬り裂く対象を変化させる、あの戦法のまさに真ま逆ぎやく。アテナは自らの神格を意図的に分けたのだ！

「「妾は闇やみをしろしめす女神アテナである。夜の女王にして冥めい府ふの主あるじ」」

「「妾は大地を言こと祝ほぐ女神メドゥサである。土の女王にして石いし室むろの主」」

「「されば、妾は呪じゆ詛そを授けよう。冷たき骸むくろとなって、冥府に横たわるがいい」」

「「されば、妾は恵みを授けよう。冷たき石像となって、土に根を張るがいい」」

　両女神より放たれた言霊が、海ほたるを襲う。

　アテナは『死』を。そこにいる者を全て死に至らしめる、死神の呪じゆ詛そを。

　何てものを使いやがると護堂は怒ったが、これはどうにかなる。『剣』を加速させ、『死』の波動をことごとく切り払った。

　しかし、メドゥサの放った『石化』の邪視は切れない。防げない。破れない！

　真下にある海ほたるの全施設が石と化していく。

　草薙護堂はこの石化にも屈しない。神の権能であっても、もっと渾こん身しんの力で繰りだされなければ、カンピオーネの肉体はど

うにか堪こらえてくれるのだ。

　しかし、それ以外のものは。

　なかにいる人々、その他の生き物、車両に機械に草木に、さらに仲間たちは。

　抗あらがう術すべを持たない。

「万ま里り谷や！　リリアナ！　清せい秋しゆう院いん！」

　叫ぶ。声を限りに叫ぶ。しかし、護堂の眼前で万里谷祐理は美しい石像となった。

　リリアナ・クラニチャールも妖精の似姿を思わせる石像となった。

　だが、例外がひとりだけいてくれた。

「王様、お願い！　あれを——恵那に力を——！」

　石化させられる寸前で、清秋院恵那が絶叫して手をのばした。

　護堂に向けて。草薙護堂が持つ、彼女の相棒を求めて。

「頼む、天あまの叢むら雲くも！　清秋院を守れ！」

　己の右腕に宿る神刀へ、とっさに命じる。なんとか間に合った。

　刃渡り約一メートルの大刀が、恵那の手に顕れる。刀身は夜のごとき漆しつ黒こく。これこそ剣の姿をした神・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎである。

　草薙護堂の相棒でもある刃は、もうひとりの相棒に神力を渡す。

　神がかり——その身に神の力を降ろす、恵那だけの荒技。

「我、御み劔つるぎを振りかざさん！　ちはやぶる破は金がねよ、我と共に！」

　とっさに人を超える存在となった媛巫女は、天叢雲劍を振るう。

　漆黒の刃は女神メドゥサの石化波動をとらえ、その力を呑のみ込

み、どうにか使い手の身を守るのであった。

「くそっ。他のみんなはダメだったか！」

「おお。先ほどよりもよい目をするようになったな、草薙護堂！」

　歯は噛がみする護堂へ飛びかかってきたのは、美しき女神。

　遥はるか下方の路上より、飛ひ鳥ちようのごとく大跳躍し、ひととびに展望台へ到達したのだ。

「怒りと復讐に燃える雄お々おしき瞳。それでこそいくさ人なり。善よき哉かな！」

　アテナとメドゥサは、またひとつになっていた。

　童女と乙女は合わさり、一八、九歳ほどの美少女と化す。

　その姿で獰どう猛もうに護堂へ飛びかかり、手刀を繰りだす。アテナの繊せん手しゆは、さながら死の騎士が振るう槍やりであった。

「ぐは——ァッ！」

　脇腹を鋭く抉えぐられ、護堂は悶もん絶ぜつした。

　肉が断たれ、臓器が裂け、鮮血がほとばしる。もはや刃物の傷だ。

　あの分身がある以上、もう『剣』は通じない。とっさに『駱らく駝だ』の化身になり、アテナへ逆襲の横蹴りを叩たたきつける！

「くくく。よいな。妾の血がたぎる。この上なく燃えておる！」

　跳びのいて蹴りをかわし、猛たけ々だけしく凄せい絶ぜつに微笑む女神。

　その美貌を、護堂は険しくにらみつけた。

　ウルスラグナ第四の化け身しん『駱らく駝だ』。

　これを使うときは、ある程度の重傷を負ってなければならない。

　代わりに野獣じみた格闘能力、神すら蹴け散ちらす脚力、痛みを堪こらえる打たれ強さ、通常以上の治ち癒ゆ力りよくを得る。

　脇腹の痛みがうすれるのを護堂は感じた。戦いを続行できそうだ。

「そのような力を隠しておったか！　さすが千せん変ぺん万ばん化かの軍神より奪った権能、なかなかに行き届き、多彩であることよ！」

　哄こう笑しようしながら、アテナは大おお鎌がまを振りまわす。接近戦用の武具として呼び出したのだ。

　死神の所持品を思わせる、両手で振りまわすための鎌。その刃やいばは闇やみ夜よの黒。

　これを護堂は、『駱駝』の恩恵で避ける。

　人の格闘技ではない。荒ぶる獣けもののすばやさ、鋭さで体を操り、蹴りを放つ。

　岩をも砕くだく足蹴り。しかし、アテナは黒き鎌の柄で受け止めた。

　神の使う超自然の武器であるせいか、それともアテナの神技ゆえか。『駱駝』の蹴りにも木製の柄は砕けず、威力を吸収しきってしまう。

「くそ。当たらない、か――！」

　護ご堂どうは脇腹の痛みを堪こらえながら、必死に接近戦を戦った。

　アテナの鎌をかわし、反撃の蹴りを打ち込み、カウンターを喰くらえば獣の身ごなしで避け、またも反撃。

武芸の心得など草くさ薙なぎ護堂にはない。

しかし、戦士カンピオーネの直感が教えてくれる。『駱駝』はデタラメに強い。陸りく鷹よう化かあたりがどれほど俊しゅん英えいであろうと、一ラウンドでＫＯできる。サルバトーレ・ドニにはやや上を行かれ、羅ら翠すい蓮れんには大苦戦。そんな具合だ。

その『駱駝』と、闘神といわれる神様たちは、おおむねドニ以上に戦う。

ペルセウスも。そしてアテナも。

彼らの武芸は、デフォルトで人類の最高峰レベル。一握りの天才が血ち反へ吐どを吐き、悩み、苦しみ、狂気すら帯びながら己を鍛きたえ、その末にようやく到達できるか否いなかという聖域に、生まれながらにいる。こっちもデタラメだ。

いや、人の身で神々と伍ごすドニや義あ姉ねを、むしろ絶賛すべきなのだろうが。

「だが草薙護堂よ……」

女神の振るう鎌の動きは、精妙にして剛強。

ウルスラグナの『駱駝』でも、全てをしのぎきれない。切り傷、裂傷が護堂の体にどんどん増えていく。血も流れ出ていく。

だというのに、アテナは余裕で言い渡してきた！

「妾わらわとあなたが人間のごとき立ち合いをつづけるのも、どうかと思うぞ？　大いなる権能をもって敵に対す。それこそがやはり、我らの本領なれば！」

「——！」

護堂は戦せん慄りつした。そうなれば、もうかなわない。

殴なぐり合いが強いだけの『駱駝』だから、ガムシャラに接近戦を挑んだのだ。

それでどうにか互角。だが、何らかの呪法を織り交ぜられると——。

「影よ、うごめけ」

　アテナが言こと霊だまをささやいた。

　その背後で黒い影がうごめき、蛇へびの形をかたどる。

「鉄をも裂く爪そう牙がとなり、奔はしれ！」

　蛇が鎌かま首くびをもたげ、護堂の頸くびへ食らいつこうと飛びかかってきた！

　しかもアテナは、手にした鎌で横殴りの斬ざん撃げきも繰り出す！

「危ない、王様！」

　とっさに割り込んでくれたのは、恵え那なだった。

　ガキン！　太た刀ちの媛ひめ巫み女こが振るう天あまの 叢むら雲くもの 劍つるぎは、アテナの鎌を受け流した。護堂の方は、黒い蛇の牙きばをぎりぎりで横に跳んで、かわすことができた。

「……巫女か。そなた、下女の分際で我らの聖域に入りこむつもりか？」

　はじめて――。

　はじめてアテナは、清せい秋しゆう院いん恵那を見た。

　今までも視界には入っていただろう。だが、まったく認識していなかったはずだ。

「死すべき人の身でありながら、わずかに神の恩おん寵ちようをたまわったようだが……。その程度の力で我ら神々におよぶべくもなし。分ぶんをわきまえよ」

「いくら神様の命令でも……それは聞けない」

　天叢雲劍を青せい眼がんにかまえる恵那。

　割り込むタイミングをずっとうかがっていたようだ。

「草薙護堂こそ、我が背せの君きみ。清秋院恵那は一命を賭とし

て、この方をお守りするって決めているんだ。あなたが地ち中ちゆう海かいの女王だって話は知っているけど——恵那は退ひかないよ」

　つぶやく媛巫女の身には、天叢雲劍の神力が横おう溢いつする。

　これこそ神がかり。規模は小さくとも、ちはやぶる神の威を与あずかる大秘術。

「いいよね、王様？　あなたの隣で、恵那も戦う。必ず役に立ってみせる！」

「ああ……俺だけじゃ、この女神さまにはかなわない。頼む」

　決然たる問いに、すぐ護堂は答えた。

　カンピオーネと肩を並べて戦えた人間は、ほとんどいない。

　神との戦いでは皆、後方から援護するのみだった。例外はウルスラグナの加護を得たエリカだけだろう。しかし、神がかりをした恵那ならば——。

「弓矢の冥みよう加があるべくば、この太た刀ちに誉ほまれを取らせ給たまえ！」

　言こと霊だまを謡うたい、恵那が愛刀を天にかざす。

　天叢雲劍。漆しつ黒こくの刀身にはゆるい反そりがある。斬撃の威力を増すために施ほどこされた工夫。いにしえより、常に外敵をまつろわせてきた神刀なのだ。

「死を謡え。死をいざなえ。死を踊れ——。アテナのしもべは、すなわち冥めい府ふより来きたりし死の御み使つかいなれば！」

　アテナも禍まが歌うたを口ずさむ。その背後で、黒き蛇がふたたび形を取る。

　一匹だけではない。次々と鎌首がもたげられる。

　二、三、四——しまいには九匹もの黒蛇がアテナの背後に顕あらわれた。しかも長大。蛇の首は全て一〇メートル近い長さであった。

　それらがアテナの背後に、食虫花の花弁のごとく広がり、うごめく。

　そして、戦いは再開された。例の死神の鎌が、もうひとつのアテナの武器。これを振りかざして突進する女神につづけと、九頭の黒蛇も来襲する。

　次々と牙をむき、鎌首をもたげ、地上の人間どもを食い散らそうとする。

「清秋院、無理に攻めなくていい！　まず守りを固めろ！」

「了解！　今は流れが悪いもんねッ」

　護堂の声に、察しよく恵那が答える。

　さすが太刀の媛巫女。かんたんな指示なのに意図を悟ってくれた。

　今、有利なのはアテナの側。ならば、我慢強くピンチを凌しのぐのが吉だ。その間に勝負の流れをこちらに引き寄せる！

　護堂と恵那は力を合わせ、呼吸を合わせて、女神に立ち向かった。

　ときに肩を並べて、ときに背中合わせに——

　アテナの鎌を『駱らく駝だ』で蹴り飛ばして防ぐ。

　食らいつく黒き蛇の口を天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎで斬り裂く。

　アテナの鎌を天叢雲剣が払いのける。

　黒き蛇を『駱駝』で蹴りあげ、かかと落としを喰らわせて追い払う。

　即席のタッグだが、コンビネーションは良好だった。

　恵那が突出せず、ひたすら『楯たて』となってくれたおかげだ。護堂が己の力では防げそうにない攻撃にさらされたときに、神刀で救いの手をさしのべる。

それ以外は基本的に防戦。

無理にアテナへ切り込まない。攻め込まない。牽けん制せい程度。

恵那はわかっているのだろう。神がかりしてもアテナと正面衝突はできない。しかし『楯』としてなら役立てると。

そうか――。なんとなく護堂は理解した。

聡そう明めいさが武器のエリカ、万事に気を利きかすリリアナともちがう。

彼ひ我がの戦力差、戦況から、今取るべき応手をなんとなく悟り、大胆に体を動かす。目に見えない才覚。天性の勝負勘かん。

そうした資質を、清秋院恵那は持っているのだろう。

おそらく同じ資質が、草薙護堂に神を殺あやめさせた一因のはず。似た感性を持つ者同士。だから、驚くほどすんなりと連携できるのかもしれない。

「輝ける我、敗れざる我、アフラの創つくり給たまいし我は、背後より敵を追いつめ、正面より敵を斃たおす。我が名を唱となえ、勝利の呪文とせよ！」

ひとまず防御は形になった。次は攻撃。反撃の一手。

護堂はウルスラグナの聖句を唱え、呪力を高めた。流れを取り戻すためにも、強烈な一撃をアテナに叩たたきつけたい。

いちばんいいのは『白馬』。前回も決まり手になった焔ほのおの化け身しんだ。

だが、あのときも一度は防がれた。不用意に繰り出せば、最大の切り札を失う。ウルスラグナ十の化身は、一度使うと丸一日ほど使用不能になるのだから。

『さあ！　聖せい杯はいを動かすべきは今。どうぞアテナをお討ちあそばしませ！』

護堂は目をみはった。

かすかにグィネヴィアの声を聞いた――気がしたのだ。

「フ！　あいもかわらずしぶとい男だな！　いいだろう、草薙護堂。あなたの築いた城壁を妾の権能で突き崩してくれよう！　分をわきまえぬ巫女よ、神罰を畏おそれるのであれば、疾とくこの場より去いね！」

アテナが大だい音おん声じようで叫ぶ。

いつしか戦いの場は、海ほたるの外となっていた。

蛇女神の呪じゅ詛そが石化させた海。本来なら立つ余地のない波の上で、護堂と恵那、そしてアテナは戦っていた。

皆、人間離れした身軽さなのだ。護堂も『駱駝』の脚力のおかげで、一〇メートル近くも助走なしでジャンプし、着地できるようになっている。

あちこち跳びまわりながら戦っていたら、ここまで来てしまった。

「今こそ冬の謡うたを紡つむごう。全ての草は枯れ、木は実を落とし、花は散る。死と暗黒の季節、その到来を告げよう！」

アテナの言霊が、石の海原にこだまする。

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを地じ擦ずりの青眼にかまえて、恵那は迎え撃つ準備。この神刀は、さまざまな呪術や霊力をも吸い取り、斬り裂いてしまう。

女神の繰りだす権能が何であれ、必ず斬り伏せて護堂を守る――。

その決意が見て取れた。だが、はたしてかなうか。

アテナの体からは、すさまじい冷気が放たれている。近くにいるだけで骨まで凍こごえそうになる、永久凍土の冷たさ。

彼女は闇と冥府の女王。冬と死をしろしめす、死神のなかの死神である。

その本領を、神ならぬ身の清秋院恵那は切り伏せられるだろう

か。万能ならざる草薙護堂は防ぎ切れるだろうか。

「我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者なり。人と悪魔、全ての敵を挫くじく者なり！」

　だが、それでもやらねば——！

　決心して、護堂が呪力を高めたときだった。

『その昔、白き女神はある器うつわを創つくるために、地じ母ぼ神しんとしての神聖さを、不死を、叡えい智ちを、全て注ぎ込みました。そうして生まれたのが聖杯なのです……』

　たしかにグィネヴィアの声を聞いた。

　肉声ではない。これは護堂の心にのみ響く、内なる声だ。

『聖杯とは、大地の女神より命を吸い取る器にございます。あるときは死せる地母神の骸むくろから。あるときはまだご存命の女神から、聖杯は命の糧かてを受け取ってきたのです……』

　さっきの邂かい逅こうでかけられた、あの術だ。

　グィネヴィアが言った『聖杯の呪法』とは、これだったのか。

『いくつかの手順を踏めば、どのような地母神も聖杯より逃れることはかないません。そして今、この霊れい宝ほうがアテナの裡うちに眠っているのです……』

　なんだって？　護堂は驚いて、アテナを凝ぎよう視しした。

　今まさに、全力で権能を解とき放はなとうとする闇の女神。たしかに感じる。『聖杯の呪法』が動き出したせいか、はっきりと視みえる。

　美しい女神の肢し体たいに呑のみ込まれた、甕かめのような何か——あれが聖杯か！

　あの神具にどう働きかければいいか。アテナはどのような対応を取る可能性が高いのか。今の護堂には全てが明快だった。

　これをどう使えば戦況を有利にできるかも、頭が勝手に考えてい

た。

なぜ、こんなものがアテナのなかに？

なぜ、こんなものの使い方をグィネヴィアは自分に？

疑惑がうずまく。しかし。

美しい石像と成りはてた祐ゆ理り、リリアナの姿が脳のう裏りに浮かんだ。ここでアテナを倒さなければ、彼女たちを救うことはできない。恵那も犠ぎ牲せいになるだろう。

——必ず勝つ。みんなを助けるためにも、必ずアテナをたたきのめす！

闘志が疑問の数々を蹴りとばした。前にいた恵那へ叫ぶ。

「細かいことは後まわしだ！　ここでケリをつける。清秋院、そいつを貸してくれ！」

「わかったッ。いいよ！」

護堂がアテナめがけて駆け出すのを見て、すぐに恵那は察してくれた。

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。愛刀を持ちかえて、その柄を駆けてくる護堂へ向けた。

それをつかんで、護堂は天叢雲劍を借り受けた。そのまま走る。決壊寸前のダムのごとく、ひたすら神力を高める女神へ。

その背後にいた九頭の黒蛇が護堂めがけて、一斉に食らいついてくる。

そこで天叢雲劍を前方に突き出した。

またの名を『草くさ薙なぎの劍つるぎ』ともいう神刀は、ひとりでに動いて蛇たちを斬り払ってくれた。後ろから見守る恵那が念じて、相棒を動かしてくれたのだ。

「冬の使者よ。凍いてつく双手をのばし、生のぬくもりを拭ぬぐい去れ！」

　その瞬間、アテナも言霊を誦しようし、権能を解き放った。

　女神を中心にブリザードが吹き荒れだす。

　ただの雪嵐ではない。地上の永久凍土をしのぐ冷たさで、冥府に吹き荒れる風だ。

　ふれるもの全てを凍りつかせ、そのまま打ち砕く魔風。その冷気は絶対零度にさえ等しいものかもしれない。

　デタラメに打たれ強いカンピオーネでも、耐えきれないはずだった。

「白き女王の骸むくろよ、今こそ我に力を！」

　護堂はためらわず、言霊を叫んだ。

　これこそ聖せい杯はい覚かく醒せいの呪文。地母神の命を吸い取る、魔性の言葉。

「ぬ——!?　なぜ、あなたにそれができる!?」

　ブリザードを放ちながら、アテナは驚きよう愕がくしていた。

　彼女の全身に、黄金の光がともる。

　まるで真夏の夜、死を間近にした蛍ほたるが放つような、淡い輝き。アテナの裡うちにひそむ神聖なる甕——聖杯が発するものだった。

　雪原ならぬ石原に、妖あやしき氷雪の嵐が吹き荒れる。

　同時に、黄金の光はまっすぐ上に吹きあがった。さながら屹きつ立りつする光の柱であった。

「いにしえの杯よ、今はいくさのさなかぞ！　おとなしくしているがいい！」

　雲へ届かんばかりに駆けあがった光の柱へ、アテナが命じた。

　今まで以上の集中力を割さいて、聖杯の働きを抑おさえにかかったのだ。この光が出つづければ、アテナの命も急速に失われるためだ。

光の柱は、その高さを半分ほどに減じた。

だが、それはブリザードを操るための集中力が割かれたことも意味していた。

「頼む、清秋院！　天叢雲！」

すばやく護堂は叫んだ。

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎには呪術・霊力を吸い取り、斬り払う力がある。

アテナの全力には通じまい。しかし、急なトラブルに集中が乱れたところを狙ねらい、ほんの十数秒、ブリザードを斬り裂くぐらいなら！

とっさの指示にも、恵那はよく応えてくれた。

後方から天叢雲劍に念を送り、アテナの神力を斬り裂かせる。

「な、に――？」

驚くアテナ。ブリザードを斬り裂いて得た、わずかな猶ゆう予よ。

神刀を放り捨て、護堂は『駱駝』の脚力にまかせてジャンプした。高々と宙に舞いあがり、そのまま跳び蹴り。さながら、天あま降くだる流星のごとく――。

空中より放った渾こん身しんのキックが、ついにアテナの左肩を抉えぐった！

「ぬ――うっ!?」

女神の肩を粉々に砕く感触が、足裏から伝わってきた。

さすがのアテナもコマのように転がり、吹っ飛んでいった。それなりのダメージをあたえたはず。このまま戦いの流れを引き寄せる！

決意して、護堂は身がまえた。

アテナの体から吹きあがる光は、ほとんど消えかかっていた。例

の聖杯はふたたび抑えられたのだろう。あれは相す撲もうでいえば猫だまし。ただの目くらましだ。

　同じ手はもう通用すまいと、護堂の計算からはとっくに外れていたのだが。

　いきなり、またもアテナから光が吹きあがった。

　天を突くように高々と。この勢いは、さっきの比ではない。

　一体、何が起こったんだ？　愕がく然ぜんとする護堂の前で、ほとばしる輝きは、石化した海原と海ほたるを金色に染めあげていった。

「ああああああああああ————————————ッ！」

　そして、アテナは苦く悶もんの叫びをあげた。

5

　人の暦こよみでいえば、だいぶ昔の物語になる。

　救世主と呼ばれた男が死んでから、五〇〇年以上もすぎた頃か。

　今日ではヨーロッパと呼ばれる地には、幾人もの魔王がひしめいていた。

　神を殺あやめ、聖なる権能を簒さん奪だつした者たち。ただ心のおもむくままに戦い、荒れ狂う神殺しの戦士。全人類のなかから、一時代にひとりでも出れば僥ぎよう倖こうという怪物である。

　しかし、稀まれにあるのだ。

　この者たちが幾人も顕あらわれ、覇はを競う末世のような時代が。

　魔王どものまわりには、不思議と人々が集まった。彼らを『王』と崇あがめ、仕つかえることを望んだのである。

ある『王』は騎馬の民たみを率ひきい、諸国の領土を劫ごう略りやくしつづけた。

ある『王』は純然たる狂戦士であったが、彼を慕したう勇ゆう猛もう残ざん忍にんな蛮ばん族ぞくどもに囲まれ、常に徒と党とうを組んでいた。

ある『王』は魔道を極め、帝都ローマの汚い路地裏に望んで居をかまえ、妖あやしき魔術師・神官・占星術師どもを支配した。

ある『王』はそうしたしがらみを疎うとみ、諸国を漂泊しながら蛮ばん勇ゆうを振るった。

そして、ある『王』はブリテンなる島を狩しゅ猟りよう場ばとしていた。

この島は当時、混乱のまっただなかにあった。本来の支配者は大帝国ローマであったが、すでに統治するのを諦あきらめており、内乱が絶えなかった。近隣の蛮族どもにも頻ひん繁ぱんに攻められた。

島の『王』は、宗主国ローマの武将であったという。

ブリテンを蛮族より守護せよと命めいを受け、わずかな兵と共に派は遣けんされたのである。

その任地で彼は神を殺め、魔王となった——。

島外より敵が侵入すれば、彼はすぐに迎え撃ち、勝利した。だが皆殺しにはせず、ふたたび侵攻するのを許した。内乱があれば、彼はすぐに鎮ちん圧あつした。だが首しゆ謀ぼう者しやどもは逃げるにまかせ、ふたたび内乱の芽めとなるのを許した。

まあ、おおむねその繰りかえしであった。

神をも殺める『王』は、狩りを何より愛していたのである。いちばんお気に入りの獲え物ものは、生きた人間。その嗜し好こうを満たすため、ブリテンの地でひたすら狩りを愉たのしんだ。

ゆえに、いにしえのブリテンは末世であった。この世の終わりであった。

戦乱に民も疲れはてたとき、彼が顕れた。

彼は狩猟好きの『王』に戦いを挑み、勝利した。また漂泊の『王』が戯たわむれにブリテンを襲い、狼ろう藉ぜきを尽くしたときも、みごと倒した。

まさに英雄。まさに勇士。

ブリテンの民は彼を慕したい、『勇者アルトス』と呼んだ。

そして、大陸の『王』たちも、魔王殺しの勇者に注目した。畏おそるべき大敵現る。ならば、己の手で殺めてくれよう……。

どのような史書にも記しるされぬ、死闘のはじまりであった。

のちに『勇者アルトス』の呼び名は Arthur へとわずかに響きを変え、歴史と伝説に足跡を残す。

彼こそが魔女王グィネヴィアの主、この世の最後に顕れる王であった。

「グィネヴィアの起源は、主あるじや小お父じ様と共に戦った女神。しかし、グィネヴィアにその頃の記憶はなく、主の偉業を昔語りでしか存じあげません」

極東の砂浜にたたずむ金髪の美少女。

その名はもちろん、神しん祖そグィネヴィアであった。

「うむ。だが、そなた――いや、先代のそなたは長き探索の果て、ついに主の分身であった神刀……その骸むくろを見つけ出した」

グィネヴィアの隣に立つ騎士が、重々しく言った。

ランスロット・デュ・ラックである。美び々びしい白き甲かつ冑ちゆうをまとい、兜かぶとの面めん頬ぽおは深く下ろして素顔を見せない。彼の手は一振りの長ちよう槍そうを握る。

神しん槍そうとして甦よみがえった、いにしえの剣エクスカリバーであった。

「そして、当代のグィネヴィアたるそなたは、主が眠る聖地に近づきつつある。見よ！」

　槍の穂先で、ランスロットは海原を示した。

　さまざまな神話、神秘、伝承が吹きだまる極東の島国。その砂浜より、白き軍神は眼前の海を指し示す。その方角では今、聖なる黄金の光がほとばしっていた。

　さながら、海に昇る太陽の輝き。

　聖せい杯はいが地じ母ぼ神しんから命を吸いあげるときに見られる光であった。

「若き神殺しは、そなたの企たくらみに乗り、アテナの持つ聖杯を覚かく醒せいさせた。無論、あのままではふたたび働きを抑おさえ込まれるであろうが」

「ええ。その前にグィネヴィアは、仕上げをしてご覧に入れます！」

　黄金の光を見み据すえて、呪力を高める。

「名高きグラアル、あなたの声を聞かせてちょうだい。白き女神の娘は七つの燭しよく台だいに火をともし、あなたの栄光を思い出しているわ」

　心に浮かんだイメージを、そのまま呪句に変え。

　グィネヴィアはごく自然に魔術をつむいだ。神祖とは、手足を操るのと同じように術を使う妖よう人じんなのだ。

　術が形になるまでの間に、黄金の光はだいぶ小さくなっていた。

　はじめは雲に届かんばかりの高さで、さながら光の柱だった。だが、柱はどんどん小さくなり、この浜からはもう見えない。それでも間に合った。

　アテナが完全に抑え込む前に、グィネヴィアは聖杯の存在を掴つかんだ。

「白き女神よ。御おん身みの裔すえにして御身そのものでもある娘

が請こい願います。聖なる杯さかずきと救世の神刀、ふたつの器うつわにふたたび絆きずなをあたえ給たまえ！」

　命を汲くむ杯と、星をも斬り裂く神刀の間に、ついに『路みち』をつなげた。

　目には見えぬ『路』を通して、聖杯の吸いあげたアテナの生命力が、ランスロットの持つ神槍エクスカリバーへ送り込まれる。

　このときアテナの体からは、以前に倍する光が吹き出したはずだ。

「うむ。これで何の躊ちよう躇ちよもなく神刀を振りかざせる」

　ランスロットは槍の穂先を天に突きつけた。

　白金プラチナ色の刃やいばが燦さん然ぜんときらめく。

「はい。聖杯と神刀をつなぐため、草くさ薙なぎさまの御力を利用させていただく。目もく論ろ見みが上う手まくいき、ホッといたしました」

　わずかな間ではあったが、若きカンピオーネが覚かく醒せいさせた聖杯。

　その波動をとらえ、存在をつかみ、即そつ興きようでエクスカリバーとリンクさせる。魔女王であればこそ成しえた秘術。みごとな神技であった。

「フ……そなたの読みが正しかったということだ」

　ランスロットは安あん堵どする被保護者に言った。

　兜かぶとさえなければ、微笑する軍神の顔が露あらわになったはずだ。

「彼奴きやつらは神をも殺めるほどの武もの人のふなれば。勝利するため、あらゆる武器を惜しまず使うであろう……。うなずける話ではないか」

「ええ、本当に。やはり神殺し、愚おろかなエピメテウスの落とし子！」

　侮ぶ蔑べつを込めてグィネヴィアはつぶやく。

　しかし、幼い美び貌ぼうはかすかな畏おそれでおののいていた。

「ですが、その愚かさゆえにあの方々は、我らの知ち謀ぼうもおよばぬ脅きょう威い、大敵となってしまうのですわね。なんと恐ろしい人たち！」

　愛いとし子ごの嘆たん声せいを聞きながら、ランスロットは砂浜を歩きだした。

　その先には白き神馬が待っている。彼に仕える神獣にして、共に戦野を駆ける友だ。

「娘よ、まつろわぬ身となった余があと幾年、幾百日そなたの傍そばにいられるかはわからぬ。だが、別れの日が来る前に、必ずそなたを主のもとへ導みちびくと、余は誓約する！」

　いつか訪れる別離。

　それこそがグィネヴィアとランスロットの危き惧ぐであった。

　神話に語られる正しき神の姿から外れ、ときに迷い、ときに狂い、ときに妄もう執しゅうに囚とらわれながら地上をさまようのが『まつろわぬ神』。

　全ての力を解き放つため、魔女王の守護者たるをやめた軍神。

　今はいい。千年を超える絆が、ランスロット・デュ・ラックをグィネヴィアの庇ひ護ご者しやたらしめている。しかし、いつか彼も『まつろわぬ神』の歪ゆがみに呑のみ込まれ、漂泊の旅をはじめるだろう。愛し子を置き去りにして。

　ともあれ、ランスロットは愛馬にうちまたがり、空へと駆け出した。

「いにしえの鋼はがねよ、我に力を。騒そう擾じょうの芽を刈り取る刃やいばとなり給たまえ」

　神刀を覚かく醒せいさせるため、空中で言こと霊だまを唱となえる。

この剣を動かすのは大地の精気。純度が高いほどいい。

荒涼たる砂漠よりも、肥ひ沃よくな広野の方が精気にあふれているのは言うまでもない。だが、最も望ましいのは母なる大地の女神が宿す命——。

「勇士の名誉をもって、余はここに神しん威いを示さん！」

エクスカリバーの白き穂先から、白金の光球が生まれた。

それはまるで、地上に墜おちた太陽のように鮮烈で、凄せい絶ぜつなまぶしさを持つ光だった。

白金色の太陽はそのまま天あま翔かける。

いくさ場へ。女神アテナが若き神殺しと立ち合う、決闘場へ。

「ぐ——ぬ……くう——ッ!!」

護ご堂どうと恵え那なの前で、女神アテナはもがき苦しんでいた。

美しい肢し体たいから黄金の光を放ちながら、石の海原の上をのたうちまわる。

その上半身は幼い童女。いつもの姿だった。

しかし、腰から下は蛇へびの胴だった。長い、恐ろしく長い蛇の体。これだけで十数メートルはあるだろう。蛇体を細かにおおうウロコは白銀色。半人半蛇の妖あやしき姿形となって、アテナは苦痛にあえぎ、のたうつ。

この異い形ぎようも女神の本質なのだろう。美少女であり大蛇でもある。

恐ろしく、おぞましい存在。だが神こう々ごうしく、美しい。その彼女が苦しんでいる。黄金に光り輝きながら蛇体をうねらせ、美び貌ぼうを歪ゆがませ、可か憐れんな声で苦く悶もんを吐き出している。

アテナから放たれる、金色の光。

最初は太陽にも等しいまぶしさで、直視できなかった。それもだいぶうすれ、もう目をそらす必要はない。だが、アテナのなかで聖杯が順調に動くのを護堂は感じていた。

大だい地ち母ぼ神しんは、その身に宿す聖杯によって——

蛭ひるに血を吸われるように、命を吸い取られている。

不死であるはずのアテナだが、このままならどこまでも衰弱していくはずだ。

「く……そうか、あの婢はした女めめ。聖杯を操る秘術、あなたに伝えていたのだな。このような仕掛けで妾わらわを陥おとしいれるとは、やってくれる！」

「やっぱりグィネヴィアとかいう魔女、あんたの知り合い……というか敵だったんだな」

アテナのうめきに、護堂はつぶやいた。

苦しむ女神を見ながら裏の事情を考えていたのだ。

「敵の敵は味方……じゃないな。俺は上う手まく利用されたわけだ」

「フッ……あなたも妾を討うつため、あの婢女の術を利用したであろう？　それでよく、欺あざむかれたような口を利きく……！」

半人半蛇のアテナは、不敵な笑みで美貌をいろどった。

そして、蛇体のうねりを止めさせる。銀のウロコにおおわれた胴はゆっくりと縮み、形を変えていった。人間の——少女の足に。

ふたたびアテナは、幼い美少女の形態を取ったのだ。

「まあよい。敵の弱きを突き、情けをかけずに斃たおす。これも戦士の流儀よ。あなたもすこしは成長したのだと、大目に見ようではないか……」

苦痛に苛さいなまれながら、寛大さを示し、笑みすら浮かべる。

　蛇の半身を人に戻したのは、アテナの意気か。窮きゅう境きょうだからこそ、女神として自みずからを可か憐れんに装うつもりなのだろう。

「だが、妾にはまだ残された時がある。最さい期ごまでつきあうがいい、草薙護堂！　追い詰められたアテナと立ち合う栄誉、あなたに授けてくれよう！」

「もうよせ！　これ以上やり合うつもりは、俺にはないぞ！」

　例の大おお鎌がまを呼び出したアテナに、護堂は叫んだ。

「今回はあんたにもいろいろ事情があったみたいだし、もうそんな体だぞ⁉　ケンカなんてできるかッ。おとなしくしていろ！」

　このままなら、不死のアテナも死に至るかもしれない。当然の降こう伏ふく勧かん告こくであった。

　だが、戦いをやめないのであれば、もう倒すしかない。少女の姿をした女神を。奇妙な縁で、幾度かふれあう機会のあった者を。

　あまり堂々とした勝ち方でもないし、グィネヴィアの思おも惑わくも気になる。

　だが、それはそれとして、倒さないわけにはいかない。これ以上アテナが暴れるなら、木き更さら津づどころか関東地方の全てが石になりかねない。

　どうする？　やるのか？　やらなきゃいけないのか？

　逡しゅん巡じゅんする護堂へ、アテナが大鎌を勇ましく振りあげた、その瞬間だった。

「王様、危ない！　上を見てッ。あれは——ものすごくヤバイよ！」

　恵那の叫びを聞いた。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを手に、ずっと待機していたのだ。

　空を見あげて、護堂は愕がく然ぜんとした。白金色に輝く光の球が飛来してくる。その輝かしさは、さながら地上に墜おちた恒こう星せいであった。

「救きゆう世せいの神しん刀とう！　妾の命数が尽きるのを待たず、この場で切り捨てるつもりか！」

　アテナが吐き捨てた直後。

　白金に輝く恒星より一筋の閃せん光こうが放たれ、石化した海面を襲う。

　大きく切り裂かれた。ただの一撃で、石の海面に溝が刻み込まれた。十数メートルもの長さで、深さも相当ありそうだ。

　なんという斬ざん撃げき！　ウルスラグナの『剣』と同じだ。神が操る武器なのだ。

　一刻も早く、あの恒星から離れなくては！

「先に逃げろ、清せい秋しゆう院いん！　俺もあとから行く！」

「うんっ。気をつけてね！」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こは、風のごとき速さで駆けていった。

　足手まといがいなければ、彼女の足なら安全圏に逃のがれられるだろう。

　だが、護堂は無理だ。あれが必要になるはず。それゆえの指示に、恵那はすぐ従ってくれた。迷う暇ひまはないと判断したのだ。

　一方、アテナは――

　己のまわりに闇やみのかたまりを出現させた。前にウルスラグナの『白馬』――太陽よりこぼれ落ちた焔ほのおを防いだのと同じ、闇の防護障しよう壁へきだろう。

　白き恒星より、ふたたび閃光が放たれた。アテナの闇へ降りかかる。

　なんと、暗黒色の障壁はその一撃を防いだものの、吹き飛ばされた。かつて『白馬』の火力さえ防いだ闇が！

　……それが攻撃のはじまりだった。

　白き恒星から、閃光がまた放たれる。しかし、一筋だけではな

い。

　幾筋、いや幾十筋もの閃光がまとめて乱射された。まさしく十と重え二は十た重え。白き閃光の刃が織りなす、必殺必滅の剣陣……！

　光のひとつが護堂の頭上に迫る。稲いな妻ずまのごとき速さだ。

　だが、その速さが逆に、ウルスラグナ第七の化身『鳳おおとり』を使わせてくれる。神速を得た護堂は、光の刃を避けようとした。

　どうやら神速は、稲妻と同等のスピードらしい。光速にはおよばない。

　白金色の恒星が放つ光線は、幸い護堂の神速でもギリギリ逃れることができた。ということは、電撃の一種なのかもしれない。

　ふと思ったが検証する余裕はない。とっとと逃げよう。そうしかけたときに見た。

　十重二十重の剣陣に、アテナが八つ裂きにされる寸前であるのを。

　さっき彼女を守った闇は、もうない。無防備だ。為なす術すべなく切り刻まれるだろう。

　——自じ業ごう自じ得とくだ。護堂は思った。

　いろいろ事情はあったようだが、今回これだけの騒ぎを起こし、人間社会に多大な迷惑をかけたのだ。それがなければ、ここで危険な目に遭あったりもしなかったはず。

　しかし、アテナの表情も目に入った。

　女神は雄お々おしく、決然と顔を上げ、白き恒星をにらんでいた。

　きっと彼女は、首を刎はねられる寸前でも同じ表情だろう。いにしえの太たい母ぼ神しん、神界の女王たる矜きよう恃じを胸に。

「くそ……何だって、そんな顔をするんだ？」

　ここで命を拾っても、どうせ『戦え』と迫ってくるだけだろう。

　放っておいた方がいい。祐ゆ理りにリリアナ、その他たくさんの人々も石化させられた。その行為への怒りもある。だが、聖杯なんて爆弾が体に埋まっていたのも事実で――

「余計な手間をかけさせやがって！」

　その速さ、閃せん電でんのごとし。

　護堂は『鳳』の神速を全開にして、駆け出した。女神の方へ。

　ギリギリまにあった。十重二十重と降りかかる光の剣陣がアテナを切り刻む前に、抱え込むことができた。そのまま全力疾走。

　一瞬ののち。護堂とアテナが駆け去ったあとの空間。

　閃光の剣は存分に荒れ狂い、無人となった石の海原を八つ裂きどころか千以上の破片となるまで、跡あと形かたもなく切り裂いた。

　かくして、白き恒星は目標を見失った。

　だが、地上の星はまた動きだした。逃げた獲え物ものを捜し出そうと、猟犬が匂においをたどるようにゆっくりと……。

　海ほたるへ一度戻り、木更津方面の連絡道路へ。

　木更津ジャンクションを抜けて、それから近くの海岸へ出る。

　アテナを抱えたまま、護堂が選んだ逃走コースである。しかし、光の剣を放つ白き恒星はまだ上空にとどまったままだ。

　しかも、護堂たちのいる砂浜へゆっくり向かってくる！

「あれだけの速さで走ったのに、俺たちの居場所がわかるのかよ……」

　護堂はうめいた。

　アテナを休ませるため、神速を中断したところだった。

「当たり前だ。救世の神刀より放たれた『剣』の星——あれが糧かてとするのは大地の精気。そして、今使っておるのは聖杯が妾より汲くみあげた至し純じゅんの精気……」

　つぶやいたのは、隣にいるアテナだった。

「妾の命を吸って、あの『剣』は動いておる。ならば、妾の居場所がわかるのは道理よな。この身にひそむ聖杯とあれはつながっているのだから！」

　色白の美び貌ぼうがいつもより、さらに白い。目の下に暗い影も落ちる。

　明らかにアテナは憔しょう悴すいしていた。

　しかし腰を下ろそうともせず、傲ごう然ぜんと白き恒星を睨ねめあげている。

「あれもグィネヴィアの道具なら、あいつも近くにいるはずだよな。居場所、わかるか？」

「……どうするつもりだ、草薙護堂？」

「あんたがそうなったのは自業自得だけど、俺のせいでもある。グィネヴィアを捜し出して、あの『剣』を止めさせる。手荒な真ま似ねをしなきゃいけないだろうけど、仕方ない」

　護堂は計画を語った。

　まだ心臓に痛みはない。『鳳』のタイムリミットまで余裕がある。

　居場所さえ迅じん速そくに突き止められれば、神速でひとっ走りして魔女のひとりくらい捕まえられるはずだ。他に強敵がいなければ、だが。

「何だと？　あなたは妾を助けるつもりか！」

「ペルセウスのときは、あんたに助けられた。借りを返す前に死なれたら困るんだよ」

　失笑されたが尚も言う護堂へ、アテナはかぶりを振ってみせた。

「あいかわらず甘いな……。それがいかに度しがたい隙すきとなるか、学ばぬと見える……」

　またもダメ出しの言葉。しかし、表情から険がうすれた。

　風にそよぐ春草のごとく、アテナは肩の力を抜いた。護堂へ向けるまなざしに、珍品を愛めでる好こう事ず家かめいた色が浮いていた。

「なかなかに面白き言いぐさだが、是非もなし。そのように悠ゆう長ちような策で、あれを止められるはずはなかろう」

　とつぶやき、アテナは白き恒星へ視線を転じた。

　もう『剣』を乱射してこない。護堂が神速を見せたせいだろう。迂う闊かつに斬りかかっても避けられるなら、じっくりと攻め、確実にしとめるつもりなのだ。

「とはいえ、このまま婢はした女めの奸かん計けいどおりに命を落とすのは、ちと腹立たしい。何より、あなたとの決着をつけずに死ぬのは、さらに腹立たしい」

「まだ俺と戦うつもりかよ……」

「無論だ。それを為なさなければ、妾はアテナではない。だが——」

　つぶやく女神の手に、忽こつ然ぜんと鏡が顕あらわれた。

　化粧する際に女性が使うような、小さな手鏡だった。

「アテナとしての生に、わずかな瑕か瑾きんを加えてもよいと思うようになった。妾は不死者にふさわしき流儀で、悠久の生が尽きるのを待つつもりであった。だが今すこし、地上に在ありつづけるために小細工を弄ろうそう」

　そう言って、アテナは鏡を見つめた。

　すると、この世ならぬ美しさの幼女は、唐とう突とつに美しい石像となった。蛇女神はメドゥサの邪視を、鏡によって己へ向けたのだ！

しかも、空に浮かぶ白き恒星まで、いきなり消え失せた。

——そうか。護堂は理解した。

石化の呪じゅ縛ばくは、かりそめの死をもたらす力。アテナが仮死状態となり、自らの生命活動を停止させた。だから、聖杯は命を吸うことができなくなった。あの『剣』も動力源を失い、維い持じできなくなったのだろう。

最後にアテナは、グィネヴィアの陰いん謀ぼうにみごと報復してのけた。

しかし、草薙護堂はどうしたらよいのか。神祖、アテナ、石化した街や施設、石化した人々、犠牲になった祐理とリリアナ——。

護堂はいらだちながら、これからのことを思った。

第５章　その剣を振りおろす先は

1

「今回の事件、被害の規模は無茶苦茶に壮大ですし、後始末や情報操作がすごく厄やつ介かいなのはたしかですが」

　沙さ耶やの宮みや馨かおるは、いつもどおり明めい晰せきな口調で護ご堂どうに言った。

　木き更さら津づ市内の砂浜。数時間前、アテナが自みずから石像となった場所でだ。

「ある意味では、すごくシンプルに解決できるケースでもあります。あとは護堂さんのお心次第といいますか」

　砂浜からは、夕焼けでオレンジ色に染まる海原が見渡せる。

　その情景のなかに美ア少テ女ナの石像がぽつねんと立っている。この世ならぬ精せい緻ちな美び貌ぼうは、いかなる芸術家にも再現できまい。また、幼いながらも傲ごう然ぜんと胸をそらして示す、女神の誇り。これを真ま似ねできる少女もいないだろう。

　美しき石像をのぞけば、馨と護堂しかいない。

　この海岸一帯は、正せい史し編へん纂さん委員会によって封ふう鎖さされたのだ。一般人は入出不能だった。

「俺の心、ですか？」

「ええ。どんな神様が起こした不思議現象か、明確にわかっているんです。明日になって丸一日が過ぎたら、また『剣』の言こと霊だ

まを使えばいいんですよ。たとえば恵え那ななら、アテナについての知識もご教示できますし」

「清せい秋しゆう院いんが？」

「そういう備えも必要かなと思いまして。数カ月前から、媛ひめ巫み女こたちには西の神様たちも勉強するようにと通達してあるんです。もちろん全てをフォローできるわけではありませんが、アテナのようなビッグネームなら問題ないでしょう」

　さらりと馨は語った。あいかわらず手て際ぎわがいい。

　媛巫女としてだけでなく、組織の運営者、戦略家としても抜きんでる才人なのだ。

「アテナは浮うき島しまの埋め立て地からアクアライン、海ほたるに至るまでをまるっと石に変えましたが、破壊はしなかった。これは本当に幸運だったといえます。護堂さんの権能なら、アテナの力を切り裂く『剣』であの一帯を一ひと撫なですれば、全すべてをもとに戻せます」

　そう。物も人も、その他の動植物も。

　祐ゆ理りもリリアナも、石化した全てをもとどおりに。

　今、正史編纂委員会は総力をあげて情報操作、被害地域の封鎖に奔ほん走そう中ちゆうらしい。

　現在は全ての情報を統制し、マスコミにも詳しい報道を禁止している。その間に、川かわ崎さき近辺にて起きた有毒ガス散布未み遂すい……というニュースソースを捏ねつ造ぞう。

　各種メディアで喧けん伝でんして、デタラメな事実を隠す準備の最中だとか。

　最大の懸けん案あんは、石化被害者の家族への対応だそうだ。何しろ、帰宅しないどころか連絡もよこさないのだ。近しい人々は当然心配し、何らかの行動を起こすだろう。

　迅じん速そくに解決できるなら、そうすべきなのだ。

　元気になったリリアナと祐理に、護堂も早く再会したかった。

　だが、しかし。

「このような状況なので、ぜひ護堂さんのご協力をいただきたく思っています。ご快かい諾だくいただけると本当に助かります。さらに言うなら、石化被害を破るついでに、石になって無防備なアテナもいっしょに切り捨てれば、再発の芽もなくなり『めでたしめでたし』でしょうね」

　馨の要請にも、考え込んでしまう護堂であった。

　そうだ。ついでにアテナを倒せば、本当に万事解決となる。

　だというのに、護堂はずっとここにいる。アテナが石像となったあとから、この砂浜にずっと、もう数時間もいるのだ。

　すさまじい威力を示した、白き『剣』の恒こう星せい——。

　あれを操ったグィネヴィアが、ふたたびアテナを狙ねらうかもしれないと考えて。

　これだけの被害を人間社会にあたえた女神である。見捨てたとしても、どこからも苦情など出ないだろうに。

　時計の針はさらに進み、夜になった。

　護堂はまだアテナの石像と共に、あの海岸にいる。

　さっき甘あま粕かすから電話があり、あとで恵那が差し入れを持っていくと報しらせてくれた。きっと、護堂が何かで悩んでいると察しはつけているだろう。

　だが、そこには一切ふれなかった。

　カンピオーネの決断を尊重するつもりなのか。それとも、何を悩んでいるのか理解できないので、放っておくつもりなのか。後者でも無理はないと思う。

　何しろ護堂自身、どうしてアテナのことが気にかかるのか、説明できないのだ。

「こいつ……やっぱり、死にかけていたのか？」

　グィネヴィアの暗あん躍やく。聖せい杯はいの件。さまざまなアテナの言動。もろもろ考慮すると、そういう結論に達してしまう。

　初冬の砂浜。冷たい潮風を浴びる妖あやしの像。

　姿形こそ一一、二歳の少女だが、無邪気でかわいい女の子には見えない。

　そのように非力でも、人じん畜ちく無む害がいでもない。いと高き天空と、豊ほう穣じようなる大地、そして暗き冥めい界かいを統すべる三界の女王。誇り高き女神。

　死を前にした彼女が、敢あえて護堂を訪ねてきたのなら——。

「何だって、こいつはそんな真ま似ねを……」

　想像はできたが、当たっているかどうか。このカルチャーギャップを埋めるのは、独力では難しいかもしれない。なんとなく携帯電話を取りだす。

　青せい銅どう器き～鉄器文明時代の戦士で女王様。その脳内を理解できそうなヤツがいい。

　となると、やはりあいつか。

「冗談じゃないっ。あのアホとこんな話をしてたまるか！」

　友人知ち己きのなかで、最も現代人らしからぬ思考をする青年。

　奇き天て烈れつな剣の申し子。神殺しの騎士。

　無視したいし忘れたいのに、草くさ薙なぎ護堂の敵てき愾がい心しんを奇妙なほど刺激する。なんとなく意識せずにはいられない。あいつは現代に順応したバイキングの戦士みたいなものだが、話し相手には向かない。考え直そう。

　というわけで、護堂はべつの人物と話すことにした。

　イタリアへの国際電話。今は午後の六時で、向こうとの時差は八時間。遅く起きた朝というところだ。起きているか微妙だが——

『どうしたの護堂？　わたしがいないさびしさに、いよいよ耐えかねたのかしら？』

　すぐエリカ・ブランデッリにつながった。彼女にしては早起きしていたようだ。

　寝起きのときとはちがう、きびきびした口調だった。

「べつにおまえがいなくても、ちゃんと元気にやっている。妙な創作はするな」

『リリィじゃあるまいし、そんなことしないわ。わたしという太陽を失った人間がどんな感情を抱くか、ちょっと想像して、言ってみただけよ』

　あいかわらずの自信と覇は気きに、護堂は苦笑いした。

「それは置いといてだな。こっちは結構、こみいったことになっている」

『…………ふうん。本当にこみいってるようね』

　かいつまんで説明すると、エリカはあっさり言った。

　そして、こんな言葉まで平然と付け加えた。

『まあ、迷っている時点で、あなたの心はもう決まったようなものよね。好きにやっていなさい。あとは合流次第、わたしがいいようにフォローしてあげるから』

「俺の心が決まっているだって？」

　いや。どうしたらいいのか曖あい昧まいだから、人と話をしたくなったのだが。

　しかし、エリカはさらにあっさりと言う。

『わたしの知る草薙護堂はね。何者かを倒そうと思ったときは、一瞬の躊ちゆう躇ちよもなく行動に移す人よ。ええ、現代の、それも平和な日本で生まれ育った人間とは思えないほど果断というか、ためらわない人よね』

「俺はれっきとした現代文明人だし、平和主義者だ。変な描写はよせ」

『どうかしら？　わたし、ときどき思うの。護堂ってば、文明にかぶれた当初の遊ゆう牧ぼく騎き馬ば民みん族ぞくみたいだわって。平和なときは文明人らしくしているけど、戦いになったら容よう赦しゃないし、即断即決だし、根無し草みたいな生活にもすぐ順応しそうだし』

　エリカのヤツ、何て言いぐさだ。護堂は憤ふん慨がいした。

　それではある男について自分が考えたのと、大差ない人物評ではないか！

『よかったら、中国やヨーロッパ諸国を席せつ巻けんした騎馬の民たみモンゴル族の軍団と、あなたの行動の類るい似じ性せいを指摘してあげましょうか？　きっと、そうした方が護堂も自分について理解できるでしょうし……』

「余計なお世話だ。でも、迷った時点で心は定まっている、か」

　現代人らしくないという評価は聞き流したが、こちらは心に引っかかった。

「おまえ、いつ頃もどってくるんだ？」

『ある人の許しを得なくてはいけないから、すぐには飛行機に乗れないのだけど。そういう状況なら、できるだけ早く日本へ帰るわ。そちらへ合流したら、あとのことはどうにかしてあげる。あなたの好きなように戦いなさい』

　そうか。護堂は強くうなずき、エリカとの電話を終えた。

　べつに、すぐ応援に来てくれるわけではない。だが何の不安も、後こう顧この憂うれいもなく、背中を完全に預けきれる相棒が帰ってくる。

　だったら、本当に俺は好き勝手にやれる——。

　そう思うと、自然と考えがまとまってきた。祐理とリリアナはあんな目に遭あわされた。必ず助ける。石化によるたくさんの被害もどうにかしたい。あとはアテナ。あの厄やっ介かいな女神さまにも

因いん果がをふくめてやらなければ。

　誰かのために誰かを捨てる。それは草薙護堂のやり方ではない。

　俺は、俺の流儀をどこまでも押し通すのだ。

2

「王様、おまたせ！」

　恵え那なが海岸にやってきたのは、エリカと電話した三〇分後だ。

　どこかの学校の制服を着て、日本刀入りの布袋を肩にかけるのはいつもどおり。だが、食料を入れたコンビニ袋、寝袋などのアウトドアグッズも持参していた。

「……いろいろ持ってきたな」

「もしかして、ここで夜明かしするつもりかなって思って、念のため。一応、甘あま粕かすさんが近くに宿も手配したってさ」

　目を丸くする護ご堂どうに語った恵那は、荷物一式を軽々と砂浜におろした。

　武芸で鍛きたえ、山を駆けまわるせいか、かなり足腰が強いようだ。

「その辺をどうしようかって考え出したところだから、ありがたい。悪いな」

「いいよいいよ。じゃあ早速、ごはんにしようか」

　と言って、恵那はそこらに落ちている木の枝を集めだした。

　海水に濡れていない、乾いたものを選んでいるようだ。媛ひめ巫み女この意図に気づき、護堂も同じことをはじめた。

　数分後。ふたりで集めた木の枝や紙切れに、恵那がライターで火

をつけた。

　たき火のできあがりだ。夜よ目めが利きくので、明かりがなくとも不自由しないが、だいぶ冷え込んできている。暖だんを取れるのはありがたい。

「清せい秋しゅう院いんって、たしかタバコ吸わないよな？」

「うん。でもライターとかマッチって、いろいろ便利だしね。持ち歩いてるんだ」

　たしかに、アウトドアでは何かとお世話になる道具だ。

　自然児らしい回答をした恵那は、コンビニで購入したミネラルウォーターをアウトドア用の小さなヤカンに入れ、火にかけて湯を沸かす。

　カップ麺めんもふたつ取り出した。

　油揚げの入ったきつねうどん。かき揚げをあとから乗せるたぬきそば。

　あとはカツサンドにＢＬＴサンド。ホットドッグにチーズバーガー。鮭さけ・たらこ・昆こん布ぶ・梅などのおにぎり。コンビニの棚から、適当に選んだとおぼしき品々だった。

「こういうの、外で食べると結構うまいよな」

「うん。街はいいよねー、食糧の調達がかんたんで。山のなかだと、食材を集めたあとも準備で大変だしさ」

　たき火を囲みながら、差し向かいで食事をはじめる。

　かなり空腹だったので、護堂は遠慮なくたいらげていった。

　わざとらしいほど昆布の旨うまみが強い、カップ麺のつゆ。疲れた体には、この味が染みいるようにうまい。恵那もおいしそうに口へ運ぶ。

　この手のジャンクフードに、まったく抵抗がないようだ。

　人里にいる間は清秋院家令嬢、深しん窓そうの大やまと和撫子な

でしことして育てられたそうだが……。

「こういうのはたまにやる方だけど、ひさしぶりに山とか行きたくなったな」

　アウトドア好きな友人たちとの旅行を、護堂は思い出した。

　恵那とふたりでいると、男友達とのつきあいのようだ。女子といっしょにいるのにも慣れてきたが、ときどき気疲れを覚える。

　この自然児が相手だと、それを感じないのが不思議だった。

「王様も山ごもりとかするの？　じゃあ、恵那といっしょに出かけようよ。今度さ、羽う黒こく山さんの霊場に登るつもりなんだ。地元の修しゆ験げん者じやさんでも、かなり慣れた人しか行かないところ。すごい難所なんだって。面白そうだよ」

「……俺とおまえじゃ、たぶん『山』のレベルが全然ちがうぞ」

　死への片道切符を渡されるのと、大差ない勧誘かもしれない。

　あっけらかんと言う恵那に、護堂は苦笑した。

「行くなら、もっと難易度の低いところを選んでくれ。それこそ、万ま里り谷やあたりでも登れそうな、初心者向けの山がいい」

「……祐ゆ理りでも？」

「ああ。次に遊びに行くなら、万里谷やリリアナもいっしょだ」

　護堂は言い切った。

　彼女たちがいれば、コンビニフードばかりの食事にはなるまい。

　手の込んだアウトドア料理を作ってくれるかもしれない。まあ、今日のように適当な食事も実はかなり楽しいのだが、やはり祐理とリリアナもいる席にはふさわしくないだろう。

　というか、たぶん体に悪いからと許してくれないような……。

　その手の食品にふくまれる添加物やトランス脂し肪ぼう酸さんの有害性について熱弁するリリアナを、護堂は思い出した。

「明日、あいつらを助けるぞ。手伝え、清秋院」

「もちろんッ。まかせてよ！」

　元気のよい媛巫女の声を聞きながら、護堂は考えた。

　あのふたりを、そして他の人々も助ける。それは決定事項だ。あとの問題は、どうやって傍はた迷めい惑わくな女神さまの始末をつけるか。一晩かけて、頭を悩ませるとしよう……。

　ひとりうなずき、護堂は後片づけをしようとした。

　ゴミを入れようとコンビニ袋を取ったところで、それに気づいた。

「何だ、これ？」

　紙切れが一枚、袋に入っていたのだ。

　短い英文が記しるされていた。乱暴な筆記体で『Watch out,Here comes snatcher!』と。

「盗ぬすっ人とに気をつけろ……って意味だよな。どこで入れられたんだ？」

「術で送ってきた——ううん、きっとちがうはず」

　手紙をにらみながら、媛巫女は言った。

　そういえば、エリカもたまに使う。投とう函かんの術というらしい。任意の人物のもとへ、書状を送り届ける便利な魔術だ。

　恵那も前に、護堂の机に手紙を送ってきた。同じ術を使えるのだろう。

「術を使われた気配……全然感じなかったもの。たぶん、恵那がここへ来るまでの間に、誰かが入れたんだと思う。ごはんを食べている間にやられたのかもしれないけど……」

「何だって？」

　護堂は心の底から驚いた。

　草薙護堂はともかく、清秋院恵那の目を盗む――。

　そんな芸当、誰にできるというのだ？　野生の獣けものじみた鋭敏さを持つ、太た刀ちの媛巫女に一切気づかせない。まさに神技だ！

　恵那も衝撃を覚えたようだ。腹立たしげに手紙を見つめている。

　それはともかく『気をつけろ』。一体、何に？

　ここで護堂は思い当たった。そういえば、あれをすっかり忘れていた。

　携帯電話を取り出し、甘粕へかける。つながらない。まさか、やられたのか。そのまま数分ほど彼の身を案じていたら――

「いやいや。ストーカーをまくのに、ひどく手間取りましたよ。ところで、お電話をいただいたようですね。何かありましたか？」

「甘粕さん！　無事でしたか!?」

　危き惧ぐした直後に甘粕冬とう馬まの声を聞き、護堂は安あん堵どした。

　正せい史し編へん纂さん委員会のエージェントは、くたびれた背広姿で忽こつ然ぜんと砂浜に現れ、こちらへ歩いてくるところだった。

　さすが忍者。みごとな神しん出しゆつ鬼き没ぼつぶりだ。

「もしかして、あのグィネヴィアって魔女が出たの？」

「ご名答ですよ、恵那さん。あの気配はまちがいなく、例のお嬢さまかと。使える限りの術を使いまくって、必死にここまで逃げてきました」

　恵那に問われて、甘粕は疲れた表情で言う。

　そして、背広のポケットから天あま之の逆さか鉾ほこ――例の神具を取り出した。

「やっぱりこれ、草薙さんに預かっていただきたいのですが……。

神しん祖そなんてトンデモ魔法使いから逃げつづけるの、ちょっと私には荷が重いと思うんですよねェ……」

「いえ。すいませんが、もうしばらくお願いします」

　気がかりは多いし、甘粕に面倒事を押しつけたままなのも心苦しい。

　だが、護堂はぺこりと頭を下げた。

「万里谷も言っていたじゃないですか。この石とアテナは近づけない方がいいって。こいつ、今は石像だから大丈夫そうですけど、そうじゃなくなったらヤバそうですからね」

「……どういうことです？」

「……王様、やっぱり」

　怪け訝げんそうな甘粕。逆に察してくれた様子の恵那。

　このふたりに、そして石化したアテナに、護堂はきっぱりと告げた。

「石になったみんなを助けるのはもちろんですけど、俺はこいつとも決着を——どういう形になるかはまだわかりませんけど、とにかく何かケリをつけなきゃいけません。だから、また大変なことになると思いますが……勘かん弁べんしてください」

　アテナとしての生に瑕か瑾きんを加えてもよいと、女神さまは言った。

　大おお仰ぎような言いぐさだと思う。しかし、だったら草薙護堂も、文明人の看板をすこしだけ返上してやってもいい。本当にすこしだけなら。

　甘粕は「こりゃ大変だ」と天を仰あおぎ、それから一礼して恭きよう順じゆんの意を示した。

　恵那はこくりと、全てを受け容いれるようにうなずいた。

　そして護堂は、魔王カンピオーネらしい自みずからの宣言に自じ己こ嫌けん悪おを感じて、頭をかきむしりたくなった。

「とは言ったけど、具体的にどうするかを詰めなきゃいけないんだよな」

　深夜になりつつある時間帯。

　あれこれ考えた末に、護堂はひとりごとをつぶやいた。

「アテナの石化は俺の剣で解けるだろうから、問題は聖せい杯はいの方か……」

　海沿いにある民宿、その二階の一室。甘粕が手配してくれた宿だ。明日はきっとハードになる。ありがたく休ませてもらうことにした。

　この民宿は、例の海岸を見渡せる場所に建っている。

　アテナに何かあったときは、すぐ対応できる。窓の外はすぐに海。石となった女神が雄おゝおしく立ち尽くす、冬の砂浜だ。ここを地元警察と委員会スタッフが封鎖している。

　異状があったら、すぐ護堂の携帯を鳴らす取り決めだ。

　ちなみに、この宿は警察関係者で使用するからと方便を使い、借り切ってある。宿の切り盛りをする家族にも、口実を設もうけて無理を言い、よそへ行ってもらったそうだ。

　宿にいるのは草薙護堂だけであった。

　もう夜の一一時。だが、アテナとの『ケリのつけ方』を考えなければ……。護堂は明かりもつけないまま窓辺に立ち、思案をつづけた。

　光は窓から差し込む月と星、街灯の明かり程度。夜目も利きくので、これで十分だ。

　ガチャリ。部屋のドアノブがまわり、誰かが入ってきた。

「王様、起きてる？」

　恵那だった。だが、衣装を見て護堂は驚いた。

「どうしたんだ清秋院、その格好？」

「あ、うん。これから寝るわけだし、着替えた方がいいかなって思って」

　珍しく歯切れが悪い恵那。

　いつもの制服姿ではなく、巫み女こ装しよう束ぞくだった。清らかな白びやく衣えにあざやかな緋ひ袴ばかま。

　そういえば、恵那の巫女姿は斉せい天てん大たい聖せいとの戦いで見たきりだ。

「おまえ、パジャマの代わりに巫女さんの格好をするのか？」

　なんて罰ばち当あたりな……。遠い目をして護堂は言った。

　すると、媛巫女筆頭はあわてて訴える。

「いつもはしないよっ。でもさ、汚れた服で王様のところに来るの、恥ずかしかったし。他に持ってる服もなかったから、仕方なかったし」

「何を今さら。おまえ、いつもあの制服だったじゃないか」

「そう……だけど、今夜は夜よ這ばいだからさ」

　今、火星語を聞いたような。清秋院のヤツ、何て言った？

　一瞬、現実逃とう避ひする護堂だった。だが、もちろんこれで終わらない。

「特別な夜になるから、やっぱりきれいにしておきたいじゃん？　あ、王様、もう布ふ団とんしいてたんだ。じ、じゃあ、お邪魔するね」

　恥じらいながら、恵那は衝撃発言をした。

　しかも、しいておいた布団に歩み寄り、ちょこんと正座する。



「おおおおまえの言うことは無茶苦茶だ。筋が通ってない！」

「そんなことないよ」

　狼ろう狽ばいしつつもダメ出しすると、静かに言われてしまった。

　もう恵那は恥ずかしがっていない。毅き然ぜんとした表情。たしかな意志を感じさせる目。端正な美び貌ぼうは月明かりを浴び、白く輝いて見える。

「王様は明日、またアテナと戦うつもりなんでしょう？　石になったアテナを斬り捨てるんじゃなくて」

　そうだ。きちんとケリをつけるなら、そうする必要があるだろう。

　もう一度、真っ向勝負。雌し雄ゆうを決するというやつだ。

　もちろん他の選択肢もある。アテナから不死を奪った原因の聖杯。あれを抜き出す方法を探したり、活動停止させる方法を探したり……。

　だが、アテナが真に望むのは何かと考えるなら、やはり。

「ずっと迷ってたんでしょう？　たくさんの人がまた困るからって。でも、もう吹っ切れた——ううん、吹っ切ったんだよね。だったら、恵那も覚悟を見せないと」

　護堂はハッとした。恵那の可か憐れんさに改めて気づいたのだ。

　ずっと意識していなかったが、この媛巫女は祐理にも負けない黒髪の大和撫子で、しかも、とても魅惑的な少女なのだ。

　その事実を、唐突に突きつけられてしまった。

「もともとアテナの知識を教えるつもりだったからさ。今夜、王様と――その、いろいろするかなとは思ってたんだ。でも、王様が『まつろわぬ神』と命がけで戦うなら、それ以上のこともしておかなくちゃって。そう思って……」

「そ、それ以上⁉」

　切々と訴えられて尚、護ご堂どうは逃げ道を探した。

　きっと恵え那なは軽い気持ちで言っているはずだ。徹夜でゲームをするつもりかもしれない。

　ＵＮＯウ　ノや花札だろうか。トランプで神経衰弱、七並べという線も――。

「王様はとても強いけど、死んじゃうかもしれないわけだし……。出陣する前にさ、恵那の体で夜よ伽とぎして差しあげて、すこしでも英気を養って欲しいんだ。万一のことがあったときも、もしかしたら王様の忘れ形見が授さずかれるかもしれないでしょう？」

　かなり具体的に言われてしまった。

　これでは、『夜よ這ばい』の内容について誤解しようがない！

「ち、ちょっと落ち着け、清せい秋しゆう院いん。まず、そこにすわれ」

「落ち着いてるし、すわってるよ。とっくに」

「じ、じゃあ正座だ。正座して、俺の話をまじめに聞け」

「それもとっく。恵那はずっと正座してるし、まじめ。王様こそ、真剣にお話しして」

　逃げ道は全てふさがれる。正面突破を図る以外に活路はないか。

　護堂は恵那の正面に腰を下ろし、あぐらをかく。

「まあ、何だ……。おまえの気持ちはありがたいんだが、そういうことは結婚を前提にした男女でやるべきだと俺は思う。そこのところはどうだろう？」

冷静に、そして真しん摯しに問いかけた。

いつだって、まっすぐな誠意に勝る武器はないはずだ。たぶん。

「前から言ってるじゃん。恵那は都合のいい女でいいよって。形にはこだわらないからさ。それに、王様も約束してくれたでしょ？ ずっと俺のそばに置いてやるって」

口をとがらせて、恵那が反論する。まさにおっしゃるとおり。

もはや誠意ではなく、覚悟が問われる段階だった。

「あ、でも。そういえば、あのとき王様に言われたもんね。『都合のいい女でいい』とか言うなって。ゴメン、恵那の方こそ忘れてた」

あれは白はく昼ちゆう夢むだったのではないかと。

そうも思えてしまう一幕を、恵那は思い出したようだ。シュンとうなだれる。そしてうつむき、躊ちゆう躇ちよしながら、おずおずとつぶやく。

「だったらさ……。恵那はやっぱり、王様のお嫁さんになりたいな」

ストレートな意思表示。いつもの破は天てん荒こうさがウソのような恥じらい。

そんな恵那の姿に、護堂は動揺した。このままどうかなってしまいそうだ。まずい。

「やっぱり白しろ無む垢くとか着て、式もしてみたいな。……ダメ？」

「だだだダメなんかじゃ、もちろんないっ。な、ないんだけど、その、こういうのは俺たちにはまだ早いだろ！」

可か憐れんすぎる恵那から目をそらし、護堂は必死に言った。

もっと場数を踏んでいれば、冷静さを保てるのかもしれないが。もう限界だ。こんな娘とふたりきりで差し向かい。

しかも、うっかり同じ布ふ団とんにすわってしまった。

手をのばせば、彼女の体にふれられる。この距離感は非常にまずい。

エリカあたりが相手なら、こういう雰ふん囲い気きになるのをぎりぎりで避けるよう、普段から注意している（ダメなときもあるが）。だが、今回は恵那の不意打ちで、完かん璧ぺきにペースが乱れてしまった。

「もう……王様、どうして恵那に夜伽させてくれないの？」

頼むから、そんなに可愛かわいく拗すねないでくれ。

声を大にして訴えたいが、それは敗北宣言に等しい。陥かん落らく寸前であると教えてしまう。

「あ、そうか。そうだよね」

唐突に拗ねるのをやめ、恵那はふたたびうなだれた。

下を――布団を見ながら、その生地を人差し指で、所在なげにいじりだす。

「恵那なんて、そんなに可愛くないもんね。あんまり女の子っぽくないし、おしとやかでもないし。そういう気持ちになれないのも、仕方ないよね。ただでさえ王様のまわりには、きれいな娘が多いわけだしさ……」

「バカを言うな。そんなことあるか」

しょげる恵那へ、護堂は何も考えず、反射的に手をのばした。

彼女の白い手は布団をいじっている。その手を上から強く握りしめた。

「俺にはもったいないくらい、おまえはきれいだし、可愛いヤツだよ」

心から護堂は言った。まっすぐ恵那の顔と目を見つめながら。

「本当に？」

「ああ。ウソじゃない。信じてくれ」

「もう……そんなふうに言われたら、疑えないよ」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こはようやく微笑ほほえんで、おもむろに目を閉じた。

　誘うように顔を上げる。みごとな黒髪にふちどられた美び貌ぼうを向けてくれる。意味するところは明らかだった。

　――肚はらを決めなくてはダメだ。護堂は静かに考えた。

　一線を越える度胸が、単純に足りなかったのも事実。エリカや祐ゆ理り、リリアナ。他の娘たちのことが頭にちらついたのも事実。

　だが、恵那から真心を捧ささげられて、ようやく自覚できてきた。

　どうして踏ん切りがつかなかったのか。その理由。心の奥底にわだかまっている、荒々しい欲求と願望を。

　護堂はうなずき、俺はどうしたいのだと思い定めてから。

　改めて恵那へ顔を寄せ、唇くちびるを奪った。

　ふたりの唇が合わさり、睦むつみ合い、想おもいを重ね合う。

「じ、じゃあ王様、本当にふつつか者ですが、よろしくお願いします……」

　長い接せつ吻ぷんのあとで唇を放すと、恵那がささやいた。

　普段の奔ほん放ぽうさがウソのようにしおらしい。だが、白衣の襟えりをはだけようとする媛巫女に、護堂は改めてかぶりを振った。

「それはいいんだ。それはもうすこし待ってくれ」

「ええっ？　やっぱり恵那のこと、かわいくない……？」

「ちがう。そうじゃない。何て言うか……俺がおまえを――おまえたちの全部を苦もなく背負えるようになるまで、待ってもらえるか」

静かに告げる。心はもう乱れていない。

自分は、身近な少女たちに命を懸かけてついてこいと命じた男だ。相当にろくでもない、悪魔のような男なのだ。

だがその分、彼女たちの献けん身しんにふさわしいだけの戦いをする。

人類を代表して、神様たちの理り不ふ尽じんにも立ち向かい、戦ってやる。

そして、彼女たちが命だけでなく、純真な想いや人生までも草くさ薙なぎ護堂に捧ささげるというのなら、それにふさわしい意気を見せる。

今さらながら、護堂は強く己おのれに言い聞かせた。

「まだ学生だってのもあるけど。それより問題なのは、俺にはまだ、おまえにそこまでしてもらえるほどの器うつわはないと思うんだ。俺は——こんなところで自分を甘やかして、都合のいい状況に負けたくない」

「負けたく……ない？」

「ああ。悪いな。おまえの気持ちはありがたいんだけど、わがままを言わせてくれ」

清せい秋しゆう院いん恵那と、身も心も親密に暮らしていく。

あるいは、そこに他の娘たちも加わるのかもしれない。それはとても楽しい、草薙護堂にとって都合のいい、楽園のような日々になるだろう。

だが、そのぬるま湯は自分から牙きばを奪うかもしれない。

戦うために不可欠な、あらゆる苦難・窮きゆう境きよう・理不尽に立ち向かう闘争心——。

それを削そぎ落としてしまうかもしれない。

そんなのはごめんだ。いつ神様や、傍はた迷めい惑わくな魔王仲間と戦うかもわからないのに。

「おまえにそこまでされたら、俺は今までみたいに戦えなくなるかもしれない。だったら、まだ早い。俺に十分な器ができて、そういうことも余裕で受け容いれられるようになってからじゃないとダメだ」

　全ては戦うために。勝利するために。

　とんでもなく魅力的な女の子からの求愛。

　だが、より優先すべきことが俺にはある。だから、わがままを貫つらぬきとおす。

　まあ、もしかしたら。『守るべき者がいれば、もっと強くなれる』なんて、もっともらしく語るヤツがいるかもしれない。そんな理屈、知ったことじゃない。

　俺の敵は、その程度の強さで立ち向かえる相手ではないのだ。

　まっとうな社会生活に背を向け、ひたすら己を鍛きたえ抜き、神をも斬り裂くに至った男。

　草薙護堂を倒すためなら、人間世界を崩壊させてもかまわないという女神。

　そんな連中を相手に戦っていくのだから。

「……そっか。じゃあ、仕方ないね。待つよ、王様」

　こんなにバカげたわがままだというのに。

　なぜか恵那は微笑み、けなげなことを言ってくれた。

「そういうの、わかる。恵那もしょっちゅう山に入ったりして、心や体をきれいにしていないと、力を使えなくなっちゃうからね。結構大変だし、さびしいときもあるけど、今より弱くなるわけにはいかないもん」

　秘術・神がかりは神の御み霊たまと力を降ろす荒技だ。しかし、前に聞いた。

　この術を使うためには、身も心も研ぎ澄ませねばならない。

五ご臓ぞう六ろつ腑ぷを深しん山ざん幽ゆう谷こくの空気で満たし、精神を常に六ろつ根こん清しよう浄じようの境地へいざなえるようにしておく。それが使い手に課される義務だという。

俗ぞく世せの穢けがれ・浮き世の垢あかにまみれることを許されないのだ。

だから恵那は、ひんぱんに霊山へ分け入って身を清める。人里に一月以上留とどまることはないらしい。一〇代の女の子にあるまじき暮らしぶりだ。

だが、彼女は自みずからの意志で、この生き方を選んでいるのだ。

「安心して。恵那はこれでも、武ぶ門もんに生まれた女だからね」

清秋院家令嬢にして、太刀の媛巫女。

先祖には戦国大名もいるという大やまと和撫子なでしこは、快活に言った。

「いくさに出た夫が一〇年も帰ってこなくたって、その間ずっと待てるくらいの甲か斐い性しようはあるよ。だから、その逆だって、きっと大丈夫」

いつもどおりの笑顔で、けなげに言ってくれる。

この想おもいにいつか必ず応こたえなくてはと思う護堂へ、恵那は口ごもりながら、

「そ、それでね。待つのは全然大丈夫なんだけど」

こんなことを願い出た。

「とりあえずさ、キ、キスから先に行かなければ、いいんでしょ？　だったら、もっとたくさん……して、欲しいな」

上うわ目め遣づかいで護堂を見あげる恵那は、幼い子供のような可愛さだった。

「アテナと戦うなら、やっぱり『剣』は必要になるよ？　それに……切ないよ。ここから先に進むのはがまんできるけど、もっと

王様といっしょにいたい。ふれ合っていたいもん」

　さらに、目を潤うるませて訴える。くそ。

　護堂は心のなかで毒づいた。そこまで言われたら、堪こらえ切れないじゃないか！

　そのまま黙って、恵那にキスする。

　いや、そんなやさしいものではない。唇を強引にふさぐ。

「あ……ん。王様、強いよ。もっとやさしくして……」

　小声で懇こん願がんされたが、ダメだ。止まれない。

　恵那の体を荒々しく抱き寄せ、護堂は本格的にのめり込んでいった。

　やわらかな媛巫女の唇に、自分の唇をおおいかぶせる。こいつの吐き出すものを全て——吐と息いきも唾だ液えきも言葉も全て、俺のものにする。乱暴な口づけだった。

　唇の下で、もうひとつの唇がわななく。

　そのかすかな動きで、護堂はさらに昂たかぶった。

　空気を求めて、恵那が唇を開ける。だが、許さない。それよりもさらに大きく唇を開け、媛巫女の口をふさいでしまう。

　ふたりの口中で吐と息いきが混じり合い、唾液もひとつになる。

「ん……王様の意地悪ッ。恵那、窒ちつ息そくしちゃうよ……っ」

　涙目になりながら、文句をささやく。

　だが、それでも恵那は護堂とのキスから逃れようとしない。逆に、ひしと抱きついて可憐な唇を押しつけ、もっと好きにしてと無言で訴える。

　だから、護堂も遠慮しない。

　強引に舌をねじ込み、恵那の舌を探る。見つけた。

あらんかぎりの力を込めて、蛭ひるのようにうごめく恵那の舌に自分の舌を押しつけた。

絡からませる。ちろちろと舐なめまわす。それから大だい胆たんにねぶり、もてあそぶ。

「んんっ。王様、もっと……もっとしてくれなきゃ、ヤだっ」

もはや懇願だった。

珍しい恵那のわがまま。これで燃えないはずがない。

護堂は激しくキスをしながら、媛巫女筆頭の手を握った。ぎゅっと強く。彼女の存在をたしかめるように。向こうもすぐ握り返してくれた。

おたがいの右手と左手。

唇以外の場所でもつながっていたい。自然な心の動きによって、結び合わされた。

——イメージが駆け抜けたのは、このときだった。

草薙護堂が所有する剣は、ウルスラグナ最後の化身『戦士』が振るう智ち慧えの刃やいば。古き神々を切り裂き、まつろわす、言こと霊だまの剣。

今はその準備をするために、恵那と呪術のつながりを作ろうとしていた。

だが、もうひとつ。

そうだ。草薙護堂の剣はもうひとつ存在するのだ。

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。清秋院恵那と草薙護堂、どちらにとっても〝相棒〟である神刀が。

剣と劍。ふたつの刃やいば。ふたりの使い手。

そして、新たなる武器——。

この天てん啓けいをもたらしたのはカンピオーネの直感か？　それとも天叢雲劍か？

　どちらでもいい。戦うために使えるのなら、存分に使ってやる。

「清秋院。予定をすこし変えるぞ。これから俺たちの剣――あいつの新しい可能性を引きずり出せるか、ふたりで試すんだ」

「うん……っ。新しい力を手に入れよう。王様と恵那のふたりで」

　護堂のささやきに、恵那はすぐにうなずいた。

　やはり天叢雲剣と深く結びついた巫女。剣についての天てん啓けいを、彼女も得ていたのだ。

4

「ゆくへなく月に心のすみすみて――果てはいかにかならんとすらん……」

　恵え那なが紡つむぐ言こと霊だまを聞きながら、護ご堂どうは思い出す。

　神しん祖そグィネヴィアによって教えられた呪じゆ法ほう。石化する前に、リリアナが教えてくれた。おそらく『秘法伝授』で伝えられたのだと。

　知識のみを伝える『教授』で、魔術は教えられない。

　センスや心構えなど、知識ではない部分こそが重要だからだという。

　だが、『秘法伝授』にその制約はない。

　銀髪の騎士も使えない超高等魔術だそうだ。その術を使えるだけの呪じゆ力りよくが教わった者になければ無意味。そのうえ、数日しか覚えてられないらしいが。

「準備はできたよ……。はじめよっか」

　ささやいた恵那を引き寄せて、護堂は改めてキスをした。

　古い民宿の一室。ふたりで同じ布ふ団とんにすわっている。場所は変わっていないが、さっきまでとはちがう儀式のはじまりだった。

　恵那と唇くちびるを合わせながら、護堂はおもむろに語り出した。

「聖せい杯はいは、グィネヴィアって神祖が女神だった頃に創つくったものなんだ」

　さっき媛ひめ巫み女こが使ったのは『霊感共有』の術だ。

　いつもの知識を伝える術ではない。思い描いたイメージや微妙な感覚、胸に抱いた想いを共有できる呪術。

　幾人もの術者でひとつの術を完成させる——儀式魔術のときに用いられるという。

　術者の心がバラバラでは呪術が形にならないため、重ちよう宝ほうされるとか。

「こいつは、俺が昔エリカから預かったメダルと同じで、壊せないし滅びもしない。世界の理を体現する記号のようなものだ」

　そして、護堂が語るのは聖杯の由来。

　神殺しと太た刀ちの媛巫女。共に天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの使い手。ふたりで斬り裂くべき目標を再確認するために語り、キスを交わす。

　まだ『聖杯の呪法』は忘れていない。だから、教えることができた。

「女神だった頃のグィネヴィアは、そんなすごい代しろ物ものを創ったせいで、命のほとんどをすり減らしたらしい。不死の女神さま、大だい地ち母ぼ神しんだったのにな。で、死にかけの命を自分から望んで聖杯に捧ささげて、本当に死んだ」

「仕方ないよ……いくら神様でも、あれだけの神具だもの……」

　語りの合間、息をつく合間に。

恵那がせわしなく護堂の唇をついばむ。

今までの濃厚な接せつ吻ぷんとはちがう、軽いふれあい。しかし、あれだけ大胆に睦むつみ合ったあとのせいか、逆にそれが心地よく、新鮮だった。こうして彼女は、呪術が利きかないはずのカンピオーネに術をかけているのだ。

「そんな事情があるから、グィネヴィアは聖杯の申し子で、生みの親でもあるんだ。俺はあいつから、聖杯が大地母神の命を吸いあげる装置だって教わった。その機能を覚かく醒せいさせるやり方も教わった」

地母神の命を奪い、呪力としてプールする。

言ってしまえば、それだけが聖杯の機能である。白き恒こう星せい――『剣』を生み出すのは、べつの術か神力のはずだ。

「あの器うつわそのものは、斬って壊せなくても……」

「うん。その機能、働きだけなら斬れるかもしれないよね……」

ふたりで目的を確認したあと。

たがいをじっと見つめ合い、また軽いキスでふれあった。

草くさ薙なぎ護堂を利用するため、神祖グィネヴィアは知識と呪法をあたえた。

勝手にくれたものだ。こちらがそれを足がかりに目的を果たそうとしても、文句を言われる筋合いではない。好きなように使わせてもらう。

問題は、上う手まくいくかどうかだ。

聖杯の機能を切り裂く準備ができるかどうか。斬り裂いたあと、望むとおりの結果になるかどうか。だが、とにかくやってみなくては――。

「じゃあ、いくよ。恵那と王様、ふたりでいっしょに天あまの叢むら雲くもを使う……その感覚を掴つかまなきゃダメだもんね……」

恵那はつぶやいてから、舌を差し込んできた。

　おずおずと護堂の口内に入り、所在なさげに弱々しく動き、もうひとつの舌を探す。

　こういうときだけ、本当に引っ込み思案なんだな。

　護堂は苦笑して、ぎこちない恵那の舌を迎え撃ち、激しく吸いあげた。

「あン!?　ま、まだ慣れてないのに……意地悪しないで……」

　だが、恵那は逃げない。だから遠慮しない。

　向こうの舌を思うさまなぶったあとで、護堂は彼女の耳元でささやいた。

「こっちに——もっと近くに来い。呼吸を合わせにくい」

「あ……っ。う、うん。わかったから、あんまりいじめないでよぉ……」

　ついでに耳たぶを軽く噛かみ、舐なめたら、恵那は息もたえだえとなった。

　そのまま彼女は、ハァハァとすこし息を整えて。

　さらに身を寄せてきた。護堂はあぐらをかいていたのだが、その上にぺたんと腰を落としてすわりこむ。

　そのまま二本の足で、護堂の胴体をはさみ込んだ。

　これなら、ふたりで向き合ってすわりながら、さらに密着できる。

　いつも若わか鮎あゆのように跳ねまわる恵那の体。今、その躍動感は失われ、べったりと護堂の上半身に体重を預け、しなだれかかってくる。

　驚くほど豊かな恵那の乳房がつぶれ、みっしりとした量感を護堂は味わった。

　その体の熱さ、やわらかさも。肌のなめらかさも。

　清せい秋しゅう院いん恵那の全てを感じながら、彼女の背中に手

をまわす。強く抱きしめる。

「ふあっ……も、もっと力を込めていいよ。もっとギュッとして」

　痛そうに眉まゆをひそめながら、恵那は懇願した。

　拘束する力が強いほど、強く愛されていると思うのだろうか？　望むところだった。あらん限りの力で、護堂は抱きしめた。

　その手のなかで、恵那は幸せそうに恍こう惚こつと微笑ほほえむ。

「あ……王様の心臓、トクトクいってるの聞こえる」

「おまえのだってそうだ。息を切らしているみたいに、せわしないぞ」

　たがいの心音、胸の鼓動を肌で感じるほど、密着していた。それから見つめ合い、微笑みを交わし、またキスをする。

　ふたりで絡からみつくようにあぐらをかきながら、際限なく接せつ吻ぷんし合う。

　さらに呪術のつながりによって、護堂の昂たかぶりが恵那に、恵那の陶とう酔すいが護堂に伝わる。

「王様、わかる？　王様のなかで眠る天叢雲を、恵那が感じているの……？」

　キスとキスの合間にささやかれ、護堂はうなずいた。

　あの神刀、もとの使い手は太刀の媛巫女。現在の所有者よりも、彼女の方が明確に存在を把は握あくし、精密に使いこなせる。

　恵那の感覚が捉とらえた、護堂の右腕に宿る天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。その感覚が伝わってきた。

「天叢雲……ふたりでいっしょに使うような、そんなイメージを心に描いてみて。恵那の手に、王様の手を重ねて……つかんで、持ちあげるの……」

　今度はキスをしながら、唇を合わせながらのうわごと。

恵那の思い描いたイメージが伝わってくる。鞘さやに収まった天叢雲劍。その柄つかを掴むのは、媛巫女の白い手だ。護堂も思い浮かべた。

神刀を持つ恵那の手に、己の手を重ねて、ぐっと握りしめる。

「あ——んッ。だ、ダメだよ王様……それだと痛いから、もっとやさしく、ゆっくりやってみて……。お願い……」

朦もう朧ろうとしながら、恵那は苦痛を訴えた。

感覚とイメージを研とぎ澄すます術のせいで、恵那の脳はかなり過敏になっているようだ。もっと慎重にやらなければ——。

愛いとしい少女を苦しませないよう、護堂は最大限に神経を集中させた。

剣術自慢のくせに華きゃ奢しゃな手へ、まずゆっくりと掌てのひらを乗せ、それから白魚のような細い指へ自分の指を重ねた。

イメージのなかでの行為だが、なぜか汗で濡れた恵那の肌のなめらかさを感じ取れた。

ひどく愛いとおしい感触を、護堂はやさしく握り込んだ。

「そう……ゆっくり。あ、ちょっとズレてるよ……」

相方のナビにしたがい、イメージの手を操る。

重ねた指がすこしずれたので、慎重に重ねなおす。こういう作業に慣れてないので、暗がりを手探りで進むような感じだった。

「うん、そう……大丈夫……あ、ダメ。それだと力が強すぎる……またズレちゃ……ンッ。うん。うん。そう、そこ……いいよ、そのまま——！」

鞘に収まった天叢雲劍を、ついに恵那と共に掴んでみせた。

不器用に事を成なし遂とげた護堂に、涙目になった恵那が笑いかけてくる。彼女も慣れぬ共同作業に苦しんだのだろう。

愛おしさが込みあげてきた。すかさず唇を奪う。

　恵那の舌が、今度は積極的に迎え入れてくれた。彼女も感かん極きわまっているのだ。

　唾液が混ざり合い、ふたりの口元をびちょびちょに濡らす。想いと感覚が溶け合っていく。

　ここからは一いつ気き呵か成せい。ふたりで天叢雲劍を鞘から抜くイメージ。

　力を合わせて引き抜き、いっしょに振りおろす。完かん璧ぺきに息が合った。天叢雲劍を通して、護堂と恵那は新たに深い絆きずなを得たのだ。

　直後、周囲が一変した。ふたりのいた部屋が焔ほのおにつつまれたのだ。

5

　メラメラ燃えあがる紅ぐ蓮れんの焔で、民宿の部屋は埋め尽くされていた。

　火事、それも家屋全焼というレベルだ。おそろしく熱い。なのに、護ご堂どうと恵え那なのまわりだけは火に呑のまれていない。

　明らかに超自然の産物だ。そして、誰の仕し業わざかもはっきりしていた。

「火の……幻げん覚かくだよな？　あいつは何だってこんな真ま似ねを？」

「王様、あれ。恵那たちの前に出てきたからだよ」

　恵那に言われて、護堂は気づいた。

　いつのまにか天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが顕けん現げんしていた。床に突き立てられた三尺三寸五分の豪刀。ひなびた民宿の一室には不似合いなはずの勇姿だ。

　もっとも、焔が燃えあがる視覚効果のおかげで、かなり幻想的な光景ではあったが。

『ふん。すこしは己オレの使い方を学んだか』

　ついに護堂は、天叢雲劍の声をはっきりと聞いた。

　斉せい天てん大たい聖せいとの戦いでも耳にしたが、あのときよりも遥はるかに聞き取りやすい。

「恵那たちがいっしょに劍を使えるようになったから、出てきてくれたんだね？」

『ああ。この方がおぬしたちも話しやすかろう。己オレはこれでも、面倒見のよいやつなのだ』

　たしかに。ぶっきらぼうな答えに、護堂はうなずいた。

　自分を『相棒』と呼べと求めた神刀は、これまでさんざんお節せっ介かいを焼いてくれた。

「たしかに話しやすいっちゃ話しやすいけど……何で火なんだ？」

『おぬしたちは、新たな劍を鍛きたえようとしたのだぞ。劍の誕生に火はかかせぬもの』

　それでか。焔の幻げん覚かくを、護堂はしらけながら眺めた。

　こいつはまちがいなく派手好きだと確信する。『猪いのしし』と気が合うかもしれない。

『まあ、そんなことはいい。おぬしらふたりが合ごう力りきすることにより、己オレが助けてやれる領分もすこし広がった。その褒ほう美びだ。王よ、おぬしの求めに応こたえてくれよう』

　所有物のくせに、やたらと上からの物言い。

　さすがは『相棒』だ。あくまで立場は対等ということか。だが、護堂はそんなことを気にはしなかった。

「じゃあできるのか、あれを⁉」

『ああ。劍と剣をひとつに。二振りの刃をひとつに成さしめようで

はないか。だが、あまり期待はするな。相手は不ふ朽きゅう不ふ滅めつの神具。己オレの力もどこまで通じるか……』

　と、神刀は釘くぎを刺した。それでも護堂にはありがたい。

　恵那もうれしそうに微笑んだ。もしかしたら、彼女と神刀はずっとこんなふうに心を通わせていたのかもしれない。

「そういえば、おまえって昔からスサノオのじいさんといっしょだったんだよな？　あの天あま之の逆さか鉾ほこって、どういうものなんだ？」

　不意に思いついて、護堂は訊たずねた。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎはもうずっと長い間、かの老神の佩はい刀とうだったのだ。

『ああ、あれか。知らぬ。知ろうともしなかったゆえな』

「じゃあ、あのじいさんたち、どういうつもりで清せい秋しゅう院いんの質問にも答えないんだ？」

『それも知らぬ。気にもならん』

　にべもなく答えを重ねてから、神刀は吐き捨てた。

『そのようなこと訊きくな、問うな。己オレは劍、それも剣神の性に最も忠実なる一党だぞ？　我らは戦うことにのみ注力する。それ以外のもろもろは全て余よ所そ事ごと。刃の鋭さを鈍にぶらせる、無用の雑事に過ぎないのだ』

「ああ、前にもそんなこと教えてくれたよね、たしか」

　思い出したように恵那が言った。

「でも、斉せい天てん大たい聖せいのとき気になったんだけどさ。あのおサルさんはそういう感じじゃなかったよ？　戦う以外にも遊んだり、いたずらしたり」

『あやつは雑種なのだ、巫み女こよ。剣神以外の要素・神性も取り入れながら成立した、混こん淆こう神しんなのだ。最源流の系けい譜ふを継つぐ、我ら純血の《鋼はがね》とはちがう。ああいう輩や

からは、我らほど単純ではない。より複雑な気質と神格を持つようになる』

　なるほど。神様の出しゆつ自じにもいろいろあるものだ。

　感心する護堂へ、天叢雲劍はあいかわらず上から目線で告げた。

『では、王よ。己オレの助すけ太だ刀ちにふさわしい丈夫ますらおぶりを見せるがいい。地に属する女神などに敗れては、我ら剣神の沽こ券けんにかかわる！』

　天叢雲劍と、まぼろしの焔ほのお。どちらも忽こつ然ぜんと消え失せた。

　護堂と恵那はどうにか儀式を終えたのである。

　ちゅん、ちゅん。小鳥のさえずり。

　さわやかな朝の日差しが、窓から差し込んでいる。

　——よく寝たな。布ふ団とんのなかで護堂は思った。

　本格的な覚かく醒せいまで、あとほんのすこし。この時間がたまらなく心地よい。

　うすく目を開けて、部屋を眺める。

　あの民宿の一室だ。儀式を終えたあと、疲れ切っていた護堂はすぐに寝たのだ。

　枕まくら元もとの携帯電話を取り、着信をチェック。——ない。護堂は安あん堵どした。

　アテナの石像が立つ海岸では、何もなかったようだ。連絡はあったが寝すごすという失態も犯おかさずにすんだ。

　布団と人肌のぬくもりの心地よさを、護堂は改めて楽しんだ。

　夜どおし見張ってくれた警備陣に、申し訳なく思いながら。早く起きて、戦いの準備をしなくては。だが、このあたたかな肌は手放したくない……。

ん？　肌？　人肌？

急速に頭が覚醒へと向かう。護堂は掛け布団をはねのけた。

――隣で清秋院恵那が寝ていた。もしかして、いっしょに寝たのか!?

儀式のあとの記憶が曖あい昧まいだ。本当に疲れていたから、あっという間に眠ったのだろう。

しかも、恵那の格好。

太た刀ちの媛ひめ巫み女こは、巫女のくせに巫女装しよう束ぞくを脱いでいた。

布団のすぐそばに、白と紅の上下が脱ぎ散らかしてある。寝る前に脱いだのか、それとも寝ぼけて就寝後に脱いだのか。

ともかく、護堂の前に一いつ糸しまとわぬ恵那の裸体が横たわっている。

生まれたままの姿。つくべき部分にはたっぷりと肉がつき、ふくよかなくせに、それ以外はほっそりと引き締まった、奇跡のような肢し体たい。

中ちゆう禅ぜん寺じ湖この温泉でも見た、白い宝ほう玉ぎよくがすぐそこにあった。

護堂が寝ながらずっと抱き寄せ、そのぬくもりを愛めで、ときどき不作法にまさぐって愉たのしんでいたのは、これだったのか！

「……あ。王様、起きたんだ――きゃああっ！」

タイミング悪く、恵那が目覚めてしまった。

ぼんやり寝ぼけていたのは、ほんの一瞬。すぐ我に返り、掛け布団を引き寄せた。

朝の日差しに輝く裸体を隠す。らしくない、可愛かわいい悲鳴をあげながら。

「せ、清秋院……おまえもここで寝てたんだな……」

「う、うん。昨日は神がかりとかして、すごく疲れてたから……儀式のあと、すぐ寝ちゃったみたい。その辺のことはよく覚えてないけど」

　恵那は顔どころか、白い肌の全てを真っ赤にしていた。

　隠しきれていない肩や胸元、ふとももや素足を見れば、それは明らかだった。

「な、何かね。なんとなくだけど、儀式のあと王様とふたりして、バタンって布団に倒れ込んだ気がする。そのまま寝ちゃったみたい……」

「そ、そうか」

　ふたりとも赤面し、ぎこちない口調で会話をする。

「だ、だけどね、ちょっと気になるのは……着物を脱いだ記憶が恵那には全然ないんだよね……。もしかして、王様が脱がせてくれたの？」

「そそそそ、それはないっ。ないはず……だよな？　あれ？」

　護堂は愕がく然ぜんとした。

　まったく身に覚えはないが、恵那が自分で脱いだところも見ていない。

　だから、ちがうともそのとおりだとも断言できないのだ。もしかして俺、そんな狼ろう藉ぜきをしでかしたのか？

　衝撃に打ちのめされながら、護堂はよろよろと窓へ歩いた。

　向こうに見える砂浜。あいかわらず厳重な警備態勢が敷かれている。今日はいよいよ、アテナとの決着をつける日だった——。

第６章　雌雄を決する、その前に

1

　平へい安あんの御み代よを偲しのんだ寝しん殿でん造づくりの邸てい宅たくは、美しい庭園に面していた。

　配置を計算したうえで、さりげなく木立を植え、築つき山やまを盛ってある。池は舟遊びもできる広さで、島を三つ設もうけ、それぞれの間に朱しゅ塗ぬりの橋が架かかる。

　限られた土地のわずかな自然で、山さん紫し水すい明めいをよく体現していた。

　ここに住み、庭を愛めでるのはただひとり。

　瞳ひとみに愁うれいの陰をくゆらせる、傾けい城せいの佳か人じんのみであった。

　まとう衣ころもこそ十じゅう二に単ひとえだが、髪は深い亜あ麻ま色。瞳ひとみは玻は璃りの色。美び貌ぼうの彫りも深い。日本国の生まれではない証しよう左さである。

「よお。媛ひめも現うつし世よのゴタゴタに気づいたかい？」

　池のほとりで水面を見つめる媛に、声をかける者がいた。

「はい。『最後の王』に仕つかえる者どもが、ついにこの日ひの本もとこそ王の墓所であると気づいたようですね……」

　近づいてくる逞たくましい老人の方へ、玻璃の媛は体の向きを改めた。

媛の十二単よりも、彼の衣装はもっと古式である。白い筒つつ袖そでの衣きぬとゆるい褌はかまの組み合わせ。髪を左右に分け、耳のあたりで束ねれば、倭やまと建たけるの命みこともかくやという装いだ。

ただし、彼の頭はボサボサした蓬ほう髪はつのままだった。

「人の暦こよみで千年ほども眠らせてきたからなァ。潮しお時どきっちゃ潮時だともいえるわな。さすがにそろそろ、あのガキも目覚めようってもんさ」

老いた豪ごう傑けつはつまらなそうに言った。

玻璃の媛たちは、彼を御ご老ろう公こうと呼ぶ。その名は速ハヤ須ス佐サ之ノ男オノ命ミコト。かつて天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎをたずさえ、地上をさまよい歩いた『まつろわぬ神』だ。

今は幽かくり世よに住まいを移し、隠居した身であった。

さまざまなしがらみと地上を捨てて、ここで隠いん棲せいしている。それは媛も同じであった。だが、捨てたくとも捨てきれぬ縁えにしはある。

「結局、このようなところまで逃げてきても、あの方とわたくしはどこかでつながっているのかもしれませぬね……」

自然と、最後に見た彼の姿が思い出される。

秀しゆう麗れいなはずの顔立ちには、いつの頃からか歴戦の精せい悍かんさが錆さびのごとく広がっていた。そして、長き戦いへの倦うみと疲れが深く刻まれ――。

「仕方ねえさ。あんたらをそんな体にしたのは、あのガキだからな」

媛の憂うれいに、老神はフンと吐き捨てた。

「ま、ここまで来たら、しばらく高みの見物と洒落しやれ込もうぜ。オレらも隠居じじいらしく、現うつし世よのゴタゴタに知らぬ存ぜぬしてもいい頃合いだしな」

媛はうなずいた。そうだ。まず成り行きを見守ろう。

　死にゆく地じ母ぼ神しんアテナといかに決着をつけるか。その顚てん末まつで、草くさ薙なぎ王おうが『最後の王』を苦しめる器うつわか否いなか、わかるかもしれない。

　かの女神の心に、彼はいかに応こたえるだろう——？

　池の水面へ視線を注ぐ。それだけで地上の情景が映し出される。神しん祖そと呼ばれる女たちと同じく、彼女も息を吸うように魔術を操る者なのだ。

2

「マスコミ報道の規制は、今のところ全て上う手まくいっています」

　沙さ耶やの宮みや馨かおるは、小型ワンセグテレビを見ながら言った。

　バラエティ色の濃い、日曜朝の情報番組だ。四インチの画面では、何人かのコメンテーターがキャスターと談笑していた。

「川かわ崎さきの一部と東京湾アクアライン、ついでに海ほたるまで石化した……なんて大事件が発生中ですが、このように報道さえされなければ、国民の九九％はその事実を知らないままでいるわけです」

　千ち葉ば県木き更さら津づ市内。アテナの石像が立つ海岸。

　身支度と朝食を終えた護ご堂どうがここへ戻ってくると、すぐに馨もやってきた。

　さまざまな根回し、裏工作が一段落したので……とのことだった。

「ほんと、どの局もここら辺のニュースを流してないですね」

　護堂は感心しながら言った。

　戦いまでの時間つぶしにと、馨が持参してくれたワンセグテレビ。さっきから何度も局を変え、いろいろな番組をチェックしていたのだ。

　ちらりと、海の方にも視線を投げる。

　木更津の陸地から海へとのびる、東京湾アクアライン――。

　海ほたる周辺は荒こう涼りようたる石の宮殿と化している。

　しかも、川崎方面につながるトンネル内には、石となった自動車が数百台も停車中。

　車内にはやたらとリアルな石像も乗ったままだ。ドアも開かないため、乗員の救出もできないのだ。しかし、それらは遠目に見ただけではわからない。

「本来であれば、全ての局が特別報道番組を流してもおかしくない異変です。アテナ現るの情報を受けて、各方面へ事前に通達できていたのは大きかったですね。……被害地域がもうすこしズレて、羽はね田だ空港がやられていたらアウトだったかもしれませんが」

　馨の弁に、護堂はうなずいた。

　あそこは利用者・関係者の数が、アクアラインとはケタちがい。

　情報を隠いん蔽ぺいする難易度もぐんと上がったことだろう。

「ネットとかは大丈夫なんですか？」

「そちらもどうにか。近隣住民はだいぶ不審がっていますし、なかにはこの件を気にしてブログや掲示板で話題にしている人もいますが、何とかコントロールできています」

　馨はすらすらと教えてくれた。

　そういえば、前に甘あま粕かすが『いざとなればサーバーを云うん々ぬん』と、護堂にはよくわからない緊急時の電脳対策を語ってくれた。

　そちらの方面にも準備を怠おこたっていないのだろう。

「もっともらしい憶おく測そくや偽にせ情報は、すこし出まわっていますけどね。ぼくらが意図的に流したものもふくめて。まあ、決定的に真実に近づいた情報や、裏を取れるソースは皆無です。それに、何といってもアレですし」

「アレ？」

「真実をネット経由で世界に発信しても、かんたんには信じてもらえないと思いますよ。荒こう唐とう無む稽けいもいいところですからね」

　本当にそうだ。納得する護堂であった。

　直接話しても、正気を疑われるか、冗談と思われるかだろう。

　母・草くさ薙なぎ真ま世よが『一年後にマイケル・ジャクソンは甦よみがえり、全人類を救済する』と真顔で語る親しん戚せきを米軍海兵隊式カウンセリング合宿とやらへ送り込み、力ずくで社会復帰させたのは記憶に新しい。

　護堂が知る限り、最も破は天てん荒こうな一般人女性でさえそうなのだ。

「真実を知ろうとするなら、現場を訪れるに若しくはなし。ですが、ぼくら委員会の敷しいた封ふう鎖さ網もうをかいくぐれる手練だれは、堅かた気ぎの世界にはいないでしょう。今日の夜くらいまでは、この事件を隠しとおせるかと」

「たぶん、そこまではかからないはずです。すくなくとも、石になった人たちや物はすぐに戻せると思います」

「了解しました。救出の準備を急がせましょう。やはり『剣』で？」

　馨に問われて、護堂はかぶりを振った。

　やっぱりそう考えるよなと、納得しながら。今まで馨が口にした方法は全て正しい。何の苦労もなく事件を解決できる選択ばかりだ。

　アテナは石になっている間に斬り捨てればいい。

　アテナの石化は『剣』の言こと霊だまで解除してしまえばいい。

　馨ほど聡さとくない人間だって、彼女の正しさは理解できるはず。だが、草薙護堂には選べない。そうしたら、全ての欲求を満たせない。祐ゆ理りにリリアナ、その他の人々を助け、あいつの覚悟とやらにつきあう――。この身勝手な衝動を満足させられないからだ。

「『剣』はべつのことに使います。でも、石になっていた人たちを助ける準備は進めておいてください。たぶん上う手まくいきますから」

　まったく言い訳にならないが、護堂にも成算はあるのだ。一応。

　神々はいつだって、卑ひ怯きような行いはしなかった。すくなくとも自みずから意図しては。あれはおそらく、彼らが普通の人間をまったく眼中に入れないのと似た理由のはず。

　とはいえ、確証はない。

　敢あえてバクチを選ぶ己に、護堂は頭をかきむしりたくなった。

「全て仰おおせのままにいたしますよ、我が君。何なりとお申しつけください」

　馨はうやうやしく言った。宮中を仕切る上級貴族めいた優ゆう雅がさだった。

　垢あか抜ぬけた男装の麗れい人じんなので、尚なお更さらそれが際きわ立だつ。

「本当に、いつも迷惑かけてすいません……」

「魔王陛へい下かの勅ちよく命めいにしたがうのは、ぼくらの義務みたいなものです。お気になさらずに。それに、ぼく個人はかなりの見返りをいただいていますしね」

　見返りなど渡した覚えはないのだが。

　いぶかしむ護堂へ、馨はウインクしてみせた。

「ぼくの頭からは出てこない発想で、ぼくの立場では許されない行

動をされる。そんな護堂さんにご協力できるのは、得がたい娯楽ですよ。まあ、今回の件が楽しくなるかは祐理たちがどうなるかの顛てん末まつ次第ですが、もう今の時点でかなりドキドキしています」

　正せい史し編へん纂さん委員会の幹部は、にやりと笑った。

　一八歳の女性としては、驚異的にうすい胸を押さえながら。

「そういう裏がありますので、あなたの気まぐれにも専せん横おうにも、この身の才覚がつづく限りついていきましょう。無理難題はむしろ大歓迎です。ぼくがお役に立てる者だとアピールできるチャンスですからね」

　大魔王の幹部になるべく、売り込みをかける美び貌ぼうの悪魔。

　はたまた、ファウスト博士のもとに馳はせ参じたメフィストフェレス。

　そんな雰ふん囲い気きの麗人といて、護堂は天を仰あおいだ。自分の陣営はどんどんアナーキーな方向に充実していくような……。

「ぼくはいずれ委員会の長となり、この国の呪術界を管理すると決まっています。ただ、そういう仕事は上う手まくできるでしょうけど、柄がらじゃありません。自分たちの手で一から事業を興おこす……みたいな方が、ぼくの好みでして」

　四家の次期頭とう領りようであり、しかも媛ひめ巫み女こ。

　馨や恵那を取りまく血のしがらみは、想像していた以上に根深いのかもしれない。

「自分好みの生き方を引きずり寄せるために、あなたとのおつきあいは最大限に利用させていただきますよ。だから、変なご遠慮は無用です。……では、ぼくはこれにて。あとは一切をいいように取りはからいましょう」

「万ま里り谷やとリリアナのことも、よろしくお願いします」

　立ち去っていく馨に、護堂は頭を下げた。

　彼女たちは昨日のうちに海ほたるから救出され、この海岸近くの

病院に収容されている。もちろん委員会の息がかかった場所だ。

　天あま之の逆さか鉾ほこの隠し場所に近いため、その手の施設が多かったらしい。

「もちろんです。何が起きても揉もみ消してみせますから、存分にお戦いください」

　倫理的には問題のある、馨の激励。しかし、ありがたい言葉だ。

　彼女の後ろ姿が見えなくなってから、護堂はもうひとりの当事者と向き合った。

　――まつろわぬアテナ。自ら石となった女神。

　この一帯には、もう護堂と彼女しかいない。例の警備陣は海岸を離れ、この浜を取りまく町全体の封鎖にまわっている。住民には『有毒ガス散布未み遂すい……か？』の情報を明かし、昨夜から今朝の間に緊急避難させた。

　ある役目のために、恵那にもここを離れてもらった。

　準備は全て終えてある。護堂は心置きなく武器を抜いた。

「我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者なり。全ての敵と、全ての敵意を挫くじく者なり」

　勝利の神ウルスラグナの聖句。だが、これで終わらない。

「爰ここに須す佐さ之の男おの命みこと、国を取らんとて軍いくさを起こし、小さ蠅ばえなす一千の悪神を率そつす」

　スサノオの愛刀にまつわる聖句も唱える。

　ふたつの刃やいばをひとつにするために。言こと霊だまと神刀をひとつにするために。

「一千の剣を掘り立て、城じよう郭かくとして楯たて籠こもり給たもふ。是これ所いわ謂ゆる、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ也」

　天叢雲劍は、護堂が使うウルスラグナ十の化身を吸収できる。そ

して自らの神力と掛け合わせ、新たな力を発現させるのだ。

　かつて、斉せい天てん大たい聖せいに超電磁砲レールガンを放ったときのように。

『王よ。言霊を剣と成す力、たしかに呑のみ込んだ』

　右腕より届く天叢雲劍の思念を、護堂は感じた。

『常の戦いであれば、おぬしの刃は神を斬り裂く智ち慧えの剣。だが、己オレと合わさった刃はちがう。不ふ朽きゅう不ふ滅めつの神具をも斬り裂く、智慧の劍』

　神でありながら、神具でもある天叢雲劍。

　そんな存在と合わさった刃は、神ではなく神具を斬り裂く武器となった。

『おぬしのなかにある聖杯とやらの知識、そのまま刃の鋭さに変えた。怨おん敵てき退たい散さん・外げ道どう覆ふく滅めつのときぞ。存分に振るうがいい！』

　いつもは神についての理解がそのまま刃となる。

　だが今は、滅ぼしたい神具についての理解が刃となる。そして、護堂が狙ねらうのはアテナの命を吸い取る元げん凶きよう——聖杯。

　グィネヴィアがわざわざ教えてくれた知識だ。それを逆用させてもらう！

「ああ。ありがたく使わせてもらう。ゆくぞ！」

『応！　我こそは、ちはやぶる千せん釼けん破はの鋼はがねなり！　推すい参さん仕つかまつる！』

　使い手と神刀の意思がひとつとなる。

　斉天大聖と戦ったときは、護堂の闘争心も呪力も最大限に高まっていた。だから、いつも以上に天叢雲劍ともシンクロし、その力を引き出せた。

だが、今回は戦いがはじまる前。

これまでどおりなら、あのときのようには使いこなせないはずだった。

しかし、恵那との儀式で、天叢雲剣の所有者として真の覚かく醒せいを遂とげた今なら——。

「人と悪魔——立ちふさがる全ての敵を打ち破らん！」

言霊に応こたえて、天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎが護堂の右手に顕あらわれる。

刃渡り三尺三寸五分の豪刀。しかし、いつもとちがって刃は黒くない。輝く黄金。軍神ウルスラグナが持つという剣と同色であった。

『忌いまわしき聖なる器うつわよ！　散る花のごとく枯れはてよ！』

天叢雲剣は叫びながら、少女の姿をかたどるアテナ像へと奔はしる。

肉付きのうすい胸を、黄金の刃で貫つらぬく。

しかし、護堂の右腕に伝わってくるのは石と女神を斬り裂く手応えではなく、いにしえより伝わる神具を刺し貫いた確信だった。

静かに引き抜く。手を一振りして、天叢雲剣を消す。そのまま護堂は待った。

五秒、一〇秒……一分近く。アテナの目がついに開いた。

灰色の石を素材とする像は、やわらかな肌と産うぶ毛げの少女にもどった。髪も銀月を溶かした色と輝きを取りもどす。

彼女から命を汲くみあげていた聖杯。

その機能停止を悟り、自らの石化を解除したのだろう。

「草薙護堂……あなたの仕し業わざか。あなたが妾わらわに宿る聖杯へ一撃を加えたのか？」

それは、初めて見る表情だったかもしれない。

女神アテナは幼い容よう貌ぼうに賛さん嘆たんの念を浮かべ、神殺しを見つめていたのである。

3

「一日ぶりに会ったな。積もる話はあるけど、その前に頼みがある」

いろいろ問いただしたげなアテナに、まず護ご堂どうは告げた。

「あんたを助けた礼が欲しいとか、言う気はない。だから頼みだ。あんたが石にした人や物を、今すぐ元どおりにしてくれないか」

「何だと？」

「あんたはさんざん、自分と戦えって俺に言っていたよな。どうせまた同じことを言うつもりだろう？　でもな、こんな状況で戦わされるのは、人質を取られるのと変わらないぞ。石になった人たちが心配で、集中して戦えるかよ」

「……あなたはまさか、こう言いたいのか？」

侮ぶ辱じよくと感じたのだろう。

アテナから賛さん嘆たんの色は失うせ、鋭くにらみつけてきた。

「かりそめの死についた輩やからを楯たてにして、妾わらわが誉ほまれなき勝利を得ようとするのでは、と。なんという非礼！　なんという無む恥ち！　神界の女王たるアテナの心に、そのように卑ひ小しような策など生まれようはずもない。失言と心得よ！」

憤ふん怒ぬと共に一いつ喝かつされた。おそらく事実だろう。神々は人間に関心を持たない。なんとなく石にしただけで、『人質』という発想はなかったはずだ。

「俺にとっては、石にされた人たちはとても大切なんだよ。あんた

にその気はなくても、俺にはそう思えて仕方ないんだ。だから頼む。まず、全部もとに戻してくれ。人質を取るような真ま似ねは、あんたの権けん威いってヤツも傷つけるだろ？」

　とにかく、アテナのプライドを刺激しなくては。

　ウルスラグナの『剣』で聖杯を停止させた以上、他の手段で石化を解除する必要がある。そのために選んだ論法だった。

　成算は一応だが、ある。破れかぶれではない。

　かつて、カンピオーネ羅ら翠すい蓮れんは言った。『神の強さは、自じ我がの強さに比例する』と。

　今までの戦いを思い出すと、うなずける話だった。

　また、もうひとつ護堂は気づいていた。自我の強さに正比例して、プライドも高い。

　どの神も傍はた迷めい惑わくではあったが、卑ひ怯きような真ま似ねはしなかった。超越者としての余裕を示す者ばかりだった。あのふざけた斉せい天てん大たい聖せいでさえ。

　ならば、アテナのプライドもきっとくすぐれる。

　特に貸しを作った格好の今なら、要求を呑のんでくれる可能性は高い。

　そうと読んでのバクチだった。しかし、結局は女神の心ひとつ。もしアテナがいやだと言えば――。胃が痛くなりそうだ。

　だが、それでも馨かおるの言ったとおりにしていれば……とは思わなかった。

　賭かけに勝てそうな理由がもうひとつ胸中にあったからだ。

　傍ぼう若じやく無ぶ人じんだが誇り高い女神さまは、きっと期待に応えてくれる――。変な話だが、護堂は彼女を信頼していたのだ。

「フン。まあ、よかろう」

舌打ちと共に女神は言った。

「いくさにおいて先せん達だつたる妾が、あなたに塩を送る。これは女王として正しき振るまいだ。しかし、あなたに塩を送られたままでは、妾の誉れに傷がつく。よかろう、草くさ薙なぎ護堂。あなたの求めに今回は応じてくれよう」

直後、アテナの体から呪力の波動が一瞬だけ吹き出した。海の方へ——石化したアクアラインの方へ駆け抜けていく。

すこしあとで、ポケットのなかの携帯電話が震動した。

救出作業がはじまったときは報しらせてくれと、馨に伝えてあったのだ。

「手間をかけさせて悪かったな。ありがとうよ」

「礼など不要。それよりも、女王につまらぬ詮せん議ぎをかけた無む恥ちこそを猛省せよ。……しかし、あなたはさきほど言ったな」

アテナはニヤーッと愉たのしげに笑った。

獲え物ものを見み出いだした猛もう禽きん類るい、獲物を呑み込む寸前の毒蛇に喩たとうべき表情だった。

「このような折に戦えとは、人質を取られるのと変わりなし——と。ついにあなたも自身の蒙もう昧まいなるを悟り、心を改めたか？」

「べつに、改めなきゃいけない心なんか、俺は持ってない」

昂たかぶる仇きゅう敵てきの決めつけを、護堂は否定した。

「それよりも聖杯の方はどうだ？　あんたから不老不死と悠ゆう久きゅうの生せいってヤツを奪った元凶は、それなんだろ？　一応、上う手まく斬れたとは思うけど」

「ああ。先ほどの一撃はみごとであった……」

なぜだろう？　アテナはまた初めて見る表情になった。

ほんのすこしだけ、やさしげに微笑したのだ。まるで弟か後輩の

成長を見届け、安あん堵どしたかのように。

　剣と劍。聖杯をも斬り裂く合わせ技に賛さん嘆たんしたからか。

　それとも、べつの理由から来る微笑なのか。女神の胸中はうかがい知れない。

「妾のなかにある聖杯もしたたかに傷つき、その動きを止めているところよ。これならば、しばらくは妾の命を汲くみあげることもできまい」

「しばらく、か」

「うむ、しばらくだな。陽がまた昇り、沈む。これを数回繰りかえす間ほどはもつであろうか。不ふ朽きゅう不ふ滅めつの神具をそこまで追い込むとは、たいした一刀であったぞ」

　淡々とアテナは賞賛した。

　ギリシア風の衣装につつまれた幼い胸を、そっと押さえている。

　体内の聖杯を、智ち慧えの女神の力（おそらく祐ゆ理りの霊視力と同種の、しかし、その数百倍は強力であろう霊感だ）で調べているのだろう。

「あなたも救きゅう世せいの神しん刀とうを見たな？　実のところ、残っていた命をあれにだいぶ削そぎ取られて難なん儀ぎしていたところだ。聖杯がつつがなく動き出せば、残りもすぐに失われよう。ふふふ、正直に言って、この猶ゆう予よはありがたいぞ」

　数日後に迫る確定した死を、アテナは泰たい然ぜんと語った。

　やはり、破壊は無理か。うすうす予期していたので、あまり落胆しなかった。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎもほのめかしていた。そもそもウルスラグナの『剣』でそこまでできるなら、カンピオーネの権能だって半永久的に封じ込めてもおかしくない。あの『剣』ひとつで勝てた神も、今までいなかったし……。

　あれは攻防一体の便利な武器だが、いまひとつ決定力に欠けるのだ。

　仕方ない。だったら、決めていたとおりに、俺は戦う。

「わざわざ聖杯のみを封じ、妾を眠りより呼び覚ましたほどだ。あなたもついに妾と雌し雄ゆうを決するを望むか。妾の猛たけりに応こたえるべく、いくさ場に立つつもりなのだな？　善よき哉かな！」

「いいや。さっきも言ったとおりだ。俺は心変わりしてないぞ」

　戦士にして女王なる者の華やかさで笑うアテナへ、かぶりを振る。

　そうだ。俺はどこまでも俺のやり方を貫つらぬくのだ。

「だけど、死を前にしたあんたが俺と戦うのを望むなら、いくらでも応えてやるさ。本当にガチで、後先考えずに戦ってやる。でも、そのあとは俺流でいかせてもらう」

「あなたの流儀だと？」

「ああ。俺は必ず勝つ。俺を殺す気のアテナの上を行って、返り討ちにする。そのあと、あんたを殺しかけている聖杯……そいつをどうにかして止めてみせる。で、前みたいにまた日本から追い払ってやるよ」

「……この期ごにおよんで、まだそんな妄もう言げんを。妾の死は、もはや定まったことだぞ」

　悩ましげなアテナの言葉を、護堂はすぐにはねのけた。

「聖杯と、救世の神刀とかいうのが、あんたを殺すんだろう？　そいつらの持ち主であるグィネヴィアをとっつかまえて、いろいろ聞き出すさ。幽かくり世よとかいう世界にいる連中のところに行って、上う手まいやり方を教えてもらうのもいい」

　これは、問題を先送りするだけの考えなのかもしれない。

　だが、こうしたかった。全てを拾いあげるにはこれしかないからだ。自分が気にかけているのは、祐理やリリアナ、その他の人々だけではないのだから。

「あんたに死なれたら困るんだよ。俺はまだ、あんたの願いを聞い

ちゃいない」

「伝えたはずだぞ。妾の挑戦に応え、意気を見せよ。それを代価にするとな」

　にらむ蛇女神の目を、護堂はにらみ返した。

「俺も言ったはずだぞ。まわりの人間に迷惑をかける願いは聞かないってな。だから、あんたと戦うのはノーカウントだ。まずあんたをぶっとばす。それから助けて、べつの願いを聞く。もう決めたことだから、変えたいのなら力ずくで来い」

　聖杯からアテナを助ける。口で言うのはたやすい。

　しかし、上手くいく見込みはあまりない。先行きの暗い探たん索さくだ。だから、悪い結果に終わる前に、アテナに『意気』を見せたかった。

　死を前にして、わざわざ草薙護堂との対決を望んだ女神のために。

　……平和の尊とうとさを知る文明人らしく、『アテナと戦わずに、聖杯の処分法を調べにいく』という選択肢も頭にちらついたのだが。

　なぜか、この案を護堂は蹴けった。考慮にも値しないと思ってしまった。

「男子三日会わざれば、刮かつ目もくして見よというが」

　呆あきれたと言わんばかりに、アテナは頭を振った。

　偉大な女神らしからぬ、どこか人間くさい所しよ作さだった。

「あなたは一向に改まらぬ。さすが愚者の落とし子よ！　まったく、そのように度しがたい甘さを抱えて、この先どこまで生き延びられよう⁉」

　ソプラノの声で、朗々と語る。

　女神の目に浮かぶ諧かい謔ぎやくめいた色を、護堂は見逃さなかった。

「甘いなりに筋すじ金がねらしきものがあるようにも、ないようにも思えるが……。愚おろかよな。実に愚か――。嗚あ呼あ、やんぬるかな！　しかも、闘たたかいの女神たる妾に力で攻めよとは、畏おそれを知らぬにも程がある！」

　いつも仏ぶつ頂ちよう面づらで無表情だった女神が、愉快そうに叫んでいる。

　こいつ、こんな顔もできるんだな。不ふ敬けいこの上ない感想を抱く護堂だった。

「よかろう。あなたはアテナに勝利すると言った。そのような所行、かなうはずもなし。我が武勇をもって、草薙護堂の蒙もうを啓ひらいてくれる。異存があるなら、自ら申したように力ずくでどうにかせよ」

　きっと『おまえが勝ったら言うとおりにしてもいい』程度の意味なのだろう。

　痛快そうなアテナを見て、護堂は理由もなく確信した。

　根拠はない。不思議とそう思えたのだ。そして、ゆっくりと浜辺を歩きだす。寄せては返す波の音を聞きながら、歩く。

　アテナも無言でついてきた。護堂のやや後ろを歩む。

　このままはじめてもいいが、もうすこし闘志をためたい。きっと向こうも同じだろう。

　神と神殺しは、因いん縁ねんめいた絆きずなを感じながら歩きつづけた。

　それはもしかしたら、強敵と書いて『友』と読むような、余人には説明しがたい縁なのかもしれなかった。

　グィネヴィアが最初に気づいた異変は、聖杯の気配が消えたことだった。

　彼女はあれを創造した女神の転生体。どれだけ距離を隔へだてていても、アテナの体内に呑のまれていようとも、その気配を把は握

あくできる。なのに突然、感じなくなった。

　そして、第二の異変。

　この近辺をおおっていた神力の消失にも気がついた。

　生物・物体・有機物・無機物を問わず、全て石に変えたアテナの神力まで消え失せたのだ。

　グィネヴィアは、女神が自らを石とした場所から数十里隔へだてた海辺にいた。

　のどかな砂浜ではない。切り立った断だん崖がいの上だ。眼下では初冬の海が岩に当たって砕け、白い波は濤とうとなっている。

　すぐに千里眼の術『魔女の目』を使い、視覚を飛ばした。そして見た。

　——人の手で海に架かけられた大道。

　——そのなかばに築かれた、船とも砦とりでともつかぬ城じよう邑ゆう。

　——グィネヴィアや女神がいる側とは対岸にある、海辺の街。

　先ほどまでは、ことごとくが石だった。建物も、道も、草木も、池や沼も。海の一部さえも。生者も獣けものも、取るに足らない小さな生き物、羽虫や地虫の類たぐいまでも。

　全てが石の骸むくろ。石の墓場であった。

　それらがいつのまにか、もとへ戻っていたのである。きちんと生ある状態へ。もしくは、本来あるべき状態へ。石になっていた人間や動物たちは皆、横たわるか何かに寄りかかるかして眠り込んでいた。

「石の呪じゆ縛ばくは、かりそめの死。真に殺あやめたわけではないのですから、甦よみがえらせることなどアテナにとっては児じ戯ぎにも等しいでしょうが……」

（愛いとし子ごよ。アテナの姿を探すのだ。あるいは、あの若き神殺しめを！）

ランスロットの叱しつ咤たが耳じ朶だを打つ。遠方より見守っていた彼も、異常を察知したのだ。

あわててグィネヴィアは、アテナが自らを石とした浜辺へ『目』を飛ばした。

見えた。草薙護堂と対たい峙じする、甦った女神が——。

グィネヴィアは『魔女の目』を打ち切った。すぐさま飛翔の術を使う。空へ飛び立ち、白い光につつまれながら天あま翔かける。

とにかく現地へ急行し、何が起きたのかを調べなければ。

そして、ふたたび草薙護堂を後押しし、彼にアテナを斃たおさせなければ。

狙そ撃げきを受けたのは、一心不乱に飛んでいる最中であった。

清せい秋しゆう院いん恵え那なは、太た刀ちの媛ひめ巫み女こと呼ばれる。

だが、身につけた武芸は刀術だけではない。薙なぎ刀なたも使う。柔術も上手い。手しゆ裏り剣けんや十じつ手て、暗器と呼ばれる隠し武器の心得もある。さらに、弓術にも通じていた。

残念ながら、弓道と呼べるほど格調高くはない。

何しろ、適当に弓を構えたら、なんとなく標的を見定め、無造作に矢をつがえ、当たると思ったら撃うつという闊かつ達たつなものだからだ。

とはいえ、並外れて視力がよく、勘かんもいい恵那の弓はよく的まとを射いた。

「南な無む八はち幡まん大だい菩ぼ薩さつ……願わくば、この矢はずさせ給たもうことなかれ」

念のため『破は魔ま矢や』の術もかけておく。

標的が実体のない霊や幽体であっても、もしくは、飛び道具を弾

はじき飛ばす術で守護されていても、撃ち抜けるようになる術だった。

　恵那がいるのは、東京湾アクアラインの路上だ。

　木き更さら津づジャンクションの出入り口から、ほんの数百メートルの位置。交通規制をされているので、路上を走る車は一台もない。

　準備は万端。そして、標的の光も見えた。

　天翔ける白い光。速い。かなりのスピードで飛行している。もうまもなくアクアラインの上空を通過する。目的地はやはり、アテナのいる海岸か。

「用心しといてよかった。陰でこそこそするだけなら見逃してもいいけど、わざわざ邪魔しに来るなら、絶対に近づかせないよ！」

　つぶやいてから、狙ねらいを定める。

　白い光は神しん祖そグィネヴィアのはずだ。このときがあるのを想定して、見晴らしのいいところで空を警戒していたのだ。

　天翔ける魔女がアクアライン上空を通りすぎるところで——

　恵那はよっぴいて、ひょうと射た。

　一発必中を期した一いつ矢し。それも清秋院本家から送ってもらった特別製。これは降ごう魔ま破は邪じやの呪力を秘めた、霊れい験げんあらたかなる魔弾なのだ。

　この矢は、数キロ先の上空にまで届く。

　和弓で出せる飛距離ではない。これも魔弾が秘める呪力のひとつ。射程距離・貫通力ともに尋じん常じようではなかった。プラス、恵那の目と勘と弓術。

　これらを積み重ねた渾こん身しんの矢で、白い光を撃ち落としにかかる。

　鏃やじりが柔肉を貫いた——と、恵那は確信した。

名手の勘にあやまりなし。白い光の飛翔はいきなり中断となった。

即座に光は消え失せ、魔女王グィネヴィアの姿が露あらわになる。自由落下がはじまる。このままなら、海かアクアラインの路上に叩きつけられるだろう。

しかし、いきなり落下のスピードが遅くなった。

ゆらゆらとゆっくり、木の葉のように落ちてくる。空中浮ふ揚ようの魔術を使ったのだ。

神祖の左腕……二の腕のあたりに裂れつ傷しようが走っていた。

そして、幼い美貌は隠しようのない憤ふん怒ぬで紅あかくなっていた。それでも尚、アンティークドールのごとく美しかったが。

「急所には当てられなかったか……。仕方ないよね、あの速さで飛んでたんだし」

数十メートル先の路上に、金髪の神祖が降り立つ。

恵那は弓と矢筒を捨てた。挨あい拶さつは済ませた。ここからは刀の出る番だ。

グィネヴィアは必ず足止めする。それが背せの君きみと慕したう男より託された役目であった。

4

「あなたのことは存じております、神々の降こう臨りんを賜たまわる巫み女こよ」

地上へ落ちてくるまでに怒りを鎮しずめたのか。

グィネヴィアの美び貌ぼうは、凪ないだ湖水のごときおだやかさであった。

「最も権けん威いある神しん祖そ、魔女王であるグィネヴィアの道

行きを阻はばむとは、大だい胆たんな娘ですね。その僭せん越えつの代価は、あなたの命となりますよ」

　恵え那なよりも歳とし下したに見える姿形。

　しかし、魔術の素そ養ようにも、単純な呪じゆ力りよくにもかなりの開きがある。

　それでも太た刀ちの媛ひめ巫み女こは怯ひるまず、神祖グィネヴィアと正面から向き合った。

「その言葉がはったりじゃないって、わかってはいるけど——。おとなしくやられるつもり、恵那にはないよ」

　決然と言い返す恵那。弓を捨てた彼女は丸腰だった。

　いつもの日本刀もない。しかし、代わりの得え物ものを用意してある。

「倭やまとは国のまほろば——たたなづく青あお垣がき山ごもれる、倭やまとしうるわし！」

　切り札を使うために言こと霊だまを唱となえる。

　そして想おもう。刀の姿をした相棒のことを。昨夜結んだ、新たな絆きずなを——。

　神がかりがはじまった。神の霊気が恵那に流れ込んでくる。守護神スサノオの気を賜たまわったのではない。もっと近くにいる相棒の神気だ。

「天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに願い奉たてまつる！　その影をここに示じ現げんし給たまえ！」

　叫んだ恵那の手に、刃渡り三尺三寸五分の豪刀が忽こつ然ぜんと顕あらわれる。

　ゆるやかに弧こを描く、漆しつ黒こくの刀身。日本刀風に造られた拵こしらえ。草くさ薙なぎ護ご堂どうの右腕に宿るはずの天叢雲劍であった。前のように借りたものではない。

　護堂の右腕から呼び込んだ天叢雲劍の神気を、刀として具現化さ

せたのだ。

　いわば、天叢雲剣の分身。もうひとつの神刀であった。

「まあ……さすがね。さっそく神の力を呼び込んだのね！」

　それでもグィネヴィアは微笑ほほえむ。

　神がかりした太刀の媛巫女は、神祖・神獣と同じ高みにいるはずなのに。

　恵那は天叢雲剣の神気を御ぎよしながら、気を引き締めた。

「ねえ、ご存じ？　あなたたちはこの国で媛巫女と呼ばれるそうだけど、その力の源みなもとはグィネヴィアと同じ神祖の血なのです。ええ、あなたがたは我らの遠い遠い裔すえ」

　歌うように魔女王はささやき、あどけなく笑う。

「ふふっ。遥はるかな後こう裔えいたちにできることが、神祖にできないと思われるのは癪しやくだわ。あいにくとグィネヴィアに降こう臨りん術じゆつの心得はないのだけど——」

　その瞬間、恵那の近くで神気がわきあがった。

　グィネヴィアからではない。べつの場所から……そこか！　アクアラインの外に広がる房ぼう総そうの海へ、恵那は視線を投げた。

「似たような術なら、すこし使うことができるのよ。おいでなさい、海の神より遣つかわされた下げ僕ぼくよ！　グィネヴィアのために戦って！」

　ザアアアアアアアッ!!

　押しのけられた多量の海水が、海面へ落ちていく爆音。

　その偉容が海を割り、せりあがってきたところで、恵那は絶句した。

　巨大なイカの頭部だった。全容が見えないため推定だが、体長三、四〇メートルはありそうな——。

　海面から、巨大なイカの足も数本伸びてきた。

　アクアラインのコンクリートに絡からみつき、うねうねと不気味にうごめく。

「うふふふっ。水と大地の神気は、グィネヴィアの同胞でもあるの。すこしの間なら、神獣に変えて顕けん現げんさせることができるのよ。聖杯の呪力が使えれば、神の似に姿すがた……まがいものの神さえ顕あらわすこともできるのだけど」

　悠ゆう々ゆうとグィネヴィアが語る内容に、恵那は驚きよう嘆たんした。

　神の力を降ろす彼女には、目の前にいるのが神獣だとわかっていた。自分の神がかりもだいぶ反則だが、これは輪をかけてひどい。

　何しろ、神の力を借りても、清せい秋しゆう院いん恵那は生身の少女なのだ。

　あちらには神獣の巨体がある。パワーとフィジカルの差は圧倒的だった。

「って、出てきた早々にあわただしいな、もう！」

　長大きわまりないイカの足が、頭上より襲ってきた。

　ギュン！　その速さとしなりは、さながら超巨大な鞭むちであった。

　恵那は猿ましらのすばやさで跳び退いた。太刀の媛巫女より身軽な者など、めったにいるものではない。

　ほどほどの余裕を持って、イカの足をかわす。

　だが、巨大生物の末端器官は、恵那の代わりにアクアラインの路面を打ちよう擲ちやくし——そのまま引き裂いた。鉄筋コンクリートがバキバキと砕け、割れ、イカの足に深々と抉えぐられる。ケーキでも切り分けるように、あっけなく。

　しかも、イカだけに足はたくさんある。

　着地した恵那を、超巨大な足たちが次々と襲撃する。頭上から降りかかる足。背後から巻きつこうとする足。右から、左から絡からみついてくる足たち。

「ずいぶんとすばしこいのね！　でも、グィネヴィアも忘れないで欲しいわ！」

　必死で避けつづけていたら、この宣告。

　恵那は舌打ちした。巨大イカ（格調高くクラーケンとでも呼ぶべきか）の数十本はありそうな足たちが、まわりの路上をめちゃくちゃにしている。

　ずたずたに切り刻まれ、砕かれた路面。

　大小さまざま、形もさまざまなコンクリートの塊かたまりがそこかしこに転がる。

　この路みちを走れる車などあるまい。歩くのも難なん儀ぎする。軽けい捷しような恵那でなくては、ここで飛びまわり、クラーケンの連続攻撃を全て避けるなど不可能だったはず。

　そこに、さらなる苦難が降りかかるのである。

　いつのまにか空中に浮かんでいたグィネヴィアの手に、投擲用の槍ジヤブロがあった。

「影の国を守る魔女の槍やりよ。女王スカアハの故事に倣ならうといいわ！」

　言こと霊だまを唱えて、神祖は槍を投げた。

　まったく腰の入っていない、ふぬけた投とう擲てき。武芸の心得はないのだろう。

　しかし、それで十分なのだ。この投槍は恵那めがけて勝手に飛ひ翔しようし、しかも途中で一二本もの短い槍に分裂して標的を襲う呪術の武器なのだから。

　恵那は防御をあきらめた。

　彼女自身の反射神経は、クラーケンの襲撃に備える。あとは全て天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに託す！

　神刀を握る両腕から、力を抜いた。勝手に動くのを許す。

一いつ閃せん、二閃、三閃と、剣光をひらめかせながら天叢雲剣が縦じゆう横おう無む尽じんに走り、襲い来る呪術の槍を次々と撃ち落とした。

全て撃げき墜つい。鉄の相棒は、みごと恵那を守り抜いてくれた。

そこで足もとのコンクリートが割れた。

いつのまにかクラーケンは足の一本で路面の下を掘り進め、真下から襲撃する準備を終えていたのだ。

それでもぎりぎりで飛びすさり、巨大な足をやりすごす。

だが、二本目、三本目の足がやはり足もとのコンクリートを引き裂いて、下からの攻撃を重ねてきた。恵那は飛ぶように跳ねまわり、必死に逃れつづける。

ここでグィネヴィアが、さっきの槍をふたたび投じた。しかも二本同時。

またも分裂し、合計で二四本もの短たん槍そうが降りかかる。

——お願い、天叢雲！

祈りに応こたえて神刀はまたも乱舞。ついに今度も守り切ってくれた。しかし。

グオオオオオオオオンンンンン!!

不気味な啼なき声。どのような器官が発したのか不明だが、クラーケンの咆ほう哮こうだった。

これを聞いた瞬間に、恵那の全身が硬直した。

神獣の霊力による金かな縛しばり。指の一本も動かせない。

いつもの神がかりした恵那なら、天叢雲剣で切り裂けたはず。しかし、猛攻にかまけて不覚を取った！

「ふふふふ。あなたを相手にしたら、万が一もあり得るかも……と警戒していたのだけど。取り越し苦労だったかしら？」

うそぶきながら、グィネヴィアはあの槍を三み度たび投じた。

天叢雲剣に防御をゆだねようにも、体はびくとも動かない。

こうなったら、天叢雲の力を全開で――恵那が集中をはじめたときだった。

「見よ。我、汝なんじの額ひたいを金こん剛ごう石せきのごとくし、巌いわおよりも堅くせり！　汝、逆ぎやく賊ぞくの同どう胞ほうを恐るることなかれ！」

聞き慣れた美声が、鉄の言霊を誦しようした。

恵那の前に、忽こつ然ぜんと壁が出現する。分厚い鋼鉄の一枚板で、文字どおりの鉄壁。槍をことごとく跳ね返す。

「どうやら、いちばんの見せ場には間に合ったみたいね。日頃の行いがいいせいかしら」

きっと王様ならツッコミをいれるんだろうなァ。

苦笑する恵那へ、決して品行方正とは言いかねる少女が歩み寄ってきた。

赤みがかった金髪を王冠のごとくかかげている。その下の美貌は、造形の美しさ以上に覇は気きと才気で光り輝いている。

身にまとう軍衣サーコートは、黒地に紅の縦たて縞じまを描いた色使い。

紅と黒ロツソネロを代名詞とする美少女。もちろんエリカ・ブランデッリその人であった。

5

「状況を説明する必要はないわ。昨日までのあらましは護堂から聞いているし、この有様を見れば大体のところは想像がつくから」

颯さつ爽そうと現れたエリカの手には、巾はば広ひろの大剣が握

られていた。

　真の姿を露あらわにした魔剣、クオレ・ディ・レオーネだ。さらに逆の手には菱ひし形がた状の楯たても装備されている。

　思わぬ救い主の登場に、恵え那なは訊たずねた。

「エリカさん、すぐ戻ってこれないんじゃなかったの？」

「ええ。ただ幸いにも、護ご堂どうと電話で話したあと、わりとすぐに帰国の許可をもらうことができたの。あとは空港に行って、日本へ向かう飛行機の席にキャンセルが出るよう祈るだけでよかったわ」

　エリカはあいかわらずの優雅さで語った。

　だが、その余裕がむしろ恵那にある確信を抱かせてくれる。

「その言い方、ちょっと馨かおるさんみたい。『祈る』以上の何かを絶対してそうだけど」

「まさか。わたし、騎士として天に恥じるような真ま似ねはしていないわ。恵那さん、ああいう腹黒そうな方とのおつきあいで、他人の幸運を信じられなくなったのね……」

　しれっと言ってから、エリカは空へ視線を移した。

　その先にいるのは魔女王グィネヴィア。

　さらに、その背後には海中より頭を出した神獣クラーケンまで控える。

　イカの足は普通なら一〇本のはずだが、この生物の末端器官はまちがいなく二、三〇本はありそうだ。それらが巨大な海うみ蛇へびか触しよく手しゆのごとく、うねうねとアクアラインの路上でうごめき、鎌かま首くびをもたげている。

　無数の吸盤で埋め尽くされた、白い不気味な足たち。

　アンティークドールのようなグィネヴィアとは、不似合いなことはなはだしい。

「魔女のなかの魔女である方に、名乗りを上げさせていただきます。騎士エリカ・ブランデッリ、高名なあなたとお会いできて光栄ですわ。黒王子アレクさまの仇きゆう敵てきでいらっしゃると仄そく聞ぶんいたしました」

「まあ。あの方とグィネヴィアの交こう誼ぎを知る者はすくないはずなのだけど」

　優美に騎士の礼を取る金髪の女剣士。

　貴婦人の微笑で、空中より応こたえる黒ドレスの美少女。

　場の異様さを無視すれば、中世騎士道物語の宮廷じみた組み合わせだった。

「勇ゆう猛もうにして礼を知るのみならず、機き略りやく縦じゆう横おうでもあるのね！　ふふふ、聡そう明めいなる騎士よ、あなたも存じております。たしか草くさ薙なぎさまの直じき臣しんでしたね」

「グィネヴィアさまの知ち遇ぐうを得ていたとは、望外のよろこびですわ」

　打てば響くような、ふたりのやりとり。

　恵那はくすぐったい気分になった。雅みやびな言葉遣いもできる彼女だが、本質はやはり野の放ほう図ずな自然体である。何とも居心地が悪い。それに気になるのは——

　ひさしぶりに再会したエリカ・ブランデッリ。

　媛ひめ巫み女こ筆頭として抜きんでた実力を持つ清秋院恵那が、初めて出会った本当の意味でのライバル。おそらく終生の競争相手。

　その彼女から、以前にはなかった深みを感じる。

　純粋に潜在能力だけでいえば、神しん童どうエリカも神がかりの使い手にはおよばない。

　これまではそうだった。だが、今はどうだろう？　そして、これからは？　恵那の勘かんがなぜか警告していた。

「ふふふ。ひさしぶりに婦人との接し方を知る騎士と話ができて、楽しいひとときでした。でも残念だわ。草薙さまとアテナが何をなさっているのか、グィネヴィアは一刻も早く知りたいのです。そろそろ区切りをつけましょう」

　空中のグィネヴィアが微笑と共に言った。

　優雅だったのは会話だけで、もとより空気はゆるんでいない。

　エリカは魔剣を構え、応戦の準備をする。恵那も天あまの 叢むら雲くもの 劍つるぎを握り直した。

「ねえエリカさん……ひとりでやらせてもらってもいい？」

「あら恵那さん、一対一での決闘がお望みなの？　そういうの騎士らしくて、わたし好みではあるけど……。あちらは二対二でやる気しかないように見えるわ」

　媛巫女と大騎士は、肩を並べて敵方と向き合っていた。

　神しん祖そグィネヴィアと神獣クラーケン。美び醜しゅうの落差はすさまじいが、どちらも神域の住人。どれだけ魔術や武術を駆使しても、遠くおよばない難敵だった。

「うん。恵那にもそう見える。でも、このままちょこちょこ戦っても埒らちがあかない――ううん、じり貧になる気がしてさ。だから、まず恵那がガーッと暴れてくるから、あとはお願いできないかなって思ったんだ」

「弁論術を学べとはいわないけど、もうすこし恵那さんは修しゅう辞じ学がくを学ぶべきね」

　抽ちゅう象しょう的てきすぎる言い方に、ダメ出しされてしまった。しかし。

「まあ、エリカ・ブランデッリは幸いにも臨りん機き応おう変へんの才にも恵まれているの。好きにやってみなさい。何とかしてみせるわ」

「ありがと。すごく助かるよ。――じゃ、あとはよろしく！」

　エリカから色よい返答を得た瞬間に、恵那は駆けだした。

神祖と神獣へ全力疾走。そして、天叢雲劍の神気を今までよりも多く呼び込む。もう抑おさえきれないという臨界を迎えても、さらに呼ぶ。

そんな恵那に、クラーケンが巨大な足を振りおろしてくる。

グィネヴィアが例の槍やりをまた投じようとする。

だが、一切気にかけない。あとは体と相棒が薙なぎ払ってくれるはず！

……ここから、恵那の意識はぼんやりとしていった。

だが、全力疾しつ走そうする体は真ま逆ぎやくだ。今までよりも遥はるかに鋭さ、激しさを増した。

野生の獣けものじみた荒々しい動きで走り、跳び、クラーケンの足どもをかわす。踏みつける。飛び越える。ついでにグィネヴィアが放った魔ま槍そう十数本の雨も、機敏にかいくぐる。

激しく動くのは体だけではない。

神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎもまさしく縦じゆう横おう無む尽じん、自由放ほう縦じゆうに乱舞する。

クラーケンの不気味な吸盤付きの足——何十本あるか、やっぱり見切れない末端器官。

聖なる漆しつ黒こくの刃やいばは、これらを次々と突き刺した。切り裂いた。断ち切った。

グィネヴィアの槍たちも、同じ目に遭あわせた。刃が届く間合いに入ったものは、片っぱしから切り落とした。

クラーケンが苦く悶もんの咆ほう哮こうをどこかの器官から上げる。

グィネヴィアが驚きよう愕がくで顔を引きつらせる。

清秋院恵那の体と神刀は、それらの雑音と風景に何の反応も示さぬまま、跳ねまわる。

彼女の意識は、これらをぼんやりと空中から眺めているような感覚。もはや他ひ人と事ごとだ。明らかに正常ではない。

暴走。そう、恵那は意図的に神がかりを暴走させたのだ。

かつてエリカを追い詰めたときもこうなったが、あれは過失だ。今回は故意に、この状態へ己を持っていった。神獣と神祖のコンビを打ち破るには、暴走の爆発力にまかせるのがいちばんだと思えたのだ。

不確定要素が強すぎて、ちょっと気軽には使えない奥の手である。

しかし、あとのことをエリカにまかせても大丈夫そうなので、心置きなく恵那は自みずからを暴走させた。そういえば、向こうはどうしているだろう？

エリカは暴れ狂う媛巫女から距離を取って、戦いの趨すう勢せいを見守っていた。

うん、正解。ひとりごちる。

今の恵那と天叢雲剣に敵味方の区別がつくか、あまり自信はない。ならば成り行きを見守って、おいしいところを持っていけばいい。やっぱりエリカさんは頭いいな——。

と、意識が考える間に、恵那の体は最後の一暴れをはじめていた。

そろそろ限界が来るように思える。あとは糸が切れた凧たこのように墜つい落らくするだけだ。まにあえばいいが……。

ぼんやりとした願いをよそに、恵那の体は海へ飛び出していった。

アクアラインの端から、思いきり跳躍。

海中より突き出たクラーケンの頭部めがけて。足ではなく本体を狙ねらうつもりなのだ。

八艘そうの船をも跳び越える身軽さで、恵那の体は飛ひ翔しようする。

　まっすぐ前方に天叢雲劍を突き出している。このままイカの頭に激突し、漆黒の刃で貫つらぬきとおす構えだ。これを阻止せんと、クラーケンが吠ほえた。

　グアアアアアアアアンンン！

　神獣のすぐ前で海面が隆起した。ぐんぐんせりあがり、海水の防壁ができあがる。恵那の飛ひ翔しようと刺突を跳ね返そうとする！

　しかし、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの切っ先が海水の壁にふれた刹せつ那な。

　防壁の素材だった海水は一瞬にしてはじけ、形を保てなくなった。もとの海面へザザーッと落ちていく。恵那の飛翔は止まらず、クラーケンの顔面に神刀を突き立てた。



　ヒュアアアアアアアアアン！　断だん末まつ魔まの咆哮だった。

　渾こん身しんの一刀を受けて、不気味な巨大イカは莫ばく大だいな量の海水に変じた。バシャアーンと轟ごう音おんを立ててはじけ、海へ戻って大波を起こす。

　しかし、勝利した恵那の体も海に落ちていった。

　溺おぼれるかな——と、意識の方が心配したところで、エリカが動いた。

「もうッ。後先考えられない、面倒な状態になってくれたわね！」

　クオレ・ディ・レオーネを分ふん銅どう付きの鎖くさりに変形させた。すぐに投じる。分銅と鎖は、みごと恵那の右足首に絡からみついた。

　エリカが引っぱると鎖はうねり、恵那の体をアクアラインへ引きもどしてくれた。

　ここで恵那の意識は、体に引き寄せられた。ついに限界が来たのだ。

「ぐぅっ——くはっ！」

　気づけば恵那は、エリカの足もとにうずくまり、血を吐いていた。

　全身がずっしりと鉛なまりのように重い。疲労の極致にある。二日連続の神がかりに暴走。そのツケが一気に襲ってきたのだ。

「もうダメみたい……。さっきお願いしたとおり、よろしく……」

「仕方ないわね。感謝して頂ちよう戴だい。わたしが護堂とリリィ以外の人間をフォローしてあげるなんて、滅めつ多たにないことよ」

　エリカの返答に、恵那は微笑した。

　ライバルは傍ぼう若じやく無ぶ人じんなくせに、大きな包容力の持ち主でもあるのだ。

「どうやら、グィネヴィアの不安は的まと外はずれではなかったようですね」

　魔術で宙に浮かんだまま、グィネヴィアはささやいた。

　神獣の敗北を目まの当たりにしても、美少女の容貌に陰りはない。

「いにしえの狂戦士を偲しのばせる、みごとな戦いぶりでした。まさか、我が同胞をこのように切り倒すだなんて、恐ろしい子……！」

　グィネヴィアは微笑んでいた。

　幼い美貌に、超然たる魔女王の貫かん禄ろくを宿らせながら。

「やはり神殺しに仕つかえる者ともなれば、只ただ人びととはかけ離れるものですのね。かくなる上は、奥の手を見せましょう。小お父じ様。どうぞグィネヴィアの声をお聞き届けくださいまし！」

　天へ届けと、可か憐れんな声を張りあげる。

　直後、よく晴れていた空に暗雲が立ちこめ、稲いな妻ずまが落ちてきた。

　否いな。稲妻をまとう人馬が、天より落ちてきた。白き神馬に、白き甲かつ冑ちゆうの騎士。神獣どころではない。これは『まつろわぬ神』だ！

　白き人馬はグィネヴィアのそばへ降下し、そのまま空中で静止した。

「グィネヴィアはあの者どもを始末しなければなりません。小父様、アテナと草薙護堂さまのもとへ向かっていただけますか」

「ほう。手早くかたづけるわけにはいかぬか」

　騎士の白き兜かぶとより洩もれるのは、男らしい美声。

　素顔は見えないが、涼やかな男ぶりではないかと思わせる凛り々りしさだった。

「残念ながら。ですので、小父様にはこれを」

　グィネヴィアの手に、忽こつ然ぜんと小さな錫しやく杖じようが顕あらわれた。

　先端には、双頭の蛇へびをかたどった銀細工が施ほどこされている。差し出された蛇の錫杖を、白き騎士は無造作に受け取った。

「うむ。委い細さい、そなたの望みに添おう」

「御ご武ぶ運うんをお祈りいたします、ランスロット・デュ・ラック！」

　見送りの言葉にうなずき、白き神は稲妻をまとった。

　そのまま一直線に飛ぶ。あの方角の先は、アテナと草薙護堂がいる海岸だ。もう一歩も動けない恵那だが、壮そう健けんでも邪じや魔まはできなかっただろう。

　まさに天あま翔かける稲妻。恵那ごときの矢で撃げき墜ついすることはかなうまい。

「湖みずうみの騎士、ランスロット卿……。グィネヴィアさまを陰ながら守護されていると聞いておりましたが、あれでは陰どころか……」

　一方、恵那のそばでエリカが愕がく然ぜんとしていた。

　すると、グィネヴィアは地上にあどけない微笑を振り向けて、

「ふふっ。あなたはどうやら、アリス姫と交友があるようね。ええ、かつて黒王子殿に敗れたときと同じあやまちを犯おかさぬため、小父様にはまつろわぬランスロットとして顕けん現げんしていただいたのです」

　魔女の王は鋼の軍神まで招しよう聘へいする。天てん衣い無む縫ほうの恵那も呆あきれかえった。

「小父様にあなたたちを薙なぎ払い給たまえとお願いできれば、全ては一瞬で終わるのだけど。無む双そうの軍神にそのような非礼を願い出るなど、許されるはずもなし。グィネヴィアが直じき々じきに葬ほうむってあげましょう！」

叫ぶグィネヴィアから、強烈な呪力が放たれた。

「水の神気よ。ふたたびグィネヴィアのもとへ馳はせ参じてちょうだい。あとひとたび魔女王の祈りに応こたえて、聖なる姿を顕すのです！」

またも神気がふくれあがり、海面が盛りあがる。今度はクラーケンではなかった。

顕現したのは白き水竜だった。

肉食の恐竜に似た、凶きよう猛もうそうな頭部。大蛇のごとき長い胴。背から生えたコウモリの羽。前まえ肢あしふたつはおそらく蜥蜴とかげのもの。複雑怪奇なキマイラ——。

海面より胴と首を突き出して、水竜が吠ほえる。

オオオオオオオオンンッ!!　この咆哮は風を巻き起こした。

アクアラインの路上と周囲の海面に、烈風が吹き荒れる。恵那とエリカも体を持っていかれそうになるほど、強い風だった。

「さあ！　グィネヴィアと共に、あの娘たちを噛かみ砕きましょう！」

魔女王の華きゃ奢しやな体は、水竜の胸あたりに呑み込まれ、消えた。神祖グィネヴィアと体長数十メートルはあろう白竜が一体化した。

「まさか、竜りゅう蛇じゃの封印を解いたの!?」

「ちがうと思う——ッ。あれはまだ神獣のままだよ！」

顔色を変える女騎士に、恵那はささやきかけた。

すると、エリカは鋭く水竜の巨体を見あげ、ぽつりとつぶやいた。

「そう……だったら、どうにかできるかもしれないわね」

この言葉、やはり。恵那はうなずいた。

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが千ち鳥どりヶが淵ふちで暴

走したとき、斉せい天てん大たい聖せいと戦ったとき。エリカはウルスラグナの加護を得て、恵那や大聖と対たい峙じした。

　今、それはない。己の器量だけで切り抜けねばならないのに。

「——どうにかできるかも、じゃない。何としてもやってもらわないと困るぞ、エリカ」

　いきなりの呼びかけだった。

　ほぼ一日ぶりに聞く、凛り々りしい女騎士の声。恵那はすぐそちらを見た。

　今いるのはアクアラインの路上、木き更さら津づジャンクションに近いあたり。そちらから入ってきたのだろう。ついに彼女たちも駆けつけてきたのだ。

「あの秘ひ儀ぎを手に入れさせるために、学校のズル休みも黙認したんだぞ。きちんと成果を見せてもらわなければ、自由にさせた意味がない！」

「まあ。よく言うわ、リリィ」

　リリアナ・クラニチャールの発言に、エリカは軽く笑った。

　十数分前に石化から解き放たれたはずの青き騎士は、状況を聞いて即座にこちらへ向かったのだろう。主あるじよりも恵那の支援が急務だと判断して。

「護堂の補佐をお願いって頼んだとき、リリィったらすごくうれしそうにニヤニヤして。どうせ、わたしがいない間は好き勝手できるとか思ったんでしょう？」

「んぐっ。バカを言うなッ」

　青と黒ネラツズーロのケープをまとうリリアナは、顔を引きつらせて叫ぶ。

　薙なぎ刀なたに似た魔剣イル・マエストロも召しよう喚かんして、戦闘の準備も抜かりない。

「わたしだって、いっしょにあの書を閲えつ覧らんしたかったん

だ。だが、草薙護堂のおそばをがら空あきにするわけにもいかないから、仕方なく……！」

「恵那さん、神がかりを使いすぎたのですか⁉　今、手当てをします……！」

　騎士の焦あせりをよそに、もうひとりの救援者が言った。

　巫み女こ装しよう束ぞくをまとった万ま里り谷や祐ゆ理り。神獣が暴れたためガレキだらけの路に、鈍にぶい彼女はつまずきながら走り寄ってきた。

　うずくまる恵那の背を撫なでながら、すぐそばのエリカにもうなずきかける。

「大丈夫ですよ、エリカさん。あなたが新たに得た力――御ぎょすることさえできれば、神の降こう臨りんを給たまわる術にも比ひ肩けんする切り札になるはずです」

「ありがとう、祐理。心強い激げき励れいだわ」

　霊視の啓けい示じを受けたのであろう媛巫女に、エリカは華やかに微笑みかけた。

「まあ、いちばんの問題はその『制御』なのだけど、ここまで来たらやるしかないわね。みんな、エリカ・ブランデッリの勇姿をその目に焼きつけなさい！　神祖グィネヴィア、ここで討ち取ってみせるわ！」

　高らかに宣言して、紅き騎士は猛たけき水竜へと歩み寄っていった。

6

　魔ま導どう書しよ『ダヴィデによる勲いさおの書』より、エリカとリリアナはダヴィデの言こと霊だまを学んだ。

　だが、学び取ったのはそれだけではない。

聖せい絶ぜつの言こと霊だま。ダヴィデの名を冠する戦闘魔術コンバツトマジツクの最終奥おう義ぎ。使い手に神獣・神霊の類すら屠ほふる『聖なる殲せん滅めつの特権』をあたえるという——。

かつてサルバトーレ・ドニの師・聖ラファエロのもとで魔導書を盗み見たとき、エリカとリリアナはこの秘儀の箇所もできる限り暗記した。しかし記述は膨ぼう大だいだった。ふたりとも明めい晰せきな頭脳の所有者だが、記憶力には限りがある。

エリカは『ジェリコの殲せん滅めつ』にまつわる部分を、リリアナは『ミデアンの殲滅』にまつわる部分を覚えるので精一杯だった。これ以外にもさまざまな教えがあったのだ。

——いや、あの短時間で術の要よう諦ていとなるところをどうにか押さえたことこそ、ふたりの天才的な魔術センスと聡そう明めいさの証明でもあったが……。

ともかく、運よく学べた奥義ふたつ。

折にふれて、エリカはこれらを研けん鑽さんした。リリアナもそうだったはずだ。

数年後、ふたりはダヴィデの言霊を修得した。神をも傷つける秘術。ただし、これで神を倒すのは、よほどの奇跡が起こらなければ不可能だと、実戦を通して学んだが。

そして、聖絶の言霊はエリカもリリアナもまだ使えない。

この秘義の修得には、聖騎士パラデイーノ級の武芸と魔力が要求される。

わずかに知られる使い手の名も、聖ラファエロ、エリカの叔お父じパオロ・ブランデッリ、黒王子アレクの懐ふところ刀がたなサー・アイスマンなど、生ける伝説に等しい騎士だけだった。

神しん童どうとはいえ、修行なかばの騎士に使いこなせる術ではない。

だが、斉せい天てん大たい聖せいとの戦いで——。

ウルスラグナの加護を授かり、ふたりは不完全だが聖絶を成じよう就じゆさせた。

あれではっきりしたのだ。この術でも神を相手にするのは厳しい。しかし、下げ僕ぼくである神獣に対しては、有効な対抗手段になると。

草くさ薙なぎ護ご堂どうの戦いは、これからますます激しさを増すだろう。

すこしでも役立つために、聖絶の言霊をすぐにでも会え得とくしなければならない。また、そうしなければ、身近なライバルたちに差をつけられてしまう。

「ちょっと不愉快な話題だけど、忌き憚たんのない意見をぶつけ合いましょう」

三週間ほど前、エリカはリリアナに言ったものだ。

旧友兼ライバルを本ほん郷ごう通り沿いのカフェに誘い、ふたりきりでコーヒーを飲みながら。

「わたしたちと恵え那なさん、修行の程度は変わらないはずだけど、あの人の降こう臨りん術じゆつはとんでもないわよ。あれを使ったら、彼女は欧州でいう聖騎士パラデイーノ……叔父さまや聖ラファエロに並ぶ、別格の存在になるわ」

「ああ。認めたくはないが、それは事実だな」

リリアナも眉まゆをひそめながら、うなずいた。

欧州魔術において、神がかりは降臨術と呼ばれる。しかし、使い手がここ三百年に誕生したという話は聞かない。清せい秋しゆう院いん恵那は、その秘術を意のままに操る逸いつ材ざいなのだ。

紅と青の騎士はどちらも負けず嫌い。

だが、それゆえに他者を過小評価する愚おろかさとは無縁だった。

「あまり目立たないが、万ま里り谷や祐ゆ理りの潜在能力もかなりのものだぞ」

「ええ。あの子はプリンセス・アリスと同系統の霊力者だものね」

　ウルスラグナの加護を得て、明確になった事実だ。

　あのときの祐理は、白き巫み女こ姫ひめすら超える霊視力と精神感応力を駆使してみせた。

「この先、プリンセスの域に達するとは思わないけど。世にふたりといない巫み女ことまでいわれる方に似ているだけでたいしたものだわ。ああ、そういえば陸りく家けの御おん曹ぞう司しも護堂のまわりを最近うろちょろしているわね」

　偏へん屈くつな麒き麟りん児じの顔も、エリカは思い出した。

　一応は同世代だが、彼はまだ体もできあがっていない子供なのだ。いずれ青年に成長し、自分やリリアナ以上の屈強さを得る。

　神殺しの師より、いくつもの奥おう義ぎも伝授されていくだろう。

　純粋に武芸だけ比べるなら、数年以内に大きな差が生まれる可能性は高かった。

「厄やつ介かいな競争相手が多いと共通認識を持ったうえで、リリィに相談があるの。わたしたち、そろそろ聖騎士の階きざはしに足をかけてもいい頃だと思わない？」

　紅と青の騎士は、かくして共通の目的を持ったのである。

　ふたりは欧州の仲間と連絡を取り、協力して情報収集に当たった。

　四年前、サルバトーレ・ドニに託されたらしい『ダヴィデによる勲の書』。その行方ゆくえを追い、アンドレア・リベラが管理者だろうと推測し、ドニ一党の行動予定を調べ、どんな口実で閲えつ覧らんを願うか検討――。

　本当なら、ふたりそろって魔導書を閲覧しにいくところだ。

　しかし、彼女たちには草薙護堂という要監視者がいた。ちょっと目を離すと、すぐに神と戦ったり、新しい少女と親しくなったりする。

　見張り兼護衛がそろって不在になるのは、やはり避けたい。

　結局、エリカがイタリアへ旅立ち、リリアナが留守を守ることになった。

　魔導書の必要な部分は、全て書しよ写しやして持ち帰るという約束で。もちろん、いくらでも反ほ故ごにできる取り決めだ。

　それでも、リリアナがエリカを送り出したのは——

　銀髪の旧友は認めないだろうが、十数年かけて育はぐくんだ信頼関係の賜たま物ものだろうか。何だかんだで、ふたりは腐くされ縁えんの幼なじみなのだ。

　サルバトーレ・ドニの許しを得たのは一週間前。

　魔導書の書写を終えたエリカは、ミラノの実家へ向かった。やはり聖絶の使い手である叔お父じの教えを受けるためだ。

　偉大な先せん達だつに導かれながら、研けん鑽さんを積んだ。

　わずか一週間の特訓。しかし、付け焼き刃ではない。四年の間、ひそかに鍛たん錬れんしつづけてきた秘儀である。じっくりと魔導書を読み解き、良師についたことで、エリカの理解は一足飛びに深まった。とはいえ、やはり最高難度の秘儀。

　エリカの聖絶はまだ不完全であった。それでもアテナの再来を知った。

　術が不完全なまま帰すのを叔父は渋ったが、何とか説とき伏せた。このようにして、エリカは日本とイタリアを行き来したのである。

「本当に世話の焼ける人なんだから——！」

　口では愚ぐ痴ちりながら、エリカは微笑を浮かべていた。

　今度の敵はアテナ。さらに神しん祖そまで。

　そうでなくては、エリカ・ブランデッリの愛する少年ではない。彼はいつだって闘争に愛される、生まれながらの戦士なのだから。

エリカはひとり、アクアラインの路上を風の速さで疾しつ駆くする。

疲ひ弊へいした恵那、戦闘では無力な祐理、そしてリリアナを敵から引き離すためだ。

エリカに並行して、グィネヴィアと一体化した水竜が飛ひ翔しようする。

高度は上げずに低空飛行。前肢をのばせば、たちまち爪つめで切り裂ける高さと近さ。しかし、最初の攻撃はそちらではなかった。

白き水竜は大きく口を開き、息ブレスを吐き出した。

ただの吐息ではない。無数の氷片が混ざった、凍れる風。喰くらった生き物は無惨に切り刻まれ、しかも、またたく間に凍りつく。

まさしく魔性の凶風。すさまじき竜の吐息ドラゴンブレス。

直撃を受けたら、無事では済まない。エリカは足を止め、言こと霊だまを唱となえはじめた。

ただの魔術ではなく、もちろん聖絶の言霊を使うために。

「七人の祭さい司し、各おの々おの角つの笛ぶえを吹き鳴らし、甲かつ冑ちゆうのいくさ人はこれに先立ちて進軍す！」

エリカの体から、聖なる紅あかい光が放たれた。

この光が氷の息を跳ね返し、守護してくれる。しかし、おそろしく冷たい。氷片はどうにか防げるものの、冷気は聖なる光を貫つらぬいて侵入してくる。

今、エリカの肉体は氷結させられる寸前だった。

骨まで震えるどころではない。骨すらも凍りつきそうな冷気。それでも歯を食いしばり、詠えい唱しようをやめなかった。

「邑まちを七度巡り、七度目に祭司らは角笛を吹き、ヨシュアは告げたり。主はこの邑を汝なんじらに賜たまれりと——」

さらに、水竜は前肢を叩きつけてきた。

その掌てのひらには四本の爪がある。剣かと見まごうほど鋭く、長い。

これをエリカは大剣に戻したクオレ・ディ・レオーネで払いのけ、楯たてで受け止める。呼吸が荒くなる。精神集中も破れそうになる。

聖絶の言霊を使いながら白はく兵へい戦せんもこなすのは、やはり至し難なんの業わざだった。

「生ける者、男も女をんなも若きも老いたるも分かちなく悉ことごとく刃やいばにかけ滅ぼし、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで及ぼせり！」

だが、エリカは詠唱をやめない。

何のプレッシャーもなければ、一応は聖絶を使えるようになったが――。

それでは意味がない。無防備な己をさらさなければ成功しない術など、実戦では何の価値もない。だから、必死に剣と楯を振るった。

「このジェリコに邑を建つる者、主の御前にて呪のろわるべし！　礎いしずえを据すえなば初うい子ごを失い、門を建てなば末すえ子ごを失わん！」

ダヴィデの書より授かった言霊――。

エリカは全て唱え終えた。水竜の息と爪、さらには時折叩きつけられてくる長い尾、びっしりと牙きばの生えた顎あご、体当たりなども凌しのぎながら。あとは呪力だ。

聖絶を解き放つために、エリカが持つ全呪力を爆発させねばならない。

しかし、この猛攻をさばきながらできるか？

斉天大聖戦のときはウルスラグナの加護によって、普段よりも大量の呪力を得ていたので問題なかった。今はちがう。それでもやら

ねば——！

「それに、そろそろ加勢があってもいい頃ですものね……！」

　自らを勇気づけるように、エリカは小声でささやき。

　そして、微笑した。期待どおりに青き光の矢が飛来してきたからだ。

　これを期待して、わざわざ彼女たちと距離を置いたのだ。神しん祖そグィネヴィアの意識から、もうひとりの騎士の存在をすこしでも消させるために。

「ダヴィデの哀あい悼とうを聞け、民たみよ！　ああ勇士らは倒れたる哉かな、戦いの器うつわは砕けたる哉！」

　エリカの苦闘を遠くに眺めながら、リリアナは言霊を唱えていた。

　こんなことだろうと思った。あの秘儀を一週間で完全にできるはずがない——。旧友兼ライバルの見み栄えっぱりに肩をすくめながら。

「殺あやめし者の血を呑のまずして、ヨナタンの弓は退かず！　勇士の油を喰くわずして、サウルの剣は虚むなしく還かえらず！　ああ勇士らは戦いのなかに倒れたる哉！」

　数百メートル先のアクアライン路上。

　紅き光につつまれながら、エリカは剣を振るい、楯を構える。これを上空より白き水竜が襲っていた。氷の息が吹き荒れ、爪そう牙がが閃ひらめく。

　ここでリリアナが選ぶのは、もちろんあの武器だった。

「ヨナタンの弓よ、鷲わしよりも速く獅し子しよりも強き勇士の器よ。今こそ我が手に来きたれ！」

　青き光で構築された長弓と、青き光の矢。

　神をも傷つける武具がリリアナの手に顕あらわれる。これなら神獣にも通用する！　目をすがめ、狙いをつけようとしたとき。

「恵那さんっ。まだ動くのは無理です！」

「大丈夫……。あとちょっと刀を使うだけだし、祐理に手当てもしてもらったし……」

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを杖つえによろよろ立ちあがる恵那を、祐理がなだめていた。

　力尽きた神刀の使い手に、もうひとりの媛ひめ巫み女こは必死に治ち癒ゆの術をかけていたのだ。

　外傷を癒いやす術だけではない。体の内部の損傷を治療する術。失った体力を一時的に恢かい復ふくさせる術など、何種類もの治癒術を。

　神がかりの連続使用は、使い手の命を蝕むしばむときさえある。

　恵那自身が語っていたのを、リリアナは思い出した。二日つづけて神がかりし、暴走までした。それがとてつもない負担だと、祐理は承知しているのだろう。

「リリアナさん……もう一ひと太た刀ちだけ、恵那もつきあうよ……」

「なら手早く済ませて、草薙護堂と合流しよう。ぐずぐずしている暇ひまはないからな」

　止めても無駄と悟り、リリアナは改めて弓矢をかまえた。

　標的は遠くエリカを苦しめる水竜。光の矢は二本。十分に援護できるはず——いや。これで仕留めるつもりで撃つ。決意と共に二に矢しを放った。

　恵那も天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを槍やり投なげの要領で投じる。

　普通の太た刀ちなら、こんな使い方はできるはずない。しかし、稀き代たいの神刀はいかなる神秘の恩恵か、矢のごとく一直線に飛んでいった。

　リリアナの放つヨナタンの弓。さらに恵那の天叢雲剣まで。

　エリカを苛さいなんでいた白き水竜はそれらの攻撃にさらされて、守護の魔術を展開した。白き光の紋様が竜の前に顕れ、青き矢を受け止める。天叢雲剣は竜の尾が払いのけた。

　ただの神獣にできる芸当ではない。

　さすがは神祖の宿る竜。賛さん嘆たんしながら、エリカは雄お々おしく微笑んだ。

　勝利を確信した雌めす獅じ子しの笑み。

　今の防御はさすがだが、より近くにいる敵に一息つかせてしまった。

　深く——。深く息を吸い込む。

　その呼気を体の隅々にエリカは行き渡らせた。

　全身の細胞が燃え立つような、激しい熱さが生まれる。これが呪力だ。生まれた力を体の中心に集める。東洋医学でいえば臍せい下か丹たん田でん、チャクラでいえばスヴァディシュターナである。

　そして、爆発させた。

　動き出す寸前だった秘儀に、全呪力を一いつ気き呵か成せいに注ぎ込んだのである。

　グィネヴィアが見せた、ほんのわずかな隙。それが聖絶を完成させる、最後のピースになってくれた……！

「兵つわものどもよ！　今こそジェリコに角笛を吹き鳴らせ！」

　即興で言霊を継ぎ足し、術の発動をうながす。

　聖絶——『聖なる殲せん滅めつの特権』がエリカの身に宿る。体より放たれる紅あかい光は、今や白き水竜を突き飛ばす物理的な力となった。

『なんですって⁉　これはまさか——！』

　ギュアアアアアアアアアッ！

　グィネヴィアの声と咆ほう哮こうが、竜の口より同時に発せられる。紅き光にいきなり押しのけられて、驚きよう愕がくしたのだ。

　かまわずエリカは、殲滅の特権を目に見える形に具現化させた。

　甲かつ冑ちゆうだ。まず、小さな鎖くさりを編みあげた鎖くさり帷子かたびらで上半身をよろわせる。次は鈍にぶい鋼はがね色いろの胸きよう甲こうに、肩当て。堅けん牢ろうな造りの籠こ手てに脛すね当あて。

　全身を守る完全鎧フルプレートではなく、それなりに機動性も確保した部分鎧ハーフプレート。

　エリカ・ブランデッリの美を隠すのは、戦場にあっても罪悪だといえるだろう。だから、この形を選んだ。魔剣と楯たてにも殲滅の特権をあたえ、武装は完成した。



「恐るるなかれ、おののくなかれ。いくさ人を悉ことごとく率い、攻めのぼれ！」

　エリカは言霊を発して、空へ飛びあがった。

　跳躍したのではない。聖なる殲滅者は、短時間ならば天あま翔かけることも許される。

　一気に百メートルほど上昇し、下方を見おろす。グィネヴィアの宿る水竜が翼を広げ、今まさに飛び立たんとしていた。

　追撃をかける気なのだ。だが、もう遅かった。

「我は今ここに、獅子の心臓クオレ・デイ・レオーネを示さん！　全ての騎士は我を畏おそれ、我を讃たたえよ！」

　獅し子しの心臓とは、何者にも屈せぬ勇気を意味する。

　この言霊を引き金に、エリカは紅い光をまき散らしながら急降下した。天より獅子の星座が舞い降り、襲いかかるように——！

　白き竜との激突。敵の巨体を跳ね飛ばす。

　喉のどを狙う。剣を突き立てる。抉えぐる。抉る。抉る。抉る！

『く……なんて乱暴な！　この場は退ひくしかないようですね！』

　キュオオオオオオオオオオン!!

　グィネヴィアは負け惜しみを叫び、竜は断だん末まつ魔まの悲鳴をあげた。

　神獣の巨体はさっきのクラーケンと同じように、海水となって吹き飛んでいった。また、その体から白い光が飛び出し、空へ駆けあがっていった。

　グィネヴィアは逃したか——。しかし、エリカに追いかける余力はない。

　ふぅと深く息を吐き出して、天翔ける白き魔女を見送る。同時に秘儀も終わった。紅き光も鎧よろいも消え失せ、全身を疲労と倦けん怠たい感かんが襲う。

頭もぼーっとして、上う手まく考えをまとめられない。

まさか、寝起き以外にエリカの智力を鈍にぶらせるものがあったとは。

「今日のところは及きゆう第だい点てんだけど、もっと磨きをかけないと駄目ね……」

頭を振りながら、エリカはつぶやいた。

かつて叔お父じパオロは、同じ突撃をもってランカスターの古城を崩壊させたという。

さらに、聖なる殲滅者となったまま一昼夜を過ごし、まつろわぬ三女神エリュニエスが解き放った六匹の神獣より、眠れるプリンセス・アリスを守り抜くという伝説まで成し遂とげた。

後継者として、後おくれを取るわけにはいかないのだ。

だが、今は草くさ薙なぎ護ご堂どうを追いかけなくては。エリカは疲れ切った体に鞭むち打うって、きびきびと仲間たちのもとへ歩きだした。

本当はまっすぐ歩くのも難しい状態ではあった。

しかし、弱った姿を衆しゆう目もくにさらすわけにはいかない。エリカ・ブランデッリはどんなときでも華麗で優美、才さい気き煥かん発ぱつであるべきなのだから！

第７章　我が仇敵に訣別を

1

「フ……あなたの家か臣しんは、あの男の婢はした女めとよく渡り合っているようだな」

　ふたりきりの砂浜で、不意にアテナは微笑した。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうとの決戦がいよいよはじまるという、その矢先であった。

「はしため？　グィネヴィアのことか？」

「そのような名であったか？　かつて白き太たい母ぼ神しんであった魔女、聖せい杯はいの継承者よ」

　護堂の問いに、適当な答えが返ってきた。

　アテナは何らかの千里眼で、グィネヴィアの動向を偵察したのだろう。おそらく無ぶ粋すいな邪じゃ魔ま者ものの乱入を警戒するために。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎには、もうひとりの相棒が危なくなったら必ず教えろと厳命してある。

　向こうにも万一のときは草薙護堂の名を呼べと言った。『強風』の化け身しんで助けに行けるからと。まだどちらの報しらせもない。

　恵え那なはがんばって、神しん祖そを足止めしてくれているようだ。

「婢女ってのはあんまりな言い方だな。それに、あの男って誰だよ？」

「神殺しの宿敵たる英雄よ。妾わらわも所在は知らぬが、この島のどこかに眠っているらしい」

「……もしかして、最強の《鋼はがね》ってヤツか」

　前に古老たちから聞いた話を、護堂は思い出した。

「知っていたか。先ほどの一撃といい、あなたも成長を遂とげているのだな」

「こういうのは成長じゃなくて、『深みにはまった』とかいうんだよッ。それにしても、グィネヴィアにはそんな裏があったんだな……」

　アテナの評価に文句をつけてから、護堂は言った。

「今まで仕組んできた悪だくみは、全部そいつを叩たたき起こすためか？」

「無論だ。あなたも気をつけよ。あの男は全ての神殺しを滅ぼす宿命の戦士。目覚めしあとは、魔王殲せん滅めつの戦いをはじめるはず。そうなれば、あなたは必ず死ぬ」

　突然の宣告に、思わず護堂は反論しかけた。

　やってみなければわからないだろう。俺は平和主義者だけど、あっちが襲ってくるなら迎え討つくらいはするぞ——。

　しかし、アテナの幼い容よう貌ぼうはかつてないほど厳げん粛しゅくだった。

　その厳しさに言葉を呑のむ。すると、女神は唇くちびるの端をにやりとゆがめた。

「まあ、それも妾との対決に勝利できればの話よ……。知っているか？　天寿をまっとうした神殺しはほとんどいない。その多くが何処いずこかのいくさ場で斃たおれていった。あなたも過去の同どう胞ほうにならうがいい！」

「だったら、俺は数少ない例外になってやる。いくぞ！」

　両者の闘志は静かに高まっていた。

　ならば、この昂たかぶりにまかせて相打つまで。アテナがふたたび蛇へびの目となり、護堂は身がまえる。雷鳴が轟とどろいたのは、このときだった。

「ちっ！　やはり来たか、ランスロット・デュ・ラック！」

　舌打ちと共にアテナは天を見あげた。

　空がおそろしい速さで雷雲におおわれていく。さらに、アクアラインの方角から白き稲いな妻ずままで飛来してきた。

『警戒せよ！　あやつは己オレと同じく純血の《鋼》ぞ！』

　天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎまでが右腕から警告を発する。

　数々の予兆が只ただ者ものならずと告げる稲妻は、天あま翔かける神馬にまたがっていた。

　身にまとうのは白き甲かつ冑ちゆう。兜かぶとの面めん頬ぽおをおろしており、顔は見えない。そして、手に持つのは白金プラチナの刃やいばが輝かしい長ちよう槍そう——。

　あの色、あの光は昨日も見た。白き『剣』の恒こう星せいと同じ輝きではないか！

「おい、あれってもしかして……⁉」

「うむ。彼奴きやつこそ軍神ランスロット。あの男の配下にして、白き婢女の守護者。そして、我らを斬り刻まんとした『剣』の担にない手よ！」

　とっさに訊たずねると、アテナは苦々しげにうなずいた。

　ランスロット。円卓の騎士というヤツか。

　愕がく然ぜんとする護堂の頭上に、凛り々りしく男らしい声が降ってきた。

「アテナよ。貴女あなたの生が尽きぬうちに久きゆう闊かつを叙じよせて、よろこばしく思う。そして神殺し・草薙護堂よ。女神よりご紹介をたまわったが、重ねて名乗ろう。余の名はランスロット・デュ・ラック。湖みずうみの騎士と人は呼ぶ」

「……俺の名前、あんたに教えた覚えはないぞ」

　堂々たる名乗りに、護堂は仏ぶつ頂ちよう面づらで応じた。

　こいつとグィネヴィアが今回の黒幕なら、愛想よくする理由はない。

「これは失礼した。卿けいを侮あなどるつもりはなかったのだが……。許せとも言えぬ身だが、謝罪いたそう。物陰より卿らを噛かみ合わせ、漁ぎよ夫ふの利りを狙ねらう。たしかに武人の風上にも置けぬ振る舞い。まこと、慚ざん愧きに堪たえぬ」

　何だ、こいつは？　護堂は首をかしげた。

　やけにすがすがしい男ぶりだった。記憶を失っていた頃のウルスラグナと同じく、妙な魅力にあふれているというか――。

「フン、たぶらかされるな。たしかにあやつは剛ごう直ちよくな武人であるが、あの婢女にせがまれるまま武勇を振るう愚おろか者よ！」

「たしかにそうかもしれぬ。だが畢ひつ竟きよう、剣とはそのような道具であろう」

　アテナの決めつけを認めながら、ランスロットは愛馬の腹を軽く蹴ける。

　白き神馬はゆっくりと、砂浜へ降下をはじめた。

「鋼の英雄とは、すなわち剣の神。ひたすらに戦うのみが剣の性。そして、余は我わが刃やいばを麗うるわしき女人のために捧ささげんと誓ったのだ」

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎはランスロットを同族と呼んだ。

　闘争以外にこだわりを示さない。それこそが純血種の特徴なのだ

ろう。

「ふふふ。血と鉄風に彩いろどられるいくさ場に、わずかな潤うるおいを求めんとする騎士の酔すい狂きよう。笑ってくれてかまわぬぞ」

　こんなことを言うが、女にたぶらかされた駄目男の雰ふん囲い気きは微み塵じんもない。むしろ色好みが高じて、わざわざ難しい遊びに手を出した粋すい人じんめいている。

　このあたり、さすがは神の威い風ふうというべきか。

「しかし、卿らのいずれが成したことかはわからぬが——」

　降下してきたランスロットの神馬は、四本の足を砂浜につけた。

　槍やりを持たぬ方の手に、彼は短い錫しやく杖じようを持っていた。双頭の蛇をかたどったものだ。これを小さな花でも愛めでるようにもてあそぶ。

「聖杯の働きが完全に止まっているな。ふむ……かの器うつわを御ぎよす力、愛いとし子ごより預かりはしたが、これでは意味がない」

「ならば軍神よ、どうする？」

　女神の威厳をみなぎらせながら、アテナは言った。

　神こう々ごうしい闘志が幼い美び貌ぼうを輝かせる。意味するところは明らかに挑戦。

　対してランスロットは、鷹おう揚ようにつぶやいた。

「うむ、仕方あるまい。貴女の胸を切り開き、我らが聖杯を引きずり出そう。そのうえで無二の神器を甦よみがえらせるべく、手を尽くすとしよう」

　飄ひよう然ぜんたる殺害宣言。やはり『まつろわぬ神』、一ひと筋すじ縄なわではいかない曲くせ者ものだ。

　護堂は強く拳こぶしを握りしめ、ランスロットをにらんだ。

「見れば、卿らはこれより名誉を賭としての決闘に臨のぞむ模様。そこに割り込むなど、騎士にあるまじき無ぶ粋すい。だが、余も座して待つのには少々飽きた」

　白き騎士は、長槍の穂先を天にかかげた。

　その仕草に彼の猛たけり、抑おさえがたい闘気の高まりがかいま見える。

「グィネヴィアがおれば、余の介入に苦言を呈ていすであろうが。卿らが力尽き、いずれかが斃たおれてから事を起こせばよいと。しかし、槍と馬を得た男子がいつまでもそのように振る舞うわけにもいかぬ。アテナよ、我が槍をふたたび馳ち走そうつかまつりたい！」

「よかろう！　ならば草薙護堂よりも先に、あなたへの借りを返してくれる！」

　アテナは鋭い蛇の目を向ける。ランスロットは白き兜で受け止める。

　そして、護堂はスッと両者の間に割り込んだ。

「アテナだけがあんたの相手じゃないぞ。俺ともまとめて勝負してもらう」

「ほう？」

「どういうつもりだ、草薙護堂？」

　白騎士は驚き、女神はとがめる。護堂はかまわずにつづけた。

「これは俺とアテナの勝負なんだよ。割り込んできた邪魔者を追い払うんだ。俺が協力しちゃいけないって決まりはない。いいや、むしろその方が自然だろ」

「自然だと？　ははは、卿は面白いことを言う！」

　護堂の宣告に、ランスロットは兜を揺らして笑った。

　嘲ちよう笑しようではない。いかにも痛快そうな、心からの笑いであるように聞こえた。

「神と神殺し――不ふ倶ぐ戴たい天てんの仇きゆう敵てき同士が共闘するなど、自然であるものか！　しかし、そのように思う心根、武もの士のふとして合が点てんがいかぬでもない。卿の参戦、余は歓迎するぞ」

　ランスロットは二対一を平然と受け容いれた。

　さすがは軍神、器がでかい。だが、実のところ彼の意見など重要ではない。

　問題は誇り高き女神さま。そちらを見て、護堂は驚いた。アテナは愕然としていたのだ。

「……あなたは知っているのか？　かつての戦い――あの男を苦しめた者たちがいかなる振る舞いを見せてきたのかを……？」

「――？　何のことだよ？」

　訳のわからないことを言われて、護堂は眉まゆをひそめた。

「それよりも、俺はこいつをとっとと追い払いたい。だから、あんたといっしょに戦いたいんだけど、ダメか？」

「いいや……。考えてみれば、よい機会かもしれぬな」

　愕然としていたのは、ほんの一瞬。アテナはすぐに不敵さを取り戻した。

　護堂は思わず、見まちがいだったかと疑った。

「あなたにいくさの仕方を指し南なんしてくれよう。足手まといになるでないぞ！」

「それはこっちのセリフだ。半病人みたいなヤツがいきがるな！」

　そろって軍神をにらみつける、アテナと護堂。

　死力を尽くして戦ったこともある。共に旅したこともある。しかし、肩を並べて戦うのは初めてだ。そして、護堂は内心ホッとしていた。

　アテナは誇り高い。二対一での戦いなど、受け容れないのではと

不安だったのだ。

　共闘に応じてくれた理由は何だろう？　ランスロットが手て強ごわいからか、名誉よりも効率を選んだのか。あるいはもっとべつの理由からか。

　いずれにせよ、これからはじまるのは前代未み聞もんの死闘であった。

2

「草くさ薙なぎ護ご堂どう、彼奴きやつの神しん刀とうはひとまず警戒せずともよい！」

　まずアテナは、愛用の武器を呼び出した。死神の道具めいた鎌かまだ。

　しかし、いつもの戦いとちがい、背丈は伸ばさない。幼い姿のままだった。力の消しよう耗もうを抑おさえたいのかもしれない。

「あれは、大地の精気を糧かてとする武具。妾わらわの呑のんだ聖せい杯はいがふたたび動きださぬ限り、あの刃やいばが振るわれることもない」

「おお。すでに見抜いていたとは、さすが智ち慧えの女神よ」

　アテナに喝かつ破ぱされて、ランスロットは馬上より賛さん嘆たんした。そして、

「ならば、いたずらに主あるじの忘れ形見を振るうにはおよばぬか」

　槍やりを宙へ放り投げる。恐るべき武具は雲の彼方かなたへ飛んでいった。

　ランスロットの手に逆さか棘とげ状じようの槍ランスが顕あらわれる。

「うむ。やはり、こちらの方が手になじむ。ではアテナよ、我が槍を受け給たまえ！」

「ハ！　あなたに武で劣おとる妾わらわと思うでないぞ！」

　かくして、軍神と女神による白はく兵へい戦せんがはじまった。

　騎士を乗せて、白馬は走りだした。全速力ではなく、ゆるい駆け足程度だ。

　向かう先には、鎌を持つ女神アテナ。ランスロットは馬上より槍を突き込んだ。

　一撃目、二撃目、三撃目までは、どうにか護堂にも見えた。だが、そこから先はもう目では追えない。

　地面に千の穴を穿うがつ豪雨のごとく、怒ど濤とうの連続突きで幼い姿の女神を狙ねらう。

　アテナは小刻みに動いて避けながら、死神の鎌を振りまわす。

　馬上にいる敵の有利をくつがえしたいのか——。鎌は白馬の前まえ肢あしや胸、頸くびを襲う。また、鐙あぶみを踏むランスロットの足や、槍を振るう腕に襲いかかったりもする。

　しかし、アテナの鎌はことごとく防がれた。

　まず、ランスロットの駆る神馬が機敏であった。己おのれに刃が迫ると見れば、ただちに跳びすさる。あるいは、主あるじの槍がアテナの鎌を払いのけやすいよう、すこしだけ横や後ろに動いたりして、巧たくみにポジションを移す。まさしく人馬一体の境地。

　また、ランスロットの甲かつ冑ちゅうも堅けん牢ろうであった。

　白き鉄甲は彼のほぼ全身をよろっている。アテナの黒き鎌が腕や足を襲っても、籠こ手てが、脛すね当あてが、あるいは鎖くさり帷子かたびらが跳ねかえすのだ。

「俺を使って、跳べ！」

　護堂は叫びながら、飛び出した。

白き騎士と神馬の前へ。鎌を振るうアテナよりも、さらに前へ。

「おお。太た刀ちも抜かずに騎士の前へ出るとは勇ゆう敢かんな！」

一瞬、ランスロットの注意がそれる。

このときを見逃さず、アテナが動いてくれた。軽やかに跳躍し、護堂の肩を踏む。ここを踏み台にして、二度目の跳躍。

馬上のランスロットよりも高く跳びあがって、アテナは鎌を振りかぶった。

「冥めい神しんのあたえる死よ、我が刃に満ちよ！」

言こと霊だまと共に、渾こん身しんの一撃を白騎士の胸へ打ち込む。

今度こそはじかれなかった。漆しつ黒こくの鎌は、白き胸きよう甲こうに浅くめり込んだ。刃を叩たたきつけたあたりが黒く腐ふ食しよくしている。

「ぬう――っ！」

しかし、ランスロットは上半身を大きく一振り。

それだけで鎌は胸甲からすっぽ抜け、アテナの体は紙細工のように飛んでいく。

正面衝突なら、騎士の神は戦いの女神も寄せつけないらしい。アテナが猫のごとく着地するのを見て、護堂は身がまえた。

軍神が次に関心を向けるのは、もちろん自分に決まっている！

「徒か歩ちの兵を蹄ひづめにかけるは戦場の習ならい。いささか不作法ではあるが、許せ神殺しよ！」

一声叫んで、ランスロットは愛馬の頸をたたいた。

ヒヒィィィンッと高らかに嘶なき、白き神馬は後ろ肢だけで棹さお立だちになった。

自由になった前肢を、護堂の頭上で振りあげる。

　蹄てい鉄てつをはめた悍かん馬ばの蹄は、鉄のハンマーに匹敵する武器。これがふたつも降ってくる。

　しかも、相手はただの馬ではない。体格こそ普通だが神獣なのだ。カンピオーネのバカみたいに頑丈な体も、異様な脚力でたやすく粉々にできるはず——！

　護堂はとっさに両腕を上げ、ボクシングのガードを真ま似ねた。

　神馬の蹄の前では、紙切れ程度の防御力しか期待できない格好。しかし。

　ガキン！　鉄が鉄をはじく異音。

　護堂の両腕は、今や鋼はがねの硬度を備えていた。また、神馬に全力で踏みつけられても、微動だにしない剛ごう力りきを宿していた。

「鉄腕にして膂りよ力りよく無む双そう！　それが卿けいの権能か!?」

　ランスロットが槍を突き込んでくる。

　速すぎて見切れない。だが、おそらく狙ねらいは草薙護堂の額ひたい。カンピオーネ特有の勝負勘かんで当たりをつけ、護堂は右腕で顔面をかばった。

　ガキン！　ふたたび異音。掌てのひらが槍の穂先をはねのけた音だ。

「上う手まくいってくれたか……」

『己オレが助すけ太だ刀ちしているのだぞ？　当たり前であろう！』

　護堂のつぶやきに、天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎの念が応じる。

　力で敵に劣るとき、ウルスラグナ第二の化身『雄お牛うし』は怪力を授けてくれる。

　さらに、天叢雲剣には敵神やカンピオーネの権能を吸収し、護堂

に貸たい与よする力がある。このとき吸い込んだのは、白き甲冑の堅牢さ。

結果、両腕は鋼の硬度を得た。そこに『雄牛』のバカ力が加わる。

護堂はブンと左腕を振りまわし、白馬の胸に殴なぐりかかった。

見よう見まねの左フック。しかし、この鉄拳は四、五階建ての雑居ビルさえ崩壊させるかもしれない。

威い力りよくを察したか、ランスロットの神馬は大きく跳びすさった。

「なるほど……草薙護堂よ。どうやら、あなたはなかなかに役立つ道具——鋼の類たぐいを手に入れたようだな」

さっき放り投げられたアテナがつぶやいた。

軍神と護堂の方には寄ってこない。着地した場所にうずくまり、砂浜に手を当てる。

「善よき哉かな！　ならば、妾わらわも太たい母ぼ神しんの力を示さねばならぬな！」

この直後、地震が起こった。

すさまじい縦たて揺ゆれ。戦場となっていた砂浜は、激しく揺さぶられた。

護堂の平へい衡こう感覚ではもう立っていられない。とっさに両手と両膝ひざをつき、四つん這ばいになった。これが街中なら、家々が倒壊してもおかしくはない。

ゴゴゴゴ——と、大地の鳴動する音が聞こえそうなほどの震度だった。

一方、ランスロットはさすがに倒れなかった。

天変地異にも負けず、みごとに乗騎を御ぎよしている。いや、それどころか彼の神馬は宙に跳びあがり、そのまま飛ひ翔しようをはじめた。

「……そういえば、さっきも飛んでたもんな」

　四つん這いのまま護堂はつぶやいた。

　ランスロットと神馬が急上昇するさまは、ロケットの打ちあげさながらだ。ひたすらまっすぐに、雲海を目指している。これでは地震の意味がない。

　だが、いぶかしむ護堂の前で、アテナはすっくと立ちあがった。

「ククク……湖みずうみの騎士よ。地上を駆ける限り、あなたは天下無双の騎士やもしれぬ。だが、天空においても同じか試してくれよう！」

　大地の揺れが収まり、不敵に笑うアテナの背に翼が生えた。

　茶色っぽく、無数の斑まだら模様が入った翼だ。天使の羽根じみた純白ではない。そうか。護堂は立ちあがりながら、理解した。

　蛇へびだけがアテナの化け身しんではない。あれはフクロウの翼だ。

　夜空を自在に飛びまわる聖鳥。智ち慧えの象徴。そして、冥めい府ふより来きたる死の使い。女神アテナが好む、猛もう禽きんとしての姿！

「夜よ。冥府の女王が統すべる時間よ。妾の招きに応こたえ、天をおおえ！」

　天に人差し指を突きつけ、アテナが命じる。

　たちまち光が消え失せた。まだ昼前だというのに太陽は隠れ、夜になったのだ。

　この浜だけの天変地異なら、あとで真実を隠いん蔽ぺいするとき楽でいいのだが――。護堂は思わず、神様以外の何者かに祈った。

「おお。天地冥界の女王は闇やみを呼んだか！　ならば、余も同志たる稲いな妻ずまを招き、返礼とせねばなるまいな！」

　上空からランスロットの声が降ってくる。

　途端に、白い稲光がつづけざまに閃ひらめき、夜空をずたずたに切り裂きだした。

　白騎士の登場時に集まった雷雲の仕し業わざだ。神とカンピオーネの戦いもデタラメだが、神様同士の内輪もめはもっとひどい——。

　護堂は天変地異の連続に、心からあきれた。デタラメすぎる。

　そんな感想を知らぬアテナは、フクロウの翼を広げて飛び立った。なめらかな飛翔。氷上をすべるように夜を渡っていく。

「天空の鳥王でもある妾の羽ばたきを見るがいい、軍神！」

「ならば、我が雷のほとばしりもご覧あれ、女神よ！」

　雷光が次々とはじける夜空を舞台に、神々の激突は空中戦へ移行した。

　ランスロットと神馬はひたすら直線的に飛ぶ。

　標的たる女神めがけて矢のようにまっすぐ向かい、槍の穂先を突き立てようとする。騎士と愛馬のまわりには稲光がバチバチと閃いている。

　この突撃を、アテナは優美な旋回であざやかに避けた。

　ぬめっとなめらかな軌道。それは海鳥の狩りめいた動きだった。海面に上がってきた魚群を狙い、音もなく下降して嘴くちばしを突き出す——。

「やはりそうか。空はあなたの領域ではないと見える。ずいぶんと隙すきが多い！」

　しかも、突進を避けながら、アテナはランスロットたちの背後へまわりこんだ。

　麗うるわしき御み手てが持つのは銀製の長ちよう弓きゆうと矢。

　ギリシアでの同どう朋ぼう、狩猟の女神アルテミスを偲しのばせる姿で矢を放つ。

「ははは、おっしゃるとおりかもしれぬな。生来の不調法にて、なかなか上う手まい飛び方が身につかぬ。だが、この程度ではまだまだ墜おちぬ！」

　言いざま、ランスロットと神馬は『Ｖ』の字に方向転換した。これでどうにか、背後より放たれた矢をかわす。

　アテナのあざやかな旋回とは好対照な、強引な軌道変更だった。

　飛行速度もガタッと落ちた。そこを狙い、アテナは弓を引く。二の矢はみごとランスロットの白い兜かぶとに当たった。カンと甲かん高だかい音を立てて、はじかれたが。

　女神の意図を察して、護堂はうなずいた。

　地上戦では騎士が有利。しかし、空中戦なら互角と踏んだのだ。

　銀の弓で矢を放つアテナ。夜空を渡るフクロウのごとく、その飛翔は静かで無駄がない。優美でさえある。

　対して、ランスロットの飛翔は不器用だ。

　どうやら一直線にしか飛べないらしい（放物線くらいは描いているだろうが）。

　だから、方向転換もジグザグで『Ｖ』の字になる。最高速度トップスピードではアテナを上まわるも、曲がるたびに減速するため優位をたいして活いかせない。

　とはいえ、甲冑の頑強さもあるので、不利になるほどではない――。

「でも、頭の上でブンブン飛びまわられると、俺が加勢できないんだよな」

　上空の格闘戦ドッグファイトを眺めながら、護堂はつぶやいた。

　怪力無双の鉄腕もあの高さには届かない……いや。何とかなるか。あとは、どうやって弾を調達するかだが。

　護堂がきょろきょろと砂浜を眺めまわしたときだった。

「軍神ランスロット……あなたの鋼を妾の武具で破れぬのはわかった。しかし、この一いつ矢しはちがうぞ。これは矢に見えて矢に非あらず。冥界の女王が放つ、死への誘いざない。すなわち、死そのものである」

　突進してきたランスロットを、アテナが軽やかな飛行で回避。さらに白騎士の頭上へ急旋回しながら、叫んだのだ。

　女神の右め手ては、銀の長弓に矢をつがえていた。

　矢羽はフクロウの羽根。鏃やじりは黒こく曜よう石せきを削けずったもの。まるで石器時代の産物だ。

「鋼の英雄はたしかに戦場においては不死。だが、病やまいの前ではどうだ？　あるいは、寿命が尽きればいかに!?」

「む――っ。それを受けるわけにはいかぬようだな！」

　アテナの指が矢を放した。黒曜石の鏃は下方にいるランスロットへ向かう！

　途端に白騎士と神馬の姿が消えた。

　護堂は見た。黒き矢がむなしく空くうを切り、砂浜へ墜ちていくのを。そして、この一帯におそろしく濃い霧きりが発生していくのを。

「な、何だ、こいつは？」

『ランスロットとやらが不死の加護を用いたのであろう』

　護堂の驚きに天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎが回答をくれた。

『あの者、霧にまぎれることで災さい厄やくより護身すると見た。霧は突けぬ。切れぬ。呪のろい殺すこともかなわぬ。まあ、嵐で吹き飛ばす程度はできようが』

「……あいつ、この霧に隠れてアテナや俺を不意打ちできるんじゃないか？」

『それはなかろう。純血の《鋼》に忍びの心得などない。せいぜい

夜討ち朝駆け程度だな。我らのいくさはあくまで華々しく、稲妻のごとく峻しゅん烈れつでなければならぬ。あやつが攻めに転じるとき、必ずや霧は晴れる』

　やはり似たもの同士なのか。我が事のように断言された。

　ならば、逆をいえば、霧が出ている間は猶ゆう予よがあるということになる。あるアイデアが護堂の頭に浮かんだ。今のうちに探さなくては。どこにいった？

　五メートル先も見えない濃のう霧むのなか。カンピオーネの直感に頼るしかない。

　神様の気配——神力を探るのだ。護堂は精神を集中させた。

　上空にわだかまる、巨大な力のかたまり。これはアテナだろう。

　同じく空のどこかで澱よどんでいる、弱々しい力。もしかしたら、これが霧となったランスロットか。なるほど。こうして感じ取れるなら、寝首をかかれる不安はなさそうだ。

　そして、もうひとつ。

　空の神々よりも近いところに、もうひとつ転がっている。

　海に沈んでなければいいのだが。神力の気配を求めて、護堂は濃霧のなかを歩きだした。幸いにも数分後、目当ての物を見つけ出すことができた。

「——冷たい!?」

　砂上から拾いあげて、驚いた。ドライアイスなど比ではない冷たさだった。

「そういえば、さんざん物騒な代しろ物ものだとか言っていたよな……」

　護堂は冷や汗を流した。

　鉄腕でないときにさわっていたら、とんでもないことになったのでは？

　低温火傷やけどで済むとも思えない。もっと深刻な被害を受けたはず……ゾッとした瞬間、あれだけ濃かった霧が一瞬にして晴れた。

『来るぞ、王よ！　あやつめ、雷雲に飛び込みおった。次の一撃であの地じ母ぼ神しんを——否いな、我ら全てを薙なぎ払うつもりぞ！』

　神刀の警告を聞くまでもなかった。

　空に満ちる暗雲は今までどおり。しかし、稲光は一筋も見えなかった。

　力を溜ためているのだろうと、護堂は察した。カンピオーネの勘かんか、さんざん修しゆ羅ら場ばをくぐり抜けた経験値ゆえか、すぐに理解できた。

　空にいるはずのアテナを探す。

　見つけた。フクロウの翼をゆっくり羽ばたかせて、夜空に浮かんでいる。

　しかし、幼い美貌は決死の覚悟でこわばり、目は猛禽のそれになっていた。ここが勝負所だと承知しているのだ。

　護堂は急いで、アテナのいる方向へ走り出した。

3

　嗚あ呼あ。いくさはいい——。

　ひさしぶりの決闘を、ランスロットは存分に堪たん能のうしていた。

　今ひそむのは雷雲のなか。周囲では稲いな妻ずまがバチバチとはじけ、爆はぜ、猛たけっている。彼にとってはなじみ深い光景だ。

　白き神馬といっしょに霧きりとなり、ここへもぐり込んだのだ。

　女人を愛めで、守るのはよいものだ。しかし、それだけでは満たされぬ飢うえがある。最も生を堪能できる時と場所は、いくさ場以外にありはしない。

　生を追うにしても死を得るにしても、弓きゆう馬ばと槍やりは不可欠であろう。

　魔女王たる神しん祖そを千年以上も守護してきた。ついでに、天地をきわめた魔女たちにわずかな助力をあたえるときもあった。

　それなりに楽しき日々ではあった。だが、戦場往おう来らいのいくさ人びとがそのような生き様で満足できようか？　いや、できまい。

　ランスロットは身も心も蘇そ生せいする思いであった。

「神と神殺しを相手に、二対一で武勇を示す。まさしく男子の本ほん懐かい。ふふふ、かつての戦いを思い出させてくれるものだ」

　ランスロットはひとりごち、改めて下界を見やった。

　彼の心眼はふたつの『気』を捉とらえている。

　すなわち女神アテナと神殺し・草くさ薙なぎ護ご堂どう、両者のすさまじいほどの昂たかぶりを。

「このような決闘であれば、いつまでも愉たのしみたいものだが、それは我が流儀に非あらず。一騎駆けをはじめるとしよう」

　霧にまぎれるのをやめた。白き神馬を駆る、雄お々おしき騎士の姿に戻る。

　雷雲のなかで、相棒の頸くびをランスロットはやさしく撫なでた。

「いまだ完全ならぬ余の体は、これ以上の戦いに耐えられまい。この愉ゆ悦えつを長く堪能すれば、心の方も浮き足立とう。愛いとし子ごを置いて去る日が早まるやもしれぬ。やはり潮しお時どきよな」

　つぶやいてから、一気に神力を燃えあがらせた。

　前回、アテナを破った電光の隕石落としメテオストライク。全速全力の一撃をふたたび叩たたき込むために。

　霧と化している間も、準備は行っていた。

　ランスロットが雷の速さ——神速に至るには、大量の稲いな妻ずまを吸収せねばならない。

　だから、こうして雷雲へ飛び込んだのだ。

「今の有様では、只ただ一度の速駆けで力を使い果たすはず。しくじれば敗北となるのは、いつぞやと同じだ。心して駆けようぞ」

　言い聞かせてから、神馬の横腹を蹴けった。

　まず空中のアテナを貫つらぬき、次いで地上の草薙護堂を圧おしつぶす。決めた瞬間、白き騎士と神馬は稲妻の速さで天あま降くだった。

　雷雲より飛び出す、白き隕石メテオとなって——！

　ランスロットの到来を悟って、護堂は全力で駆けた。

　一方、アテナは空中の一点にぴたりと静止し、言こと霊だまを叫んでいた。

「ゴルゴンの楯たてよ、妾わらわを死守せよ！」

　今まで握っていた銀の長ちよう弓きゆうが巨大な楯となった。

　幼いアテナの全身をおおいかくすほどの、長方形の大楯。表面には蛇じや妖ようメドゥサの似姿が彫り込まれている。

　これを天にかざして、アテナは完全防御の態勢を整えた。

　武器を捨て、楯を取った。迎撃しようなどと色気を出せば、すぐに撃げき墜ついされると考えたのだろう。あの攻撃的な女神さまが！

　護堂が驚いた瞬間、白き閃せん光こうが降ってきた。

　それとほとんど同時に、ランスロットと神馬はアテナにぶつかっていた。

　なんという速さ。まさに稲妻、神速の急降下！

　白き神馬を駆るランスロットは片手で逆さか棘とげ状じようの槍ランスを突き出し、逆の手で菱ひし形がたの楯を構えている。甲かつ冑ちゆうの上には戦闘用上衣サーコートをはおり、隙すきのない完全武装。

　そして、全身から電光も放っている。

　すさまじい熱量、衝撃波、超絶的な破壊力までまとう。

　これをアテナは大地を守る天てん蓋がいのごとく、大楯で受け止めたのである。

　槍の穂先がゴルゴンの楯に突き刺さり、抉えぐり抜こうとする。しかし、蛇妖女メドウサの加護を受けた防具は軋きしみながら耐える——。

「ぐぬうッ！　あいもかわらず、すさまじき一撃よな！」

「なんの！　余も賞賛いたそう。我が全力全速の一騎駆けを二度も止めるとは、さすが太たい母ぼ神しんの裔すえ、闘争の女神よと！」

　急降下した軍神と、受け止めた女神のせめぎ合い。

　それは隕いん石せきと地表の激突を防ぐのにも等しい、神域の力比べであった。

　だが、ランスロット有利か。護堂は焦あせりを感じた。

　アテナが死力を振りしぼり、白騎士の墜つい落らくを止めているのは一目でわかる。対してランスロットは、まだ底力を残していそうな雰ふん囲い気きなのだ。

　ランスロットが地上への突撃を完了させれば、大だい隕いん石せきの墜落に等しい惨事となるはず。

　確信した護堂は、思いっきり振りかぶった。

軍神と女神がせめぎ合うのは、百メートルほど上空か。

ならば問題ない。もともと草薙護堂は野球選手で、しかも強きよう肩けんの捕手だった。

快足ランナーの盗塁を何千回阻そ止ししたか、覚えていない。速く、強く、狙ねらいも正確な牽けん制せい球きゅうには絶対の自信がある。

そして、『雄お牛うし』のウルスラグナによる怪力。

これがあれば、必ずあそこまで届く。しかも、ランスロットとアテナは空中の一点でほぼ静止して、全力でぶつかり合っている。

相撲すもうでいう、がっぷり四つの格好。あれなら絶好の的まと。外す方が難しい！

「だあああああっ！」

雄お叫たけびと共に、護堂は黒こく曜よう石せきを投げた。

アテナが放ち、ランスロットの霧化によって避けられた矢。そこから引きちぎった、鏃やじりの部分である。さっき霧のなかで探し当てた一品だった。

石。おそらく人類が得た、最初の武器。

何しろ手に持って殴なぐりかかるだけでいい。投げれば立派な飛び道具だ。

護堂ははじめ、砂浜に転がっているテトラポットを投げるつもりだった。今の怪力なら投とう石せき機きの真ま似ねもたやすい。

しかし、白き甲冑の堅けん牢ろうさを思い出し、鏃のことを思い出したのだ。

渾こん身しんの一投によって、黒曜石は天へ駆けあがる。アテナの大楯に槍をぶつけ、そのまま押し切ろうとしているランスロットの白しろ兜かぶとに命中した。

「ぐふっ！　これは先ほどの――!?」

「おお！　みごとなり、草薙護堂！」

　ランスロットが驚きよう愕がくし、アテナが賛さん辞じした瞬間。

　黒曜石は砕け散り、千の破片となって、騎士の甲冑にはりついていった。さらに、黒い不定形の影が顕あらわれ、ランスロットの肩と背にまといつく。

　その黒さは死そのものに等しかった。

　周囲の夜空と比べても、ひときわ暗いのがカンピオーネにはわかる。

　夜よりも暗き影。黒に似て黒よりも濃い、真性の闇やみ。

　もしかしたら、ランスロットを葬ほうむるために用意されたのかもしれない。何しろアテナときたら、ペルセウス抹まつ殺さつのために休火山を甦よみがえらせようとしたほどだ。

「ぐ、おおおおおおおおお！」

　ランスロットが獣けもののごとく咆ほう哮こうした。

　慟どう哭こくにも似た声。痛みよりも苦しみが叫ばせる類たぐいの絶叫。

　白騎士の放つ神力が大いに弱まるのを、護堂は感じた。おそらく気力も体力もごっそりと削けずり取られたはずだ。

　これによって、隕石墜落メテオストライクの圧力が落ちたのだろう。

　力尽き、押し切られる寸前だったアテナが、ぐっと強く大楯で槍ごとランスロットと神馬を押し返し、言霊を叫んだ。

「我が現うつし身みのひとつ、メドゥサよ！　今こそ怨おん敵てきの時を止めるがよい！」

　大楯に刻まれた蛇妖の似姿。

　美しき乙女おとめでありながら、髪の毛に代わって無数の蛇へび

を頭より生やす。

　彼女の目に黄金の輝きがともり、弱った軍神ランスロットと白き神馬を凝ぎよう視しした！

　刹せつ那な、神馬は石となった。逞たくましき白馬から、今にも走りだしそうな馬の石像に変わってしまった。ランスロットの左腕と左足も、甲冑もろとも石化した。

　これで勝負は決したか――。

　一瞬だけ護堂はそう思い、すぐに考えを改めた。片手片足と愛馬が石になったというのに、騎士は突撃をやめない。尚なおもゴルゴンの楯にぶつかりつづけている。

　アテナを貫き、地上にいる草薙護堂を圧しつぶすために！

「その往おう生じよう際ぎわの悪さ、妾の賞賛に値あたいするぞ！　だが軍神よ、この劣勢をくつがえす術すべ、はたしてあるか!?」

「うむ……ひとつだけならば、な……」

　アテナの呼びかけに、ランスロットは弱々しいうめきで答えた。

　もともと本調子でなかった彼である。そこに冥めい府ふ神しんの『死』を浴びて、体から根こそぎ力を奪われた。指一本動かすのにさえ倦けん怠たい感かんがつきまとう。全ての動きが重い。

　何より寒かった。

　凍死する寸前なら、同じ冷気を味わえるかもしれない。

　このまま横になって死んでしまえば、どれだけ幸福だろう。だというのに、ランスロットは突進をやめない。石と化した愛馬、左手左足に残りすくない神力を注ぎ込んで無理矢理操り、白き隕石メテオでありつづける。

　不思議だ。こんな体なのに、心はこんなにも戦いを欲している！

死地にあるからこそ、散さん華げする火花のごとく勇戦せねばなるまい。それこそが騎士の本領、武人の作法——！

「先に非礼を詫わびておこう。決して貴女あなたを欺あざむくつもりはなかった……」

「む？」

怪け訝げんそうなアテナを押し切るべく、ゴルゴンの楯にぶつかりつづける。

いや、今の状態なら『墜つい落らく』と呼ぶべきかもしれないが。同時に、心眼を上空へ向ける。雷雲よりもさらに上だ。そこに目当ての品が浮遊している。

「この決闘では不要と思い、放りあげただけ。他意はまったくなかったが、是ぜ非ひもなし。他に切り札はなく、そちらの方位へ楯を向ける余力も貴女にはなさそうだ。ならば、都合よく使わせてもらおう……」

「軍神、もしやあなたは——」

理解の色がアテナの美び貌ぼうに広がる。しかし、もう遅かった。

戦いがはじまる直前、天へ投げた神しん槍そう。この刃やいばは雷雲を抜けたところで静止し、今まで所在なげに浮遊するのみであった。

だが、呪じゆ術じゆつの絆きずなで結ばれた主あるじの思念に呼ばれ、すでに動き出していた。

ランスロットはひそかに念じていたのだ。

——来きたれ、救きゆう世せいの神しん刀とう。星をも墜おとす聖なる剣よ、と。

遥はるか上空より白金プラチナの刃が墜ちてくる。

そのまま無防備だったアテナの背に突き刺さる。

女神は聖せい杯はいに命を汲くまれて弱っていた。今のランス

ロットと同じだ。これまでの激闘は、残された力を振りしぼっただけ。そんな体で白き失しつ墜ついに立ち向かっていたのだ。

　救世の神刀を防ぐ余力など、あるはずなかった。

　輝く刃が刺さった瞬間、アテナの全身より黄金の光が一気に吹き出した。

4

　聖せい杯はいが創造されたのは、一五〇〇年近く昔の話だ。

　しかし、それより前から救世の神刀は存在した。この世の最後に顕あらわれる王——神刀を本来使うべき軍神も。この事実は何を意味するのか？

　つまり、聖杯がなくとも、救世の神刀は使えるのだ。

　グィネヴィアの前身やランスロットが麾き下かに加わる前から、『最後の王』は幾度となく神刀を振るっていたのだから。

　救世の神刀。その糧かてとなるのは、大地の生命力——。

　では聖杯がなかった頃、これを提供していたものは何だろう？

　答えは単純だ。最強の《鋼はがね》である『最後の王』自身。

　鋼の英雄とは、もともと地じ母ぼ神しんをまつろわせる英えい傑けつ。神話のなかで、彼らは地母神の成れの果てである竜りゅう蛇じやを倒し、力を得る。また、地母神の零れい落らくした姿である乙女おとめを恋人、あるいは支援者に迎えるのが常だ。

　多くの《鋼》が、大地より搾さく取しゆする性質を備えているのだ。

　ならば、最強とまでいわれる男にできないはずがない。否いな、この分野で彼をしのぐ軍神はいなかった。聖杯とは、『最後の王』の労力を減らすために捧ささげられた神具なのだ。

そして、アテナをふたたび救世の神刀で貫つらぬいたとき——。

かつての主あるじが振るった搾さく取しゆの権能を、はじめてランスロットは真ま似ねた。

「我が武ぶ勲くんのために、余は求む。聖なる劫ごう略りやくを許し給たまえ！」

あの男とは、肩を並べて戦野を駆けた仲。

彼がどのように力を集め、どのように戦ったか、まざまざと覚えている。

しかも、自分も《鋼》なのだ。きっと同じ業わざを成せると思っていた。その確信に賭かけて言こと霊だまを叫び——やはりできた。

華きや奢しやなアテナの体より黄金の光が吹き出す。

この輝きこそ大地母神の精気。並ぶものなき高純度の生命力。

救世の神刀はこれを吸い取り、覚かく醒せいをはじめる。そして、黄金の爆発が起きた。アテナからこぼれる命が拡散し、火薬のように炸さく裂れつしたのだ。

アテナと救世の神刀の間に、ランスロットが通した『路みち』。

大地の化身たる女神より命を吸いあげる『路』は、ずいぶんと細く、弱々しい。やはり真ま似ねは真似。本家の手並みとは天と地ほどの隔へだたりがある。

だが、これでも神刀は十分に使える——。

黄金の爆発に吹き飛ばされながら、ランスロットはうなずいた。念を飛ばして、救世の神刀を呼び寄せる。

一方、アテナの体は地上へと墜つい落らくしていった。

白き隕石メテオの失墜も、羽ばたく女神も、全て黄金の爆発に吹き飛ばされた。

「くそっ！　まさか、やられたのか!?」

　叫びながら護ご堂どうは走る。自由落下してくるアテナの真下へ。

　どうにか間に合った。砂浜に叩たたきつけられる寸前で、ぎりぎり抱き止められた。

　華奢な少女の体とはいえ、遥はるか上空から落ちてきたものだ。『雄お牛うし』の怪力がなければ、受け止めた護堂もただではすまなかっただろう。

「……いかん、草くさ薙なぎ護堂よ。あの刃やいばがふたたび我らを襲ってくるぞ……」

　護堂の腕に抱かれて、アテナはうめいた。

　はじめてだった。幼い容姿相応に弱々しい女神の姿は。

　しかも、彼女の背にまわした腕が濡ぬれていく。血だ。背中から血が流れているのだ。さっき生やしたフクロウの翼もすでにない。

「ランスロットの仕し業わざか？」

「ああ。せっかく聖杯を封じたというのに、あやつめ、自力で妾わらわの命を吸いあげおった。手負いでなければ、あのように未熟な権能、いくらでも破れたであろうが……」

　もはや、誇らしげに頭をかかげる余力もないらしい。

　護堂にしなだれかかりながら、アテナはささやく。前ぜん代だい未み聞もんの異常事態に愕がく然ぜんとしたとき、天に輝く白き太陽を見た。

　今は夜だ。アテナによって無理矢理、夜に変えさせられた。

　なのに、白き恒こう星せいが空に浮かび、近隣一帯を煌こう々こうと照らしている。

「……余の全力全速、しのがれたのははじめてであった。讃たたえさせてもらうぞ、アテナよ。若き神殺しよ。卿けいらと戦えて、このランスロット、欣きん快かいに堪たえぬ！」

　しかも、幽ゆう鬼きじみた暗いつぶやきも聞いた。

　いつのまに着地したのか。愛馬を失い、左腕左脚が石となった白き騎士が十数メートル向こうにたたずんでいた。

　陰気なのは口調だけで、彼の全身から闘争の喜き悦えつがほとばしる。

　爽そう快かいに語る余力がないだけだろう。ランスロットもボロボロなのだ。しかし、あの槍やり——救世の神刀を持っている。絶対的な優位は彼のものだった。

「長きいくさは我わが流儀に非あらず。これにて終しまいとさせていただこう。剣よ、今こそ大地を切り裂くがいい！」

　言霊に応こたえて、白き恒星よりレーザーのごとき閃せん光こうが放たれる。

　護堂は歯ぎしりした。この化身は使いたくなかった。制限時間が生まれるからだ。しかし、背に腹は代えられない！

　ウルスラグナ第七の化身『鳳おおとり』。怪力は失われるが、神速の動きと視界を得る。

　護堂はアテナを抱きながら横に跳とび、閃光をどうにか避けた。

「その速さ、昨日も見た。ふふ、余にその身ごなしを斬る技がないと思うか？」

　しかし、ランスロットにうそぶかれた。

　同時に確信する。白き騎士は、草薙護堂の一挙手一投足を見るともなしに見ている。上空から俯ふ瞰かんするように、観かんじている。

　たとえ神速を全開にしても、完全に見切られるような——。

　不安が護堂を襲った。まさか……いや、まちがいなくヤツは心眼を使う。羅ら翠すい蓮れんやサルバトーレ・ドニがすさまじい修行の果てに会え得とくした神技を！

　迂う闊かつに動けば、その瞬間に斬られる。

　だが、動かなければ、膾なますのように斬り刻まれるのみ。

　冷や汗が背を伝う。どうする？　ここで破れかぶれになってはいけない。考えろ！

「……妾を信じて駆けよ。ランスロットの太た刀ちといえども、必ずやかわせよう」

　そのささやきは、アテナが発したものだった。

　神の啓けい示じか、悪魔の誘惑か。ふぅ。護堂は深呼吸した。迷う必要などない。ここまで来たら一いち蓮れん托たく生しようなのだから。

　白き恒星より光の刃がふたたび放たれた刹せつ那な、護堂は後ろに跳びのいた。

　観みられている。見切られている。その確信がざわめく。

　神速を得た護堂の動き。これをランスロットは完全に捉とらえている。どう動いても、どう避けても、必ず切り伏せられる——！

　しかし、白き光はむなしく外れた。虚こ空くうを貫つらぬき、砂を抉えぐる。

「ほう……そうか。このために闇やみを呼んでいたとは、念の入ったことよ」

　ランスロットがつぶやいた。

　護堂の勘かんは当たっていた。『鳳』の神速と白き剣の速さはほぼ互角。ヨーイドンで駆けっこをはじめれば、勝敗は状況次第。しかし、ランスロットの心眼が、神速で走る護堂をも斬り裂くはずだったのだが。

「安心せよ……。しばらくであれば、妾の闇がランスロットの目を惑まどわせる。彼奴きやつほどの騎士ならば、直じきに慣れるであろうが……」

　アテナのささやきを聞いて、護堂は理解した。

　闇とはもともと、夜に生きる一部の生物以外から視界を奪うも

の。

　夜を到来させ、目を利きかなくさせるのもアテナの権能なのだ。これで軍神の心眼すら曇くもらせたのだろう。だから、護堂は白き剣を避けられた。

　さっき夜闇を呼んだのは、このような危機を想定しての仕込みだったか。

「ならば、数にまかせて切り破るとするか……。ちと騒々しくなるが、御ご免めん」

　だが、ランスロットはすぐに言った。

　すると頭上の恒星から、また光が放たれた。ただし、今度は光線ではない。白の輝きで形作られた、球きゅう雷らいであった。

　直径は二メートルほど。稲いな妻ずまの速さで飛ぶ。これが四つも出てきた。

　四方向から、護堂とアテナに向かってくる。

「もっとじっくり攻めたっていいだろうに！」

　どうやら、騎士の神は迅じん速そく果か敢かんが好みらしい。

　愚ぐ痴ちりながら、護堂は四方から襲ってくる球雷をにらんだ。直上から、右と左から、最後は斜め上から。

　全てをまとめてかわす方が安全。そう判断して、大きく後ろに跳ぶ。

　跳躍距離は一〇メートルほど。『鳳』は鳥の身軽さもあたえてくれるのだ。ほんのすこし前まで護堂たちがいた場所に、球雷が降ってくる。

　しかし、即座に方向転換。後ろに逃れた獲え物ものを追って、稲妻の速さで殺到する。

　護堂は神速全開で、砂浜を走りまわった。一瞬でも足を止めれば、球雷のどれかに撃たれてしまう。

　常人の目には、おそろしく奇妙な光景として映るだろう。

　目にも止まらぬ速さで駆けまわる何か。影すらも見えない何かが、縦じゆう横おう無む尽じんに空中を飛びかい、火花を散らす電光の間をくぐり抜けている——。

　だが、観戦者はいない。異様さを知るのは当事者たちのみ。

　悩ましいのは、ランスロットが神刀を無む駄だ遣づかいしないことだ。アテナから吸い取る命を大事に使うつもりなのか、連射などしない。球雷の形で効率的に運用している。無駄撃ちしてくれれば、つけいる隙すきもできるだろうに！

　雷の包囲網から、護堂は必死に逃げつづけた。

　アテナの闇による目くらましがなければ、とっくにバラバラにされていた。

「反撃しないと……やられるな」

　走りながら、ぼそりと護堂はつぶやいた。

　ランスロットの目が闇に慣れれば、一刀で斬り捨てられる。だから、その前に攻勢に出なくてはならないのだ。しかし、どう攻める？

　両腕は鉄の硬さを得ているが、これで白き甲かつ冑ちゆうを砕けるとも思えない。

　何しろ、オリジナルはランスロット自身の堅けん牢ろうさ。おそらく、同等の硬度のはずだ。

「一応、訊きくぞ。俺の『鳳』を吸収したら、ここで役に立つか？」

『立たぬ。というよりも、立てられぬ。おぬし自身の権能を吸い込むのは、なかなか骨が折れるのだ。幾日か間を置かねば使えぬよ』

　内なる天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに問えば、予想どおりの答えだった。

　護堂は落胆しなかった。役立つものなら、劍の方がとっくにお節

介を焼いているだろうと思っていたのだ。

「妾に策があるぞ、草薙護堂よ」

　遠方から届くような声。神速で移動中、他人の声はこのように聞こえるのだ。

　もちろん、アテナのささやきだった。

　不意の呼びかけに護堂は驚いた。語られた内容については、さらに驚いた。無茶にも程がある。しかし、聞き終えた瞬間に納得もした。

　ああ、そうか。こいつはやっぱり戦いの女神さまなんだな――と。

　そう思えてしまった。だから、ほとんど即答だった。

「……ああ、いいぜ」

　アテナを右腕で抱きかかえながら、飛びまわっている。

　自分だけでなく、荷物の重みもなくす『鳳』ならばこその芸当だ。

　女神はこちらに全体重をゆだね、護堂の頬ほおに頭を預けていた。だから、彼女の表情はまったく見えない。しかし、確信した。

　きっとアテナは、満足げに微笑ほほえんでいただろう。



　黙って右手で彼女の細い背中にさわり、やさしく撫なで、それから突っ込んだ。

「くぅ――っ！」

　アテナが短くうめく。苦く悶もんの汗を浮かべる。

　それを一切気にせず、護堂は女神のなかに入れた掌てのひらを広げた。

　血は出ない。美しき背中には傷もついていない。アテナは自みずからの意思で、護堂の手を迎え入れたのだ。

　右腕。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。忌いまわしき鋼はがねが宿る、仇きゆう敵てきの手を。

「外敵をまつろわせ、その力を我がものとする劍……こやつに妾の――大だい地ち母ぼ神しんの命と力もくれてやる。さらに我が秘術をかけ合わせ、天てん地ち開かい闢びやくの刃を生み出そうぞ……！　武ぶ勲くんを立てるがよい、神殺し！」

　アテナは苦痛を堪こらえながら、朦もう朧ろうとささやく。

　地母神をまつろわせる鋼の神性。これを体内に容いれるのは、相当な苦しみのはずだ。

「先ほどあなたは言っておったな。妾を救う手立て、幽ゆう界かいに求めてもよいと。ふふふ、実を申せば、それこそが唯ゆい一いつの活路よ。まつろわぬ性さがを捨て、生と不死の境界にて隠者となる。さすれば地上との縁えにしは切れ、聖せい杯はいとのつながりも失せよう……」

　その苦しみを呑み込み、アテナは毅き然ぜんと笑った。

「あるいは、それもひとつの道やもと思ったが……。しかし、事このように至ってみれば、やはり妾には選べぬ。アテナのアテナたるを捨てるよりも、妾にふさわしき終しゆう焉えんを求めたい」

　護堂は足を止めた。神速をオフにして、腕を引き抜く。

　アテナの体は砂浜に横たえる。迎撃準備は全て完了だった。

「草薙護堂よ。妾に代わり、あなたが劍を振るえ……」

「ああ。ちょっと待ってろ。次はあんたとのケリをつける番だからな」

　アテナに見守られながら、護堂は右腕をかざした。

　その手に神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが顕あらわれる。黒く焼きを入れた刀身はいつもどおり。しかし、その刃に蒼あお黒ぐろい焔ほのおがともった。

　それはまったく熱さのない、世にも稀まれなる焔であった。

　逆に冷たい。蒼き火からはすさまじい極寒の冷気が吹き出している。ふれた者は低温のために火傷やけどするはず。

　そこにランスロット操る四つの球雷が到来する。

　護堂は天叢雲劍を動かさなかった。蒼き火をまとう黒くろ金がねに、球雷たちは勝手に吸い込まれた。そのまま消えてしまう。

「む——救世の神刀を破った、だと？」

　白き恒星の真下にいたランスロットがいぶかしんだ。

「破ったわけじゃない。ただ、そんな小手調べみたいな威い力りょくなら、いくらだって消せる。今のこいつは、そっちの刀と似たような理屈で動いているからな」

　ぼそりと護堂は言った。

　残り時間はすくない。手早くかたづけなくては。

5

「あんたの剣というか槍やり……相当すごいんだろ？」

「うむ。我らが主あるじの伝説は、この鋼はがねをカリブルヌス、エスカリブール、エクスカリバーなどと呼ぶ。天地と星をも切り裂

く末世の宝刀よ」

　護ご堂どうの問いに、ランスロットは静かに答えた。

　白き騎士までの距離は二〇メートルもない。『鳳おおとり』なら、ほんのひとっ飛びだ。

「そうか。こっちの刀には、そういう芸はないみたいだけどな。アテナは天地開かい闢びやくとか言ってたか？　とにかく、そっちに負けてないぜ」

「そのとおりであろうな。余は今、背筋が総毛立ちそうな畏い怖ふをその鋼に感じている」

　言葉を投げながら、護堂は踏み込む機会をうかがった。

　天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎをつかむ手の握りは、完全にバットを振るときのそれだ。

　だが、これでいい。剣術を披ひ露ろうするつもりなどない。自分がいちばん上う手まく扱える形で振りまわす。その方が大切だ。

　対してランスロットも、白き神しん槍そうの穂先を護堂の腹あたりに向けた。

　中段の構えだ。頭上に輝く恒こう星せいより白光が降りそそぐ。これを受けた穂先は、今や太陽にも負けないほどまぶしかった。

　向こうもそのつもりか。護堂は獰どう猛もうな形に唇くちびるをゆがめた。

　もう駆け引きや戦術を云うん々ぬんする段階ではないと、ランスロットも思っているのだ。こちらには時間がなく、あちらは満まん身しん創そう痍い。それゆえ思惑は重なったか。

「天あまの叢むら雲くも、あいつを速攻で蹴け散ちらすぞ！」

「救世の神刀よ、そなたの威いを神殺しに示すのだ！」

　同時に叫び、同時に刀と神槍を突き出した。

　天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎの切っ先を前方に向け、神速

で飛び込む護堂。ランスロットは心眼でこれを見切り、槍の穂先を喰くらわせようとする。

　護堂は途中で神速をオフにして減速、騎士の虚を突く。再加速しようとする。

　しかし、その前にランスロットは神槍より稲いな妻ずまを放ち、牽けん制せい。

　稲妻をやりすごしてから護堂は再加速。天叢雲劍はあと数センチで白き甲かつ冑ちゆうにふれるところまで届く。が、ランスロットはぎりぎりで神槍をまにあわせ、白金プラチナの刃やいばで蒼あおく燃える黒くろ金がねを受け止めてみせ——。

　ついに、白と黒の聖なる鋼同士が激突した。

　救世の神刀。森しん羅ら万ばん象しようの全てを斬り裂く生せい者じや必ひつ滅めつの剣。

　対してアテナの命と秘術を得た天叢雲劍は、漆しつ黒こくの刀身に全てを吸い込む。超重力のかたまり・ブラックホールのごとく、天地の万物を吸い取ろうとする。

　吸い取ったうえで糧かてとし、いつか新たな命に転生させるために。

　老いた恒星は超新星となって爆発するが、その残ざん骸がいは新たな天体の源みなもととなる。そういう星の終しゆう焉えんとはじまりを、小なりとはいえ模も倣ほうしているのだ。

　ゆえに、この黒金は天地開闢——。

　白き閃光と稲妻が乱れ飛び、砂浜どころか房ぼう総そうの海域を白金色に染めあげ、さらに天にはオーロラまで現れた。

　そして、これらを吸い込む純黒の球状空間が発生した。

　救世の神刀が生み落とした白き恒星と同じく、空に浮かぶ疑ぎ似じブラックホール。

　聖なる白き星と、聖なる黒き空間は、激しくぶつかり合い、はじけ合い、からみ合い、破壊の光と重力波をまき散らし、ついにそ

ろって消えていった。対消滅したのだ。

　その際、すさまじい衝撃波が砂浜を駆け抜けた。

　地形すら変える——どころか、原形もとどめさせぬほどの威力。

　ランスロットは派手に吹き飛んでいった。

　護堂は『鳳』の神速で走り、必死で衝撃波から逃れようとしたが、最後でつかまった。白騎士ほどではないが、まあまあ派手に吹っ飛んだ。それでも途中で横たわるアテナを拾い、吹っ飛ぶときも体でかばったのはたいしたものだが。

　このようにして、木き更さら津づの浜辺がひとつ崩壊した。

　もとはどんな土地だったかも定かでない荒れ地が誕生し、もうもうと砂煙が舞う。

　それでも、ランスロットは神槍を支えにして立ちあがり、敵の姿を探している。草くさ薙なぎ護堂もふたたびアテナを横たえ、天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎを杖つえに歩き出す。

　敵に劣おとらず、護堂の体もボロボロになった。

　右手は肘ひじのあたりでたぶん折れた。胸の脇が痛いのは、肋ろつ骨こつが何本かやられたか。内臓も傷ついたのか、血も吐いた。吐き気もすごい。心臓がきりきり痛む。『鳳』のタイムリミットが近いのだろう。擦すり傷、打撲、内外の出血も数知れず。

　……まあ、爆弾テロに巻きこまれたのも同じだから、むしろよく生きていたといえる。

　天叢雲剣もなかばから折れかかっていた。無理をさせすぎたか。

　お節介な神刀の声も聞こえない。しばらく使えないようだ。なのに、逃げ出そうとしない自分が不思議だった。

　ランスロットの方へ、護堂は足をひきずりながら近づいた。

　向こうもよろよろ槍をかまえ、戦意を示す。あの男とは意外と気が合うらしい。

「――ランスロット卿きよう！　御おん身みの庇ひ護ごを受けるべきグィネヴィアさまは、すでに戦場を離脱なさいました。御身はいかがなさいますか？」

　エリカの声を聞いたのは、戦闘を再開する直前だった。

　見れば、なつかしいエリカ・ブランデッリと、リリアナ、祐ゆ理り、彼女たちに支えられた恵え那なが近くにまでやってきていた。

　結局、紅あかき騎士はいちばんいて欲しい場面に駆けつけてくれたのだ。

　……頭が冷静になる。護堂は目的を思い出した。

　今はアテナを優先すべきだった。こんな調子で泥どろ仕合をつづけたら、いくら時間があっても足りなくなる。

「ほう、我が愛いとし子ごが……。戦いにかまけ、あの者のことを失念してしまったか」

　冷静になったのは、ランスロットも同じらしい。

　自じ戒かいするようにつぶやくと、軍神は白い兜かぶとをぎこちなく海の方へ向けた。まるで、真に愛する者は草薙護堂なのだとでも言いたげに。

「若き神殺しよ、ひとまずさらばと告げておこう。ちと所用ができた。……ああ、余が言えた義理ではなかろうが、アテナを頼む。偉大なる女神にふさわしき壮そう麗れいさで、見送って差しあげてくれ」

「言われるまでもない。あんたとの決着は、次に会ったときだ」

　神々に自みずから再戦を約したのは、これがはじめてであった。

　この言葉に「うむ」と答えたランスロットの姿がうすれる。例の濃のう霧むがいきなり発生し、風に吹かれて動いていく。

　ほどなく濃霧は飛散し、白騎士も消え失せてしまった。

「……悪い。みんなと積もる話をしたいところだけど、すぐに離れてくれるか」

　もう本当に時間がない。すばやく護堂は頼んだ。

　祐理とリリアナは理由を問いたげな表情になったが、何も言わないでいてくれた。

　消しよう耗もうしきった様子の恵那は、全て承知している体でうなずいた。

「ええ。やりたいようになさい。神殺しの魔王さまが神と戦うのに文句を言うほど、エリカ・ブランデッリは愚おろかじゃないわ」

　そしてエリカは、いつもの華やかさで言ってくれた。

「……なんだ、意外と元気そうじゃないか」

　横たわっていたはずのアテナが、いつのまにか立ちあがっていた。しかも雄お々おしく頭をかかげ、背筋をぴんとのばしている。その姿に護堂は言った。

　エリカたちは去り、ふたたびふたりきりである。

　夜のとばりも、白き恒星も暗黒球も消失し、荒れ地は真昼の太陽に照らされている。

「当たり前だ。妾わらわを誰だと思っておる。天地冥めい界かいの女王であり、闘争の女神であるぞ？　いよいよ宿願を果たすというのに、寝てなどいられようか」

　傲ごう然ぜんとしたアテナの答え。

　強がりなのはわかっている。しかし、いかにも女神らしい言いぐさだった。

　救世の神刀を振るうため、不死の命をごっそりと削けずり取られた。そして、護堂と天叢雲剣にも地じ母ぼ神しんの命と力を吸収させた。

　いつ倒れてもおかしくない。そのような状態であるはずなのに。

「さきほど見せた天地開かい闢びゃくの一刀は上出来であった。

フッ……救世の神刀めに二度も貫つらぬかれたのが逆に幸いした。おかげであの剣のカラクリを知り、我が流りゅうではあるが似たような刃を生み落とすことができたからな。うむ、あれはアテナの手によるえくすかりばあと言えよう」

　不ふ遜そんかつ誇らしげに、自らの功を語る。

　やはり、最さい期ごの最期までアテナでいるつもりらしい。可能であれば助けてやりたいという護堂の気持ちに変わりはなかったが——。

　しかし、不思議とその善意を押しつける気にならなかった。

　俺は俺の流儀を貫く。だが、アテナもアテナの流儀を貫いていいはず。

　結局、どちらも自分勝手で傍はた迷めい惑わくな、まともな世界ではやっていけない存在なのだ。まともでない同士、ふさわしい締めくくりをするのもいい。

「さて、あなたもわかっていよう。もうおたがいに時はない」

「そうだな。そろそろはじめるか」

「うむ」

　短いやりとり。これで十分だった。

　アテナが元気そうなのは本当にうわべだけ。護堂の体も『鳳』使用後の麻ま痺ひがはじまっていた。もう足が動かない。きりきり心臓を苛さいなむ痛みもひどくなってきた。

　だが、今ならまにあう。

　護堂は東方——太陽が昇る方位を見た。

「我がもとに来きたれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ。駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主あるじたる光輪を疾とく運べ！」

　ウルスラグナ第三の化身『白馬』を呼んだ。

太陽のかけらを天空より墜おとす、草薙護堂の最大火力。民衆に仇あだなす大罪人にのみ向けられる焔ほのお。この体でもどうにか繰りだせる切り札。

「暗黒よ！　妾わらわが愛し、妾と共に在ありつづけた聖域よ。女王の滅びに立ち合う、忠義の衛えい士したれ。勅ちよく命めいである！」

　アテナも闇やみの障しよう壁へきを呼んだ。

　彼女の上空にドームのような暗黒がわだかまった。

　東天より飛来してきた白きフレアがこの荒れ地を灼やき尽くす寸前で、闇は灼しやく熱ねつを阻はばむ障しよう碍がいとなり、立ちはだかった。

　天空の覇は権けんを賭かけて、光と闇がせめぎ合う。ぶつかり合う。

　護堂は残っていた呪じゆ力りよくを全て白きフレア——『白馬』の焔に注ぎ込んでいた。アテナも末まつ期ごの死力を振りしぼり、闇を支えていた。

　永遠にも思えた、しかし、本当はごく短かった衝突。

　ついに光と焔は闇に呑のまれ、消えていった。護堂の限界が先に来たのだ。直後、暗黒の天てん蓋がいも雲うん散さん霧む消しようした。

　護堂の体はもう指一本動かせない。ばたりと倒れ、地面にあおむけになる。

　そこへアテナが飛びかかり、馬乗りになり、手しゆ刀とうを振りあげた。

「……どうだ、草薙護堂よ。これで妾の勝利といえようか？」

「……まあ、そうとも見える絵え面づらではあるな」

　勝利宣言に等しい問いかけへ、護堂は負け惜しみで答えた。

　アテナの手刀は必殺の断頭台たりうる。振りおろされれば、草薙

護堂の命は草のように刈られるだろう。

　ついに一いつ閃せん。手刀が頸くびに迫る。

　しかし、あとすこしで届くというところで、手は止まった。

「どうやら、時が来たらしい。妾はそろそろ往ゆかねばならぬ」

　首を刎はねていく程度の時間はあるだろうに、アテナはそう告げた。

　それについて、護堂は何も言うつもりはなかった。この女神さまはこうするような気が、なんとなくしていたのだ。

「そうか。変なつきあいだったけど、さびしくなるな。あんたと会えてよかったのか悪かったのか、正直、俺にはよくわからないけど」

「フン。順じゆん縁えんならざる逆ぎやく縁えんとはいえ、妾との縁えにしをよろこべぬとは愚ぐ昧まいな」

　自身の曖あい昧まいな気持ちを隠さず語ると、悪態を返された。

　そして、アテナは動けぬ護堂の頬ほおを撫なでた。

「勝者の度量をあなたに示してくれよう。妾の忠ちゆう言げん、心して聞け。——軍神ランスロット、先ほどのあやつはまだ完全ではない。言うなれば手負いであった」

　あの強さで!?　護堂は戦せん慄りつした。信じがたいし、信じたくない情報だった。

　しかし、アテナが最期に遺のこす忠告なのだ。信じざるをえない。

「妾が往けば、聖杯もふたたび外界にもどり、神しん祖そのもとに還かえるであろうな。まったく厄やつ介かいな器うつわを創つくったものよ」

　尚なおもつづく女神の言葉に、護堂はただうなずいた。

「あなたの往く道は、この先も死闘に彩いろどられよう。せいぜい

気をつけるがよい。何しろあなたはあの男——この世の最後に顕あらわれる王と、同国に住まう神殺しなのだからな！　ああ……ならば、ひとつだけ餞せん別べつをくれてやるか」

　頬ほおを撫なでる手、おだやかに見おろす瞳ひとみ。

　アテナが示す振る舞いのなかにひそむ、やさしさめいた何か。名な残ごり惜おしげな何か。

　それがほんのすこしだけ強まったような——。

　ふと、護堂はそんな印象を受けた。



「武器が多いに越したこともなかろう。今のあなたの手には余るであろうが、いずれ役立つ日が来るやもしれぬ。それまで取っておくがいい」

　アテナの幼い美び貌ぼうが近づき、護堂と唇くちびるを合わせる。

　何かが頭と心、そしてカンピオーネの体の奥底に刻み込まれていく。

　おそらくアテナの秘法なのだろう。何らかの呪術か叡えい智ちを授ける指し南なんのはずだ。その内容はまったくうかがい知れない。

　さっき告げられたとおり、今の護堂にはどうにもできない何かなのだ。

　そんなことよりも護堂は、死にゆく寸前なのにいまだ神こう々ごうしく、雄お々おしいままのアテナを目に焼きつけようとした。

「別れは告げぬ。いずれ妾が輪りん廻ねの果てに再さい臨りんした暁あかつきには、あなたの方から雪せつ辱じょくを晴らしに来るがよい。返り討ちにしてやるがな。それがいつであれ、草薙護堂を倒すのは妾——まつろわぬアテナなのだから！」

　勇ましい宣言をした直後、アテナと視線がぶつかり合った。

　女神は草薙護堂を昂こう然ぜんと見おろしている。そして、微笑ほほえんでいる。何かをやり遂とげたあとの、不思議と充実した笑みだった。

　これを見て、護堂は心の一部を削そぎ取られたような、奇妙な喪失感を味わった。

　——ああ。やはり往くのだな、と思う。

　しかし、神と神殺しが不ふ倶ぐ戴たい天てんの仇きゅう敵てき同士なら、ふさわしい別れ方はあるはず。

　だから護堂は、じゃあそのうちにな、と声に出さずにつぶやいた。

聞こえたはずはないのだが、女神は不敵さと気け高だかさはそのまま、微笑をすこしだけ大きくし、忽こつ然ぜんと消えていった。

彼女の肉体は砂のように細かく崩れ、潮風に吹かれて飛んでいく。

こうなると承知しながら、しかし、最期の誉ほまれのために不死の命を武器に変え、女神アテナは悠ゆう久きゆうだったはずの生を終えたのである。

6

現うつ世しよで死した『まつろわぬ神』は、その後どうなるか？

神々は不滅である。命と肉体を失ったとしても、その存在は尚なおもつづく。

まず、いわゆる魂たましい、霊体でさえない『神格』そのものが『生と不死の境界』へ行きつく。ここを経けい由ゆして『不死の領域』へたどりつく。

不死の領域——。神話そのものと言いかえてもいい。

死せる神は肉体と魂を失い、神話のなかにのみ生きつづける。

何かのきっかけがあれば、ふたたび『まつろわぬ神』となるかもしれない。

そのとき神格は不死の領域を出て、偉大な霊体——神しん霊れいとなる。

これが地上で受肉し、顕けん現げんを果たす。神格とは、まあ言ってみれば、その神にまつわる神話の集合体のようなもの。

……これが、女神アテナの知る世界の理ことわりであった。

東方の果てで死を得て、彼女は肉体を失った。

まだ神霊として、わずかに意識を保っているが、直じきにこれも

失われる。願わくば、かの神殺しが野の垂たれ死じぬ前に再さい臨りんを果たし、返り討ちにしてやりたいところだが。

　そこは運命の歯車にまかせるしかない。

　消えゆくアテナのなかで、そんな思念がゆらいだ。このとき彼女の神霊は地上にはなく、深き大地の底に沈んでいく途中だった。行く手に黄金の光が見える。

　そうか。あれこそが聖せい杯はいの本体――。

　考えたのは、ほんの一瞬。すぐにどうでもよくなった。

　アテナとしての意識も記憶も人格も、徐々に失われていったからだ。

　アテナが逝いき、護ご堂どうの硬直がようやく解けた頃。

　戦場となった荒れ地にエリカが、そして祐ゆ理りとリリアナ、恵え那ながもどってきた。

「王様、もしかして……さびしいの？」

「いいや。そういう気持ちはないよ。あいつもやりたいことは全部やり切ったみたいだし、俺の方もみんなのおかげでやりたいことはできた」

　アテナ消失に立ち合った女子たちを代表するように、恵那から訊きかれて。

　護堂はあっさり答えた。当の女神さまがあんなふうに笑っていたのだ。ならば、もう何も惜しむことはない。

　淡々とした声と顔だったはずだ。しかし、不思議な反応が待っていた。

　恵那は疲れを感じさせない、いたわるような笑顔になった。

　リリアナは黙もく然ぜんと、しかし瞳ひとみに共感の色を浮かべてうなずいた。祐理は全てを受け止めるようにやさしく微笑ほほえ

んだ。

　そして、エリカは一切をまとめるように言った。

「そうね。自みずからにふさわしい生と死を求めたアテナに、護堂は戦士たるの意気で応こたえた。それにとやかく言うことは、すくなくともわたしにはできないわ」

　女騎士の哲学をもって、決して賢明ではなかった選択を認めている。

　みんな気づいているのかもしれない。因いん縁ねんの敵を失ったことによる、草くさ薙なぎ護堂の奇妙な喪そう失しつ感に——。気を遣つかわれたようだ。

　いい仲間たちだと護堂は思う。みんなに感謝しなくては。

　今回の問題行動のことも、きちんとあやまろう。リリアナと祐理に頭を下げた。

「ふたりには特に迷惑をかけたと思っている。悪かった。結局、あんなバクチみたいなやり方で石からもどすことになって……。もっと安全で確実な方法があったのに、こんなことをしでかしちまった」

「まったくです。ただ残念ながら、わたしはあなたの騎士。草薙護堂がどれだけ悪あく逆ぎやく非ひ道どうの魔王であっても、忠誠を誓った身でもあります」

　口では文句を言いながら、リリアナの目には全てを許すやさしさがあった。

「そして、過程はどうであれ、あなたに危地より救っていただいたのも事実。貸し借りはなしということで、よしといたしましょう」

「そうか。悪いな」

　リリアナの微笑に、護堂も苦笑を誘われた。

　こんな論法で心の負担を軽くしようとしてくれる。ありがたい話だった。

「私も護堂さんにお礼を申しあげこそすれ、責めるつもりはございません。それに……」

　しとやかに祐理に言われて、護堂は恐縮した。

　これに甘えてはいけないと思うが、彼女のやさしさがうれしい。

　だが『それに』？　続きがあるようだった。

「どこかしらが壊されたり、どなたかにご迷惑がかかるのは、こう申しあげるのも何ですが、護堂さんがかかわった時点で約束されたようなものですし……。どちらかに謝罪をなさる必要があるときは、私もいっしょに参ります。いつでもおっしゃってくださいね？」

「でも馨かおるさんのことだから、どうせ計算ずくだよ」

「まあ、沙さ耶やの宮みや馨が隠いん蔽ぺい工作で不ふ手て際ぎわをするとは思えないが、謝罪云うん々ぬんという事態になったら、万ま里り谷や祐理だけでなく、わたしも同行しよう」

「ふうん。なら恵那もいくよ。これもつきあいだもんね」

「…………みんな、本当にありがとう」

　ダメ亭主の面倒を見る賢けん妻さいじみた、祐理のやさしい言葉。それに同調するリリアナと恵那、女子たちのチームワークのよさ。

　全てが本当にありがたい。ちょっとだけ釈しやく然ぜんとしなかったのは秘密だが。

「ところで、おまえ、結局すぐこっちに来たんだな」

「ええ。どうにか山場が終わる前にすべり込めたわ。あなたとわたし、どちらも運がいいという証明よね。まあ、あなたの幸運はエリカ・ブランデッリという伴はん侶りよを得ているだけでも明らかでしょうけど」

　護堂が声をかけると、エリカはいつもの調子で言った。

　二週間近くも離れていたのだ。だというのに、こんな軽口をたた

き合っただけで、護堂は不思議と満足した。エリカもそうなのか、くすりと微笑した。

　ただそれだけの、ちょっとしたやりとり。

　さらに話がはずむこともなければ、再会をよろこんで抱ほう擁ようするわけでもない。

　だが、これでいい気がした。自分とエリカの仲なのだ。

「……あれ？　甘あま粕かすさん、何かあったのかな？」

　いきなり恵那が指さしたので、みんなの注目がそちらへ集まった。

　くたびれた背広姿の、正せい史し編へん纂さん委員会のエージェント。実は日本屈くつ指しの忍者で、しかも陰おん陽みよう師じだと、前に媛ひめ巫み女こたちから教えられた。

　その甘粕冬とう馬まが、よろよろ頼りない足取りで近づいてくる。

　まるで強烈な電撃でも浴びて、きちんと歩くのも難しいという体ていだった。

「どうしたんですか、甘粕さん!?」

　疲れた体に鞭むち打うって、護堂は駆け寄った。

「す、すいません、草薙さん……。例のあれ、奪われました……」

「あれ——天あま之の逆さか鉾ほこですか！」

　当然の連想に、甘粕は力なくうなずいた。

　まさかグィネヴィアたちが？　撤てつ退たいしたふりをして、甘粕を狙ねらったのか？

　だが詳細を聞いて、その想像があやまりだと護堂は知った。犯人の名前と素す性じようを聞いて、心の底から驚いた。

「あの方が日本にいらしていたのね……。なんてことかしら」

愕がく然ぜんとして、エリカはつぶやいた。

才さい気き煥かん発ぱつの紅あかき悪魔でさえ、まったく想定外の事態であったのだ。

転　章

　アレクサンドル・ガスコインは多忙な男である。

　彼の仇きゆう敵てきである女性は『正確には、自みずから望んで仕事を作って、勝手に忙しくなっているだけですわよね』と要いらぬ注釈をつけたりするが、とにかく多忙なのだ。

　何しろ、ごたいそうな肩書きを持っている。

　神殺しの魔王カンピオーネ、秘密結社《王立工こう廠しよう》の総そう帥すい！

　望んで就ついた地位ではないが、そうなってしまった。人の上に立つ者は、相応の仕事や振る舞いをしなければならない。それが彼の美学である。

　カンピオーネになってから、もう一二年。

　その間、ずっと精力的に活動してきた裏には、そのような背景があった。

　おかげで黒王子ブラックプリンスアレクの名は、新時代の魔王として広く知られるようになった。ちなみに『王子』というのは、ヴォバン侯こう爵しやくら旧世代の魔王たちと比べて、いちじるしく若いことからついた呼び名だ。

　しかし、そんな彼も、年に一度くらいはバカンスに旅立つ。

　行く先々で、なぜかトラブルに遭そう遇ぐうするのが悩みの種だったが。

　神しん祖そどもの陰謀に巻きこまれたり。『まつろわぬ神』と遭遇したり。深遠なる魔術の奥おう義ぎにからめとられて破滅する寸前の一般市民を助けたり。たまたま存在を知った古代の秘宝を盗とう掘くつしにいったり。うっとうしい旧知の女性につきまとわれたり。

思いかえすと、ゆっくり休めたバカンスなど一回もなかったような……。

「そこで、今回は発想を変えることにした」

秋もすっかり深まった頃、アレクは側近に語ったものだ。

ちなみに欧おう州しゆうでバカンスといえば、普通は夏にする。いろいろ仕事や用事が立てこんで、ここまでずれたのだ。

「どうせ何か面倒事が起きるのなら、そういうことが起きそうな場所にこちらから飛び込んでやればいい。しばらく日本に行ってくるぞ」

「ほう。たしか一月ほど前も、極東方面へ旅しておられましたな」

答えたのは相談役にして護衛役、サー・アイスマンである。

いかなる欠点も持たない、伝説的な騎士（飛行機恐怖症はのぞく）。彼は三み十そ路じを越えて、整った容よう貌ぼうにますます渋しぶみを加えていた。

「ああ。最近おとなしかったグィネヴィアが暗あん躍やくしていると聞いてな。いい機会だから、あの女の狙ねらいがどのあたりにあるのかを探ってこようと思う。留守を頼む」

「……アレク、前々から思っていたのですが」

友情の絆きずなで結ばれたはずの腹心に、後事を託す一幕。

しかし、サー・アイスマンは悩ましげに頭を振り、言ったものだ。

「あなたが頻ひん繁ぱんにトラブルとでくわす理由は、それでしょう。せっかく災わざわいの火種が隠されているのに、妙にめざとく見つけて、しかもわざわざ火をつけて、文句を言いながら自分で消火する……。その性格がいちばんの元凶です」

「待て。俺ではない誰かが、厄やつ介かい事ごとを持ちこむことも多いはずだぞ！」

「ならば、交友関係を見直されるべきでしょうな。面倒ばかり押し

つけてくる人間と、いつまでも友達づきあいをつづける理由などないように思われますが」

　憮ぶ然ぜんとして反論したら、皮肉っぽく肩をすくめられた。

　あのプリンセスや神祖ども、その他いかがわしい連中は友人などではない。そう怒鳴りたかったが、自みずからの権けん威いを傷つけぬためにあきらめた。

　ともかく、彼はバカンスに入ったのである。

　日本の魔術関係者に知られないよう、入国には慎重を期した。偽ぎ名めいのパスポートを用意し、あくまで『おしのび』という形にする。

　……結果からいうと、今回はなかなかくつろげた。

　神祖グィネヴィア、『まつろわぬ神』になったランスロット、しかも女神アテナまで蠢しゅん動どうしていたのに、アレクは何もしなくてよかった。日本のカンピオーネ・草くさ薙なぎ護ご堂どうがまとめて引き受けてくれたからだ。

　その間、アレクはほとんど高みの見物をしていた。

「グィネヴィアめ。まだ『アーサー』をあきらめていなかったのだな」

　魔女王の陰謀を知ったときは、ぼそりとつぶやいたものだ。

　この世の最後に顕あらわれる王。奇妙な英雄伝説の源みなもとたる軍神。ここ数年の研究と冒険で、アレクは彼についての考察を十分に深めていた。

「復活が成じよう就じゆしそうなときは、また足をすくってやるか」

　グィネヴィアは独りよがりで視野が狭い。そうそう上う手まく謎解きができるとは思わないが、用心だけはしておこう——。

　また、個人的な興味を満たすのも忘れなかった。

　東京近辺をうろついて、正せい史し編へん纂さん委員会とやらの

内情を探ったのである。

　のんびり日本観光でも……とは一応考えたが、結局、情報収集を優先した。仕事か研究をしていないと、落ち着かない性分なのだ。

「あいかわらず潤うるおいとか、華やかさとか、癒いやしとかが致命的に欠けた私生活なのですね。ときどき、あなたの行く末が心配になってしまいます。共にすごす恋人も家族もいないまま、孤独な最さい期ごを迎えるのではないかと」

　長いつきあいの割りに決して友人ではない女性から、ちょっとあわれむように言われたセリフを思い出したが、とにかくアレクなりに日本滞在を楽しんだ。

　また、途中で悪い虫がうずきもした。

　あのグィネヴィアまでが求める天あま之の逆さか鉾ほこ。なかなか興味深い神具だった。

「行きがけの駄だ賃ちん……というのも、悪くないかもしれんな」

　ひそかにつぶやき、小細工をしてみた。

　彼が所有する第一の権能・神速。風のごとく駆け、電光となって飛ぶだけではない。

　実は、さまざまな応用変化がある。

　伝説のニンジャよろしく虚こ空くうに残像をのこして分身。自分以外の他者に神速をあたえる。一瞬だけ雷に変化して電撃を放つなど。

　そのなかには、ほぼ完全に気配を絶ち、神速で隠密行動する法もあった。

　神速を全開にすると、目にも止まらぬ速さになる。しかし、何かが超高速で動く気配が人々に異常を察知させてしまう。あまり隠密向きの力ではない。

　音もなく影もなく、神速で動く――。

　これができれば、野生の獣けものにすら気け取どられぬまま、近

くで行動できる。

　神速を手足のごとく操るアレクには可能だった。……まあ、これをするとき、邪魔な荷物は持てない。コートすら着ていられないほどだ。ちょっとでも力をいれると気配が出てしまうので、力仕事も無理。紙切れを運ぶ程度なら何とか。

　アレクは初冬だというのに上着をぬぎ、薄着のまま神速になった。

　そして食事中の草薙護堂に近づき、手紙を置いていった。

　その後の反応、顚てん末まつを見守る。天之逆鉾を隠し持つ男が誰か、確認できた。

　冴さえない感じの呪じゅ術じゅつ師し兼エージェントだった。しかし、なかなかの手て利ききだ。あの夜、グィネヴィアはこの男を追いかけ、天之逆鉾を奪おうとしていた。男は隠おん行ぎようの呪術を巧たくみに駆使し、魔女の追跡を振り切った。

　アレクでさえ、彼を見失った。どうやら忍しのびの術の権けん威いであったらしい。

　しかし、ランスロットとアテナ、草薙護堂の戦いがはじまったあと、戦場の近くで彼を見つけることができた。

　緊迫した状況に、さすがの彼にも隙すきがあった。あとはたやすかった。

　電光となったアレクは彼の背後に忍びより、軽くタッチ。ビリビリと電撃を受け、ぴくぴく痙けい攣れんした彼の背広から、悠ゆう々ゆうと天之逆鉾を頂ちよう戴だいした。

　このとき、まだ意識のあった忍びは、驚きよう愕がくの表情だった。

　アレクの顔を知っていたらしい。口封じのために殺害……などと、スマートならざる行為をするつもりはない。肩をすくめただけで、立ち去った。

　イングランドの黒き貴公子と、日本の草薙護堂。

　かくして、両者の間に奇くしき縁えにしの糸が結ばれたのである。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

Ⅸ　女神再び

著者　丈月　城

２０１２年６月21日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
Ⅸ　女神再び」

２０１１年７月17日発行の第２刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット